宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ

# 小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告

２０１０（平成２２）年３月

三重県埋蔵文化財センター

横穴式石室前面（南西から）

横穴式石室天井石検出状況（南から）

横穴式石室奥壁

**墳丘盛土縦断土層断面**（南東から）

**墳丘盛土縦断土層断面**（南から）

墳丘盛土縦断土層断面東半部（南東から）

墳丘盛土横断土層断面北端部（南から）

墳丘盛土横断土層断面南端部（西から）

第３段階盛土平面検出状況（南西から）

墓道土層断面（南西から）

閉塞上部土層断面（南から）

埋葬施設全景（西から）

木棺東小口断ち割り土層断面（南西から）

出土須恵器

須恵器出土状況（北西から）

**墳丘全景**（西から）

**副葬品出土状況**（南東から）

# 序

県内でも有数の大河である宮川は紀伊山地の日出ヶ岳に源を発し、途中大内山川や一之瀬川などの大きな支流を併せて東流し、伊勢市大湊町で伊勢湾へと流入しています。この宮川を水源とする宮川用水は、昭和30年代に整備され、長年地元の水田を潤してきましたが、施工から40年の歳月を経て、施設の老朽化や農業を取り巻く環境の変化による用水不足などが問題となりました。それを受けて、新たな整備事業が計画されたため、当センターでは平成10年度から当該事業に伴う発掘調査を進めてまいりました。これらの調査の結果、地域の歴史の一端を解明するような多くの成果を得ることができ、それを発掘調査報告書としてまとめてきたところです。足掛け10年にわたる整備事業に伴う発掘調査も今年度をもって完了します。

今回報告いたします古墳群は、多気郡明和町の通称玉城丘陵に所在します。この玉城丘陵は、県内有数の古墳密集地であり、古墳時代後期から終末期を中心とした時期の古墳が500基ほど確認されています。今回の調査では、小金３号墳で良好に残る横穴式石室が確認されたのを始め、高塚４・６号墳では須恵器や鉄製品などの副葬品を伴う埋葬施設を確認するなど、多くの成果を得ることができました。

しかし、一方でこのような遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。今回得られた成果をどのように活用していくかが、今後わたくしどもに与えられた重要な課題であると考えております。

調査にあたっては、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所をはじめ、地元明和町池村の方々、明和町教育委員会などの関係諸機関から多大なご協力と温かいご配慮を頂きました。文末になりましたが、心より厚く御礼申し上げます。

２０１０年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　　河北　秀実

# 例　言

1　本書は、三重県多気郡明和町池村地内に所在する小金２・３・４・12号墳、高塚４・６号墳、斎宮池19号墳の発掘調査にかかる報告書である。

2　各古墳の発掘調査は、国営宮川用水第二期土地改良事業に伴い、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局から受託して実施したものである。現地調査および整理・報告書作成にかかる諸費用は、農林水産省東海農政局の全額負担による。

3　発掘調査は以下の体制で行った。

【平成19年度】　小金４号墳・小金12号墳

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱ課）

主査　小山憲一　技師　伊藤文彦

調査期間　平成19年６月22日～平成19年８月10日

調査面積　130㎡

【平成20年度】　小金３号墳・高塚４号墳・高塚６号墳

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱ課）

主査　小山憲一・大川操　主事　柴山圭子・西口剛司

技師　石井智大　研修員　酒徳健

調査期間　平成20年６月９日～平成20年12月12日

調査面積　小金３号墳：806㎡　高塚４・６号墳：1,301㎡

調査補助委託業者　安西工業株式会社

【平成21年度】　小金２号墳・斎宮池19号墳

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅱ課）

主幹　林義男　主査　小山憲一　技師　石井智大

調査期間　平成21年４月30日～平成21年８月５日

調査面積　小金２号墳：620㎡　斎宮池19号墳：240㎡

調査補助委託業者　安西工業株式会社

4　発掘調査にあたっては、地元の方々をはじめ、明和町教育委員会、農林水産省東海農政局から多大な協力を得たことを明記する。

5　報告書作成にあたっては、淺生卓司氏、奥義次氏、高松雅文氏、豊田祥三氏から有益な御教示をいただいた。

6　本報告のもととなる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅱ課および支援研究課（平成21年度は活用支援課）が行った。本文の執筆は、第Ⅰ章第１節を小山、第Ⅳ章第５節・附章第１節を柴山、第Ⅴ章を松葉和也、第Ⅸ章第２節をパリノ・サーヴェイ株式会社が担当し、それ以外の部分の執筆と全体の編集を石井が行った。

# 凡　例

＜地図類＞

１．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、明和町都市計画図である。

２．明和町都市計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年４月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。

＜遺構類＞

３．挿図の方位は全て座標北（世界測地系・測地成果2000）で示している。なお、磁針方位は西偏６°30′である。

４．土層図は、層の間の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。

５．土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版、1998年第21版）を用いた。

６．遺構などの断面図で平面図の相当位置に矢印があるものは立面図となっている。

＜遺物類＞

７．当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものは、その都度示している。

８．遺物の実測図は古墳ごとに１から番号を付与している。なお、実測番号についても古墳ごとに001から付与した。

９．遺物観察表は、以下の要領で記載している。

№…挿図掲載番号である。

実測番号…実測段階の登録番号である。

種別…「土師器」「須恵器」「石製品」「鉄製品」といった区分をここに示した。

器種…遺物の器種を示す。

出土遺構…遺物の出土した遺構や層名を記した。

出土グリッド…調査時に設定したグリッド名を記した。

口径／長さ（cm）…遺物の口縁部径あるいは長さを示す。

底部径／幅（cm）…遺物の底部径あるいは幅を示す。

器高／厚さ（cm）…遺物の高さあるいは厚さを示す。

重量（ｇ）…石器などの重さを示す。

色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度…その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることを示し、12/12の場合は「完存」と記した。また、遺物が完全な形で残っているものについては「完形」とした。

＜写真図版＞

10．写真図版は、まとめて巻末に掲載した。

11．挿図と写真図版の遺物番号は、対応している。

12．遺物の写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

# 目　次


第Ⅰ章　前言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第Ⅱ章　位置と周辺の環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第Ⅲ章　小金２号墳の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第２節　墳丘の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第３節　埋葬施設の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第４節　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第５節　小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

第Ⅳ章　小金３号墳の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第２節　墳丘の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第３節　横穴式石室の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第４節　横穴式石室の構築過程と使用石材 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第５節　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第６節　小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

第Ⅴ章　小金４・12号墳の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第２節　墳丘の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第３節　小金12号墳埋葬施設の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第４節　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第５節　小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

第Ⅵ章　高塚４号墳の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第２節　墳丘の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第３節　埋葬施設の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第４節　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第５節　小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

第Ⅶ章　高塚６号墳の調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第１節　調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第２節　墳丘の調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第３節　埋葬施設の調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第４節　出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第５節　小結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第Ⅷ章　斎宮池19号墳の調査　・・・・・・・・・・・・・・・・78
第１節　調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第２節　墳丘の調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第３節　出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第４節　小結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

第Ⅸ章　自然科学分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第１節　分析試料と分析の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・84
第２節　高塚４号墳の自然科学分析　・・・・・・・・・・・・・・85

第Ⅹ章　調査のまとめと考察　・・・・・・・・・・・・・・・・87
第１節　各古墳の時期と古墳群の様相　・・・・・・・・・・・・・87
第２節　高塚４・６号墳の墳丘構築と埋葬について　・・・・・・・89
第３節　小金３号墳の横穴式石室の位置づけ　・・・・・・・・・・93
第４節　玉城丘陵の古墳群の動態について　・・・・・・・・・・・103
第５節　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

附章　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第１節　宮川用水事業にかかる範囲確認調査実施古墳の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・108
第２節　高塚２号墳出土・採集の埴輪について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110

# 図版目次


**第Ⅰ章　前言**

第１図　事業関連遺跡位置図　・・・１
第２図　事業関連古墳位置図　・・・２

**第Ⅱ章　位置と周辺の環境**

第３図　周辺遺跡分布図　・・・11
第４図　周辺古墳分布図　・・・14
第５図　上村池３号墳横穴式石室　・・・15

**第Ⅲ章　小金２号墳の調査**

第６図　小金２号墳調査前地形測量図　・・・17
第７図　小金２号墳墳丘平面図　・・・18
第８図　小金２号墳墳丘土層断面図　・・・20
第９図　小金２号墳埋葬施設平面図・土層断面図　・・・20
第10図　ピット群平面図　・・・21
第11図　小金２号墳出土遺物実測図　・・・22

**第Ⅳ章　小金３号墳の調査**

第12図　小金３号墳調査前地形測量図　・・・23
第13図　小金３号墳墳丘平面図　・・・24
第14図　小金３号墳周溝土層断面図　・・・25
第15図　小金３号墳墳丘土層断面図①　・・・26・27
第16図　小金３号墳墳丘土層断面図②　・・・28
第17図　小金３号墳墳丘盛土工程　・・・30
第18図　盛土中遺物出土状況図　・・・31
第19図　小金３号墳横穴式石室実測図・・・32・33
第20図　天井石平面図・立面図・断面図、石室内土層断面図　・・・35
第21図　石室内遺物取り上げ地区割り図　・・・36
第22図　玄門遺物出土状況図　・・・36
第23図　墓道平面図・土層断面図　・・・38・39
第24図　墓壙検出位置図　・・・41
第25図　小金３号墳横穴式石室構築過程図・・・42
第26図　横穴式石室石材材質　・・・44
第27図　小金３号墳出土遺物実測図　・・・46

**第Ⅴ章　小金４・12号墳の調査**

第28図　小金４・12号墳墳丘および調査区平面図　・・・49
第29図　小金４・12号墳調査区土層断面図・・・50
第30図　小金12号墳埋葬施設平面図・土層断面図　・・・51
第31図　小金４・12号墳出土遺物実測図　・・・52

**第Ⅵ章　高塚４号墳の調査**

第32図　高塚４・６号墳調査前地形測量図・・・55
第33図　高塚４号墳墳丘平面図　・・・57
第34図　高塚４号墳墳丘土層断面図　・・・58・59
第35図　高塚４号墳埋葬施設平面図・土層断面図　・・・62
第36図　高塚４号墳須恵器出土状況図　・・・63
第37図　高塚４号墳刀子出土状況図　・・・63
第38図　高塚４号墳出土遺物実測図　・・・65

**第Ⅶ章　高塚６号墳の調査**

第39図　高塚６号墳墳丘平面図　・・・69
第40図　高塚６号墳墳丘土層断面図　・・・71
第41図　高塚６号墳埋葬施設平面図・土層断面図　・・・73
第42図　高塚６号墳副葬品出土状況図　・・・74
第43図　高塚６号墳出土遺物実測図　・・・75

**第Ⅷ章　斎宮池19号墳の調査**

第44図　斎宮池３・19号墳調査前地形測量図・・78
第45図　斎宮池19号墳調査区平面図　・・・80
第46図　斎宮池19号墳墳丘土層断面図　・・・80
第47図　ＳＤ１平面図・土層断面図　・・・81
第48図　斎宮池19号墳出土遺物実測図　・・・82

**第Ⅸ章　自然科学分析**

第49図　土器内容物　・・・86

**第Ⅹ章　調査のまとめと考察**

第50図　河田古墳群Ｃ支群　・・・88

第51図　高塚４号墳墳丘構築過程模式図　・・・90
第52図　カリコ古墳墳丘土層断面図　・・・91
第53図　関連古墳位置図　・・・94
第54図　高倉山型石室および類似する横穴式石室①　・・・96
第55図　高倉山型石室および類似する横穴式石室②　・・・97
第56図　南山古墳横穴式木室　・・・99
第57図　墓道側壁・Ｂ－２類前庭に関連する横穴式石室　・・・100
第58図　斎宮跡ＳＢ1615出土須恵器　・・・106

**附章**

第59図　高塚３号墳周辺出土遺物実測図・・・110
第60図　高塚２号墳出土遺物実測図①　・・・111
第61図　高塚２号墳出土遺物実測図②　・・・112
第62図　高塚２号墳出土遺物実測図③　・・・113
第63図　高塚２号墳出土遺物実測図④　・・・114
第64図　高塚２号墳出土遺物実測図⑤　・・・115
第65図　高塚１号墳・神前山１号墳出土埴輪実測図　・・・117

# 表目次

第１表　事業関連遺跡一覧表　・・・３
第２表　事業関連古墳一覧表　・・・４
第３表　高倉山型石室および類似する横穴式石室の規格　・・・95
第４表　出土遺物一覧表①　・・・120
第５表　出土遺物一覧表②　・・・121
第６表　出土遺物一覧表③　・・・122
第７表　調査古墳一覧表　・・・123

# 写真図版目次


巻頭図版１　小金３号墳①
横穴式石室前面（南西から）
横穴式石室天井石検出状況（南から）
横穴式石室奥壁

巻頭図版２　小金３号墳②
墳丘盛土縦断土層断面（南東から）
墳丘盛土縦断土層断面（南から）

巻頭図版３　小金３号墳③
墳丘盛土縦断土層断面東半部（南東から）
墳丘盛土横断土層断面北端部（南から）
墳丘盛土横断土層断面南端部（西から）
第３段階盛土平面検出状況（南西から）

巻頭図版４　小金３号墳④
墓道土層断面（南西から）
閉塞上部土層断面（南から）

巻頭図版５　高塚４号墳
埋葬施設全景（西から）
木棺東小口断ち割り土層断面（南西から）
出土須恵器
須恵器出土状況　（北西から）

巻頭図版６　高塚６号墳
墳丘全景（西から）
副葬品出土状況（南東から）

写真図版１　小金２号墳①　・・・・・・・・125
墳丘表土掘削後状況（東から）
墳丘全景（東から）

写真図版２　小金２号墳②　・・・・・・・・126
調査前状況（北から）
墳丘土層断面（北西から）
埋葬施設横断土層断面（東から）
ピット群（西から）
埋葬施設（北西から）

写真図版３　小金３号墳①　・・・・・・・・127
調査前状況（北西から）
墳丘全景（南西上空から）
南側周溝（南西から）
北側周溝土層断面（西から）
墳丘盛土縦断土層断面西半部（東から）
墳丘羨道付近縦断土層断面（北西から）
盛土内土師器出土状況（北東から）
盛土内土師器出土状況（東から）

写真図版４　小金３号墳②　・・・・・・・・128
閉塞上部土層断面（南から）
羨門床面石列（南から）
玄門須恵器出土状況（南から）
横穴式石室天井石除去作業（南から）
初葬時閉塞（石室内から）

写真図版５　小金３号墳③　・・・・・・・・129
横穴式石室奥壁付近天井石（東から）
横穴式石室玄門付近天井石（南西から）

写真図版６　小金３号墳④　・・・・・・・・130
横穴式石室奥壁・右側壁接点（玄門から）
横穴式石室奥壁・左側壁接点（玄門から）
横穴式石室玄門（奥壁から）
横穴式石室玄門付近天井石（石室内から）
横穴式石室羨道右側壁（羨門から）

写真図版７　小金３号墳⑤　・・・・・・・・131
墓道右側壁（南から）
墓道左側壁（西から）

写真図版８　小金４・12号墳①　・・・・・・・132
古墳遠景（南から）
古墳からの遠望（北西から）

写真図版９　小金４・12号墳②　・・・・・・・133
調査区近景（南西から）
墓壙（南西から）

写真図版10　小金４・12号墳③　・・・・・・・134
埋葬施設検出状況（東から）
埋葬施設検出状況（西から）
石製紡錘車出土状況（北から）
石製紡錘車出土状況（西から）
埋葬施設掘削状況　（南西から）

写真図版11　高塚４号墳①　・・・・・・・135
調査前状況遠景（南東から）
墳丘全景（上空から）
東側周溝（南西から）
東側周溝（北東から）
墳丘全景（南東から）

写真図版12　高塚４号墳②　・・・・・・・・136
墳丘盛土南東部土層断面（東から）
墳丘盛土南西部土層断面（北から）
北側周溝土層断面（南東から）
埋葬施設横断断ち割り土層断面（西から）
埋葬施設全景（西から）
須恵器出土状況（北から）
刀子出土状況（北から）

写真図版13　高塚６号墳　・・・・・・・・137
北側周溝土層断面（東から）
南側周溝土層断面（東から）
埋葬施設縦断土層断面南半部（東から）
埋葬施設縦断断ち割り土層断面南半部（東から）
埋葬施設横断断ち割り土層断面東半部（南から）
棺外副葬品付近断ち割り土層断面（南から）
南側墳裾部断ち割り土層断面（東から）
作業風景（北から）

写真図版14　斎宮池19号墳　・・・・・・・・138
調査区全景（西から）
墳丘西側落ち込み（西から）
ＳＤ１（西から）
ＳＤ１土層断面（西から）
調査区全景（南から）

写真図版15　小金２・３号墳出土遺物①　・・・139

写真図版16　小金３号墳出土遺物②　・・・140

写真図版17　小金４・12号墳出土遺物　・・・141

写真図版18　高塚４号墳出土遺物①　・・・142

写真図版19　高塚４号墳出土遺物②　・・・143

写真図版20　高塚４号墳出土遺物③　・・・144

写真図版21　高塚４号墳出土遺物④　・・・145

写真図版22　高塚６号墳出土遺物　・・・146

写真図版23　斎宮池19号墳出土遺物　・・・147

写真図版24　高塚２号墳出土遺物①　・・・148

写真図版25　高塚２号墳出土遺物②　・・・149

写真図版26　高塚２号墳出土遺物③　・・・150

写真図版27　高塚２号墳出土遺物④　・・・151

写真図版28　高塚２号墳出土遺物⑤　・・・152

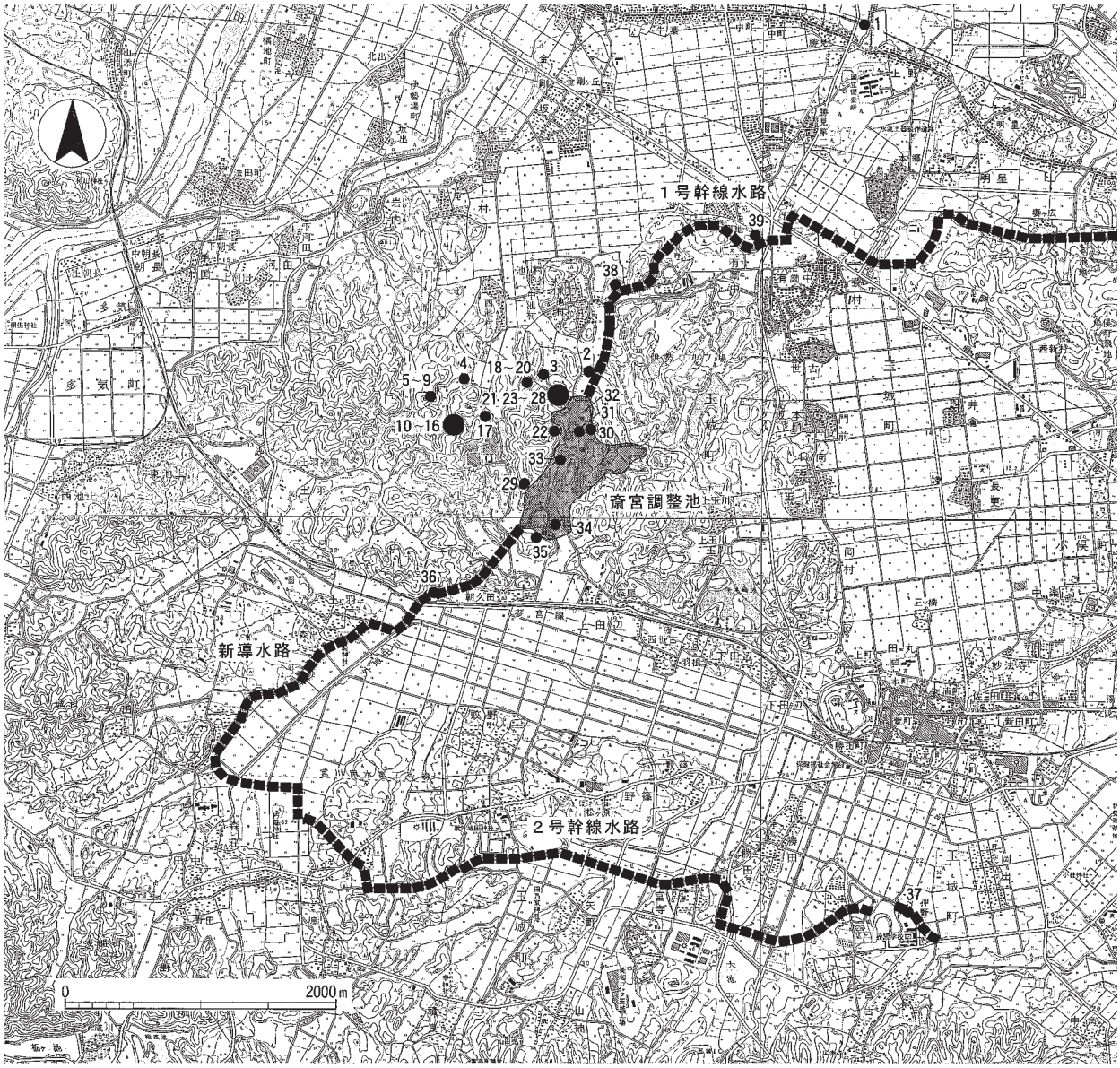
写真図版29　高塚２号墳出土遺物⑥　・・・153

# 第Ⅰ章　前言

## 第１節　調査に至る経緯

### ①宮川用水事業とこれまでの協議経過

農林水産省東海農政局が主管する国営宮川用水第二期土地改良事業（以下、宮川用水事業と略表記）は、昭和32～41年にかけて実施された第一期事業で整備された農業用水施設の老朽化や、その後の営農環境の変化によって生じた用水不足等の問題を解決するために平成８年３月に計画確定した事業である。宮川用水事業に関する埋蔵文化財保護の調整・協議については、平成９年度から本格化し、平成10～14年度の５ヶ年には、農林水産省と三重県との間で調査委託契約を締結し、発掘調査を実施している。この間の宮川用水事業全般にかかる調査に至る経緯や埋蔵文化財保護協議等については、既刊の『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ』[1)]に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。




第１図　事業関連遺跡位置図（1:50,000）

第２図　事業関連古墳位置図（1:10,000）

| No. | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 範囲確認調査（㎡） | 本発掘調査（㎡） | 工事立会（㎡） | 調査年度（平成） | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 丁長遺跡 | 明和町斎宮 | 575 | 2,800 | 280 | 18・19 | |
| 2 | 生洲遺跡 | 明和町池村 | 432 | — | 20 | 16・18・19 | 施工可 |
| 3 | 黒桂遺跡 | 明和町池村 | 288 | — | — | 16 | 施工可 |
| 4 | 野田遺跡 | 明和町池村 | 368 | — | — | 16・18 | 施工可 |
| 5 | 高塚２号墳 | 明和町池村 | 18 | — | — | 20 | 事業地外 |
| 6 | 高塚３号墳 | 明和町池村 | 11 | — | — | 20 | 事業地外 |
| 7 | 高塚４号墳 | 明和町池村 | 75 | 1,301 | — | 19・20 | |
| 8 | 高塚５号墳 | 明和町池村 | | | | | |
| 9 | 高塚６号墳 | 明和町池村 | | | | | |
| 10 | 小金２号墳 | 明和町池村 | 78 | 620 | — | 20・21 | |
| 11 | 小金３号墳 | 明和町池村 | 50 | 806 | — | 19・20 | |
| 12 | 小金４号墳 | 明和町池村 | 36 | — | — | 19 | 事業地外<br>県事業広域農道範囲 |
| 13 | 小金８号墳 | 明和町池村 | 12 | — | — | 19 | 施工可 |
| 14 | 小金10号墳 | 明和町池村 | 4 | — | — | 19 | 事業地外 |
| 15 | 小金11号墳 | 明和町池村 | 66 | — | — | 19 | 施工可 |
| 16 | 小金12号墳 | 明和町池村 | — | 130 | — | 19 | 県事業広域農道範囲 |
| 17 | 池村３号墳 | 明和町池村 | 3 | — | — | 19 | 事業地外<br>県事業広域農道範囲 |
| 18 | 黒桂３号墳 | 明和町池村 | 33 | — | — | 19 | 施工可 |
| 19 | 黒桂４号墳 | 明和町池村 | | | | | |
| 20 | 黒桂５号墳 | 明和町池村 | | | | | |
| 21 | 斎宮池３号墳 | 明和町池村 | 15 | — | — | 20 | 事業地外 |
| 22 | 斎宮池16号墳 | 明和町池村 | 15 | 615 | 180 | 11・17 | 平成17年度事業地外確定<br>現状保存 |
| 23 | 斎宮池18号墳 | 明和町池村 | — | — | — | 20 | 平成20年度協議で現状保存 |
| 24 | 斎宮池19号墳 | 明和町池村 | 39 | 240 | — | 20・21 | |
| 25 | 斎宮池20号墳 | 明和町池村 | 54 | — | — | 18 | 施工可 |
| 26 | 斎宮池21号墳 | 明和町池村 | | | | | |
| 27 | 斎宮池22号墳 | 明和町池村 | 18 | — | — | 18 | 施工可 |
| 28 | 斎宮池23号墳 | 明和町池村 | 47 | — | — | 18 | 事業地外<br>県事業広域農道範囲 |
| 29 | 等峯Ａ４号墳 | 明和町池村 | — | — | — | — | 平成17年度事業地外確定<br>現状保存 |
| 30 | 斎宮池遺跡 | 明和町池村 | 120 | 824 | — | 11・19 | |
| 31 | 真木谷遺跡 | 明和町池村 | 42 | 300 | — | 12・19 | |
| 32 | 斎宮池敷内遺跡 | 明和町池村 | 592 | — | 4,000 | 12・19・20 | 施工可 |
| 33 | 長谷町遺跡 | 明和町池村 | 100 | 946 | — | 12・18 | |
| 34 | 大谷遺跡 | 玉城町上田辺 | 1,664 | 5,735 | — | 16・17・18 | |
| 35 | 長楽寺関連遺跡 | 玉城町上田辺 | — | — | 100 | 19 | 施工可 |
| 36 | 与五郎谷遺跡 | 多気町土羽 | — | 523 | 5,500 | 18・20 | |
| 37 | 鉄砲塚遺跡 | 玉城町宮古 | 16 | — | — | 18 | 施工可 |
| 38 | 戸峯Ｂ遺跡 | 明和町池村 | — | — | 120 | 21 | 施工可 |
| 39 | 発シＡ遺跡 | 明和町有爾中 | — | — | 140 | 21 | 施工可 |
| 小　　計 | | | 4,771 | 14,840 | 10,340 | — | |
| 合　　計 | | | 29,951 | | | | |

第１表　事業関連遺跡一覧表

| No. | 古墳の名称 | 調査年度 | 協議・対応結果 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 高塚１号墳 | — | 現状保存。 | |
| 2 | 高塚２号墳 | 平成20年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | |
| 3 | 高塚３号墳 | 平成20年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | |
| 4 | 高塚４号墳 | 平成19・20年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。 | |
| 5 | 高塚５号墳 | 平成19・20年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。 | |
| 6 | 高塚６号墳 | 平成19・20年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。 | |
| 7 | 高塚７号墳 | — | 現状保存。 | |
| 8 | 小金１号墳 | — | 現状保存。 | |
| 9 | 小金２号墳 | 平成20・21年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。 | |
| 10 | 小金３号墳 | 平成19・20年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。 | |
| 11 | 小金４号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査後、一部本調査。 | 広域農道範囲 |
| 12 | 小金５号墳 | — | 現状保存。 | |
| 13 | 小金６号墳 | — | 現状保存。 | |
| 14 | 小金７号墳 | — | 現状保存。 | |
| 15 | 小金８号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 16 | 小金９号墳 | — | 現状保存。 | |
| 17 | 小金10号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | |
| 18 | 小金11号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 19 | 小金12号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査後、一部本調査。 | 広域農道範囲 |
| 20 | 上村池35号墳 | — | 現状保存。 | |
| 21 | 上村池36号墳 | — | 現状保存。 | |
| 22 | 池村１号墳 | — | 現状保存。 | |
| 23 | 池村２号墳 | — | 現状保存。 | |
| 24 | 池村３号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | 広域農道範囲 |
| 25 | 黒桂１号墳 | — | 現状保存。 | |
| 26 | 黒桂２号墳 | — | 現状保存。 | |
| 27 | 黒桂３号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 28 | 黒桂４号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 29 | 黒桂５号墳 | 平成19年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 30 | 斎宮池１号墳 | — | 現状保存。 | |
| 31 | 斎宮池２号墳 | — | 現状保存。 | |
| 32 | 斎宮池３号墳 | 平成20年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | |
| 33 | 斎宮池４号墳 | — | 現状保存。 | |
| 34 | 斎宮池５号墳 | — | 現状保存。 | |
| 35 | 斎宮池16号墳 | 平成11・17年度 | 範囲確認調査後、全面本調査。現状保存。 | |
| 36 | 斎宮池17号墳 | — | 現状保存。 | |
| 37 | 斎宮池18号墳 | — | 現状保存。 | |
| 38 | 斎宮池19号墳 | 平成20・21年度 | 範囲確認調査後、一部本調査。 | |
| 39 | 斎宮池20号墳 | 平成18年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 40 | 斎宮池21号墳 | 平成18年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 41 | 斎宮池22号墳 | 平成18年度 | 範囲確認調査の結果、施工可。 | |
| 42 | 斎宮池23号墳 | 平成18年度 | 範囲確認調査の結果、事業地外。現状保存。 | 広域農道範囲 |

※所在地はすべて明和町池村。

**第２表　事業関連古墳一覧表**

平成10～14年度に本格実施された宮川用水事業に伴う発掘調査は、平成14年度の中途で事業の全体計画の見直しが検討されることに伴い、未実施分の調査が凍結され、次年度以降の調査委託契約の更新も見送られることとなった。

事業計画の見直しの後、新たな事業計画をもとに埋蔵文化財保護の調整・協議が本格的に再開したのは平成16年度である。再開後の事業全般にかかる調査に至る経緯や埋蔵文化財保護協議等については、既刊の『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』[2)]に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。また、宮川用水事業にかかる平成16年度以降の協議対象遺跡については、第１図及び第１表を参照されたい。

## ②各古墳の調査に至る経緯

本報告書に所収された各古墳は、斎宮調整池の拡張造成に伴う発生土処分場として計画された同池西側の丘陵部に位置する。前述のとおり、宮川用水事業は平成14年度から事業計画の見直しが行われたが、当該発生土処分場についても事業計画が変更されたため、新たに確定した事業計画地内の詳細分布調査を地元文化財保護部局の明和町斎宮跡課の協力も得て、平成17年５月23日・25日、６月17日に行った。工事工程の都合上、立木等の伐開作業前に分布調査を行ったため、一部分布状況が不明瞭な範囲があったが、事業地内に保護協議の対象となる古墳が複数確認されたため、東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所と協議を行い、同年度末に協定変更を行った上で、平成18年度以降の調査対象地とした。第２図及び第２表に宮川用水事業の関連古墳を示したが、第２表の備考欄に「広域農道範囲」と記した№11の小金４号墳、№19の小金12号墳、№24の池村３号墳、№42の斎宮池23号墳については、県事業である広域農道整備事業の事業計画地内に位置する古墳である。当該の古墳は、前述の県事業に伴い、県の開発部局と文化財保護部局で保護協議が行われていたが、宮川用水事業の斎宮調整池拡張造成に伴う発生土を処分場へ搬出する工事用道路を、当該広域農道の計画路線上に先行して敷設することが平成17年度末に決定されたため、宮川用水事業にかかる協議対象遺跡となった。なお、第２表の№35の斎宮池16号墳は、事業計画見直し以前の平成11年度に本調査に着手したが、調査の途上で事業計画の変更が検討されることとなったため、周溝及び墳丘の検出段階で調査が凍結され、埋め戻された。事業計画の見直しの後に策定された新たな事業計画では、当該古墳は事業地外となったため、現状保存されることとなった。これについては既刊の『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』[3)]に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。

## ③文化財保護法等による諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

**小金２号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
　平成21年５月12日付教埋第67号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）
　平成21年８月21日付教委第12－4408号

**小金３号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
　平成20年６月20日付教埋第119号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）
　平成21年１月13日付教委第12－4419号

**小金４・12号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
　平成19年６月22日付教埋第144号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）
　平成19年８月29日付教委第12－４－４号

**高塚４号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）
　平成20年６月20日付教埋第119号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成21年１月13日付教委第12－4420号

**高塚５号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成20年６月20日付教埋第119号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成21年１月13日付教委第12－4421号

**高塚６号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成20年６月20日付教埋第119号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成21年１月13日付教委第12－4422号

**斎宮池19号墳**

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成21年５月12日付教埋第67号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成21年８月21日付教委第12－4407号

**註**

1）　三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　外山遺跡・片落Ｃ遺跡』　2000、三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　発シＢ遺跡―第３次調査―』　2001、三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　発シＡ遺跡』　2002、三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ　野田塚・野田遺跡』　2003、三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　発シＡ遺跡―第２次調査―』　2002

2）　三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ　丁長遺跡（第１次）・大谷遺跡（第１・２次）発掘調査報告』　2009

3）　三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』　2000

## 第２節　調査の経過

宮川用水事業の対象地域内には、多くの古墳があることが以前より知られていた。特に、斎宮調整池拡張に伴う発生土処分場が計画された範囲には多くの古墳が存在しているため、発掘調査に先立って平成17年度に分布調査を実施し、事業対象地内に含まれる可能性がある古墳の位置の確認と、未発見古墳の有無の確認に努めた。その結果、複数の古墳が事業によって影響を受けることが判明したほか、本書で報告を行っている高塚４・６号墳などいくつかの古墳が新たに発見された。

これらの事業対象地内の古墳の発掘調査は、上記の分布調査の結果を踏まえた上で、平成18年度から始められた。平成18年度には斎宮池古墳群を中心に範囲確認調査を行い、事業対象地内における各古墳の墳丘・周溝の有無などを確認していった。

平成19年度には、６月14日から小金４号墳の範囲確認調査を行ったが、この調査によって、それまで存在の知られていなかった小金12号墳を検出したため、引き続きこの古墳の調査を行った。

この小金４・12号墳の調査と並行して、８月３日には黒桂３・４・５号墳の範囲確認調査を行った。

また、６月22日より、次年度の調査対象となっていた小金３号墳および高塚４・５・６号墳の範囲確認調査を行い、遺構の有無の確認や調査範囲の確定を行った。

平成20年度は、６月９日より斎宮池３・19号墳、小金２号墳、高塚２・３号墳の範囲確認調査を開始した。その結果、高塚２・３号墳と斎宮池３号墳については、事業地内では周溝・盛土などの古墳関連の遺構が確認されず、調査の必要はないと判断されたが、小金２号墳と斎宮池19号墳については調査の必要があると判断されるに至った。

この範囲確認調査は６月18日まで行われたが、この範囲確認調査の現地作業が一段落した６月16日より、小金３号墳および高塚４・５・６号墳の本調査を開始した。

小金３号墳の調査と高塚４・５・６号墳の調査とは並行して行った。墳丘・周溝の調査から始め、そ

の後に埋葬施設の調査へと入っていったが、その過程で高塚５号墳については自然地形であることが判明した。

調査が進行するにつれ、小金３号墳では横穴式石室が良好に遺存していることが確認されたため、現地説明会の開催が検討された。ただし、大規模工事を行っている現場であるため、参加者の安全確保の観点から、現地への進入方法や日程については事業者や工事担当者との綿密な協議が必要であった。

こうした協議を経て、現地説明会を10月19日に開催することができた。石室内部や墓道の調査が完了していない時点での説明会となったが、それにも関わらず、当日は地元の方を中心に約150名の参加者を得ることができた。

現地説明会終了後、小金３号墳、高塚４・６号墳とも埋葬施設内部の調査を行い、副葬品などが出土した。高塚４・６号墳については小金３号墳より早く調査が終了した。小金３号墳については12月１日に調査を終了し、現地より撤収した。

平成21年度には、まず５月18日から斎宮池19号墳の地形測量を行った。それと並行して、５月20日から小金２号墳の現地調査を開始した。その後しばらくは小金２号墳における掘削作業を優先的に行ったが、小金２号墳の埋葬施設の調査にかかった段階で斎宮池19号墳についても掘削作業を開始した。

小金２号墳では墳丘の検出、埋葬施設の検出と掘削、墳丘盛土の調査などを順次行ない、並行して斎宮池19号墳でも墳丘の検出、墳丘盛土の調査などを行っていった。作業が概ね順調に進んだことや、周溝など掘削に手間のかかる遺構が少なかったことなどから、予定よりもやや早く７月21日には現地での調査作業を終えることができた。

なお、平成19年度から平成21年度における、本書で報告する古墳の現地での発掘調査作業の進行の概略は、以下の調査日誌（抄）の通りである。

**＜調査日誌（抄）＞**

【平成19年度】

６月14日　小金４号墳現地調査開始。地形測量開始。

６月21日　周溝検出。小金４号墳の推定墳丘ラインとは異なる位置からも、周溝らしき溝を検出。

７月６日　周溝掘削開始。

７月18日　小金４号墳の墳丘外から墓壙を検出。これにより、調査対象が小金４号墳に隣接する別の古墳であることを確認。以降、小金12号墳として調査を進める。

７月26日　木棺内部掘削開始。

７月31日　滑石製紡錘車出土。

８月８日　全景写真撮影。

８月14日　現地作業終了、撤収。

【平成20年度】

６月16日　小金３号墳、高塚４・５・６号墳現地調査開始。

７月４日　高塚４号墳範囲確認調査時の調査坑を掘り下げての埋葬施設検出開始。

８月８日　高塚４号墳周溝掘削開始。

９月２日　小金３号墳周溝完掘。

９月４日　小金３号墳・高塚４号墳空測。高塚５号墳想定地の断ち割り調査の結果、自然地形と判明。

９月８日　小金３号墳墳丘掘削開始。

９月12日　小金３号墳盛土内より土師器杯出土。

10月３日　小金３号墳石室天井石平面実測開始。

10月10日　高塚６号墳周溝掘削開始。

10月16日　小金３号墳石室内流入土除去開始。

10月19日　現地説明会開催。

10月20日　小金３号墳閉塞・墓道掘削開始。高塚６号墳周溝掘削完了。

10月22日　高塚４・６号墳埋葬施設検出。高塚４号墳では副葬品の一部も検出。

10月28日　高塚４号墳木棺内部掘削開始。

10月30日　高塚４号墳埋葬施設写真撮影。

11月５日　高塚６号墳棺外から副葬品検出。

11月６日　小金３号墳石室内部写真撮影。

11月11日　高塚６号墳木棺内部掘削開始。

11月12日　小金３号墳石室実測開始。

11月17日　高塚４号墳調査終了。高塚６号墳埋葬施設写真撮影。

11月20日　高塚６号墳調査終了。

12月１日　小金３号墳墳丘・墓壙断ち割り。現地作業終了、撤収。

【平成21年度】

５月18日　斎宮池19号墳地形測量開始。

５月20日　小金２号墳現地調査開始。

６月９日　小金２号墳東側で性格不明のピット群を検出。

６月19日　小金２号墳埋葬施設検出。

７月９日　小金２号墳埋葬施設完掘。斎宮池19号墳調査区内地形測量及び墳丘断ち割り。

７月13日　小金２号墳埋葬施設写真撮影。

７月14日　小金２号墳墳丘断ち割り。

７月15日　斎宮池19号墳ＳＤ１平面検出及び掘削。埋土中より土器出土。

７月21日　現地作業終了、撤収。

# 第Ⅱ章　位置と周辺の環境

## 第１節　地理的環境

### ①地形と土地利用

小金・高塚・斎宮池古墳群は、いずれも三重県多気郡明和町池村に所在する。これらの古墳群が立地しているのは、標高30～50mほどの小高い丘陵地である。この丘陵地は、明和町南部から玉城町北部にかけてやや東西に長く広がっており、玉城丘陵と呼ばれている[1)]。

この玉城丘陵は、紀伊山地の一角にあたる高見山地から連なる多気山地の東縁部に位置する。多気山地の一連の山塊からは櫛田川とその支流の佐奈川によって区切られており、独立丘陵状になっている。最高所は南西部の標高117mの庄下山であり、そこから北および東へ向かって高さを減じながら丘陵地が広がっていく。なお、東端部には谷を挟んで小規模な独立丘陵状になった部分が存在しており、この部分は大仏山丘陵と別称されることが多い。

玉城丘陵の一つの特徴は、細い開析谷が丘陵の奥部まで多く入り込んでいることである。そのため、尾根状の稜線が各所で発達している。近世以降には、こうした地形を利用して谷筋に多くの溜池が造られている。

付近の地形に目を転じてみると、玉城丘陵の北側は伊勢湾へ向かって開けた台地となっている。この台地は、主に櫛田川の支流の祓川に沿って広がる斎宮面（斎宮台地）と呼ばれる中位面と、玉城丘陵の北麓から続く明星面（明星台地）と呼ばれる高位面からなり、比較的安定した土地であることから、いずれも古くから人々の生活の主要な場として利用されてきた。玉城丘陵から谷を伝って流れ出した水は、笹笛川や大堀川といった小河川となって北流し、これらの台地を開析しながら伊勢湾へと注いでいる。

一方、玉城丘陵の南側には外城田川が流れており、この川に沿って外城田川平野とも呼ばれる沖積地が広がっている。この沖積地は大部分が水田として利用されている。また、玉城丘陵の南側裾部付近に広がる段丘面は主に果樹園や畑などとして利用されているが、その東部においては古くから集落が発達しており、現在でも玉城町役場が置かれるなど市街地化されている。

### ②地質

三重県には中央構造線が東西に走っており、その南北で地質が異なる。玉城丘陵付近では中央構造線の存在を示す断層は地表面では観察できないが、玉城町の南部の国束山の北麓付近を東西に走っているものと推定されている。したがって、玉城丘陵はその全体が内帯にあたり、領家変成帯に属する岩石によって形成されている。

領家変成帯には変成岩類や花崗岩類などが含まれるが、玉城丘陵を形成している岩石はほとんどが花崗岩類である。ただし、玉城丘陵の花崗岩類は風化が著しく、地表面付近ではほぼバイラン土（マサ土）化している。この風化はかなりの深度に及ぶようであり、約10数mの深さまで風化した花崗岩類がみられることが確認されている[2)]。地盤がこうした軟弱な風化花崗岩であることが、玉城丘陵で谷や尾根が発達した一つの要因と考えられる。

また、中央構造線が近いことから外帯に属する岩石も比較的近い地域で産出し、玉城丘陵からも近い櫛田川や宮川では泥質片岩などが多くみられる。

このほか、玉城丘陵北側の台地の一部では花崗岩類の上位に砂礫層の堆積が認められる。その中には、チャートやホルンフェルス、砂岩、花崗岩類などの円礫や亜円礫が含まれている。

### ③交通

明和町は海岸付近に広がる平野部に沿って松阪方面から伊勢方面へと至る経路上に位置するため、古くから伊勢神宮への参拝路として交通網が発達していた。

明和町付近を通る主要交通路は、市街地を迂回し

て海岸線寄りに新設された国道23号南勢バイパスを除けば、海沿いよりも山沿いを通っている。近世には、玉城丘陵の北方１㎞ほどのところに参宮街道が通っており、また、玉城丘陵の南側には丘陵裾部に沿って伊勢本街道が通っていた。これらの街道は、櫛田川を渡って松阪方面へと続き、そこから伊賀や大和、もしくは津・桑名など伊勢北部方面へと、様々な街道を通じてつながっていく。

こうした各地へとつながる交通網の形成は、奈良時代にはすでに始まっていたとみられる。玉城丘陵から1.5㎞ほど北には斎宮が置かれていたが、この斎宮を拠点として斎王をはじめ多数の官人などが京や伊勢神宮との間を往来していた。発掘調査によっても奈良時代まで遡る可能性が高い道路遺構が検出されている[3)]。

このように玉城丘陵周辺の地域は、伊勢神宮への参拝経路における通過点もしくは結節点として、古くから主要な位置を占めてきた地域の一つであるといえる。

また、海へ目を向けると、現在は漁港となっている明和町大淀には、倭姫命が伊勢湾を渡海する際に海が淀んでいたことから大淀という地名となったという伝説が残されており、こうした海路を介した交通の存在も窺うことができる。

**註**

1）　玉城丘陵に関しては、以下の文献を参考にした。
玉城町史編纂委員会（編）『玉城町史』上巻　玉城町　1995、明和町史編さん委員会（編）『明和町史』史料編第１巻　明和町　2004

2）　明和町史編さん委員会（編）2004

3）　三重県埋蔵文化財センター『丁長遺跡（第１次）・大谷遺跡（第１・２次）発掘調査報告』　2009

# 第２節　歴史的環境

## ①周辺の遺跡

小金・高塚・斎宮池の諸古墳群が位置する玉城丘陵での人々の活動は、時代によって様々に変化してきた。また、その周辺でも様々な活動の痕跡が確認されている。ここでは、玉城丘陵とその周辺に存在する遺跡を中心に概観していきたい[1)]。

**古代以前**　玉城丘陵周辺では、旧石器時代に遡る遺跡が多く見つかっており、伊勢湾西岸地域の中でも旧石器時代遺跡が多く分布する地域として知られている。当該地域の旧石器時代の遺跡は、その多くが遺物の採集によって知られたものであるが、特にナイフ形石器が採集されている遺跡が多く、カリコ遺跡（49）では数百点ものナイフ形石器が採集されている[2)]。この時代の遺跡は、丘陵上よりも丘陵縁辺部や周囲の台地上などに多いが、玉城丘陵にも上村池Ａ遺跡（35）など、少数ながら旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡も、玉城丘陵及びその周辺で多数確認されている。玉城丘陵の裾部や斜面に位置する坂倉遺跡（30）や上村池Ａ遺跡、上村池Ｂ遺跡（36）では有舌尖頭器や神子柴型石斧、押型文土器などが採集されており、縄文時代草創期から早期にかけての時期に玉城丘陵でも人々が活動していたことが窺われる。

しかしながら、縄文時代前期になると、櫛田川西岸の山添遺跡（３）などでは遺物が出土しているものの、玉城丘陵及びその周辺では遺跡がほとんど確認できなくなり、生活環境などに何らかの大きな変化があったものと思われる。こうした遺跡が希薄な状況は、縄文時代中期前半まで続く。

玉城丘陵周辺で再び遺跡数の増加がみられるのは、縄文時代中期後半からである。後期から晩期にかけての遺跡は、丘陵裾部や台地上だけでなく、祓川沿いの沖積平野の微高地などへも広く展開している。金剛坂遺跡（13）や森荘遺跡（66）、コドノＡ遺跡（25）などで後期から晩期にかけての遺構・遺物が多く確認されているほか、神殿遺跡（15）では独鈷石の出土が注目される。

また、玉城丘陵に位置する斎宮池遺跡（41）では、中期末～後期初頭の遺構や遺物が多数検出されており、この時期には丘陵上にもある程度の規模の集落が営まれていたことが窺われる[3)]。斎宮池遺跡は後期前葉で途絶するが、その後の晩期の遺物も、玉城

0　2000m

**A　高塚古墳群**
**B　小金古墳群**
**C　斎宮池古墳群**
1　天王山遺跡
2　琵琶垣内遺跡
3　山添遺跡
4　古轡通りB遺跡
5　中の坊遺跡
6　横地高畑遺跡
7　斎宮跡
8　赤坂遺跡
9　平尾遺跡
10　鱗尾城址
11　丁長遺跡
12　曽祢崎遺跡
13　金剛坂遺跡
14　寺垣内遺跡
15　神殿遺跡
16　織糸遺跡
17　安養寺跡
18　北野遺跡
19　堀田遺跡
20　水池土器製作遺跡
21　黒土遺跡
22　明星牛場A遺跡
23　城堀遺跡
24　上村城址
25　コドノA遺跡
26　コドノB遺跡
27　岩内城址
28　城山遺跡
29　カウジデン遺跡
30　坂倉遺跡
31　六ツ葉広遺跡
32　カゴ山遺跡
33　西村遺跡
34　愛場遺跡
35　上村池A遺跡
36　上村池B遺跡
37　樋口遺跡
38　世古A遺跡
39　池村城跡
40　長谷町遺跡
41　斎宮池遺跡
42　戸峯A遺跡
43　戸峯B遺跡
44　垣場遺跡
45　発シA遺跡
46　発シB遺跡
47　有爾中城址
48　世古里中遺跡
49　カリコ遺跡
50　大仏山中世墓群
51　六軒屋遺跡
52　湯田西浦遺跡
53　坂ノ垣内遺跡
54　寺田遺跡
55　田丸城跡
56　波瀬B遺跡
57　城山城跡
58　西世古（辻ノ長）遺跡
59　師子焼遺跡
60　大谷遺跡
61　与五郎谷遺跡
62　平林遺跡
63　笠木館址
64　北ノ山窯跡群
65　長安寺窯跡群
66　森荘遺跡
67　鳥取山遺跡
68　野篠里中遺跡
69　仲垣内遺跡
70　月よべ遺跡
71　赤垣内遺跡

**第３図　周辺遺跡分布図（1:50,000）**

丘陵上で点々と確認されている。縄文時代中期から晩期にかけては、丘陵が居住地のほかに狩猟・採集などの生業の場としても広く利用されていたものと思われる。

弥生時代には、主たる集落は台地や沖積平野などの平地に営まれることが多くなり、丘陵上には生活の痕跡が薄い。弥生時代前期には、祓川東岸の段丘崖沿いに金剛坂遺跡やコドノＢ遺跡（26）などの集落が形成されており、コドノＢ遺跡では周溝墓も検出されている。

弥生時代中期には、やはり祓川東岸の段丘崖沿いに金剛坂遺跡や斎宮跡（７）の古里地区など比較的大規模な集落が形成されている。竪穴住居のほか、方形周溝墓も検出されている。これらの集落は中期を通じて存続するようである。このほか玉城丘陵の裾部でも、西村遺跡（33）や波瀬Ｂ遺跡（56）などで中期後葉の遺構・遺物が検出されている。

後期前半には一時的に遺跡数が減少し、中期に営まれた集落も衰退するようである。集落の様相は不明であるが、曽祢崎遺跡（12）や月よべ遺跡（70）では、この時期の方形周溝墓が検出されている。

後期後半から終末期にかけては、遺跡数が増加するとともに大規模な遺跡も目立つようになる。北野遺跡（18）に大規模な集落が形成されているほか、野篠里中遺跡（68）・仲垣内遺跡（69）・赤垣内遺跡（71）・月よべ遺跡がひとまとまりの集落を形成している可能性がある[4)]。また、当該地域ではこの時期の墳墓の検出例が多く、北野遺跡や金剛坂遺跡、寺垣内遺跡（14）、織糸遺跡（16）、コドノＢ遺跡、波瀬Ｂ遺跡などで方形周溝墓群が確認されている。

しかしながら、弥生時代に丘陵地で全く人々の活動の痕跡が認められないわけではない。尾根上に立地する神前山１号墳の周辺で弥生時代前期の土器が出土しているほか、本書で報告している小金古墳群（Ｂ）や斎宮池古墳群（Ｃ）の発掘調査では中期や後期の土器が出土している。丘陵上でも小規模な集落の形成もしくは墳墓の築造などが行われていた可能性が考えられる。また、玉城丘陵に入り込む谷の谷底に位置する大谷遺跡（60）では、弥生時代終末期の木製品の加工に伴う施設が確認されており、丘陵地が多様な地形環境に応じて様々な活動に利用されていたことが窺われる。

古墳時代には、玉城丘陵には数多くの古墳が築造される。これらの古墳や、そのほかの古墳時代の遺跡については後述したい。

**古代**　古墳の築造が終焉を迎える７世紀後半には、伊勢神宮に仕えるために都から遣わされた斎王の居所として、斎宮（７）が成立したと考えられている。斎宮が設けられたのみではなく、明和町を含む多気郡は度会郡とともに早くから伊勢神宮の神領となっており、当該地域と伊勢神宮とのつながりは強いものであった。

斎宮の成立は、この地域の社会に大きな影響を及ぼしている。斎宮に地域の政治・経済・交通などの機能が集中していくにしたがって、その周辺に人々の活動の場も集まっていったものと考えられる。斎宮跡や丁長遺跡（11）では、８世紀に遡りうる古代伊勢道と考えられる道路遺構が検出されており、こうした交通網の整備も古くから行われていたことが窺われる。

また、斎宮跡周辺の古代の遺跡で注目されるものに、他地域では例がないほど多数検出されている土師器焼成坑の存在があげられる。奈良時代のものが多く、この時期に斎宮周辺で土師器生産が非常に活発に行われていたことを示すものである。こうした土師器焼成坑は斎宮跡近辺に存在する北野遺跡や水池土器製作遺跡（20）、堀田遺跡（19）などで特に多く見つかっているが、玉城丘陵においても、北側裾部の緩斜面に位置する戸峯Ａ遺跡（42）や戸峯Ｂ遺跡（43）、発シＡ遺跡（45）、発シＢ遺跡（46）などで多数の土師器焼成坑が検出されている。これらの遺跡では竪穴住居もみつかっており、丘陵裾部にはこうした土器生産に関連する集落が営まれていたものと思われる。

斎宮は、遺構の状況や遺物の出土量などからみて、奈良時代後期から平安時代前期頃に最も栄えたと考えられるが、すでに平安時代中期には衰退し始めている。こうした点とも関連するのか、玉城丘陵では今のところ平安時代中期から後期にかけての目立った遺跡はみあたらない。奈良時代に玉城丘陵縁辺部に形成された土師器生産に関わったと思われる集落も、平安時代初頭には消えていく。

ただし、裾部では平安時代の遺物・遺構が少量ながら確認された遺跡がいくつか存在しており、師子焼遺跡（59）では少量の平安時代後期の遺物とともに緑釉陶器片が出土している。

また、玉城丘陵の谷筋の緩斜面に位置する長谷町遺跡（40）で平安時代前期の墓が見つかったことは注目される。この墓は９世紀末頃の火葬墓で、灰釉陶器の蔵骨器が用いられており、身分の高い被葬者が想定される。

**中世**　古代において重要な位置を占めた斎宮も、南北朝期には廃絶を迎える。しかしながら、伊勢神宮への参拝が幅広い層の人々へと広まっていく中で、当該地域の伊勢神宮への交通における要衝という位置づけは失われることがなかった。

前節で述べたような周辺を通る街道筋が見渡せる玉城丘陵には、いくつかの中世城館が築かれている。良好に遺存しているものは少ないが、有爾中城（47）のように単郭のものや、池村城（39）のように複数の小規模な郭と土塁や堀切からなるものなどがみられる。これらの中世城館の築造時期はほとんどが不明であるが、岩内城（27）については付近の城堀遺跡（23）の発掘調査成果から、16世紀代のものである可能性が指摘されている[5)]。

また、現在は中世城館としての様相をほとんど残していないものの、南北朝期の延元元年（1336年）に北畠親房らによって玉城丘陵の南東端に築かれた田丸城（55）は、当初は玉丸城と呼ばれ、南朝方の拠点として重要な位置を占めるものであった。この城は南北朝の争乱の中で落城するが、室町時代には北畠氏の地域支配の拠点として再建された。15世紀頃にはすでに周囲に中世城下町や関所などが展開していたようで[6)]、近隣の波瀬Ｂ遺跡では15～16世紀の掘立柱建物群が検出されており、関連が窺われる。

北畠氏に関わるものとしては、城館のほかに玉城丘陵のすぐ北側に造営された安養寺（17）も注目される。安養寺は永仁５年（1297年）に建立され、北畠氏から保護を受けた有力な寺院であったとされる。発掘調査では、掘立柱建物や井戸などのほか、幅４～５ｍほどの大規模な堀が検出されている。

こうした城館や寺院などの主要施設以外にも、玉城丘陵では裾部に小規模な遺跡の存在が目立つ。師子焼遺跡や愛場遺跡（34）、世古Ａ遺跡（38）などでは鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸などの遺構が検出されており、玉城丘陵周辺に散在した中世村落の様相の一端を窺うことができる。また、大仏山丘陵の東側裾部には大仏山中世墓群（50）が形成されているほか、外城田川南側の丘陵地に位置する鳥取山遺跡（67）でも中世墓が見つかっており、丘陵地は墓域としても利用されていたようである。

## ②古墳の展開

玉城丘陵は、伊勢湾西岸地域全体からみても有数の古墳の集中地帯である。本報告は、この玉城丘陵に築造された古墳の発掘調査に関する内容が中心となるため、ここで玉城丘陵とその周辺における古墳の築造状況や集落・生産遺跡などについてまとめて述べておきたい。

**前期の様相**　玉城丘陵とその周辺地域では、今のところ前期古墳は確認されておらず、古墳の築造は中期に入ってから始まるようである。

ただし、前期の集落はいくつか確認されている。中でも、古轡通りＢ遺跡（４）では四面庇付建物と大型の井戸が検出されており、注目される。

**中期古墳と集落**　現在確認されているところでは、玉城丘陵で最も早く築造された大型古墳は権現山古墳群（61）[7)]と考えられる。方墳２基からなるが、２号墳からは滑石製の壺形石製品や円筒埴輪、壺形埴輪などが出土しており、中期前葉に築造されたものと考えられる。権現山２号墳は長辺が46ｍにも及ぶ大型の方墳であり、出土品からみても当該地域における首長墳と考えられる。

続いて築造される首長墳には、高塚１号墳（Ａ）がある。高塚１号墳は径55ｍの大型の造り出し付円墳[8)]で、２箇所に造り出しが付く。採集されている埴輪からみて、古墳時代中期中葉に築造されたものと考えられる[9)]。

高塚１号墳の後にも、中期後葉には径34ｍの大型の造り出し付円墳である神前山１号墳（32）が築造される。他にも、詳細な築造時期は不明ながら、径44ｍの造り出し付円墳である大塚１号墳（33）、造り出しは付かないものの径50ｍの円墳である天王山

**A　高塚古墳群**
**B　小金古墳群**
**C　斎宮池古墳群**
1　方婦多山古墳
2　天王山古墳群
3　西谷古墳群
4　山添古墳群
5　古轡通り古墳群
6　横地高畑遺跡ＳＸ13
7　坂本古墳群
8　東垣外古墳群
9　野塚古墳群
10　塚山古墳群
11　斎宮跡Ａ～Ｇ号墳
12　斎宮跡Ｈ～Ｎ号墳
13　斎宮跡Ｏ号墳
14　曽祢崎古墳群
15　明星古墳群
16　柿ノ森古墳
17　金剛坂古墳
18　辰ノ口古墳群
19　順禮野古墳群
20　西ノ野古墳
21　蓑村大塚古墳
22　鳥戸古墳
23　大仏山33・34号墳
24　倉子古墳
25　尾崎古墳群
26　カリコ古墳
27　小垣内古墳
28　間無事古墳
29　鷺山古墳群
30　大仏山古墳群
31　城山古墳群
32　神前山古墳群
33　大塚古墳群
34　河田古墳群Ａ支群
35　河田古墳群Ｂ支群
36　河田古墳群Ｃ支群
37　河田古墳群Ｄ支群
38　河田古墳群Ｅ支群
39　河田古墳群Ｆ支群
40　河田古墳群Ｇ支群
41　河田古墳群Ｈ支群
42　河田古墳群Ｉ支群
43　河田古墳群Ｊ支群
44　黒坂古墳群
45　かまくら古墳
46　天王山古墳群
47　カゴ山古墳群
48　丸山古墳
49　六ツ葉広古墳群
50　坂倉古墳群
51　妙と池古墳群
52　杉谷古墳
53　浅間山古墳
54　長迫間１号墳
55　長迫間古墳群
56　女山古墳群
57　八ツ田古墳群
58　上村池古墳群
59　一長Ａ古墳群
60　一長Ｂ古墳群
61　権現山古墳群
62　村岡古墳
63　マイラ古墳
64　森出古墳群
65　中山古墳群
66　ユブミ古墳群
67　池村古墳群
68　愛場古墳群
69　世古古墳群
70　大道古墳
71　真木谷古墳
72　等峯Ａ古墳群
73　等峯Ｂ古墳群
74　朝久田古墳群
75　師子焼Ａ古墳群
76　師子焼Ｂ古墳群
77　戸峯古墳群
78　大林古墳群
79　合戦田古墳群
80　長五郎林古墳群
81　垣場古墳群
82　発シ古墳群
83　野田古墳
84　豆塚古墳群
85　茶臼塚古墳群
86　塚田古墳
87　佐田山古墳群
88　土山古墳群
89　東山端古墳
90　城廻場古墳
91　宮ノ前古墳
92　東浦古墳
93　里古墳
94　大山田Ａ古墳
95　大山田Ｂ古墳
96　辻ノ長古墳群
97　のの尾古墳群
98　赤坂古墳
99　稲生古墳群
100　宮西古墳
101　野篠狐山古墳
102　西稲場古墳群
103　ゑなど古墳
104　谷しんで古墳群
105　坊主山Ａ古墳群
106　坊主山Ｂ古墳群
107　下り藤古墳群

**第４図　周辺古墳分布図（1:50,000）**

19号墳（46）も中期に築造されたものと思われる。

伊勢湾西岸地域では、玉城丘陵以外でも古墳時代中期前葉から中葉にかけて松阪市宝塚２号墳[10]や鈴鹿市白鳥塚１号墳[11]などの大型の造り出し付円墳が築造されている。宝塚２号墳と高塚１号墳とは墳丘築造における基準尺が共通する可能性が指摘されており[12]、伊勢湾西岸地域の広域にわたる動向の中で、玉城丘陵においても大型の造り出し付円墳の築造が行われたものと推測される。

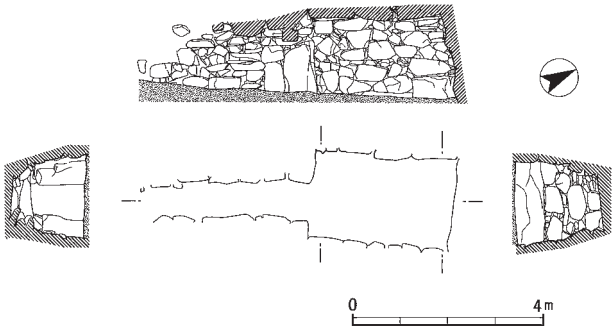
また、これらの大型造り出し付円墳の中には、周囲に径10～20mほどの円墳が多数築造されている例がある。こうした周囲の古墳には、後期・終末期まで時期的に下るものも含まれている。大型造り出し付円墳の築造を契機として、長期間にわたって古墳群が形成されていったものと考えられよう。

祓川東岸の段丘崖沿いには、中期後半に塚山古墳群（10）や辰ノ口古墳群（18）のような、いわゆる古式群集墳が展開する。これらの古墳群では円墳と方墳が混在している。

中期の集落はあまり見つかっていないが、仲垣内遺跡（69）では竪穴住居が検出されている。

**後期古墳と集落**　大型造り出し付円墳の築造は中期で終わり、後期には中期ほど大型の古墳の築造は認められない。また、祓川東岸の段丘崖沿いに展開する中期後半の古式群集墳でも、中期末には古墳の築造がほぼ停止するようである。

玉城丘陵では、これまでのところ後期前半に築造された古墳はあまりみつかっていない。少ない例ながら、前方後円墳である天王山６号墳（46）は、出土した埴輪から後期前半と考えられる。櫛田川沿いの沖積地に立地する古轡通り古墳群（５）も、後期前半に遡る可能性をもつ。




**第５図　上村池３号墳横穴式石室（1:160）**
※多気町教育委員会1986より転載

後期後半には、再び玉城丘陵やその周辺での古墳の築造が活発化する。上村池古墳群（58）や河田古墳群（34～43）のような多数の古墳が密集する群集墳の築造は、６世紀中頃に始まるものと思われる。

これらの古墳群に含まれる古墳の多くは、木棺直葬の埋葬施設をもつものとみられる。上村池古墳群や河田古墳群のような大規模な古墳群中には横穴式石室をもつ古墳も認められるが、全体からみれば少数派といえる。上村池３号墳の横穴式石室は、玄室の平面形態や、袖部が明瞭に形成されているなどの特徴から、6 世紀中頃の築造年代が推定されており、玉城丘陵の横穴式石室の中でも早い時期に造られたものとみられる。南勢地域[13]全体でみても畿内系横穴式石室の導入初期にあたる時期のものである可能性が指摘されている[14]（第５図）。

集落としては、大規模なものは現状では確認されていないが、発シＢ遺跡（46）や堀田遺跡（19）、寺垣内遺跡（14）、曽祢崎遺跡（12）などで竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、広く集落が点在していたようである。また、北野遺跡（18）では土師器生産も始まっていたとみられる。

**終末期古墳と集落**　終末期になると、主に一辺が10m前後の小型の方墳で構成される古墳群の築造が活発化する。玉城丘陵では、本書で報告する高塚古墳群（A）のほかに、河田古墳群などでこうした古墳群の形成が認められる。玉城丘陵周辺でも、台地上の微高地に明星古墳群（15）、坂本古墳群（７）などがこの時期に形成されている。後期の古墳群にくらべて小型の古墳が多く、密集度が高まる点が特徴的である。

これらの中で注目されるのは、斎宮のすぐ北側に位置する坂本古墳群である。坂本１号墳は前方後方墳で椎頭大刀が副葬されており、斎宮成立に関わったような被葬者も想定されている[15]。

また、すでに消滅しており古墳自体の詳細な状況は不明ながら、佐田山３号墳（87）から銅鋺が出土していることなども注目されよう。

斎宮跡（７）では斎宮の成立以前から徐々に集落が形成されているようである。また、北野遺跡では土師器生産が活発化していく。玉城丘陵でも、垣場

遺跡（44）で集落が形成され、土師器生産が行われていたと考えられる。

**須恵器生産**　このほか、玉城丘陵周辺において注目される古墳時代の遺跡に、須恵器の窯跡があげられる。当該地域は伊勢湾西岸地域の中でも須恵器生産の盛んな地域として知られる。

最も古い時期に操業されたと考えられるのは、玉城丘陵南側の北ノ山窯跡群（64）で、６世紀後半～７世紀前半頃の須恵器が出土している。７世紀代には、玉城丘陵より３㎞ほど西の佐奈川西岸の丘陵地に位置する明気窯跡群で須恵器生産が盛んに行われる。同じ時期には大仏山丘陵の東端に築かれた大仏八端窯跡群も操業している。これ以降も、原窯跡群や長安寺窯跡群（65）など、外城田川沿いの丘陵地に窯が構築され、須恵器の生産が続いていく。

当該地域の古墳の副葬品の中には、これらの窯で生産されたと思われる須恵器がかなり認められることが指摘されており[16]、窯業生産の発展と、玉城丘陵やその周辺における大規模な古墳群の形成との関連性も窺われる。

**註**

１）　本節の執筆にあたっては全体的に以下の文献を参照した。多気町史編纂委員会（編）『多気町史』通史　1992、玉城町史編纂委員会（編）『玉城町史』上巻　玉城町　1995、明和町史編さん委員会（編）『明和町史』史料編第１巻　明和町　2004、三重県『三重県史』資料編考古２　2008

２）　森田幸伸「大仏山丘陵とその周辺のナイフ形石器について」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター　1992

３）　三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第６号　2008

４）　三重県埋蔵文化財センター『野篠里中遺跡発掘調査報告』　2002

５）　明和町史編さん委員会（編）2004

６）　玉城町史編纂委員会（編）1995

７）　古墳については別に第４図で分布を示した。古墳時代の集落や生産遺跡については第３図に他の時期の遺跡とともに示している。なお、本文中では第４図に示した古墳の番号にはアンダーラインをつけて、第３図の遺跡に付した番号と区別している。

８）　地形測量図からは詳細な墳丘の形態は不明瞭であるため、ここでは帆立貝形古墳と造り出し付円墳との区別はつけず、まとめて造り出し付円墳としている。

９）　豊田祥三「高塚１号墳採集埴輪の再検討」『研究紀要』第14号　三重県埋蔵文化財センター　2005

10）　松阪市教育委員会『史跡宝塚古墳』　2005

11）　鈴鹿市考古博物館『白鳥塚１号墳』　2006

12）　穂積裕昌「５世紀の伊勢～首長墓の動態にみる伊勢諸地域の位相～」『東海の埴輪と宝塚古墳』第３回松阪埴輪シンポジウム　2003

13）　伊勢地域の中でも、南部にあたる阪内川流域から宮川流域にかけての地域を指す。南勢地域についても、西部（阪内川流域から櫛田川左岸にかけての旧飯高郡・飯野郡にあたる地域）、中部（櫛田川右岸から宮川左岸にかけての旧多気郡および旧度会郡の一部にあたる地域）、東部（宮川右岸の旧度会郡にあたる地域。現在の伊勢市付近）の３地域に細分されるため、本報告でも必要に応じてこの小地域区分を用いる（竹内英昭「伊勢の様相」『古墳時代中期の大型墳と小型墳―初期群集墳の出現とその背景―』発表要旨編　東海考古学フォーラム・静岡県考古学会　2002）。

14）　多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986、森島一貴「伊勢の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』　横穴式石室研究会　2007

15）　中野敦夫「坂本１号墳」『三重県史』資料編考古１　三重県　2005

16）　淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産―外城田窯址群の検討―」『Mie history』vol.16　三重歴史文化研究会　2005

# 第Ⅲ章　小金２号墳の調査

## 第１節　調査の方法

小金２号墳は、平成17年度に国営宮川用水第二期土地改良事業に伴う分布調査が行われる以前から存在が知られていた古墳である。尾根上に低い墳丘の高まりが確認されており、その形状から方墳であると考えられていた[1)]。

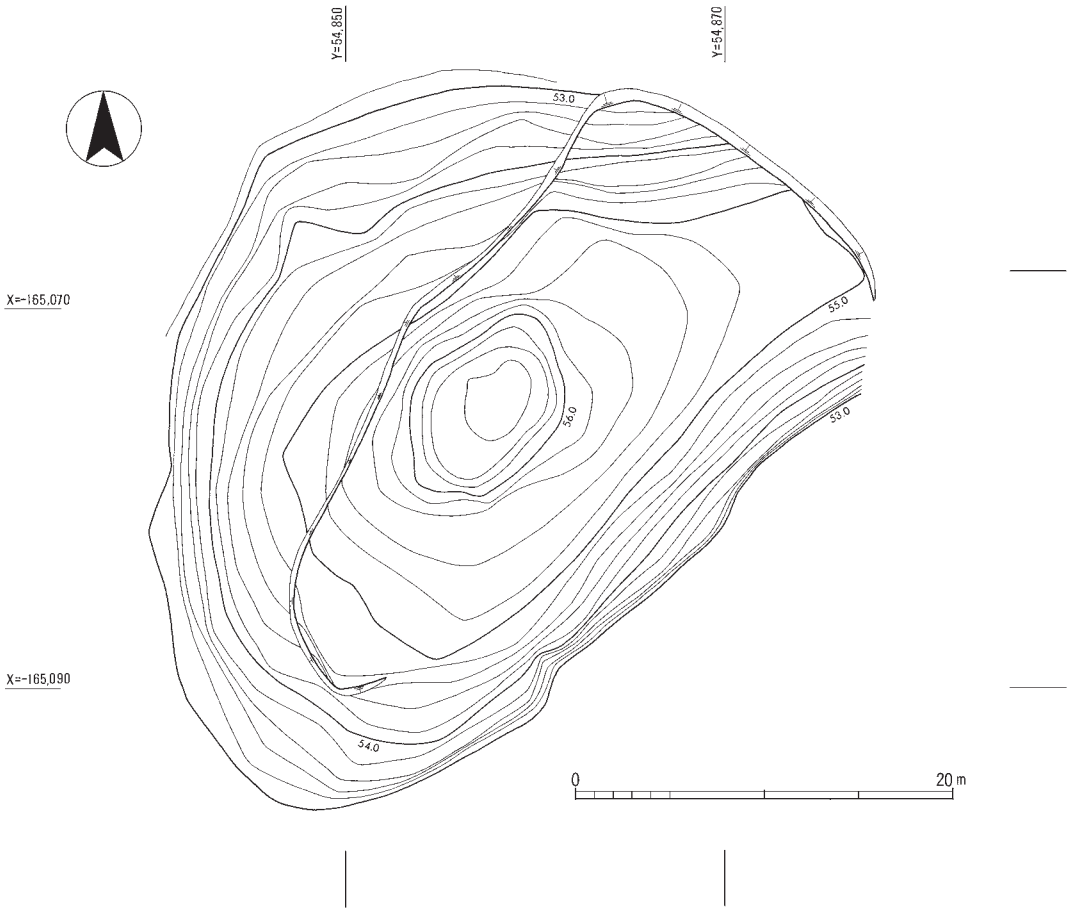
この古墳についても工事による影響が及ぶこととなったため、平成20年度に墳丘の地形測量及び範囲確認調査を行い、墳丘の遺存状況や、周溝の有無などを確認した。

地形測量は平板を用いて行ったが、それによって得られた墳丘地形図では方墳との確証は得られなかった（第６図）。

範囲確認調査では、墳丘の四方に調査坑を設けたが、そのいずれにおいても周溝の存在は確認できなかった。ただし、墳丘と想定されていた高まりの部分を一部断ち割ったところ、盛土と思われる土層が確認できた。また、いずれの調査坑においても、現状で墳丘の高まりの裾部となっている場所から４～７ｍほど離れた地点で、地山が高さ10～15㎝ほどの低い段状をなしている状況が観察された。この段の性格については不明であったが、これが古墳築造に伴う地山の整形痕跡である可能性も考えられた。

こうした範囲確認調査の成果を踏まえて、平成21年度には墳丘及び埋葬施設の調査を行った。

**掘削作業**　平成21年度の調査では、まず墳丘やその周囲の表土や流出土を全体的に除去した。この掘削作業はすべて人力で行った。また、その際に、４ｍ四方のグリッドを国土座標に沿って設定し、掘削中



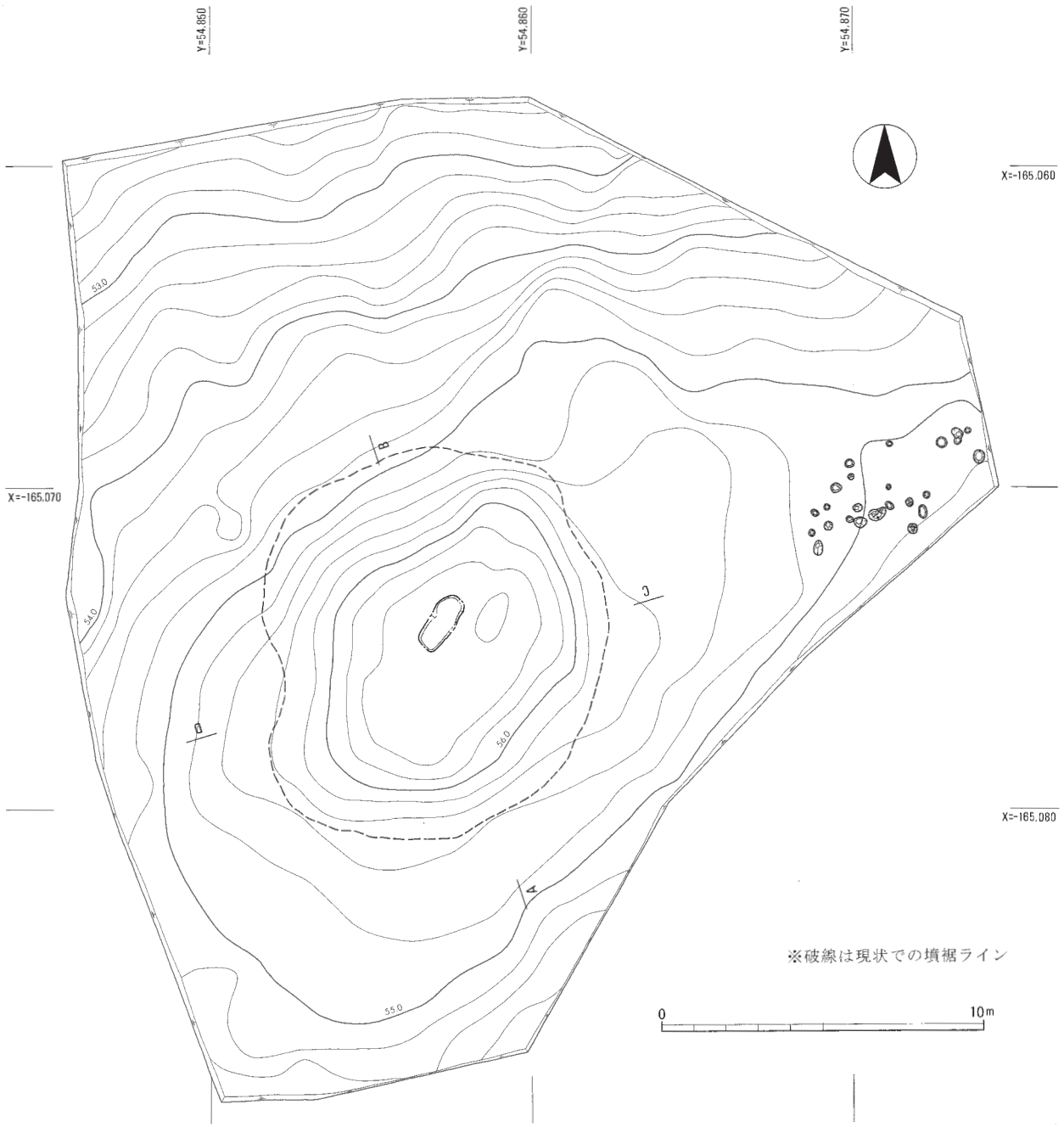

第６図　小金２号墳調査前地形測量図（1:400）

に出土した遺物はそのグリッドごとに取り上げた。

表土・流出土を除去した結果、墳丘の周囲ではほぼ表土直下で地山を検出し、範囲確認調査での知見通りに周溝が存在しないことが再確認されたが、さらに周溝が存在する可能性が最も高い墳丘東側の尾根へと連続していく部分に断ち割りを入れて確認を行った。この断ち割りでも周溝の存在が確認できなかったため、小金２号墳が周溝をもたないことは確定的となった。

その後、十字に土層観察用のアゼを残しながら墳頂部を平面的に掘り下げていき、埋葬施設の存在の確認を行った。その結果、現況の墳丘中央部からやや北西に偏った位置で埋葬施設を確認することができた。このことから、墳丘の北西側が既にかなり崩落・流出している可能性が高いことが判明した。

**埋葬施設の調査**　埋葬施設についてはまず平面で輪郭の検出を行った。しかしながら、一部では輪郭を明確にできなかったため、先行して横断方向に断ち割りを入れて土層の状況を確認した上で、内部の掘削を行った。




第７図　小金２号墳墳丘平面図（1:200）

埋葬施設内の調査後に、埋葬施設の縦断方向にも断ち割りを入れ、埋葬施設と墳丘との関係などについての調査・検討を行った。また、墳丘についても土層観察用のアゼに沿って地山まで断ち割り、盛土や地山整形の状況について確認を行った。

**遺構実測**　このほか、調査区の東端で複数のピットが検出されたため、それらについては国土座標の方位軸に沿って３ｍ間隔の実測用基準点を設けて平面図の作成を行った。墳丘の現況の墳裾ラインについてもおなじく３ｍ間隔の実測用基準点を設けて図化を行っている。

**註**

1）　明和町『三重県多気郡明和町遺跡地図』　1988

## 第２節　墳丘の調査

### ①墳丘

小金２号墳の墳丘は盛土の流出が激しく、かなり原状は損なわれているものと思われる。特に、埋葬施設の遺存位置などからみて、墳丘西側の崩落・流出が激しいものと想定される。

こうした墳丘の遺存状況に加えて、周溝が存在しなかったため、墳形を確定する根拠には乏しい。表土・流出土を除去した後の墳丘の地形測量図によれば、墳丘北側や東側で墳裾のラインがやや直線的になる部分が認められるため、方墳であるとも考えられるが、後述する墳丘南側の溝状の掘り込みと盛土の状況から、円墳である可能性も残る。径は９ｍほどと推定される。

墳丘の断面でみると、標高55.5～55.8m付近で地形の変化が認められるため、そこが墳裾にあたるものと考えられる。現存する墳丘の高さは、約１ｍほどである。

**盛土**　墳丘は大部分が地山整形によって造られており、全体的に盛土はかなり薄かった。埋葬施設が地表下40㎝ほどの比較的浅い位置で検出されたことからも分かるように、墳丘は既にかなりの部分が崩落・流出している可能性がある。特に、埋葬施設が墳丘中央からやや偏った位置に存在することからは、斜面が急な北西側の墳丘がかなり流出していると推定される。したがって、本来はもう少し盛土があったものと推定される。

墳丘盛土下では、旧表土の存在は確認できなかった。地山（第８図21層）と、地山の土壌化層（第８図20層）が最下部に存在し、その上に地山と似た質の砂質系の盛土（第８図14～17層）が施される。また、そのさらに上には褐色系の色調を呈するやや粘質の盛土（第８図７層）が施されている。

こうした盛土の施し方については墳丘のほぼ全体で共通するが、墳丘南側のみはやや異なった様相を示している。地山を大きく掘りこみ、そこに暗褐色系の土を施している（第８図８～10層）。これについては、盛土と推定される土（第８図７層）がその上部を覆っていることから、古墳築造後の撹乱ではないと考えられる。この掘りこみおよび、そこに施されている暗褐色系土の盛土は、墳裾に沿って長さ２～３ｍほど溝状にのびている。ただし、直線的ではなく、やや弧を描くようにのびていく状況が観察された。

なお、第１節で触れた範囲確認調査時に認められた墳丘周囲の地山の段差は、小金２号墳の周囲で断続的に確認されたものの、人工的な加工かどうかについては判断できなかった。

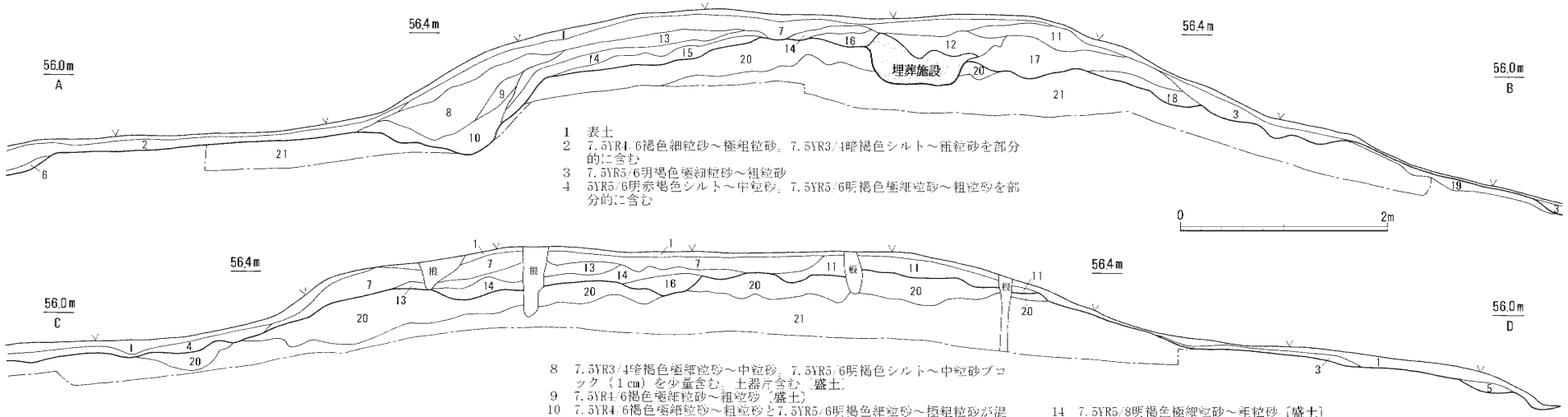
### ②ピット群

墳丘周囲の表土や流出土などを除去したところ、墳丘東裾部から10ｍほど離れた調査区の東端部分において、多数のピットが検出された（第10図）。

これらのピットは地山上に10㎝程度堆積した土層上面から掘り込まれており、ピットの上面にはさらに10～20㎝ほどの土層の堆積が認められる。

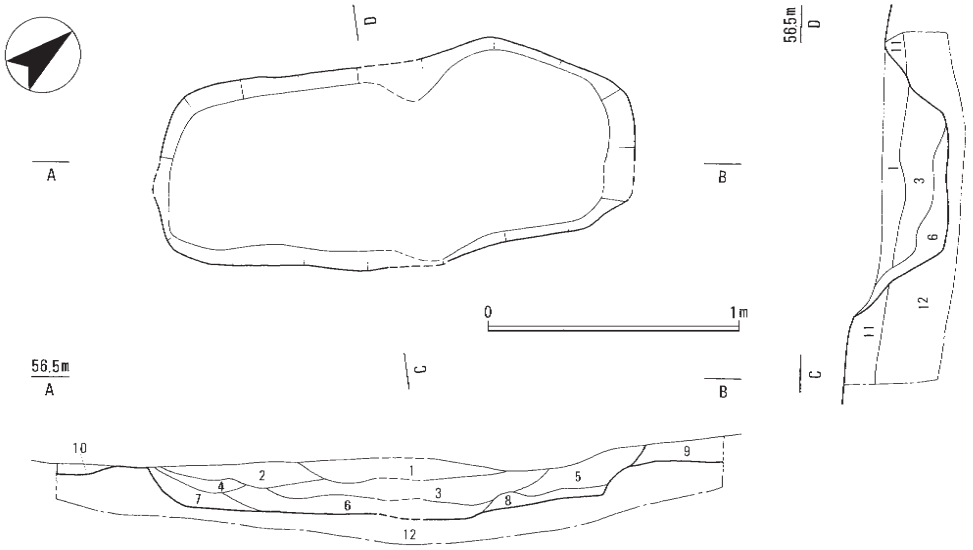
ピットは径15～40㎝ほどの大きさである。深さは10～45㎝ほどと、かなりのばらつきがある。埋土はすべて単一の土層であり、柱痕は認められない。ピット内や、ピット群周辺からは遺物は全く出土しなかった。

これらのピットの時期や性格については不明である。輪郭がはっきりしないものも多いことから、木根などの痕跡である可能性も考えられる。



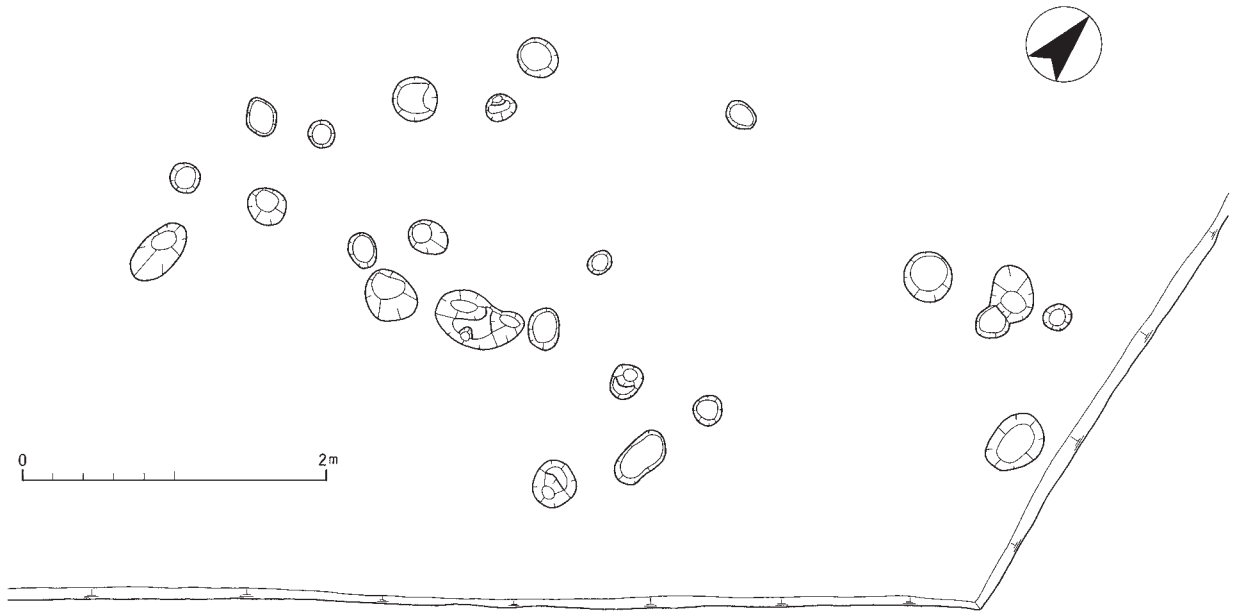

1　表土
2　7.5YR4/6褐色細粒砂～極粗粒砂。7.5YR3/4暗褐色シルト～粗粒砂を部分的に含む
3　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂
4　5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂。7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂を部分的に含む
5　7.5YR4/6褐色極細粒砂～極粗粒砂
6　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。7.5YR6/8橙色細粒砂～粗粒砂を部分的に含む
7　7.5YR4/6褐色極細粒砂～中粒砂。やや粘質〔盛土〕
8　7.5YR3/4暗褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂ブロック（1cm）を少量含む。土器片含む〔盛土〕
9　7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂〔盛土〕
10　7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂と7.5YR5/6明褐色細粒砂～極粗粒砂が混じり合う〔盛土〕
11　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。砂質。やや締まり強い〔盛土〕
12　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。やや締まり弱い〔盛土〕
13　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。やや粘質〔盛土〕
14　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂〔盛土〕
15　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR4/8赤褐色細粒砂～極粗粒砂ブロック（1～3cm）を10%含む〔盛土〕
16　7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂。7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂ブロック（1～2cm）を1～3%含む〔盛土もしくは木根による攪乱〕
17　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～極細粒砂ブロック（1～2cm）を1～3%含む。やや締まり弱い〔盛土〕
18　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂〔盛土もしくは地山土壌化層〕
19　5YR5/6明赤褐色極細粒砂～中粒砂。砂質〔地山土壌化層もしくは流出土〕
20　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR4/8赤褐色細粒砂～極粗粒砂を部分的に含む。やや砂質〔地山土壌化層〕
21　5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂・5YR5/6明赤褐色極細粒砂～粗粒砂・7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂〔地山〕

第８図　小金２号墳墳丘土層断面図（1:60）




1　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。5YR4/8赤褐色極細粒砂～粗粒砂ブロック（0.5cm）を1%含む。やや粘質。炭化物（～0.5cm）を少量含む
2　7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1cm）を1%含む
3　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に1～3%含む。やや粘質。炭化物（～0.5cm）を少量含む
4　7.5YR4/4褐色シルト～粗粒砂
5　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1～1.5cm）をごく少量含む
6　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂と5YR5/6明赤褐色極細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う
7　5YR5/6明赤褐色極細粒砂～中粒砂。やや締まり弱い
8　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。やや砂質
9　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。土器片含む〔盛土〕
10　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂と5YR4/8赤褐色細粒砂～極粗粒砂が斑状に混じり合う〔盛土〕
11　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR4/8赤褐色細粒砂～極粗粒砂を部分的に含む。やや砂質〔地山土壌化層〕
12　5YR5/6明赤褐色極細粒砂～粗粒砂〔地山〕

第９図　小金２号墳埋葬施設平面図・土層断面図（1:30）




第10図　ピット群平面図（1:50）

## 第３節　埋葬施設の調査

埋葬施設は１基検出された（第９図）。現存する墳丘の中央部からやや北西に寄った位置で検出された。主軸方向はN38°Ｅである。規模としては、確認できた土坑状の掘り込みの内法で長軸1.9m、短軸0.8mを測る。付近の高塚４・６号墳の埋葬施設と比較すると、やや幅広で長さも短い。

埋葬施設は元々地形が低かった墳丘北側に若干の盛土を施してある程度の平坦面を作り出し、そこに墓壙を掘り込んでいるものと思われる。

最初に墓壙の東側のラインが検出されたため、同一面で墓壙ラインの平面検出を試みたが、東側以外の部分ではかなり不明瞭であり、多少掘り下げて検出を行ってもなお明確には認識できなかった。そこで、埋葬施設を横断するような断ち割りを先行して設け、埋葬施設の状況を確認した上で全体の掘削を進めた。

棺痕跡は平面検出によっては全く確認することができず、土層断面においても確認できなかった。したがって、木棺が使用されていたかどうかは不明である。ただし、墳丘の土層断面をみると、埋葬施設直上の土層にやや乱れがあることから、木棺が使用されており、その腐朽に伴う陥没によって盛土が乱された可能性も残されている[1)]。

なお、埋葬施設内からは、副葬品は全く検出されなかった。埋葬施設内からの排土も篩にかけて微細遺物の検出に努めたが、何も検出されなかった。

**註**

1）　調査前の段階で、埋葬施設直上にあたる部分には墳丘上にわずかに凹みが生じていた。

## 第４節　出土遺物

### ①盛土内出土遺物（第11図１）

盛土内からは土師器ないしは弥生土器と考えられる土器片が数点出土している。図化できたものは１点のみである。

**弥生土器**（１）　１は埋葬施設北側の盛土内（第９図９層）から出土した。弥生土器の底部であると考えられる。

底部は小さくボタン状に突出し、平底となる。器壁はかなり薄い。おそらく弥生時代後期から終末期にかけての鉢ないしは小型壺の底部ではないかと思われる。

②墳丘出土遺物（第11図２）

墳丘の表土および流出土の掘削中に、須恵器片が１点出土している。

なお、細片であるために図化はできなかったが、土師器ないしは弥生土器と思われる土器片も数点出土している。

**須恵器**（２）　２は小片であり器種の判断が難しいが、形状や外面調整などからみて、直口壺の口縁部片と考えられる。墳丘の北西裾部で出土した。

外面には全体にカキメが施されている。また、破片の下端部には凹線が一部遺存している。

**第 11 図　小金２号墳出土遺物実測図（1:4）**

## 第５節　小結

小金２号墳は、調査によって埋葬施設１基を検出することができ、また人為的な盛土が存在することも確認された。

しかしながら、墳形については明らかにすることはできなかった。また、確実に小金２号墳に伴うと考えられる遺物は、副葬品も含めて全く出土しなかった。

築造時期を推定する手がかりとしては、墳裾から出土した須恵器と、盛土内から出土した弥生土器の２点があるのみである。

墳裾から出土した須恵器は、器種などからみて６世紀後葉～７世紀初頭のＴＫ43型式期からＴＫ209型式期[1]にかけてのものと思われ、この須恵器が小金２号墳の築造時期を示している可能性もある。しかしながら、副葬品が全く検出されなかった点や、埋葬施設の形態、周溝を持たない点、盛土が薄くほとんどが地山整形によって構築されている点など、本書で報告を行っている古墳時代後期から終末期の近隣の古墳と比べると差異が目立つ。また、出土した須恵器が１片だけであることからは、やはりこの須恵器が小金２号墳に伴う遺物とは考えにくい。したがって、墳裾出土須恵器を根拠に古墳時代後期後半から終末期にかけて築造された古墳であると考えることは難しいように思われる。

こうした点から、現状では小金２号墳の築造時期については不明としておきたい。ただし、盛土内から出土した弥生土器が弥生時代後期から終末期にかけての土器であることから、少なくとも弥生時代後期以降に築造されたことは間違いない。

以上のように、発掘調査では明らかにできなかったことも多いが、今後、当該地域における古墳の発掘調査や検討が積み重ねられていけば、他の事例との比較などによって、小金２号墳の位置づけについて明らかにするための手がかりが得られる可能性も残されているであろう。

**註**

1）　本報告では、古墳時代の須恵器の型式や時期について、田辺昭三による陶邑編年を用いている。
田辺昭三『陶邑古窯址群Ｉ』　平安学園考古学クラブ 1966、田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981

# 第Ⅳ章　小金３号墳の調査

## 第１節　調査の方法

小金３号墳では、平成19年度に墳丘に４箇所の調査坑を設け、墳丘や周溝の遺存状況を確認した。その結果、周溝と盛土の存在が確認され、古墳であることが確定し、墳丘が良好に遺存していることも確認された。事業計画上、当該古墳の破壊は免れなかったため、平成20年度に墳丘及び埋葬施設の調査を全面的に行うこととなった。

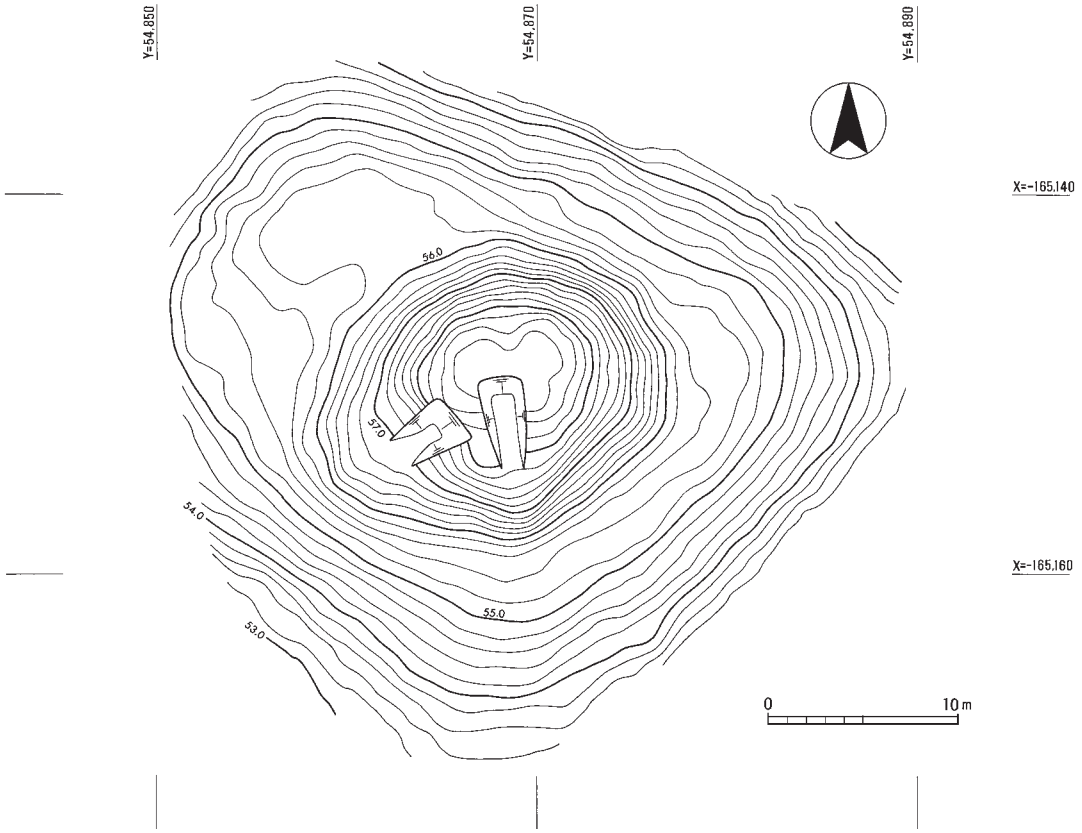
調査前には墳丘及び周辺の地形測量を行い、その結果、円墳である可能性が高くなった（第12図）。また、墳頂部に大きな盗掘坑あるいは撹乱坑が存在することが明らかとなった。この時点では、埋葬施設の様相は不明であったが、従来から指摘されているように墳丘南側に比較的大きな石が露出しており、横穴式石室の存在が推定された。

**墳丘部分の掘削**　調査は、調査後の工事に伴う古墳の破壊が前提となったため、墳丘や石室の一部を解体することも視野に入れた上で開始した。まず、表土掘削を行って周溝を検出し、その後、墳丘流出土の除去や周溝内部の掘削を行った。これらの掘削作業はすべて人力で行った。また、この作業に際しては、国土座標の方位軸に沿って４×４ｍのグリッドを調査区全体に設け、作業中に出土した遺物についてはグリッドごとに取り上げている。

墳丘流出土の除去および周溝内部の掘削終了後、再度地形測量を行い、墳丘と周溝の形態について記録を行った。また、ラジコンヘリコプターによる写真撮影も行った。

**横穴式石室の調査**　こうした墳丘部分の掘削過程で、石材が露出しており石室開口部と推定された部分の表土や墳丘流出土の除去を行ったところ、予測通り横穴式石室が開口していることが判明した。

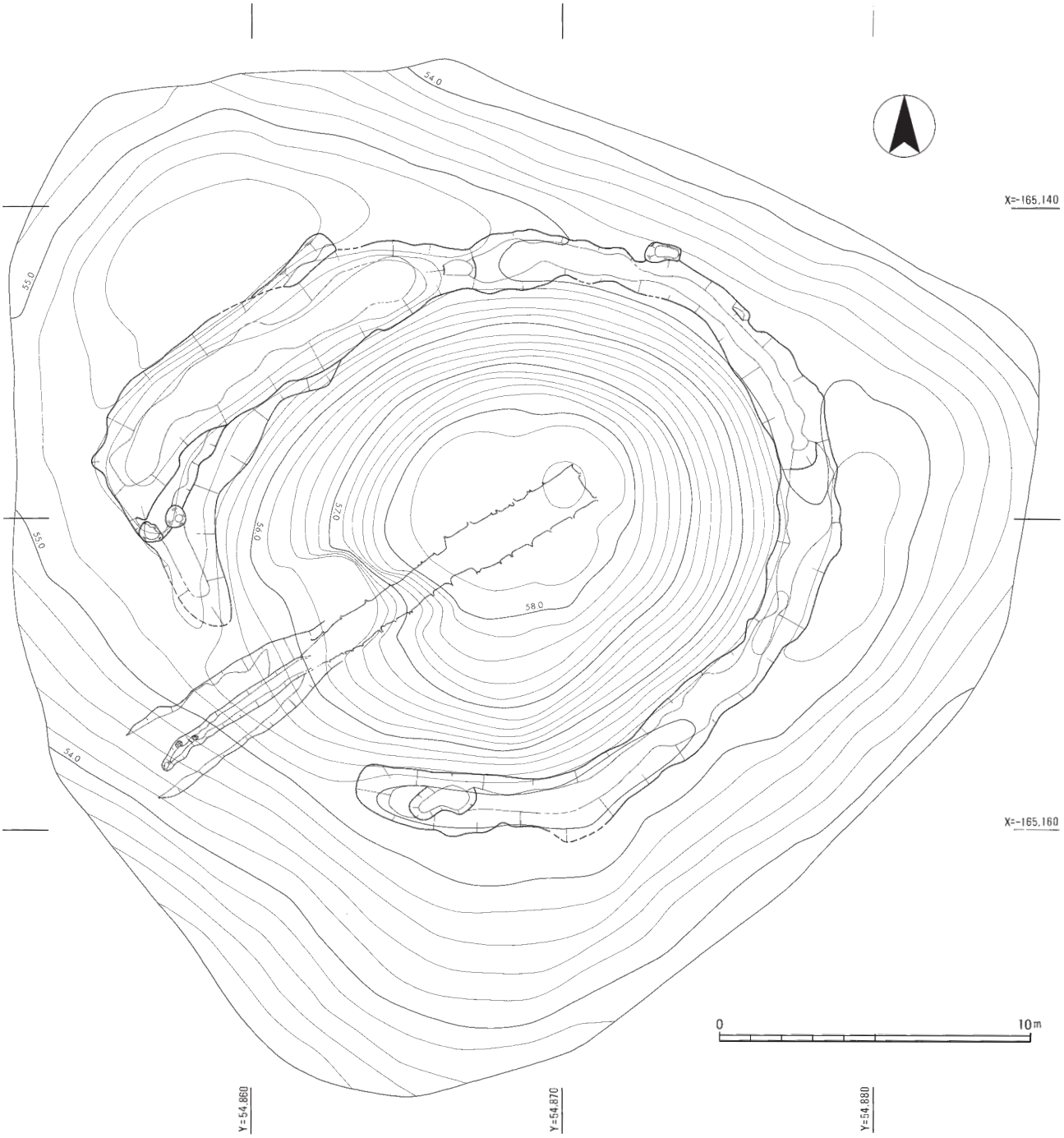
石室内部の調査に際しては、石室開口部付近に存




第 12 図　小金３号墳調査前地形測量図（1:400）

在する木の根によって石室の羨道が一部崩壊しているか、あるいは壁体が不安定になっている可能性が考えられ、また、墳頂部の盗掘坑らしき穴が大規模であることから玄室もかなり崩壊している可能性も考えられたため、墳丘盛土の調査を兼ねて、墳頂部から石室へ向かって掘削を進めることとした。

盛土の状況を確認しながら石室の天井石が露出するまで盛土を除去したところ、予想外に石室の遺存状況がよいことが判明した。ただし、先述のように開口部からの侵入が難しいことが予測されたため、玄室の天井石を一部除去して石室内部の調査を行うこととした。羨道から玄室に到るまでのすべての天井石を露出させ、その状況を記録した後に、チェーンブロックを使用して玄室の奥壁から３枚目にあたる天井石を外し、そこから玄室内へ進入し、石室内部の調査を開始した。




第 13 図　小金３号墳墳丘平面図（1:200）

石室の内部にはかなりの量の土砂が流入していたため、玄室側から羨道へ向かって流入土の除去を進めていった。その過程で、崩落の危険性が高いと判断していた羨門付近の壁体が比較的安定していることが判明したため、部分的に側壁の補強を行いながら、羨道の流入土についてもすべて除去した。

石室内部の掘削と同時に、墓道及び閉塞についても調査を進めた。これらについても当初の予想以上に遺存状況が良好であり、土層の堆積状況等に関する記録を随時とりながら掘削を行った。

石室内部および墓道部分の流入土・埋土などをすべて除去した段階で、石室の実測を行った。実測は割り付け・図化などすべて手作業で行った。

なお、石室内部調査終了後に墓壙の調査と石室床面の断ち割り調査を行った。ただし、墓壙については調査期間や安全性の問題などから全形を検出することはできず、部分的に断ち割りによって掘形及び石室裏込め土の上部を確認するにとどまった。

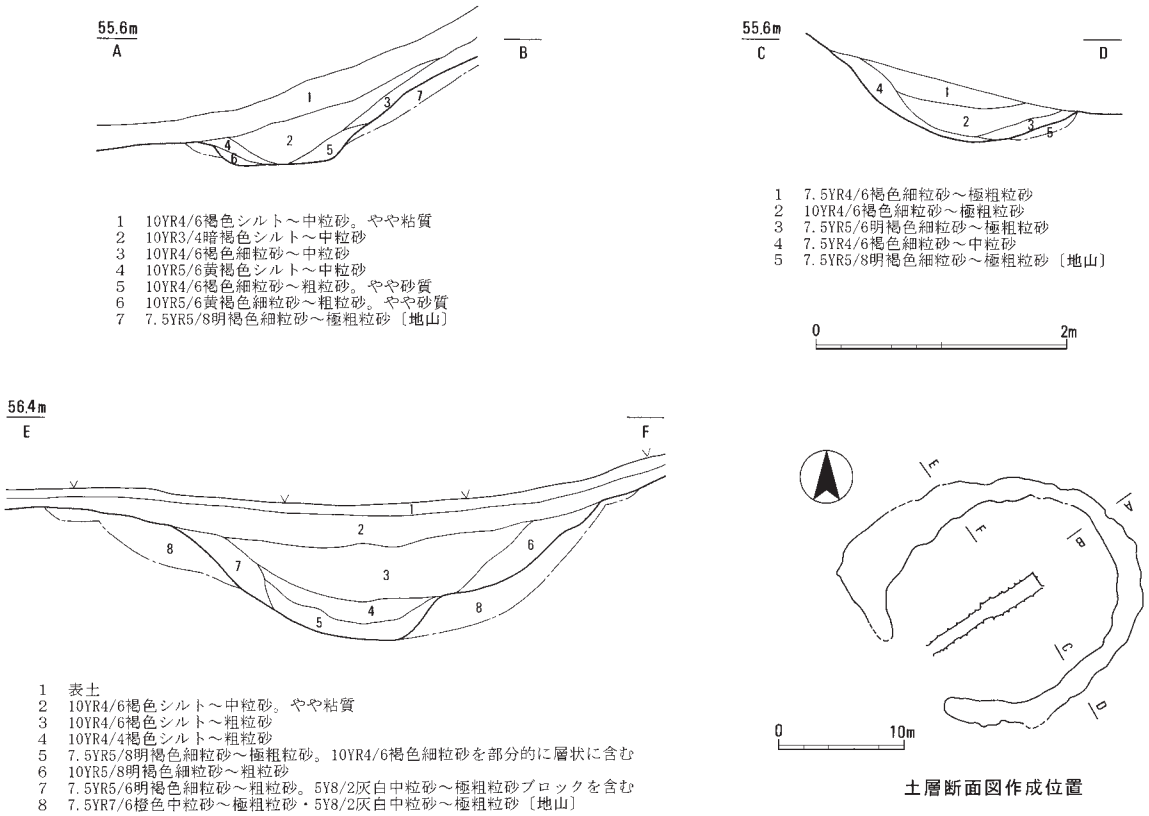
## 第２節　墳丘の調査

### ①周溝

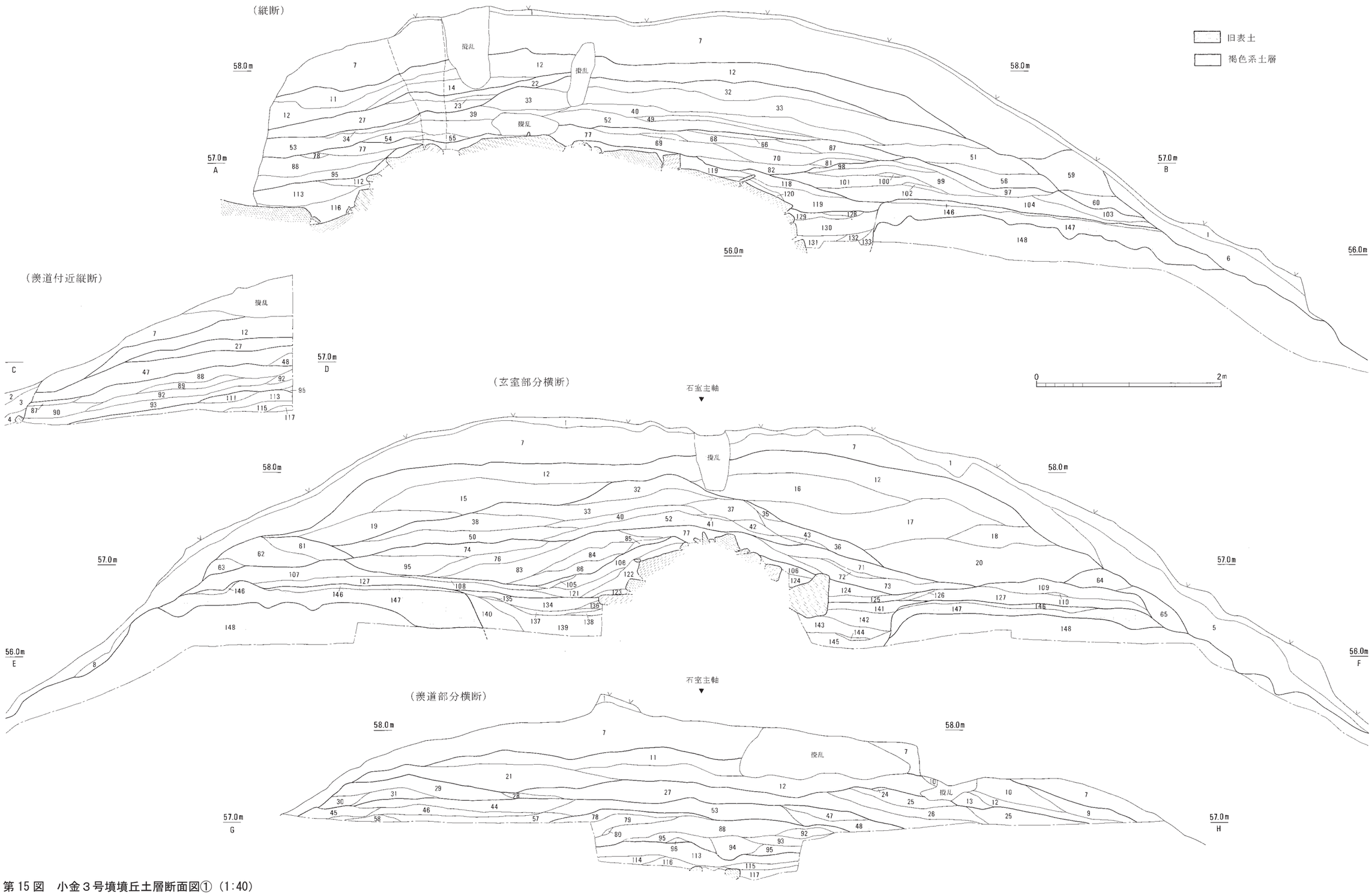
**形態**　墳丘の周囲からは、周溝が検出された。周溝は地山を掘り込んで作られており、墳丘の周囲を円形にめぐる。したがって、小金３号墳は円墳であると思われる。墳形はやや楕円形をなし、規模は周溝の芯々間距離で見ると、長径19m、短径18mほどである。石室主軸方向が、石室に直交する方向よりもやや長くなっている。

周溝は墳丘の北側から北西側にかけてが最も深く、１m近い深さがある（第14図）。しかしながら、石室入り口付近へ向かって次第に浅くなっており、墓道付近では完全に途切れている。また、石室入り口方向からみて墳丘の裏側にあたる墳丘北東側の周溝は他の部分に比べて幅が狭く、深さも現状で30cmほどとかなり浅い。

**遺物出土状況**　周溝内からは遺物はほとんど出土していないが、墓道東側の周溝端部から土師器杯が１

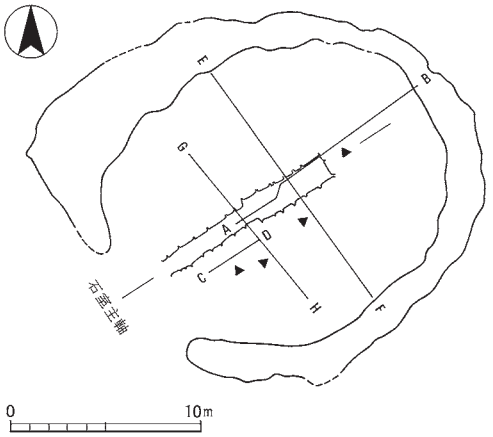



第14図　小金３号墳周溝土層断面図（1:60）




第 15 図　小金３号墳墳丘土層断面図①（1:40）

1　表土
〔追葬時閉塞土〕
2　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂
3　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質
4　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。礫（10～20cm）を少量含む
〔墳丘盛土〕
5　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。やや粘質。締まり弱い。墳丘流出土？
6　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。10YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂を部分的に含む。墳丘流出土？
7　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。やや締まり弱い
8　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂。やや締まり弱い
9　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
10　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂
11　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。７層よりやや締まり強い
12　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
13　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
14　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂
15　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR6/8明黄褐色中粒砂～極粗粒砂ブロックを20%含む
16　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１cm）を３～５%含む
17　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１～３cm）を５%含む
18　7.5YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂
19　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
20　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
21　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR6/8橙色細粒砂～極粗粒砂ブロックを３～５%含む
22　5YR4/6赤褐色シルト～粗粒砂。締まり強い
23　10YR6/6明黄褐色細粒砂～極粗粒砂
24　7.5YR4/6褐色極細粒砂～中粒砂
25　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
26　5YR5/6明赤褐色細粒砂～粗粒砂と7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂が混じり合う
27　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂ブロックを部分的に含む。締まり強い
28　7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂。やや粘質
29　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂を部分的に含む
30　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。10YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂を部分的に含む
31　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
32　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂
33　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂
34　7.5YR4/6褐色細粒砂～中粒砂と7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂が混じり合う
35　5YR5/8明赤褐色細粒砂～中粒砂と7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う
36　5YR4/8赤褐色細粒砂～粗粒砂。7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂を部分的に含む
37　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR4/6赤褐色シルト～中粒砂ブロック（0.5～２cm）を１～３%含む
38　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に30%含む
39　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
40　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂ブロックを部分的に含む
41　10YR4/4褐色シルト～粗粒砂。やや粘質
42　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
43　10YR4/6褐色中粒砂～粗粒砂。砂質
44　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR7/8黄橙色細粒砂～極粗粒砂ブロックを少量含む
45　10YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂
46　10YR5/8黄褐色細粒砂～極粗粒砂。7.5YR6/8橙色シルト～中粒砂を斑状にごく少量含む。やや砂質
47　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
48　7.5YR5/4にぶい褐色細粒砂～粗粒砂
49　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～中粒砂。10YR3/4暗褐色シルト～中粒砂を部分的に含む。粘質
50　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に40%含む
51　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂を含む。
52　7.5YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂と5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂ブロックが混じり合う
53　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。やや粘質。締まり強い
54　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
55　7.5YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂
56　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色中粒砂～極粗粒砂を３%含む
57　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂
58　7.5YR5/6明褐色細粒砂～極粗粒砂と10YR5/8黄褐色細粒砂～極粗粒砂が混じり合う
59　10YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂。10YR4/4褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
60　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
61　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂
62　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質
63　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂
64　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂と7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂が混じり合う
65　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂
66　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～中粒砂。7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂を斑状に５～10%含む
67　10YR4/6褐色極細粒砂～中粒砂。10YR4/4褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂を20～30%含む
68　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR4/6褐色細粒砂～極粗粒砂を部分的に層状に含む
69　10YR4/4褐色シルト～中粒砂。粘質
70　10YR5/6黄褐色細粒砂～極粗粒砂
71　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂。粘質。締まり強い
72　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂。10YR4/6褐色シルト～中粒砂を斑状に40%含む。粘質。締まり強い
73　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。10YR4/6褐色シルト～粗粒砂を部分的に層状に含む
74　7.5YR5/6明褐色細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に３%含む。砂質。やや締まり弱い
75　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に20～30%含む
76　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
77　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。砂質。締まり強い
78　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質
79　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂。5YR5/6明赤褐色細粒砂～粗粒砂を部分的に含む。やや粘質
80　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質
81　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。7.5YR6/8橙色中粒砂～極粗粒砂ブロック（１cm）を少量含む
82　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂
83　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂と10YR6/8明黄褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。10YR4/6褐色シルト～中粒砂を部分的に含む。やや締まり強い
84　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR3/4暗褐色シルト～細粒砂を層状に含む。粘質。締まり強い
85　10YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～粗粒砂ブロックを少量含む。砂質。締まり強い
86　10YR5/8黄褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に20～30%含む。やや粘質。締まり強い
87　7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂
88　7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂。5YR4/8赤褐色極細粒砂～中粒砂を部分的に含む
89　7.5YR5/6明褐色細粒砂～中粒砂と5YR4/8赤褐色細粒砂～中粒砂が斑状に混じり合う
90　7.5YR5/6明褐色細粒砂～中粒砂。やや締まり強い
91　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂。締まり強い
92　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。やや砂質。締まり強い
93　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。締まり強い
94　7.5YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂。締まり弱い
95　7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂。砂質。締まり強い
96　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂
97　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂。10YR3/4暗褐色シルト～中粒砂を斑状に３～５%含む
98　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂。10YR4/4褐色シルト～細粒砂を部分的に含む。粘質
99　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR4/6褐色シルト～中粒砂を部分的に層状に含む
100　10YR4/6褐色シルト～中粒砂
101　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色細粒砂～粗粒砂ブロックを１%含む
102　10YR4/4褐色シルト～中粒砂と10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う
103　10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂
104　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR5/8黄褐色細粒砂～粗粒砂を部分的に層状に含む
105　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂を部分的に含む。粘質
106　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。粘質。締まり強い
107　10YR5/8黄褐色細粒砂～粗粒砂
108　10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂。10YR4/6褐色シルト～中粒砂を部分的に斑状に含む。やや粘質
109　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。やや締まり強い
110　10YR5/8黄褐色細粒砂～中粒砂と7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂が混じり合う
111　7.5YR5/4にぶい褐色細粒砂～粗粒砂。締まり強い
112　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。砂質。締まり強い
113　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。116層より粗い砂粒を多く含む
114　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１cm）を５～10%含む。砂質。締まり強い
115　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂と10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂が混じり合う。締まり強い
116　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１cm）を少量含む。締まり強い
117　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～中粒砂を斑状に少量含む。締まり強い
118　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。10YR4/4褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
119　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂を斑状に１～３%含む
120　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。やや粘質。締まり強い
121　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。10YR5/6黄褐色シルト～中粒砂を部分的に含む。やや粘質。締まり強い
122　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に30%含む。やや締まり弱い
123　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。均質で締まり強い
124　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に20～30%含む
125　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂を層状に含む
126　10YR4/6褐色シルト～中粒砂と10YR5/6黄褐色細粒砂～極粗粒砂が層状に混じり合う
127　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂を層状に含む。やや砂質。締まり強い
〔石室裏込め土〕
128　10YR4/6黄褐色極細粒砂～粗粒砂。砂質
129　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂を層状に少量含む
130　7.5YR5/6明褐色細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色細粒砂～粗粒砂ブロック（１～２cm）を少量含む。砂質。
131　10YR5/6黄褐色極細粒砂～粗粒砂。砂質
132　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１～３cm）を３～５%含む
133　10YR5/6黄褐色極細粒砂～粗粒砂。砂質。やや締まり強い
134　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂を層状に少量含む
135　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂。やや粘質
136　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂。砂質。やや締まり強い
137　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。10YR4/4褐色シルト～中粒砂ブロック（１～３cm）を少量含む
138　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂。砂質。やや締まり強い
139　7.5YR5/6明褐色細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～３cm）を３%含む。やや砂質
140　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１cm）を１～３%含む。やや粘質
141　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に10%含む。やや粘質
142　10YR5/6黄褐色細粒砂～極粗粒砂。7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂ブロック（２～３cm）を３～５%含む。やや砂質
143　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に10%含む。やや粘質
144　7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂。粘質
145　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。10YR4/6黄褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
〔旧表土〕
146　10YR3/4暗褐色シルト～粗粒砂・7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。炭化物（~0.5cm）をごく少量含む。やや粘質
147　10YR5/8黄褐色シルト～中粒砂・7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。やや粘質
〔地山〕
148　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～極粗粒砂。花崗岩バイラン土



土層断面図作成位置

第 16 図　小金３号墳墳丘土層断面図②

点出土している（第27図６）。

この土師器杯は全体の半分ほどの破片しか遺存していないが、周溝底付近の埋土中から検出されており、もともと周溝内に置かれていたものである可能性が高い。

## ②墳丘

小金３号墳は調査の結果、盛土の遺存状況が非常によいことが判明した。また、横穴式石室を埋葬施設とするため、墳丘の構築過程は石室の構築過程とも密接に関連したものとなっている。

墳丘は中位以下は地山整形によって造られており、中位以上は盛土によって造られている。地山整形による部分は、ほぼ石室の天井石の高さまでである。周溝の外側では地山の高さはこれより１ｍほど低くなっている。周溝外側のみが後世の削平を受けているとは考えがたく、古墳を築造する際の整地や墳丘の成形に伴って周囲の地山が削り取られたものと推定できよう。

**盛土**　小金３号墳では、基本的に玄室部分の盛土と羨道部分の盛土とが一連の工程によって盛られている。この盛土の工程は、大きく６段階に区分することができる。ただし、この６段階の工程の中にはさらに細分可能なものもあるため、こうした小工程を２段階加えた計８段階の工程について、以下に述べていきたい。

**〔第１段階盛土〕**　第１段階の盛土は、墓壙の中に石室を構築した後に、旧表土（第15図146・147層）上面から石室裏込め土（第15図128～145層）の上面にかけて整地するように施されている盛土と、石室天井石の周囲を覆うように施されている盛土からなる（第15図105～127層）。この両者は、ほぼ一連の工程で施されているものと考えられる。石室の奥壁付近（第15図Ａ−Ｂ断面Ｂ側）を除けば、旧表土から石室裏込め土上面にかけての整地土が先に施された可能性が高い。

この段階の盛土は単位が細かく、土質も均質で締まりがよい。また、質の異なる土を部分的に互層状に使用している様子も確認できる。

なお、第１段階盛土が天井石上面まで及んでいることから、この時点で既に石室に天井石が架構されていたものと判断される。

**〔第１’段階盛土〕**　石室の奥壁付近では、天井石を覆うように施される第１段階盛土が先行し、その後に、この盛土上面から墓壙より外側の旧表土上面にかけて盛土が施されている（第15図97～104層）。旧表土上面を覆う点や、第２段階盛土との関係をみれば第１段階盛土に近い性格を持つものと考えられる。ただし、大きな盛土の単位として比較的明確に認識できることや、第１段階盛土との先後関係からは第２段階盛土に近い性格を持つとも考えられることなどから、第１’段階盛土として細分した。

**〔第２段階盛土〕**　第２段階の盛土は、第１段階盛土の上面に石室部分を中心に施されているものである（第15図66～96層）。第１段階盛土は墳丘端部では若干高く盛られており低い土手状を呈しているが、第２段階盛土はその内側に盛られている。

盛土の単位は第１段階盛土よりはやや大きくなるものの、かなり細かい単位で盛られており、土質も均質で締まりがよい。また、質の異なる土を部分的に互層状に使用している状況も確認できる。

**〔第３段階盛土〕**　第３段階の盛土は、やや粘質の褐色系土を墳丘端部に幅0.5～１ｍ、高さ20～50㎝ほどに土手状に盛ったものである（第15図59・62・64層）。また、この粘質の褐色系土を安定させるために、その下や周囲にも土を置いているようである。（第15図60・61・63・65層）。この褐色系土については、土層断面に現れた形状や大きさなどからみて、単に土を盛ったのではなく、土嚢など塊状のものを並べて土手状にしていた可能性も考えられよう。ただし、平面的には塊状の単位は検出できなかった（巻頭図版３）。

墳丘北側（第15図Ｅ−Ｆ断面Ｅ側）では、第４段階盛土に先行して第３段階盛土が盛られている様子が観察できたが、石室奥壁付近の墳丘東側（第15図Ａ−Ｂ断面Ｂ側）では第４段階盛土の後に盛られているようにみられた。ただし、墳丘東側では木根による撹乱を多少被っており、層の上下関係の判断に不安を残しているため、第４段階盛土に先行するものとした[1)]。こうした点からみて、この第３段階盛土は第４段階以降の盛土を盛っていく際の土留めとしての役割を持っていたものと思われる。また、そ

のほかに墳形を整えるための目安としての役割も果たしていたと想定される。墳丘のいずれの箇所においても標高57.0m前後のレベルで確認されていることから、この段階で墳丘構築における作業面の高さを揃えていたことも考えられ、墳丘の形を整える上で重要な工程であったことが窺われる。

なお、第３段階盛土はほぼ玄室部分を取り囲むように認められたが、羨道付近ではその存在が不明瞭である。玄門付近では、墳丘南東部で褐色粘質土が途切れる部分が明瞭に観察できたことから（巻頭図版３）、ほぼ玄室部分に限って施されていた可能性も指摘できる。

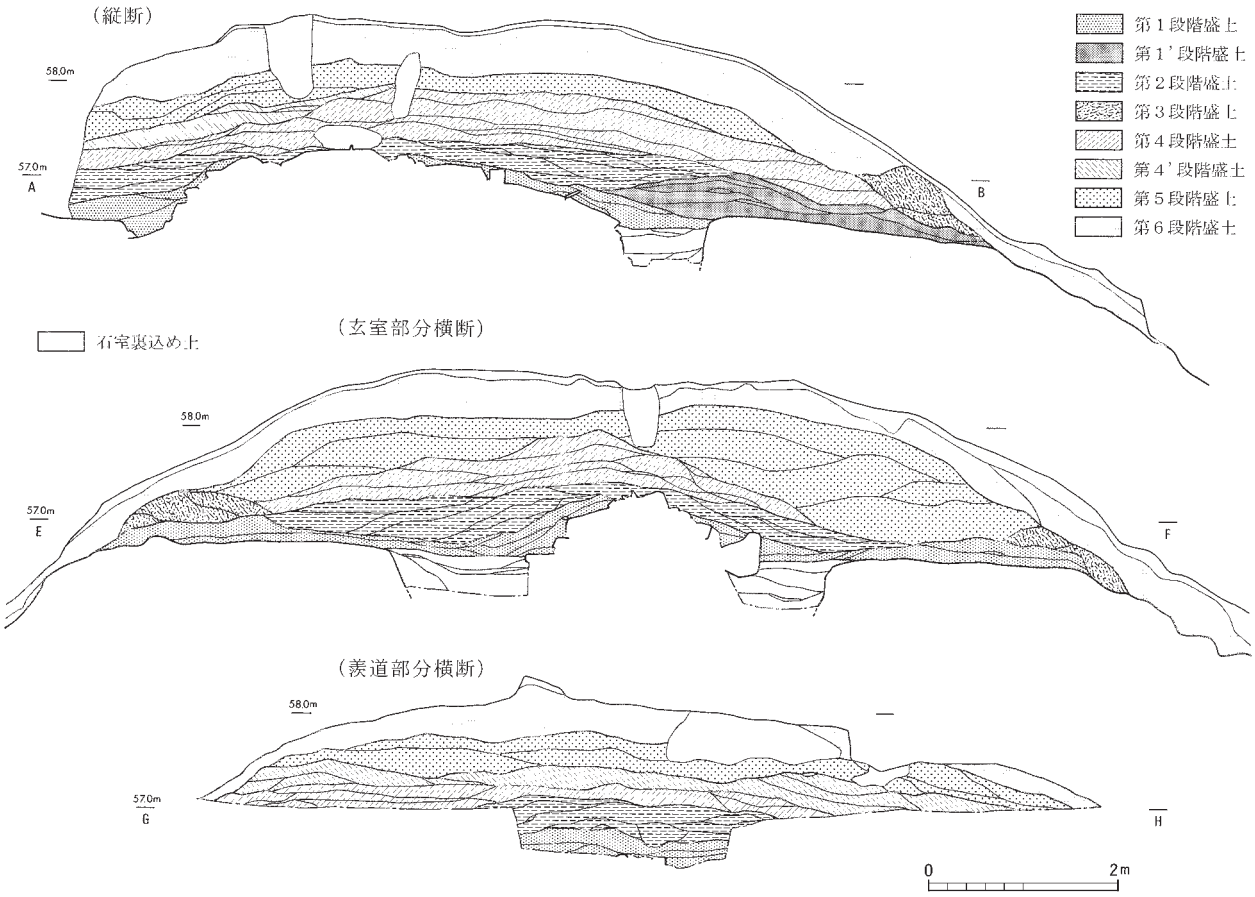
**〔第４段階盛土〕**　第４段階盛土は第３段階盛土を土留めとして、その内側に施された盛土で、実質的に墳丘上半部を形作る盛土の第１段階ともいえるものである（第15図32～58層）。

第１段階・第２段階盛土と比べると盛土の単位はやや大きくなる。石室の玄室から羨道にかけて一連の工程で盛られているが、玄室部分、特に奥壁付近では厚く盛られているのに対して、羨道部分ではそれほど厚くない。また、玄室部分でも南東側にはほとんどこの段階の盛土が及んでいない。

**〔第４’段階盛土〕**　第４段階盛土の上面に、玄室前壁部分から羨道部分にかけて施された盛土である（第15図22～31層）。盛土の質や盛り方は第４段階盛土と共通しており、大きくみて第４段階盛土に含まれるものと思われるが、羨道付近の墳丘構築に関わる小工程として区分した。

先述のように、第４段階盛土は玄室部分で厚く、羨道部分では薄くなっており、それによって生じた高低差を第４’段階盛土によって解消しようとしたものと考えられる。羨道部分の横断面でみると、石室付近にとどまらず、墳丘端部まで広い範囲に盛られた盛土のようであり、墳丘南側の成形に少なからず関わっているものと考えられる。

**〔第５段階盛土〕**　第５段階盛土は、第４段階盛土と同じく第３段階盛土の内側に施された盛土である（第15図９～21層）。




**第17図　小金３号墳墳丘盛土工程（1:80）**

第４段階までの盛土にくらべ、盛土の単位は大きくなっており、質の異なる土を交えて互層に盛っている様子は確認できない。

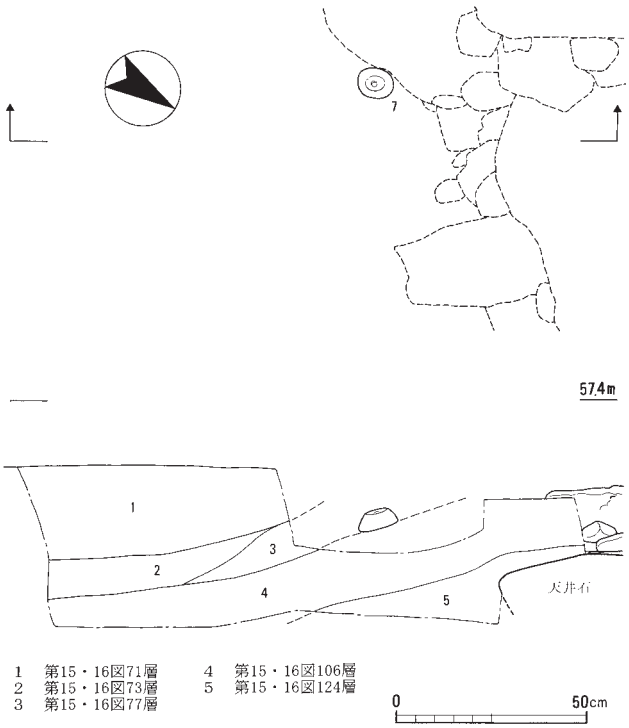
なお、第２段階・第４段階盛土が石室の玄室北西側（第15図Ｅ−Ｆ断面Ｅ側）でやや厚く盛られたために玄室の南東側（第15図Ｅ−Ｆ断面Ｆ側）との間に生じた高低差を解消するためか、この第５段階盛土は玄室の南東側で厚く盛られている。

**〔第６段階盛土〕**　第６段階盛土は、墳丘の表面の整形に関わる盛土であると思われる（第15図５〜８層）。盛土の単位は非常に大雑把で、質の似たやや粗い砂質土のみで構成されており、土を積んだ単位を細かく抽出することはできない。

この第６段階盛土は、墳丘下半部の地山整形によって造られている部分の表面まで及んでいるように観察されたが、墳丘下半部の第６段階盛土に比定される土層は（第15図５・６層）、墳丘上半部の第６段階盛土からの流土である可能性もある。本来は、第６段階盛土も第４・５段階盛土同様に第３段階盛土の内側にのみ盛られていたとも考えられる。

**遺物出土状況**　盛土中からは、完形の土師器杯が１点出土している（第27図７）[2]。この土師器杯は、石室東側の石室天井石を被覆する第１段階の盛土上面（第15図106層上面）から、口縁部を下にして伏せた状態で出土した（第18図）。この土師器杯のほかには盛土中から遺物は出土しなかった。

このほかに、墳丘周辺の表土・包含層掘削中に、土師器高杯、須恵器高杯・甕・広口壺などの破片が出土している。




**第18図　盛土中遺物出土状況図（1:20）**

**註**

1）　墳丘東側（第15図A−B断面B側）では第５段階盛土が第３段階盛土まで及んでおらず、第３段階盛土は第５段階盛土の土留めとしての機能を果たしていない可能性が高い。その場合、少なくとも墳丘北東部については、第３段階盛土は第４段階盛土の土留めとして先行して盛られていたと考えた方がよいと思われる。

2）　この土師器杯については、本章第５節で指摘されているように脚部を打ち欠かれた高杯である可能性もある。もし、指摘されているように表土掘削中に出土した高杯脚部（第27図８）と同一個体であるならば、脚部を分離した後に杯部のみを盛土中に埋置していることとなる。

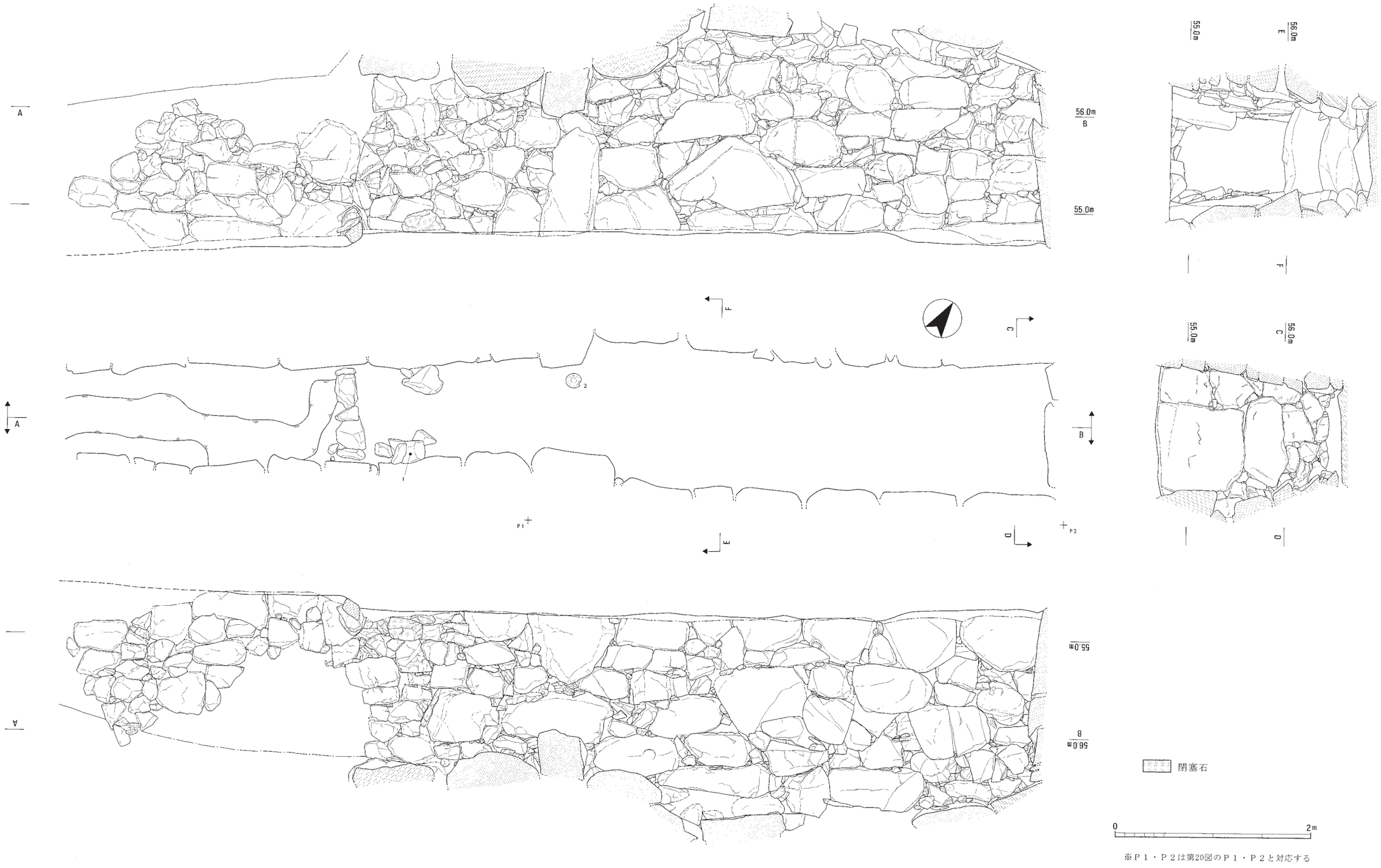
## 第３節　横穴式石室の調査

小金３号墳の埋葬施設としては、横穴式石室が１基確認された。遺存状況は良好で、羨道側壁の一部が木根によって乱されている以外には石室自体に大きな損壊は認められない。ただし、時期は不明ながらも盗掘を受けており、それによって閉塞が一部除去されていたほか、玄室の奥壁付近が床面まで荒らされていた。また、動物の巣穴と思われる撹乱が羨道から玄室にかけての床面の各所に認められた。

横穴式石室は両袖式で、袖石がやや内側に突出している。主軸はN56°Ｅであり、ほぼ南西に開口している。規模は、奥壁から羨門までの長さが7.3m、玄室は長さ4.3m、幅1.4m、高さ1.8mで[1]、羨道は長さ3.0m、幅1.0m、高さ1.6mである。玄室は長さに比べて幅が狭く、長細い印象を受ける。

また、羨門の外側には墳丘外に向かって墓道が設けられている。墓道の長さは、確認できた範囲では9.8mあり、最深部では1.5mほどある。

以下、横穴式石室の各部位ごとにやや詳細に述べ




第 19 図　小金３号墳横穴式石室実測図（1:40）

ていきたい。

## ①玄室

**奥壁**　石室は全体的に小型の石材によって構築されており、奥壁も比較的小型の石材で構成されている。持ち送りは顕著ではないが、基底石から全体的にやや内傾している。

奥壁最下段には、高さ90㎝ほどの他の石材よりやや大きめの平滑な面を持つ石材が、鏡石として使用されている。ただし、この１枚の石では奥壁幅を満たすことはできず、右側壁[2]との間にやや小さな石材を２段に積み上げている。この鏡石の横の２石は、高さがそれぞれ右側壁の最下段と第２段[3]にほぼ対応しており、側壁の積み上げと対応して積み上げられた可能性が高い。こうした点を考慮すると、奥壁は大きくみて５段に積まれているといえよう。

比較的大きな石材が用いられているのは第３段までであり、第４段以上はかなり小型の石材によって構成されている。

**側壁**　玄室の側壁は大小の不整形な石材を用いて構築しているため、石材の積み方がやや乱雑であるが、横方向の目地の通りが何箇所かで確認できる。左右側壁ともに大きくみて５段に積まれている。

側壁は第２段あたりから少しずつ持ち送られており、やや内傾している。

側壁の最下段の石は、いずれも奥壁を挟み込むように置かれている。また、袖石に対しては、左右いずれの側壁についても袖石の玄室側の面に小口を当てるように設置されている。

左側壁では、第３段については大型の石材が袖石の上に玄室から側壁へとまたがるように積まれており、この石の下の横目地の通りが玄室から羨道まで連続していくことが確認できる。こうした点からみれば、袖石の高さより上の壁体については玄室と側壁とがほぼ一連の段積み工程の中で積まれていったことが推測できる。

なお、壁体を構成する大型石材は形状が不整形であることから、上下に隣接する石材との間にかなりの隙間を生じてしまっている。この隙間を埋め、石材を安定させるために、上下の石材同士の間には小型の扁平な石が介石として多数入れられている。

**袖部**　袖部には大型の石材を縦長に使用しており、玄門立柱のようになっている。左右の袖石はかなり高さが異なっており、右袖石はほぼ天井部付近まで達しているのに対し、左袖石は側壁の中程までしか達していない。また、左右の袖の位置も若干ずれている。右袖石の方が幅が狭い石材を使用しているため、袖の屈曲の位置が左袖にくらべて若干羨道寄りとなっている。袖部の石材配置にあたって、袖の屈曲の位置よりも、袖石を対面に置くことが優先された結果であろう。

袖部の屈曲は比較的小さく、袖石のみが若干ながら内側へ突出する形となっている。そのため、玄室幅と羨道幅には大きな差はなく、また、袖石より上部についてはほとんど袖部としての屈曲が認められない。

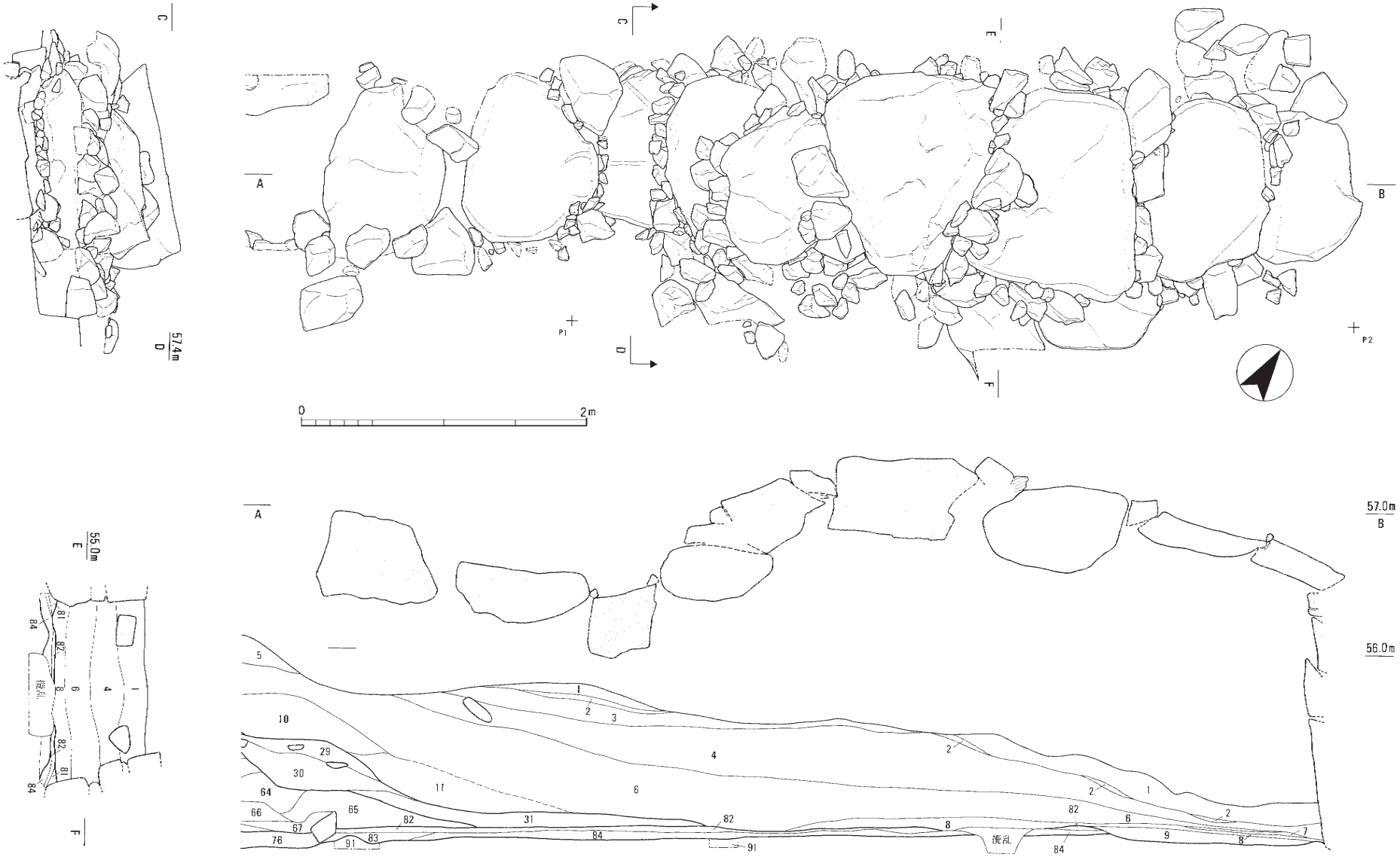
**天井**　天井は典型的な平天井ではない。奥壁から４石目までは徐々に高くなり、その後、玄門に向けて低くなっていく。そのため、断面は弧を描くようになっている。

玄門の天井石は羨道の天井石より一段低く設置されており、まぐさ石状になっている[4]。この玄門の天井石と、玄門へ向けて低くなっていく部分の天井石によって前壁が形成されているようにみえるが、天井がやや段をなしつつ徐々に低くなっていくため、明瞭な前壁とはなっていない。

天井石は奥壁から１・２石目の石は他の石に比べて薄く、板石状である。ただし、明瞭な加工痕などは認められない。その他の天井石はかなりの厚みをもち、板石というよりは塊石状の石材である。

また、今回の調査では、墳頂部から墳丘盛土を除去しつつ調査を行ったため、石室の天井石を上面から検出し、図化することができた（第20図）。これによって、天井石が架構された過程や目詰めの方法についていくつかの知見を得ることができた。天井石の架構過程については次章で述べたい。

目詰めの石は、かなり丁寧に施されていた。天井石を置いた後に、石室の外側から天井石同士や側壁との間に生じた隙間を埋めるように詰め込まれていた。特に、比較的厚みのある石が段状に積まれているために隙間を多く生じた前壁部分については、かなり多くの石を詰め込んでいた。また、人頭大程度




1　7.5YR4/6褐色細粒砂～極細粒砂。締まり弱い
2　10YR1.7/1黒色細粒砂。有機質多く含む
3　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～極粗粒砂。10YR1.7/1黒色細粒砂を層状に含む
4　10YR4/6褐色細粒砂～極粗粒砂
5　7.5YR5/8明褐色細粒砂～極粗粒砂。砂質
6　10YR5/6黄褐色極細粒砂～極粗粒砂。砂質
7　7.5YR5/6明褐色シルト～極細粒砂。木片含む
8　10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂～極粗粒砂。砂質
9　10YR4/4褐色極細粒砂～粗粒砂。礫（～5cm）を少量含む
81　10YR4/6褐色シルト～細粒砂。粘質〔貼り床〕
82　5YR5/6明赤褐色シルト～中粒砂。やや粘質。締まり強い〔貼り床〕
83　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂が斑状に混じり合う。締まり強い〔貼り床もしくは整地土？〕
84　10YR5/6黄褐色極細粒砂～中粒砂。砂質〔整地土〕
91　2.5YR8/4淡黄色極粗粒砂〔地山〕

**第20図　天井石平面図・立面図・断面図、石室内土層断面図（1:40）**　※土層番号は第23図と通番

の石も用いられているが、これらについては隙間へ詰めるというよりは、隙間を覆い隠すように配置されていた。

なお、粘土や粘質土が目詰めに使用されている状況は認められなかった。基本的に、目詰めは石のみによって行われている。

**床面**　床面は奥壁付近が撹乱により乱されているものの、ほぼ平坦である。

床面には貼り床と思われる締まりの強い明赤褐色土層がほぼ全面にわたって認められる（第20図82層）。また、側壁の基底石に沿って、この明赤褐色土による貼り床の上に褐色土が施されている様子が確認できた（第20図81層）。この土層も貼り床の一部であると思われる[5]。

床面の断ち割りを行ったところ、明赤褐色土の貼り床については側壁の基底石の下へ続いているような状況が認められた（第20図E−F断面）。ただし、確実には確認できていない。一方、奥壁基底石については地山の上に直接置かれており、そうした状況は認められない。また、後述のように羨門床面の石列もこの貼り床を施す前に置かれた可能性が高いことを考慮すれば、側壁についても基底石を設置した後に貼り床がなされた可能性の方が高いと思われる。

貼り床の上面には、敷石は施されていなかった。ただし、石室内の流入土や撹乱土中に拳大のチャートなどの円礫が混入しており、これらの円礫が床面の一部に敷かれていたものである可能性も考えられる[6]。

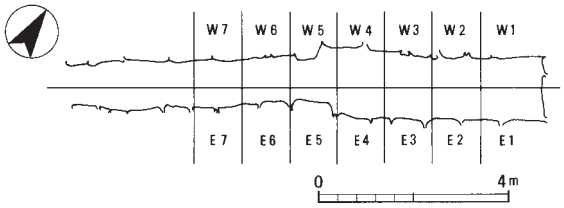
一方、貼り床の下には黄褐色土が厚さ５〜10cmほど敷かれており、これについては確実に側壁の基底石の下へ潜り込んでいくため、石室構築に先立って行われた墓壙底の整地土に相当するものと考えられる（第20図84層）。

床面の断ち割りでは、壁体の基底石を据え付けるための掘り込みなどは確認できなかった。整地土と考えられる土層が基底石の下へ続いていく可能性が高いことも考えれば、基底石の設置にあたっては、据え付け穴を掘らずに、墓壙底の整地土上にそのまま置かれたものと考えられる。

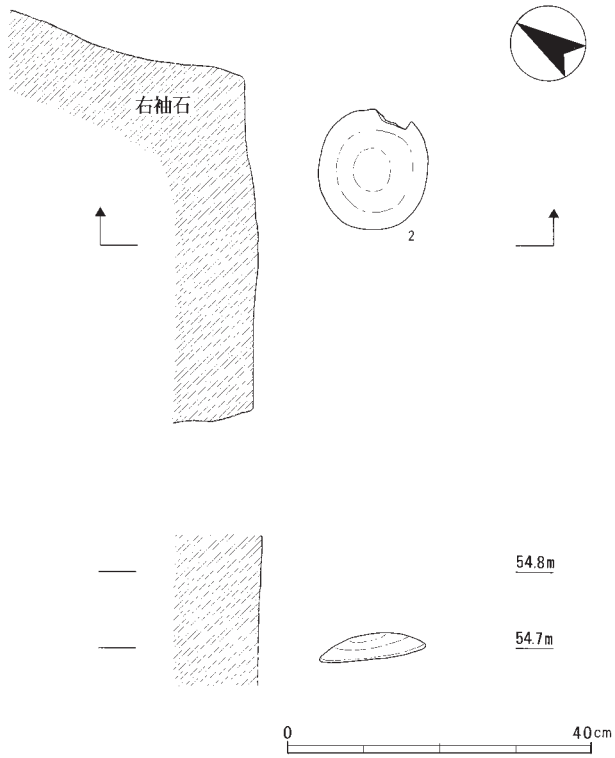
なお、床面の断ち割りによっても排水溝の存在は認められなかった。玄室内に排水溝は設けられていなかったものと思われる。

**遺物出土状況**　玄室内は先に述べたように撹乱を受けている部分が多く、原位置を保って出土した遺物は全くなかった。遺物のほとんどは撹乱土もしくは流入土中から出土している。これらの遺物についても、石室内部に設定したグリッドごとに取り上げている（第21図）。

奥壁付近のＥ１区の撹乱土中からは、須恵器直口壺の口縁部と思われる破片が出土している。また、左袖部付近のＥ４区の側壁最下段の石と石の隙間に挟まるようにして、須恵器高杯の脚部の破片が出土している。この高杯脚部は同一個体と考えられる破片が石室外からも出土しており、石室内の撹乱に伴




第21図　石室内遺物取り上げ地区割り図（1:160）




第22図　玄門遺物出土状況図（1:10）

って副葬品も大部分が石室外へ持ち出されたものと思われる。このほか、Ｅ３区とＷ４区から同一個体の高杯脚部の破片が出土している。

なお、玄室内の床面付近の流入土・撹乱土については篩にかけて微細遺物の存在の有無を確認した。これによって長さ2.5㎝、厚さ0.4㎝ほどの薄い鉄片が検出されている。ごく小片であるが、形態からみて鉄刀の破片である可能性が考えられよう。これ以外には、鉄製品の破片や玉類などは全く検出されていない。石室内の撹乱が激しいことを考慮しても、もともと副葬品の量はそれほど多くなかったものと推定される。

### ②羨道

**側壁**　羨道側壁は、玄室より小型の石材で構成されている。基底石にはそれほど大きな石材は使用されていないが､横長で安定感のある石材を用いている。壁体には玄室と同じく横方向の目地の通りが認められ、細かくみると左右両側壁とも５段程度の積み上げ工程が認識できる。

先にも述べたように、左側壁では、袖石より上については玄室側壁から連続して目地の通りが認められ、一連の工程の中で構築されていることが窺われる。右側壁は左側壁よりは不明瞭であるが、やはり袖石より上については玄室側壁から連続して目地が通っているように思われる。

羨道側壁については持ち送りはほとんど認められず、ほぼ垂直に近い。

**天井**　天井は玄門に一段低く架構されている石の他に、２石が架構されている。玄室とは異なり、ほぼ平らな天井となっている。玄室側には板石状の石材が用いられ、羨門側には塊石状の石材が用いられている。

架構されている２石の間にはやや隙間があり、そのために両者の架構の先後関係は不明である。この隙間には目詰めの石もあまり認められなかった。ただし、天井石の検出中に隙間からやや遊離した状態で人頭大の石材がいくつか検出されたほか、羨道内にも目詰めの石と思われる小型の石材がいくつか落ち込んでいた。この付近には太い木の根がのびてきており、それによって撹乱された結果、隙間が生じてしまったものと思われる。

**床面**　羨道の床面は、玄門から羨門までほぼ平坦である。

床面の構造は玄室とほぼ同じである。貼り床（第23図82層）と整地土と思われる土層（第23図83・84層）が、玄室から連続して認められる。

ただし、貼り床は後述の墓道と羨道の境界部分に置かれた石列までで止まっている。石列設置後に貼り床を施した可能性が高い。整地土については石列の下へと続き、そのまま一部墓道まで及んでいる。

なお、羨道床面においても横断方向に断ち割りを行ったが、排水溝などは認められなかった。

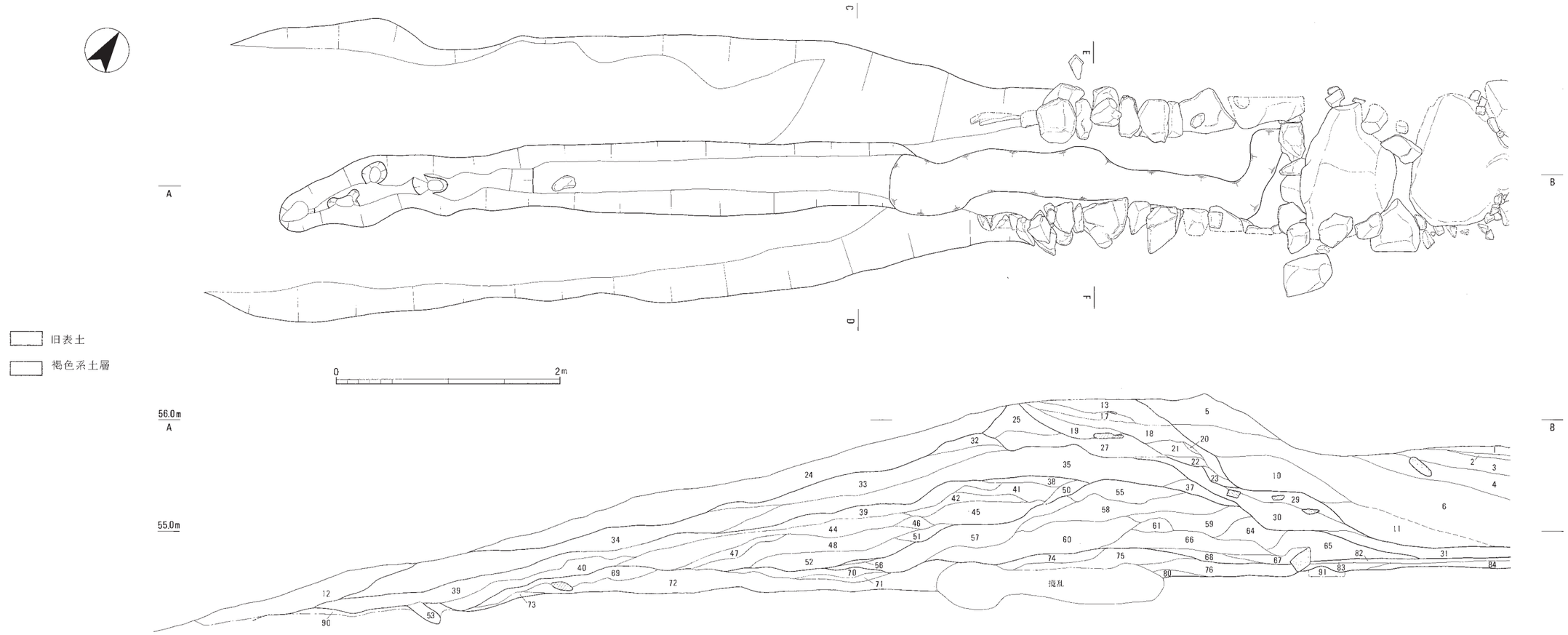
**遺物出土状況**　羨道では、玄門付近で須恵器杯身１点が出土している（第27図２）。この杯身は右袖石から９㎝ほど東側の床面直上で、口縁部を下にした状態で検出された（第22図）。ほぼ完形であるが、口縁部の一部は打ち欠かれているようである。この杯身の上面には、初葬時の閉塞の一部とも考えられる比較的均質な土（第23図31層）が堆積していた。したがって、初葬時に副葬された遺物である可能性があるものと思われる。

この他には、副葬品というよりも後述するように閉塞に伴うものと考えられる土師器杯が１点出土したのみである（第27図１）。

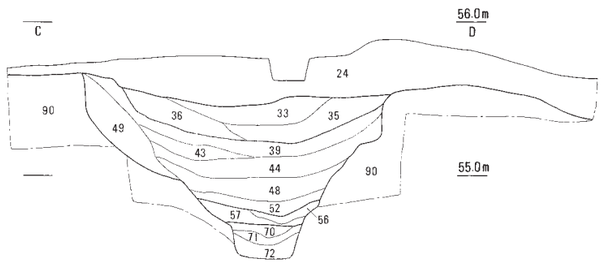
### ③墓道

羨門から外側には、石室主軸に沿ってほぼまっすぐに墓道が設けられていた。墳丘の外側へ向かって徐々に浅くなり、羨門から9.8ｍほどの所で自然に消えている。

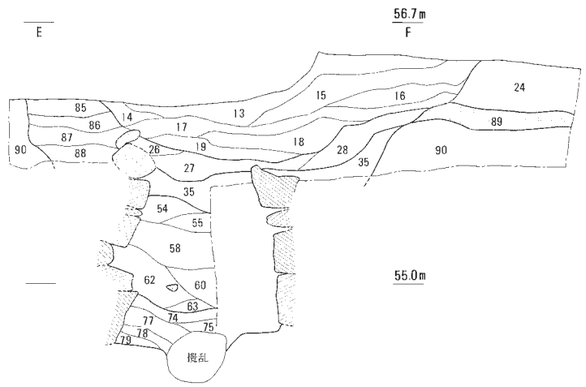
墓道は地山を掘り込んで作られている。床面の中央部には、幅60㎝、深さ30㎝程度の素掘りの排水溝が設けられている。この排水溝は、墓道の南端付近で墓道とともに自然に浅くなり消えていく。北端については、閉塞付近の墓道床面が動物の巣穴と思われるものによって撹乱をうけており、確認できなかった。ただし、羨道における断ち割りの結果から見て、石室内まで続いていないことは確実であろう。閉塞部分の床面に置かれた石列の直下でも確認できなかったため、おそらくこの石列の直前で止まっているものと考えられる。排水溝の内部には石を詰め




10　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～極粗粒砂と7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂が混じり合う
11　7.5YR4/6褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1cm）をごく少量含む。砂質
12　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。やや粘質
13　7.5YR4/6褐色シルト～極粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
14　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～極粗粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂が斑状に少量混じる〔追葬時閉塞土〕
15　7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
16　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
17　7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔追葬時閉塞土〕
18　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
19　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂と7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。やや粘質〔追葬時閉塞土〕
20　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂。粘質〔追葬時閉塞土〕
21　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
22　10YR5/6黄褐色細粒砂～粗粒砂〔追葬時閉塞土〕
23　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂と10YR4/6褐色シルト～中粒砂が混じり合う。やや粘質〔追葬時閉塞土〕
24　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂〔墳丘盛土？〕
25　7.5YR5/8明褐色シルト～極粗粒砂〔閉塞土〕
26　7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂〔閉塞土〕
27　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂〔閉塞土〕
28　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。7.5YR6/8橙色細粒砂～極細粒砂ブロックを含む〔閉塞土〕
29　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂を斑状に含む。礫を含む。締まり強い〔閉塞土〕
30　5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂。締まり強い〔閉塞土〕
31　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。やや粘質〔閉塞土〕
32　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂〔墓道埋土〕
33　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂を部分的に含む〔墓道埋土〕
34　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂〔墓道埋土〕
35　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂が混じり合う〔閉塞土・墓道埋土〕
36　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂を斑状に5～10%含む〔墓道埋土〕
37　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1～2cm）を少量含む〔閉塞土〕
38　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂が斑状に混じり合う。締まり強い〔墓道埋土〕
39　7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。炭化物（～0.3cm）を少量含む。やや粘質〔墓道埋土〕
40　7.5YR4/6褐色シルト～粗粒砂と7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う。炭化物（～0.5cm）を含む〔墓道埋土〕
41　7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂。7.5YR6/8橙色細粒砂～粗粒砂ブロック（1cm）を少量含む〔墓道埋土〕
42　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔墓道埋土〕
43　5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂〔墓道埋土〕
44　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂と5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂が混じり合う〔墓道埋土〕
45　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂。7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂を斑状に含む。締まり強い〔墓道埋土〕
46　10YR4/4褐色シルト～粗粒砂。炭化物（～0.3cm）を少量含む。やや粘質〔墓道埋土〕
47　7.5YR4/4褐色シルト～粗粒砂。炭化物（～0.5cm）を少量含む。やや粘質〔墓道埋土〕
48　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂を斑状に5%含む〔墓道埋土〕
49　5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂〔墓道埋土〕
50　10YR4/4褐色シルト～粗粒砂〔墓道埋土〕
51　10YR4/6褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔墓道埋土〕
52　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂を斑状に10%含む〔墓道埋土〕
53　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細粒砂。粘質〔杭痕？〕
54　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂と10YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う。炭化物（～0.5cm）を含む〔閉塞土〕
55　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂が斑状に混じり合う〔閉塞土〕
56　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂〔閉塞土〕
57　5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂。締まり強い〔閉塞土〕
58　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（2～3cm）を少量含む〔閉塞土〕
59　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。10YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂を斑状に含む。5YR4/8赤褐色シルト～中粒砂ブロック（2～3cm）を含む。締まり強い〔閉塞土〕
60　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂と7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂が斑状に混じり合う。5YR4/8赤褐色シルト～細粒砂ブロック（2～3cm）を少量含む〔閉塞土〕
61　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂〔閉塞土〕
62　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～極粗粒砂。礫をごく少量含む。締まり強い〔閉塞土〕




63　10YR3/4暗褐色細粒砂～粗粒砂と7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂が混じり合う〔閉塞土〕
64　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1～2cm）を含む〔閉塞土〕
65　7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（1～2cm）を1～3%含む。締まり強い〔閉塞土〕
66　5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂と10YR4/6褐色シルト～粗粒砂が層状に混じり合う〔閉塞土〕
67　10YR5/8黄褐色シルト。粘質〔閉塞土〕
68　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂。粘質〔閉塞土〕
69　7.5YR4/4褐色シルト～粗粒砂。炭化物（～0.5cm）と礫（1～2cm）を少量含む〔墓道埋土〕
70　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂〔墓道埋土〕
71　7.5YR4/6褐色細粒砂～粗粒砂。炭化物（～0.5cm）を含む。〔墓道埋土〕
72　7.5YR4/6褐色極細粒砂～粗粒砂。炭化物（～0.3cm）を含む〔墓道埋土〕
73　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～極粗粒砂と7.5YR5/8明褐色シルト～粗粒砂が斑状に混じり合う〔墓道埋土〕
74　10YR4/4褐色極細粒砂～極粗粒砂。やや砂質〔墓道埋土〕
75　10YR4/6褐色シルト～粗粒砂。やや粘質〔墓道埋土〕
76　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。10YR3/6黄褐色シルト～中粒砂を層状に含む。締まり強い〔墓道埋土〕




77　10YR3/3暗褐色シルト～粗粒砂。炭化物（～0.3cm）を含む〔墓道埋土〕
78　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～極粗粒砂。7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂を斑状に含む。締まり強い〔墓道埋土〕
79　10YR5/6黄褐色細粒砂～極粗粒砂〔墓道埋土〕
80　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～極粗粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂ブロック（1～2cm）を含む〔墓道埋土〕
85　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～極粗粒砂〔裏込め土もしくは墳丘盛土？〕
86　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂〔裏込め土？〕
87　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～粗粒砂〔裏込め土〕
88　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂〔裏込め土〕
89　10YR4/6褐色シルト～中粒砂〔旧表土〕
90　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～粗粒砂。やや砂質〔地山〕

第23図　墓道平面図・土層断面図（1:40）

ている様子は認められなかったが、１点のみ円礫が検出されている[7]。また、排水溝の底に、おそらく杭状のものを立てていたと思われる痕跡が１箇所認められた（第23図53層）。

この墓道は、閉塞と一連の工程で埋め戻されているようである。墳丘盛土と同様に、赤色系の土と褐色系の土とを互層にして埋めており、丁寧な工程が窺われる。完全に埋め戻した後に、その上面を盛土で覆っているようである（第23図Ｃ-Ｄ断面）。

排水溝についても墓道と一連の埋め戻しによる土層堆積が確認できており、墓道の埋め戻しが行われたときには蓋などはされておらず開放状態であった可能性が高い。

なお、墓道内から遺物は出土しなかった。

**墓道側壁**　墓道についても、羨門から３ｍのあたりまでは石を積んで側壁を作っている。

この墓道の石積みは、一見すると天井石を失った羨道の一部のように見える。しかしながら、閉塞や墓道の埋め戻しによって上部まで完全に土が充填されている点や、この閉塞・埋め戻し土の一部に墓道側壁の石材上面まで及ぶ土層（第23図35層）が認められる点、そして追葬時にこの部分が掘り返されている点などからみて、もともと天井石が架構されていなかったことはほぼ確実である。したがって、羨道の一部というよりは墓道の側壁として積まれたものと考えられる[8]。

墓道側壁は、持ち送りによって内傾する。内傾度は羨道側壁にくらべて大きい。また、羨道側壁と墓道側壁の境界では石の積み方がやや変化している。墓道側壁では羨道側壁よりやや大きな石材を用い、やや乱雑に積まれている。そのため、水平方向の目地の通りは不明瞭である。墓道側壁の西端付近では、両側壁ともやや小型の石材を用いて積まれているが、この部分では特に積み方が乱雑であり、目地の通りはほとんど確認できない。

なお、墓道側壁も玄室と同じく地山を掘り込んだ墓壙の中に構築されており、比較的均質な土によって裏込めがなされている。

## ④閉塞

**初葬時閉塞**　羨道側壁と墓道側壁との間の、石の積み方が変化する境界部分の床面には、長径20～30㎝ほどの石が羨道と直交する形で一列に並べられていた。この石列を境に床面が墓道へ向かって一段低くなっており、これが墓道と羨道との境界になっていると思われる。

閉塞は、主にこの羨門床面の石列より墓道側に、土を盛り上げることによって行われていた。墓道の項でも述べたように、閉塞は墓道の埋め戻しと一連の工程で行われているようである。閉塞土をある程度の高さまで積み､その高さまで墓道を埋めた後に、更に閉塞土の積み上げと残りの墓道の埋め戻しを行っていった状況が窺われる。ただし、閉塞については土が小さな単位で積まれている点や、石が含まれている点などで、墓道の埋め戻しとはやや様相が異なっている。

なお、閉塞土中には径20㎝程度の礫がややまとまってみられる部分もあった。こうした礫は羨門付近で集中的にみられたが、礫の量は少なく閉塞土中に面的に散在しているような状態で、礫が積み上げられたり、礫同士が組み合わせられているような状況は認められなかった[9]。

**追葬時閉塞**　初葬時閉塞の上部を切り込むようにして、追葬時の掘り込み及び閉塞と考えられる土層が認められた（第23図13～23層）。

この追葬時の掘り込み・閉塞と考えられる土層は羨門付近のみで確認できる。床面までは達していない。追葬に際して、羨門付近の盛土及び初葬時閉塞を最小限のみ除去して石室内へと進入したことが窺われる。

閉塞土中に、礫はほとんど混じらない。わずかに検出された礫は、初葬時の閉塞に使用されていたものが混じり込んだ可能性が考えられる。初葬時と同様に異なった質の土を互層に用いて閉塞を行っているが、初葬時の閉塞土にくらべてやや汚れた印象を受ける色調の土である。

なお、羨門付近では墓道左側壁の上部が一部欠落しているように見える。この欠落部分には追葬時閉塞の一部と思われる土が入り込んでいた。この部分の墓道側壁が遺存している高さと、追葬時のものと考えられる掘り込みの底面の高さがほぼ一致することも考えれば、追葬に伴って墓道左側壁の石材が一

部除去された可能性が高い。

**遺物出土状況**　羨道部の初葬時閉塞に用いられたと考えられる礫の下から、土師器杯片（第27図１）が１点出土している（第19図）。この礫はほぼ羨道床面直上で検出されたものであり、上部を初葬時の閉塞土が覆っていたことから、土師器片は初葬時からこの礫の下に置かれていた可能性がある。また、この土師器杯は全体の約1/5ほどしか遺存しておらず、破片の状態で置かれたものと推定される。

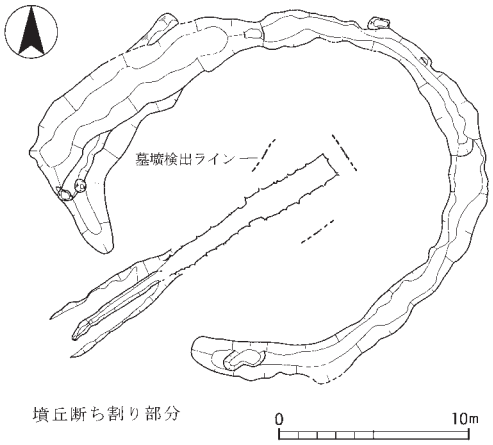
## ⑤墓壙・壁体裏込め

石室は先にも述べたとおり、ほぼ全体が地山に掘り込まれた深い墓壙の中に構築されている。

墓壙は旧表土上面から掘り込まれており、深さは２ｍほどあるものと思われる。墓壙壁はほぼ垂直であるとみられる。

墓壙壁と石室壁体の間は、確認できた石室上部においてはそれほど隙間がないが、第１段階の盛土と同様の質の土を層状に詰め込んでいた（第15図128～145層）。確認できた範囲では、礫による控え積みや、土に礫を混ぜて裏込めを施しているような状況は認められなかった。

なお、羨道については外側の断ち割りを行っておらず、墓壙の様相については不明であるが、墓道の壁面がそのまま羨道部分の墓壙壁面へと連続しているようである。したがって、羨道についても壁体と墓壙との間の隙間はそれほど広くないと考えられる。墓壙の平面形については不明であるが、こうした点からみれば、墓壙は全体として横穴式石室の平面形態と同じような形に掘られているものと推定される。




**第24図　墓壙検出位置図（1:400）**

**註**

1）　玄室の幅・高さの値は、奥壁付近での計測値である。玄室の最大高は2.1mである。また、左右の袖石の位置がずれているため、本文中では左袖の位置で計測した玄室長・羨道長の数値を記載した。右袖側で計測すると、玄室長は4.6m、羨道長は2.7mである。

2）　本報告では、奥壁から羨門方向を見た時に、右側に位置する側壁・袖を右側壁・右袖と呼称する。同様に、左側に位置する側壁・袖を左側壁・左袖と呼称する。

3）　本報告では石室壁体の積み上げ単位について、下から順に第１段、第２段、第３段・・というように記述する。なお、第１段の石については最下段もしくは基底石という呼び方も併用する。

4）　この玄門に架かる石については、天井部から遊離しておらず、また玄室高が羨道高より高く不明瞭ながら前壁状の部分が存在しているため、厳密にはまぐさ石と呼ぶべきではないかもしれないが、広義の意味で以降はまぐさ石と記述する。

5）　明赤褐色土の貼り床を施した後に、石室壁体の積み上げを継続したところ、基底石付近の地盤が沈み込んでしまったため、褐色土を沈み込んだ部分に施して床面を平坦に整えたとも推測される。

6）　同様のチャートの円礫はごくわずかではあるが玄室側壁の目詰めにも使用されており、こうした点からも敷石として使用されていた可能性がある。ただし、初期流入土に覆われていた床面においても敷石が認められなかったことや、流入土・撹乱土中に混入している円礫の量が玄室床面を覆うには量的にかなり少ないことを考えれば、石室床面全体に敷石が施されていた可能性は低いであろう。

7）　小金３号墳の周囲では円礫を採取することはできないため、人為的に持ち込まれたものと思われる。

8）　以下、墓道の石積みについては、「墓道側壁」と呼称する。墓道側壁は石材の積み方の単位の変化のほか、後述するように天井石が架構されていなかったと考えられる点などから、羨道側壁とは明確に区別される。研究史上、「前庭側壁」あるいは「前庭翼垣」とするべきかもしれないが、この点については第Ｘ章で詳述したい。なお、地山掘り込みによる墓道自体の壁面については、「墓道壁面」と呼称し

ておきたい。

9）　混ぜられている礫はほとんどが黒雲母花崗岩であり、石室石材として用いられているものと同じ種類のものであった。

# 第４節　横穴式石室の構築過程と使用石材

## ①構築過程

前節で述べた横穴式石室の調査時の観察所見を元に、小金３号墳の横穴式石室の構築過程について簡単にみておきたい。

**壁体の構築過程**　小金３号墳の横穴式石室の壁体は、前節でも述べたように玄室・羨道ともに大きくみて５段に積まれている[1]（第25図）。

石室の構築にあたって最初に設置された石材は、おそらく袖石と奥壁の鏡石であろうと推測される。

左袖部では、袖石が置かれた後に玄室側の石が置かれていると考えられる。また、右袖部では不明瞭ながら袖石が置かれた後に羨道側の石が置かれたものと考えられる。こうした点からみて、玄室・羨道両方の第１段の石の設置に先立って袖石が置かれていたと考えられよう[2]。

奥壁の鏡石と玄室側壁第１段の設置の先後関係については推定根拠は弱い。ただし、鏡石の横の奥壁第１段を構成する石が鏡石設置後に置かれたと考えられる点と、この石を置こうとした時にすでに右側壁第１段が置かれていたとすると、鏡石と側壁との間にぴったり合うように落とし込まなくてはならなくなる点を考えれば、おそらく側壁第１段の設置に先立って鏡石を含む奥壁第１段の石が置かれていた可能性が高いであろう。

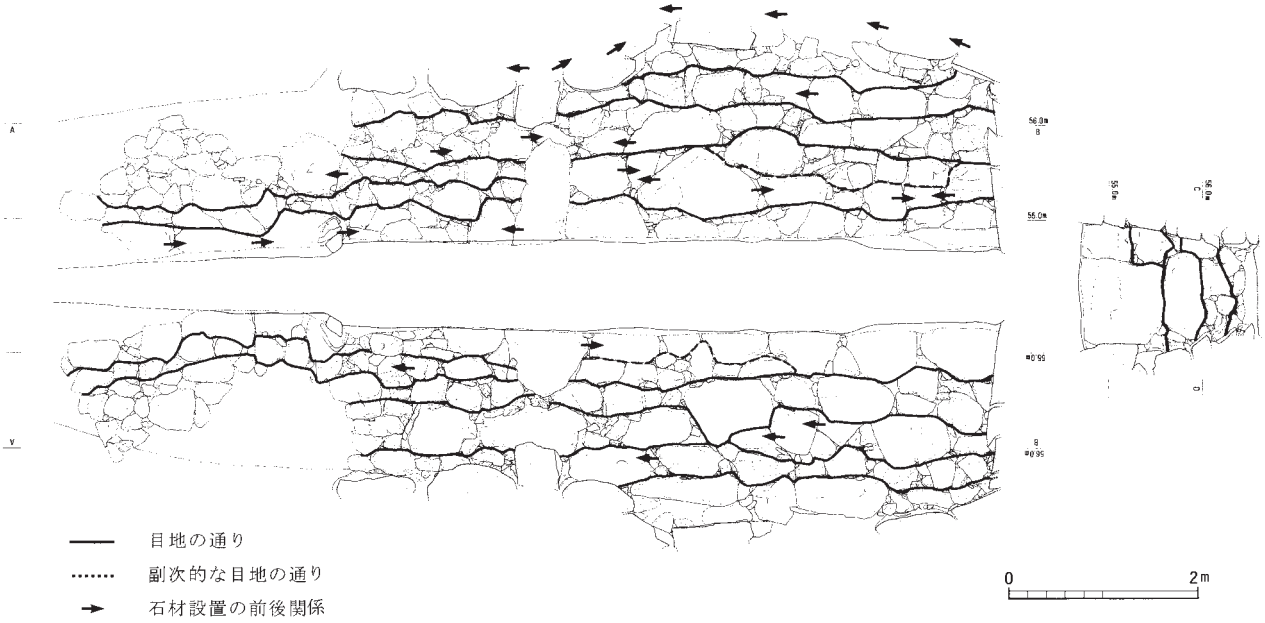
なお、袖石と奥壁鏡石の設置の先後関係については推定する手がかりがなく不明である。

袖石と奥壁第１段の設置後、玄室と羨道の第１段の石が設置される。

袖石と奥壁が最初に設置された可能性が高いため、玄室については袖部から奥壁へ向かって設置していったものと推測される。左側壁では、部分的に２段に積まれている箇所が確認できる。大きな単位では第１段の工程に含まれるものと思われるが、石室構築に用いられた石材の大きさにばらつきがあるために、こうした小単位の段積みによる調整が部分的に行われているものと考えられる。

第１段が設置された後に、玄室では袖石とほぼ同じ高さまで第２段が積まれる。

注目されるのは、玄室右側壁・左側壁ともにほぼ中央部に大型の石材を配している点である。両側壁とも、この石材が第２段を積む際の起点となってい




第 25 図　小金３号墳横穴式石室構築過程図（1:80）

ると考えられ、この石材の設置によって袖部側と奥壁側に生じた谷間を埋めるように第２段の石材を積んでいる。また、両側壁とも奥壁付近では第２段の中位に小単位の目地の通りが認められる。これも、左側壁第１段同様に、石材の大きさのばらつきの調整として行われたものと思われる。

羨道については、袖石とほぼ同じ高さになるように第２段と第３段が積まれている。第２段と第３段の間の目地はやや通りが悪く、実質的にはこの二段が一つの大きな段積みの単位を構成しているのかもしれない。

玄室・羨道ともに袖石の高さを目安に一度壁体の高さを揃えたものと思われ、続く玄室第３段と羨道第４段は一連の段積みとして認識できる。左袖部では、袖石の上に玄室から羨道にまたがって大型の石材が積まれており、玄室と羨道の壁体構築が一連のものとなっていたことを明確に示す。

玄室第３段・羨道第４段が積まれた後に、玄室第４段と羨道第５段が積まれる。これも玄室と羨道とが一連の工程で積まれたものと考えられるが、玄門部分のまぐさ石がこの段へ食い込むように設置されているため、まぐさ石設置後に玄室側と羨道側とが個別に積まれた可能性も考えられる。

羨道については第５段が積まれた後に天井石が架構されているが、玄室では第４段の上部に第５段が積まれる。右側壁では第５段は比較的小型の石材で構成されているが、左側壁ではかなり大型の石材を使用している。第５段を積んだ後に、玄室部分も天井石が架構されている。

この石室壁体構築過程においては、玄室第２段・羨道第３段までを積む工程と、玄室第３段・羨道第４段以上を積む工程との間に最も大きな工程上の区分が存在するものと考えられる。

なお、墓道側壁については目地の通りが悪く、段積みの工程が明瞭ではない。ただし、墓道右側壁については部分的に羨道右側壁から連続して目地が通る可能性がある。また、羨道右側壁と墓道右側壁との境界ラインと考えられる部分を観察すると、墓道側壁と羨道側壁とが一連の工程の中で積まれていた可能性が高い。第１段についてみれば、羨道右側壁では羨門の第１段の石が墓道右側壁第１段の石の後に設置された可能性が高く、少なくとも第１段については墓道側壁と羨道側壁とが一連の工程の中で設置されたものと考えられる。

**天井石の架構過程**　天井石は、その端部の重なり具合からみて、玄室最奥部の奥壁に架かる天井石ないしは、玄門に架かるまぐさ石が最初に設置されたことが窺われる（第20・25図）。

玄室部分では、まず奥壁の天井石を架構した後に、前壁方向へと向かって３石が順次架構されている。その後、まぐさ石から前壁を構成する２石が奥壁へ向かって架構されたようである。

羨道の天井石はまぐさ石の後に架構されるが、これが羨門側から架構されたのか、あるいはまぐさ石側から架構されたのかについては、石同士の重なりがなかったため判然としない。また、羨道の天井石と玄室の天井石のどちらが先に架構されたかについても、推測する手がかりがなく不明である。

また、奥壁に架かる天井石とまぐさ石のどちらが先に架構されたのかについても、推測する手がかりがないため不明である。

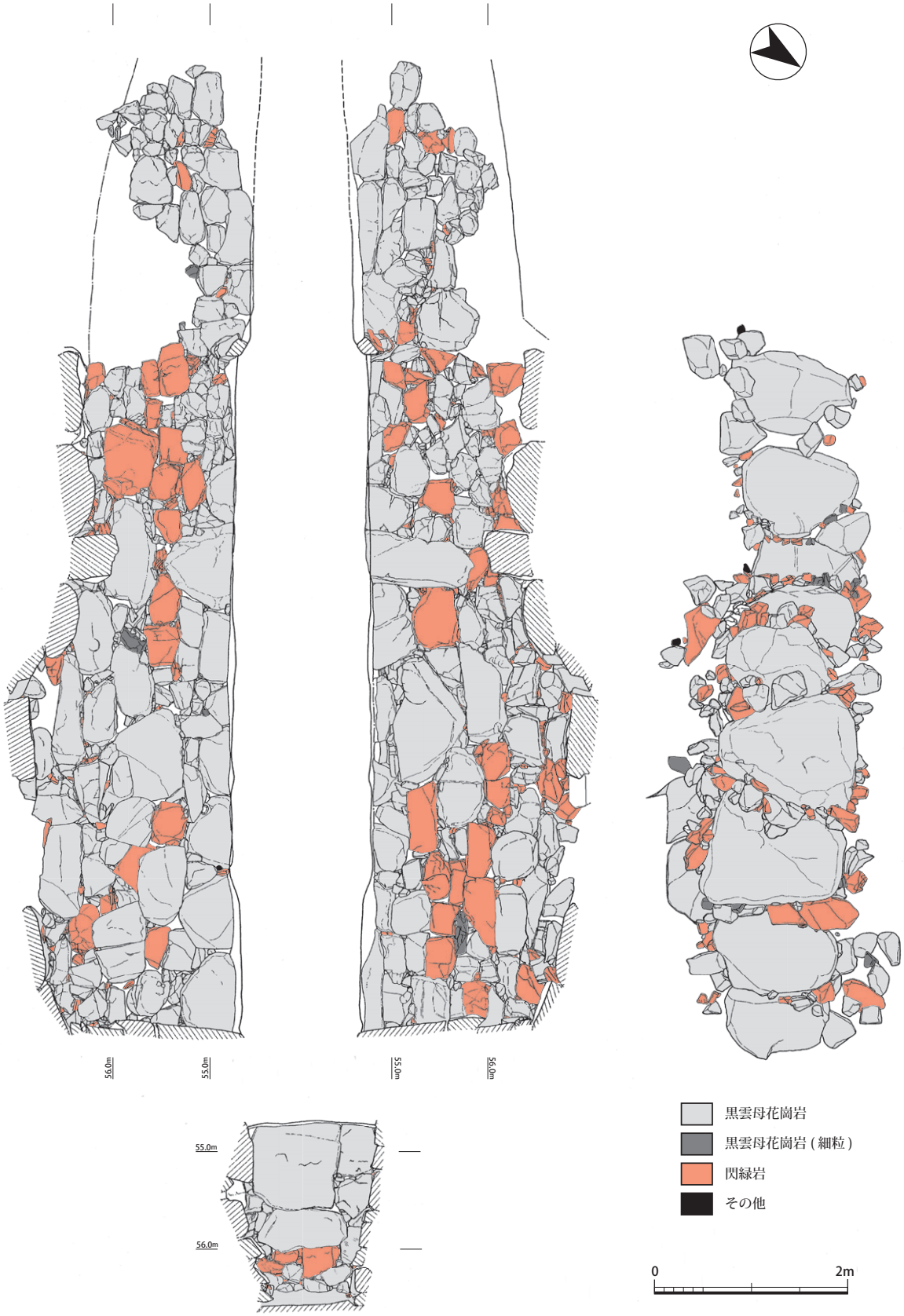
ただし、まぐさ石が他の天井石より一段低く側壁の上部へ食い込むようになっている点を重視すれば、まぐさ石の架構が側壁の最上段が積まれていない状況下で行われていた可能性も考えられる。この場合は、まぐさ石が天井石の中で最も早く架構されたものと推測できよう。

## ②使用石材

石室に使用された石材は、主に黒雲母花崗岩と閃緑岩の２種類である[3)]。黒雲母花崗岩はほとんどが中粒～粗粒のものであるが、中にはやや粒子が細かく細粒に近いようなものもみられる。

黒雲母花崗岩は風化が進み、かなり脆い質のものである。閃緑岩は細粒であるが、黒雲母花崗岩に比べてそれほど風化しておらず、硬く割れにくい。ただし、弱い層状の脈理があり、板状に割れやすい性質を持っている。

天井石には、すべて黒雲母花崗岩が使用されている（第26図）。ただし、天井石同士の間や、天井石と側壁最上部との間の目詰めに用いられた石には、天井石と同じ黒雲母花崗岩を荒割りしたもののほ




第 26 図　横穴式石室石材材質（1:60）

か、閃緑岩がかなり多く用いられている。閃緑岩はもともとそれほど大きな塊石ではないためか、あまり割らずに用いられている。

玄室側壁や羨道側壁についても、大型石材はほとんどが黒雲母花崗岩である。特に、基底石や袖石、鏡石など重要な位置にある石はすべて黒雲母花崗岩である。ただし、側壁中には長径50～70㎝ほどのやや大型の石材にも閃緑岩が用いられている。こうしたやや大型の閃緑岩は、壁体の中でも特定の箇所に固まって用いられている傾向がある。細粒の黒雲母花崗岩も、小型の石材がごく少数ながら側壁に使用されている。

大型石材を積み上げる際に、安定を図るために上下の石材の間に入れられた介石には、黒雲母花崗岩と閃緑岩の両者が使用されている。黒雲母花崗岩・閃緑岩とも、薄く板状に割ったものを使用している。特に目立つのが閃緑岩であり、これは板状に割れやすいために介石として加工・使用しやすかったためと思われる。

墓道側壁については、玄室側壁や羨道側壁と同様に花崗岩を主として用い、部分的に閃緑岩が用いられていた。

なお、主として使用されている黒雲母花崗岩・閃緑岩以外の石材もごく少量ながら認められた。石材の種類はほとんどが不明であるが、中にはチャートの円礫と思われるものもみられる。これらの石材は、玄室側壁や天井外面にほんの数点のみ使用されているが、介石としての使用ではなく、石材同士の隙間に詰め込まれているようである。

石材の採取地については正確なところは不明であるが、黒雲母花崗岩については細粒のものも含めて小金３号墳の周辺で産出するものであると思われる。風化が進んでおり脆くなっている点も、玉城丘陵周辺の花崗岩の産出状況と整合する。

ただ、当該地域の花崗岩層は第Ⅱ章第１節でも述べたようにかなりの深さまで風化が進んでおり、石室に使用できる強度・大きさの塊石を獲得することはそれほど容易ではなかったと推測される。周辺の工事に伴って、小金３号墳の石室に使用されているものと似た質の黒雲母花崗岩が掘り起こされている様子が観察され、石室石材として使用可能な石材が付近の風化花崗岩の地盤にも含まれていることが確認できたが、小金３号墳周辺でそれほど豊富に採取できたかどうかは不明である。

閃緑岩は現状では小金３号墳周辺では類似する石材の産出は確認できなかった。しかしながら、石室に使用されていた黒雲母花崗岩の一つに閃緑岩が含まれているものがみられたため、もともと黒雲母花崗岩中に脈状に含まれるものである可能性が高いであろう。したがって、閃緑岩についても黒雲母花崗岩と同じく玉城丘陵やその周辺に産地が想定される。ただし、小金３号墳周辺では普遍的にはみられない閃緑岩がかなり用いられていることからは、黒雲母花崗岩とともに閃緑岩が採取できる露頭からまとまった石材を採取し、運搬してきた可能性も考えられる。

このほか、ごくわずかにみられたチャートは円礫であり、玉城丘陵付近の砂礫層に由来するものである可能性がある。

**註**

1）　壁体の積み上げ工程の各段の呼称については、本章第３節の註３）に準じる。

2）　石材設置の先後関係の判断にあたっては、隣接する石材間の上下関係を重視した。隣接石材間に上下関係がある場合、上位にある石材が後で設置されたものと推定している。ただし、この基準は設置時に位置の微調整が困難と考えられる大型石材に限って適用している。

3）　石材の種類については三重県立博物館の小竹一之氏と津村善博氏にご教示いただいた。

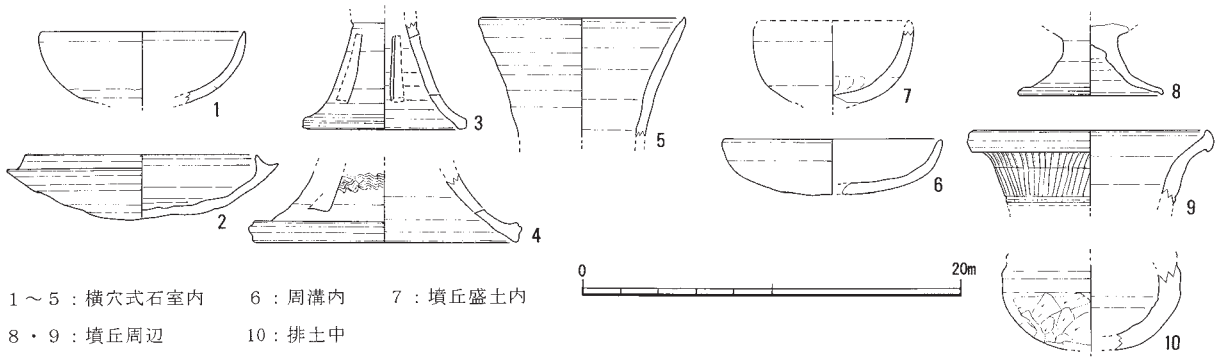
## 第５節　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして１箱である。

以下、主な出土遺物について記述するが、遺物個々の詳細については、遺物観察表（第４表）を参照されたい。

### ①横穴式石室内出土遺物（第27図１～５）

１は羨道部の閉塞石の下から、２は玄門付近から




**第27図　小金３号墳出土遺物実測図（1:4）**

出土した遺物である。また、３～５は玄室内からの出土である。

**土師器**（１）　１は杯である。全体に風化が激しいため、調整は不明瞭である。

**須恵器**（２～５）　２は杯身である。底部外面はヘラケズリによって整形されており、内面には静止した状態でのナデが見られる。３・４は高杯の脚部である。３には透孔の痕跡が見られる。おそらく三方向に開くものであろう。小型のものである。４の外面には波状文が確認できる。有蓋高杯の脚部かもしれない。５は直口壺の口縁部か。外反しながら直線的に立ち上がる形状を呈する。

### ②周溝内出土遺物（第27図６）

６は周溝の底付近の埋土中から出土したものである。

**土師器**（６）　６は杯である。全体に風化が激しく調整は不明瞭であるが、ナデ・オサエの痕跡がかろうじて見られる。底部には穿孔が確認できる。

### ③墳丘盛土内出土遺物（第27図７）

７は天井石を覆う盛土内から出土した。

**土師器**（７）　７は杯である。ほぼ完形で出土しているが、内外面とも風化が激しく調整は不明瞭である。底部には穿孔が見られる。ここでは杯と報告するが、底部外面が円形に剥離しており、脚が付いていた可能性も考えられる。

### ④墳丘周辺出土遺物（第27図８・９）

８・９は墳丘および周辺の表土や包含層の掘削中に出土している。

**土師器**（８）　高杯の脚部である。前述の土師器杯（７）の脚部とも考えられる形状である。内外面ともナデで調整されている。

**須恵器**（９）　壺の口縁部である。端部は肥厚し、丸く収める。口径13cmと小型である。２本の沈線以下、欠損する。

### ⑤その他出土遺物（第27図10）

10は排土から採集したものである。同一個体と思われる、櫛描列点文の施された肩部の破片が、表土掘削中に出土していることから、小金３号墳に関連する遺物であることは間違いなかろう。

**須恵器**（10）　10は瑳の体部片である。底部外面をケズリで調整している。体部最大径は9.4cmである。

## 第６節　小結

小金３号墳は、南勢地域[1]においてこれまでに発掘調査が行われた古墳の中でも、墳丘及び横穴式石室の遺存状況がかなり良好であったといえる。そのため、墳丘や横穴式石室の構造および構築過程について、かなり詳細な情報を得ることができた。

**築造時期**　残念ながら副葬品は後世の盗掘や撹乱によってほとんどが持ち去られ、ごく少量しか出土しなかった。少ない遺物から時期を特定することは難しいが、古墳の築造時期としては、羨道の玄門付近から出土した須恵器杯身が参考になろう。この杯身は、口径が12.0cmあり、陶邑編年のＴＫ43～209型式期のものと考えられる。ただし、立ち上がりは低

く、体部もかなり扁平である。また、底部外面のヘラケズリはかなり甘い。したがって、どちらかといえばＴＫ209型式期に入る可能性が高いものと考えておきたい。他の須恵器についても、ＴＫ209型式期とみて矛盾はないであろう。

なお､追葬が行われていると考えられることから、出土遺物の多くが追葬時のものである可能性も完全には否定できないが、少なくとも玄門出土の須恵器杯身については、閉塞からの流土との関係などからみて初葬時のものと考えてもよいと思われる。

南勢地域ではＴＫ43型式期までに築造されたと考えられる横穴式石室は少数であり、ＴＫ209型式期から横穴式石室の築造が増えてくるものとみられる。小金３号墳は、南勢地域の中で横穴式石室の築造がやや盛んになってくる時期に築造されたものとみることができる。

**横穴式石室の形態**　調査によって判明した横穴式石室の形態は、細長い平面プランの玄室や、断面が弧を描く天井形態、短い羨道など、比較的地域色が明確に表れているものといえよう。近隣には、伊勢市高倉山古墳[2]や多気町河田Ｅ－８号墳[3]など、類似した形態の横穴式石室が複数存在しており、これらの横穴式石室を構築した集団や、古墳の被葬者間同士の関係などが注目される。

また、このほかに横穴式石室に関連して特筆されるのは、墓道に石を積んだ側壁を持つ点であろう。こうした墓道側壁をもつ例については、伊勢地域では類例があまり見いだされておらず、これまでほとんど注意されてこなかった。多くの古墳では破壊によって石室が基底部付近しか遺存していないため、天井石を架構しないことが一つの特徴である墓道側壁の存在について明確にできなかったことも一因であろうが、この地域に墓道側壁を確実にもつ古墳が築造されていることが判明したことは重要である。前庭と呼ばれる類似施設との関係も含め、この墓道側壁をどのように位置づけるのかという点は、当該地域の横穴式石室の系譜や、他地域との影響関係を考える上でも重要な手がかりとなるものと考えられる[4]。

**墳丘構築**　もう一つ注目される成果は、墳丘の遺存状況が良好であったため、墳丘構築過程について詳細な情報を得ることができた点である。

これまで、三重県内では木棺直葬の古墳については墳丘盛土に関する情報が発掘調査によってある程度蓄積されてきているが、横穴式石室については墳丘の遺存状況がよくないものが多いこともあり、詳細な墳丘構築過程に関する情報を得ることができた例はまだ多くない。小金３号墳は貴重な調査事例となったといえる。

また、墳丘盛土内から土師器が出土したことにより、墳丘構築過程における儀礼についても情報を得ることができた。横穴式石室を構築し、その天井を被覆した段階で、一度何らかの儀礼的行為を行っていることが明らかになったのであり、この段階で墳丘構築過程に一つの区切りが存在していたことが推測されよう。この事実からは、この区切りの時点ですでに石室内への埋葬が行われていたのかどうかという問題も浮上してくる。小金３号墳の調査においては明らかにすることができなかったが、今後の調査事例における課題の一つであろう。

**註**

1）　伊勢地域の地域区分については、第Ⅱ章第２節の註13）に述べている。

2）　岩中淳之「高倉山古墳」『三重県史』資料編考古１　三重県　2005

3）　多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986

4）　本節で簡単に触れた小金３号墳の横穴式石室の特徴や位置づけについては、第Ｘ章でやや詳しく述べたい。

# 第Ⅴ章　小金４・12号墳の調査

## 第１節　調査の方法

当初は小金４号墳を対象として墳丘測量と範囲確認調査を行った。これは、墳形と規模を推定することと、想定される墳丘の大部分が事業対象範囲外にあるため、事業施工による周溝などへの影響の有無確認を目的としていた。

墳丘測量の結果からは、４号墳は直径20mほどの円墳と想定できた。しかし、東側に地形の高まりがあり、円墳と想定した部分と一体をなすように見えたため、これを前方部と見立てて前方後円墳と想定することも可能であった。

範囲確認調査は、墳丘の南東裾に５本のトレンチを設定して行った。その結果、４本のトレンチにおいて溝を検出した。この溝の一部は、円墳と想定した場合の周溝の一部と考えることができた。一方、これとは方向が異なり、前方後円墳の前方部と見立てた部分の裾に沿うような溝も検出した。そこで、これらの構造と関係を明らかにするために本調査を面的に行った。対象面積は130㎡であった。

本調査の当初は、周溝の検出と掘削を主におこなった。調査の結果からは、前述の方向の異なる２本の溝が切り合い、前後関係をもつことがわかった。この時点で、４号墳が円墳であり、また、前方後円墳の前方部と想定していた部分は新発見の別の古墳と認識することができた。この新発見の古墳が小金12号墳である。

12号墳の調査では、部分的にではあるが墓壙を検出することができた。掘削は、木棺の痕跡の検出と土層確認を主眼として行った。その結果、12号墳については埋葬施設を完掘することができた。なお、墓壙埋土の全てを篩がけして、微細な遺物の有無確認を行った。

## 第２節　墳丘の調査

### ①小金４号墳周溝

わずかではあるが、調査区内において確認することができた。

**形態**　周溝は地山を掘り込んで作られている。延長4.5m分を検出した。墳丘中心からみて外側の肩を検出することができたが、内側の肩は調査区外に出るため、幅は不明である。深さは、調査区内においては0.3mまで確認した。

**遺物出土状況**　出土遺物はなかった。

### ②小金４号墳墳丘

調査区内には４号墳墳丘の範囲は含まれなかった。前述のように、発掘調査前の墳丘測量の結果からは直径20mほどの円墳と想定できた。

**遺物出土状況**　出土遺物はないが、墳丘北側の谷で土師器の杯（第31図３）を表面採集している。

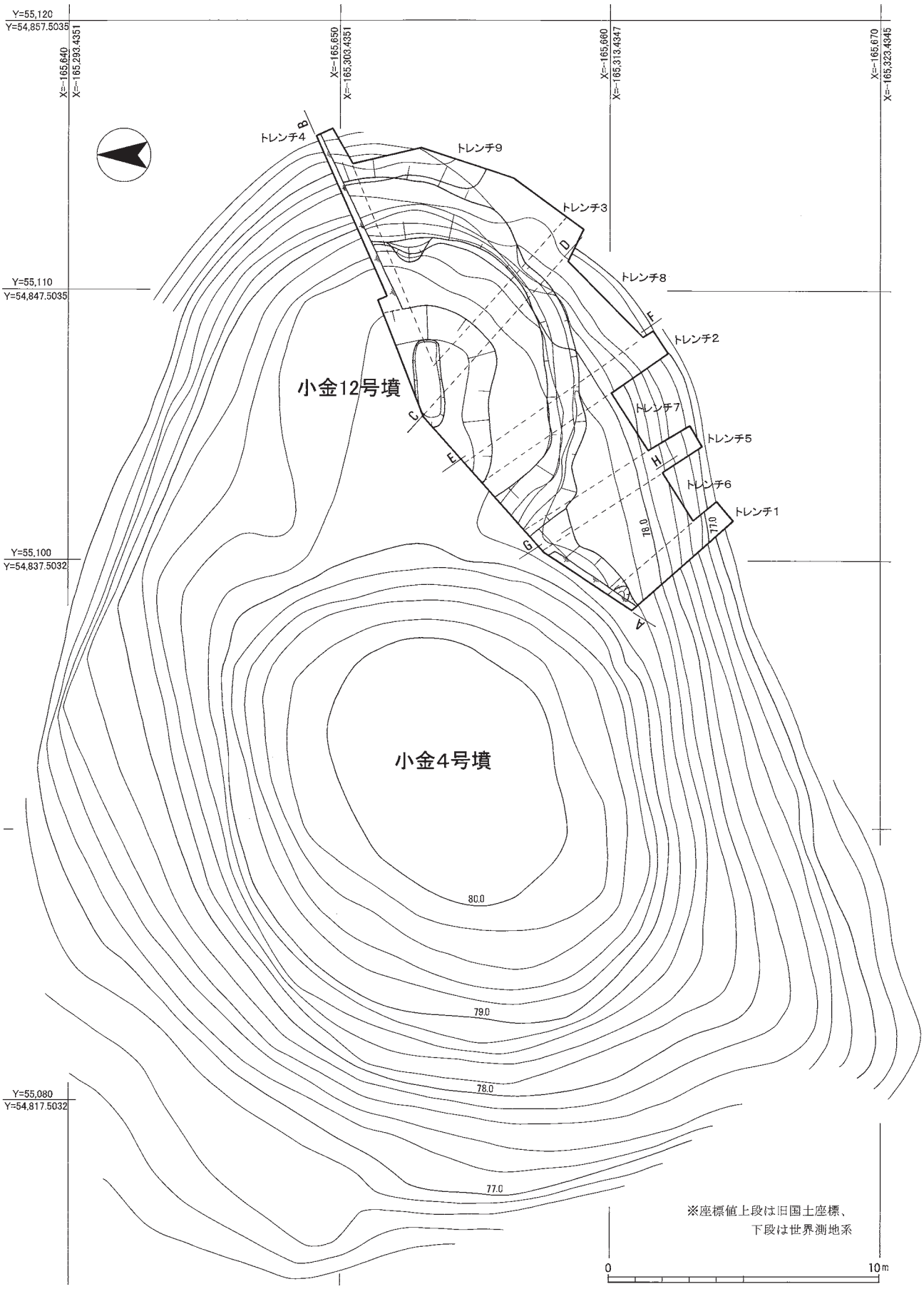
### ③小金12号墳周溝

**形態**　周溝は地山を掘り込んで作られている。調査区内においては、延長18m分を検出した。標高の低くなる東側では途切れるようにみえるが、土層断面観察からは少なくとも調査区内においては全周していることがわかる。幅は0.6～2.4mと一定しないが、内側肩のラインの形状は概ね円弧を描いているため円墳であることが読み取れる。周溝の芯心間で計測すると直径12mほどである。なお、周溝の深さは、0.15～0.35mである。

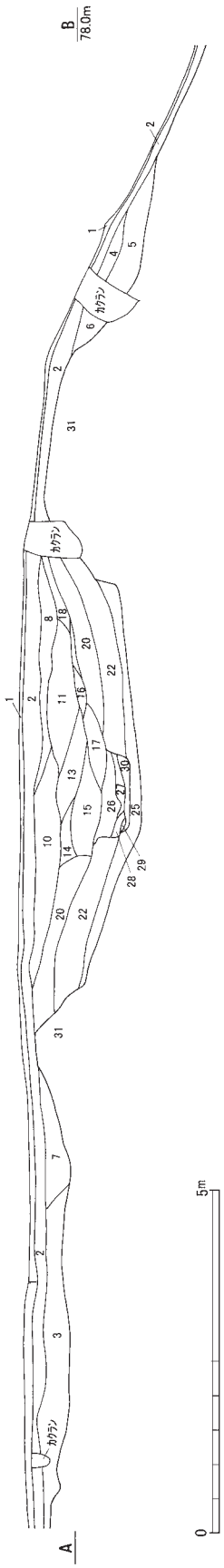
**遺物出土状況**　出土遺物はなかった。

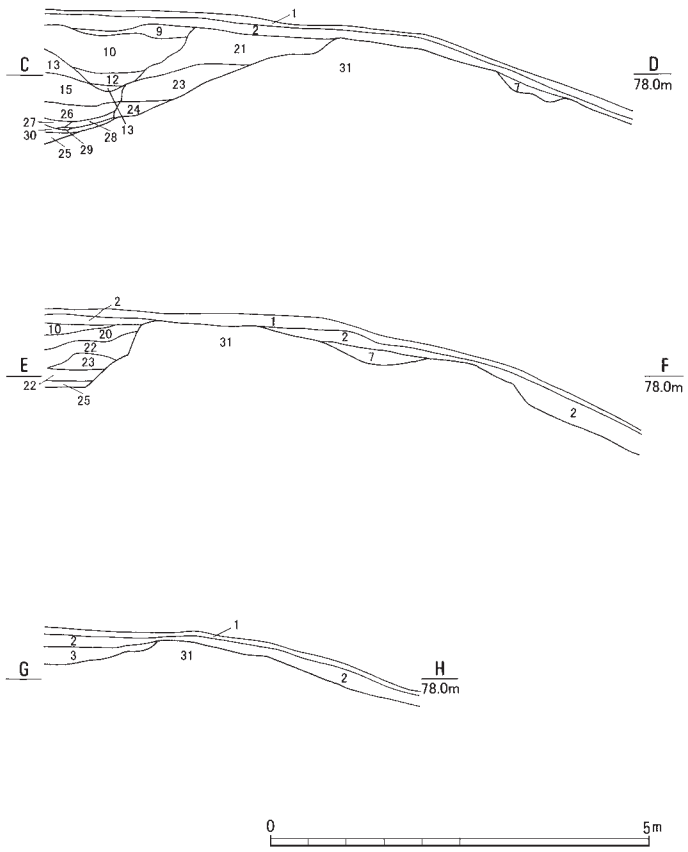
### ④小金12号墳墳丘

墳丘は、周溝の底から1.7mほどの高さが残っていた。墳丘上部が削平されているために地山の上層には盛土が観察できず、また、周溝の内側肩の標高より高い部分に地山はわずかしかないため、墳丘が



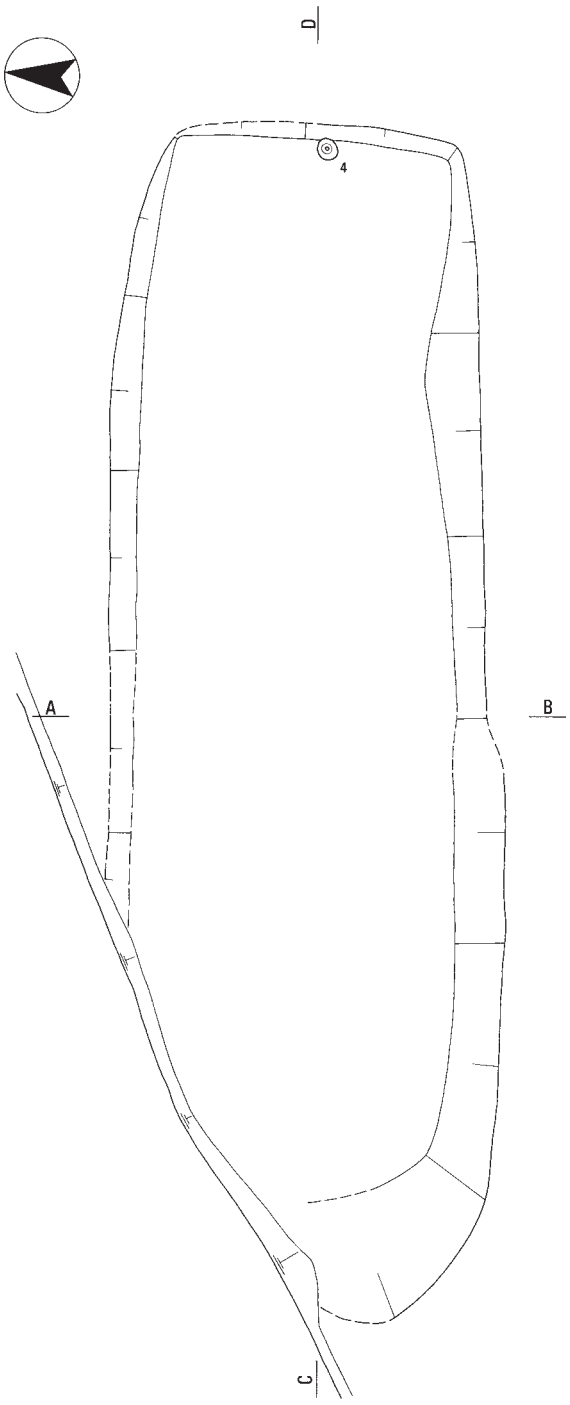

第 28 図　小金４・12 号墳墳丘および調査区平面図（1:200）

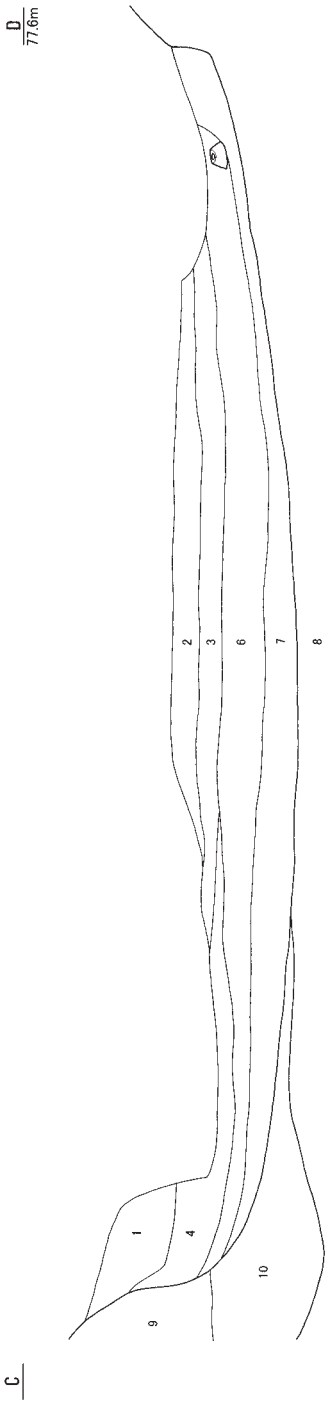



| | | | |
|---|---|---|---|
| | 1 | 表土 | |
| | 2 | 10YR7/8 | 黄褐色粘質土 |
| 4号墳周溝 | 3 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土 |
| 12号墳周溝 | 4 | 7.5YR5/6 | 明褐色砂質土 |
| | 5 | 7.5YR6/8 | 橙色砂質土 |
| | 6 | 5YR5/8 | 明赤褐色砂質土 |
| | 7 | 10YR4/4 | 褐色土に10YR4/2灰黄褐色土混じる |
| 墓壙 | 8 | 5YR7/8 | 橙色砂質土 |
| | 9 | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質土（炭化物混入） |
| | 10 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色粘質土（炭化物混入）黄橙色土が斑点状に少量混入、にぶい黄橙色砂がブロック状に混入 |
| | 11 | 7.5YR7/8 | 黄橙色砂質土 |
| | 12 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色粘質土（炭化物少量混入）にぶい黄褐色砂がブロック状に多く混入 |
| | 13 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色砂質土に明褐色粘質土がブロック状に混入 |
| | 14 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色粘質土に黄橙色砂質土がブロック状に少量混入 |
| | 15 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色粘質土に10YR7/8黄橙色砂質土がブロック状に混入 |
| | 16 | 10R5/8 | 赤色砂質土 |
| | 17 | 10R4/6 | 赤色砂質土 |
| | 18 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色土 |
| | 19 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| | 20 | 2.5YR4/8 | 赤褐色粘質土（砂粒混入） |
| | 21 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色土（やや砂質）炭化物・土器混入 |
| | 22 | 10YR5/6 | 黄褐色粘質土（炭化物・焼土混入） |
| | 23 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色土（やや粘質）炭化物混入、明褐色粘質土少量混入 |
| | 24 | 2.5Y5/3 | 黄褐色土（やや砂質）炭化物混入 |
| | 25 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色砂質土 |
| 埋葬施設 | 26 | 5YR6/8 | 橙色粘質土（黄橙色ブロック混入） |
| | 27 | 2.5YR5/8 | 明赤褐色砂質土、黄橙色砂質土 |
| | 28 | 2.5YR6/8 | 橙色粘質土 |
| | 29 | 7.5YR6/6 | 橙色粘質土（棺材か） |
| | 30 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質土 |
| 地山 | 31 | 10YR7/6 | 明黄褐色土（やや砂質）　10YR6/2灰黄褐色砂 |

第29図　小金４・12号墳調査区土層断面図（1:100）




1　5YR6/8　橙色粘質土（黄橙色ブロック混入）
2　2.5YR5/4　にぶい赤褐色砂質土
3　2.5YR6/8　橙色粘質土
4　2.5YR6/8　橙色粘質土（２が混入）
5　5YR5/8　明赤褐色砂質土
6　7.5YR6/6　橙色粘質土（紡錘車出土）
7　10YR4/2　灰黄褐色砂質土
8　10YR7/6　明黄褐色砂質土　・・・地山
9　10YR5/6　黄褐色粘質土
10　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土

0　1m

第 30 図　小金 12 号墳埋葬施設平面図・土層断面図（1:20）

盛土によって形成されているものか、地山削り出しによるものか判断ができなかった。

**遺物出土状況**　包含層掘削時に弥生土器の壺（第31図１）と高杯（第31図２）の小片がそれぞれ１点ずつ出土した。

## 第３節　小金12号墳埋葬施設の調査

12号墳の埋葬施設は、木棺直葬である。棺の長軸方向はN86°Ｅであり、ほぼ東西を向いている。墳丘中央部に墓壙が掘り込まれており、この墓壙内の東寄りに棺が設置された状況である。以下には、墓壙、棺、副葬品出土状況について各々記述する。

### ①墓壙

一部が調査区外に出るため、平面的には全体の５分の３ほどが検出できた。平面形はおおむね長方形であるが、角が多角になり、長辺が湾曲するなどやや不定形である。以上のことから推定値ではあるが、長軸長は７ｍ、短軸長は５ｍほどである。長軸方向は、ほぼ東西を向く。検出面からの深さは1.5ｍほどである。墓壙内の東に偏った位置に棺が設置されていた。

### ②棺

平面の規模は長軸長3.3ｍ、短軸長1.0ｍである。平面形と土層断面観察から箱形木棺による直葬であったと思われる。

### ③副葬品出土状況

滑石製の紡錘車（４）が１点出土した。出土位置は東側小口付近である。なお、全ての埋土を篩がけして微細な遺物の検出を試みたが、他の副葬品は出土しなかった。

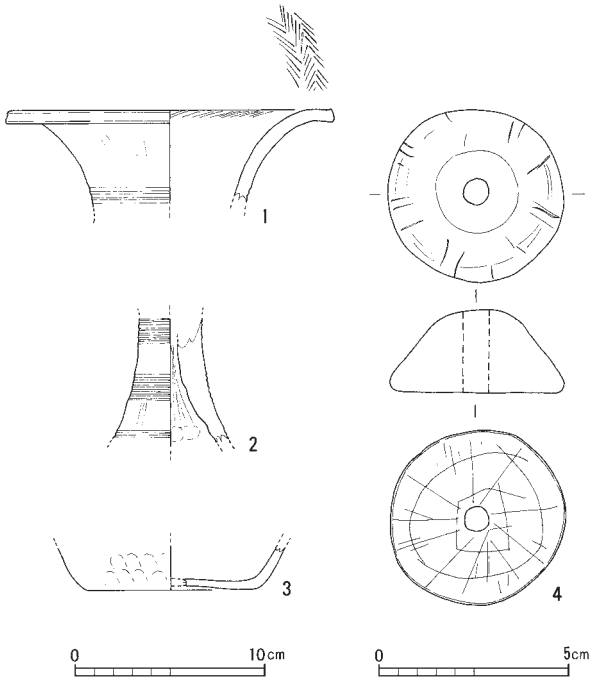
## 第４節　出土遺物

### ①小金４号墳墳丘周辺表面採集遺物（第31図３）

**土師器**（３）　３は土師器杯である。体部外面はオサエで、他はナデで調整されている。

### ②小金12号墳埋葬施設内出土遺物（第31図４）

**石製品**（４）　４は滑石製の紡錘車である。全体形は截頭円錐形で、頂部径が2.0cm、底部径が4.6cmである。厚さは2.2cmと厚手である。側面は上部と下部が区別できる。側面と底部には線刻による文様が施されている。側面の線刻は放射状である。15本程度の線刻が観察されるが、器面の摩滅により不明瞭である。また、同様に不明瞭ではあるが穿孔部分を中心とする同心円状の線刻が２条認められる。底部の線刻は、穿孔部分を中心とする放射状の線刻と同心の多角形との組み合わせによるもので、蜘蛛の巣状をなす。放射状の線刻は長いものが９本、短いものが９本程度認められるが、その他に傷と見分けのつかない短く不明瞭なものがある。穿孔部分を中心とする多角形は１重で、五角形である。なお、その始点と終点は一致していない。さらに、この多角形




第31図　小金４・12号墳出土遺物実測図
（1:4、４は1:2）

の外側には穿孔部分を中心とする円状の線刻が１条ある。これは、円弧を２条つないで円状にしたものであるが、その２接点は一致していない。

### ③小金12号墳墳丘周辺出土遺物（第31図１・２）

**弥生土器**（１・２）　１は広口壺である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部はほとんど拡張しないものの面を持つ。口縁部内面には櫛状工具による羽状文が施されている。器壁の摩滅が著しいために不明瞭であるが、羽状文は２段と思われる。頸部には櫛描直線文が施されている。

２は高杯である。おそらく杯部に屈曲部をもつ有稜高杯であろう。脚部外面はタテミガキの後に、櫛描直線文が施されている。櫛描直線文は３段認められる。

## 第５節　小結

### ①小金４号墳

４号墳は直径20mほどの円墳と推定できる。出土遺物に恵まれず、築造時期は不明である。周溝の切り合い関係から判断すると、12号墳に先行する。

### ②小金12号墳

12号墳は直径12mほどの円墳である。埋葬施設から滑石製紡錘車が出土しており、決め手には欠くがその形状と線刻文様から築造時期は６世紀後半から末ではないかと考えられる。築造された位置は４号墳の東側に接しており、周溝を共有するような位置関係にある。しかし、切り合い関係から判断すると４号墳が先行し、その周溝が埋没した後に改めて12号墳の周溝が掘削されているようである。

埋葬施設については、墓壙の底に棺を設置していることがわかった。

副葬品については紡錘車が１点のみであった。

### ③小金12号墳出土の紡錘車

三重県内出土の紡錘車については、國下多美樹氏の分類[1]（以下、國下分類）を援用した河北秀実氏の論考[2]がある。ここではこれに基づき考察したい。

**形態**　前述のように截頭円錐形で、厚さ2.2cmと厚手であり、側面は上部と下部が区別できる。また、側面の傾斜角は50°ほどである。これは國下分類によるとＩｃ類[3]に相当する。

**線刻文様**　前述のように、側面と底部には線刻による文様が観察される。特に底部については、蜘蛛の巣状文[4]となっている。三重県内でこの文様をもつものは他にも知られており、岩出地区内遺跡群ケカノ辻・角垣内地区出土のもの[5]（以下、岩出例）、中尾垣内遺跡出土のもの[6]（以下、中尾垣内例）、北野遺跡出土のもの[7]（以下、北野例）がある。形態は、岩出例がＩｃ類、中尾垣内例と北野例はＩｂ類[8]である。いずれも滑石製である。

まず、岩出例をみてみる。底部の蜘蛛の巣状文は、50本ほどの放射状の線刻と、穿孔部分を同心とする４重の七または八角形の線刻、さらにその外側の円弧の線刻１条で構成される。線刻を仔細に観察すると、放射状の線刻の後に多角形の線刻を施していることがわかる。なお、全ての放射状線刻のうち、その延長が中心の穿孔部分を通過するものの占める割合を同心率として計測した。その結果、本例は90％であった。

中尾垣内例は底部文様面が一部欠損するために推定であるが、20数本ほどと思われる放射状の線刻と、１重の六または七角形の線刻で構成される。放射状の線刻は多角形の線刻の外側を始点としている。放射状線刻の同心率は55％ほどである。

北野例は９本の放射状線刻と、１重の五角形のみで構成される。放射状線刻は９本全てが穿孔部分の外縁に接しており、同心率は100％である。

これらの比較から、３者には共通する要素が認められる一方、線刻本数において大きな開きがあり、線刻の精密さにおいても開きが認められる。以上をみれば、岩出例が他の２例に先行するものと解することができる。

では、小金12号墳出土のもの（以下、小金例）をみてみよう。放射状の線刻は長短あわせて20本ほどと、中尾垣内例に近い。また、最外周に円弧を描く要素は岩出例と共通する。しかし一方、北野例と同

様に多角形が１重の五角となり省略化が窺える。また、多角形と円弧のそれぞれの終始点が一致しないことや、放射状の線刻の間隔や方向が一定でなく同心率が57％と低いことなどは、粗雑化が進行したものと思われる。以上のことから、小金例は４例のうち最も後出するものと考えられる。

**所属時期**　河北氏によれば、三重県内の石製Ｉｂ類の所属時期は５世紀末から６世紀後半、石製Ｉｃ類は６世紀初頭から７世紀前半とみられ、また、線刻文様を有するものは６世紀代と思われるとのことである。そこで、この前提に立って前出の４例を検討してみる。

岩出例は中世墓の可能性がある土坑からの出土であり、調査区内の古墳から混入した遺物と思われる。付近の２基の古墳のうち１基からはＴＫ47型式[9]に併行する須恵器が出土している。中尾垣内例の出土遺構は中世に所属すると思われる溝である[10]。同一調査区内に古墳時代の遺物を求めると、ＴＫ43型式併行の須恵器がある。北野例は報告書によれば弥生時代後期の竪穴住居出土となっているが、形態は古墳時代後期のものである。同一調査区内で該当の時期を求めることは困難である。

以上のことからあえて推測すると、岩出例と中尾垣内例をおおよそ６世紀初頭と後半のものとし、小金例を６世紀後半から末ごろのものとすることができるのではないか。

**註**

1）　國下多美樹「京都府下の紡錘車について」『京都考古』第50号　京都考古刊行会　1988

2）　河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie history』vol. 3　三重歴史文化研究会　1991

3）　註１）文献。Ｉｃ類は、断面形態が「截頭円錐形あるいは台形状を呈するもの」のうち、「全体に厚手（厚さ16㎜以上）で側面上部・中央部と下部の境が稜をもって明瞭に区別されるもの、側面傾斜角50°以上」とされている。

4）　註２）文献。放射状の線と同心の多角形の組み合わせによる文様をこのように呼称している。

5）　註２）文献では「蚊山遺跡出土」とされているもの。三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』　1996

6）　註２）文献では「中尾東遺跡出土」とされているもの。嬉野町教育委員会『中尾垣内遺跡発掘調査報告』　1990

7）　三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡（第２・３・４次）発掘調査報告』　1995

8）　註１）文献。Ｉｂ類は、断面形態が「截頭円錐形あるいは台形状を呈するもの」のうち、「全体に扁平（厚さ16㎜未満）で側面で匙面取り状に浅く凹ませるもの、平滑な面をもつもの（ｂ）と丸味を帯びるもの（ｂ’）がある、側面傾斜角50°未満」とされている。

9）　須恵器の編年については、田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981による。以下同様。

10）　発掘調査担当者の和氣清章氏（松阪市教育委員会）のご教示による。

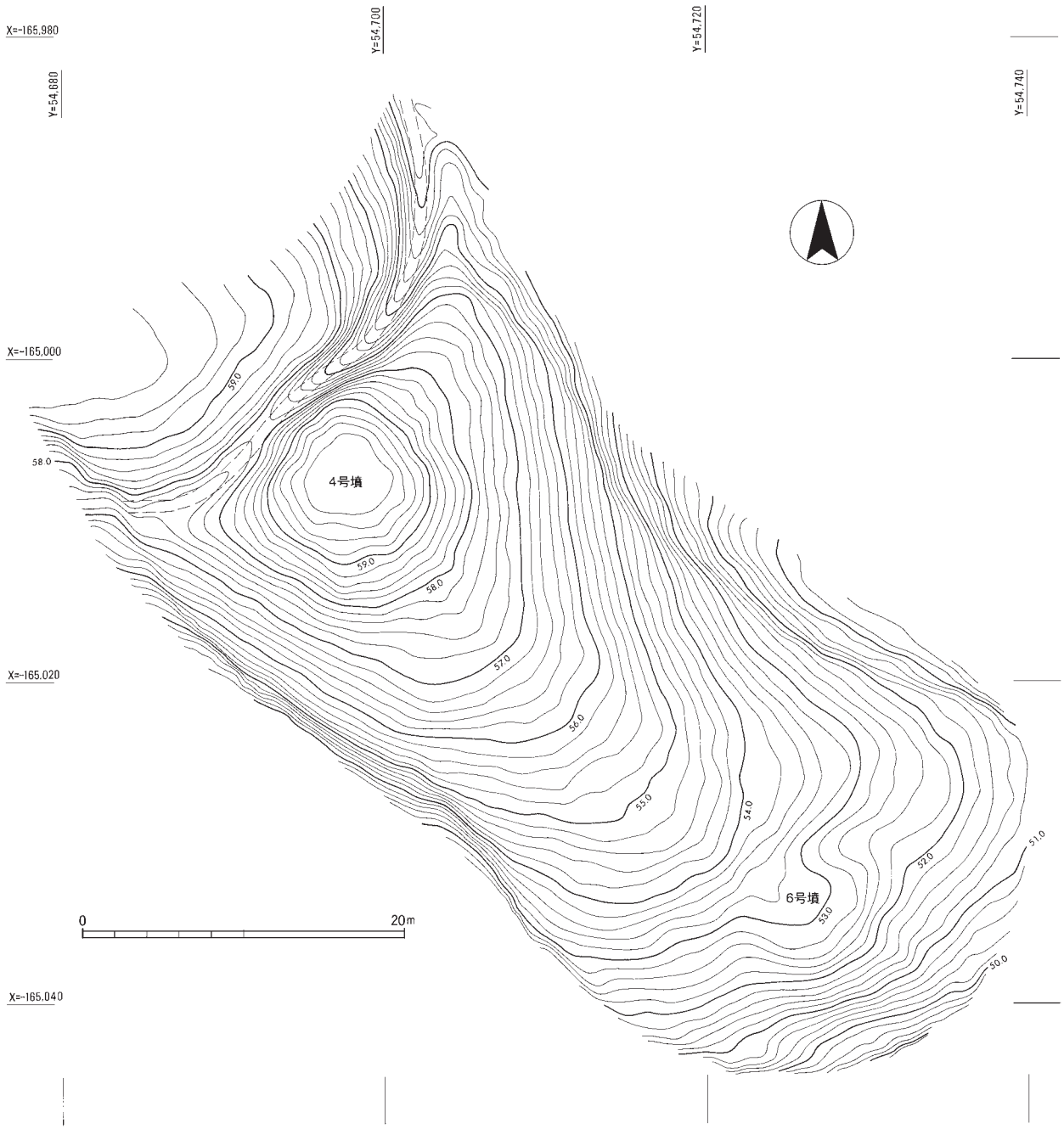
# 第Ⅵ章　高塚４号墳の調査

## 第１節　調査の方法

高塚４号墳は、平成17年度の分布調査によって新たに確認された古墳である。尾根上に高塚４・５・６号墳の計３基の古墳が隣接して存在する可能性が考えられた。

平成19年度には、本調査に先立って範囲確認調査を行い、周溝の有無などを確認した。高塚４・５・６号墳の３基を縦断する形で調査坑を設け、また、４号墳にはそれと直交する形で調査坑を設けた。

その結果、４号墳では２箇所の調査坑で周溝の存在が確認できた。また、周溝内から須恵器が出土し




第 32 図　高塚４・６号墳調査前地形測量図（1:400）

たことにより、古墳時代後期から終末期にかけての古墳であることが確実視されることとなった。

この古墳は事業計画地内に含まれており、また事業計画上、破壊は免れなかったため、平成20年度に墳丘及び埋葬施設の調査を行うこととなった。

調査前にはラジコンヘリコプターを用いた空測によって墳丘及び周辺の地形測量を行い、その結果、不明瞭ながらも方墳である可能性が強まった（第32図）。また、墳丘がかなり高く遺存していることが確認されたが、墳丘規模などからみて埋葬施設は木棺直葬であることが推定された。

**掘削作業**　発掘調査に際しては、まず、墳丘及びその周辺の表土と流出土の除去を行った。この作業についてはすべて人力で行い、また、４×４ｍのグリッドを設定して掘削作業中に出土した遺物はそのグリッドごとに取り上げた。

なお、高塚４号墳と高塚６号墳との間に高塚５号墳の存在が想定されていたが、表土掘削を行った結果、遺構は全く認められず、自然地形であることが判明した[1)]。

表土・流土を除去した段階で、周溝が明瞭に確認されたため、埋土の堆積状況を確認しながら順次内部の掘削を行っていった。墳丘西側については山道によって周溝が存在したと思われる部分が大きく削平を受けていたことから、当初は周溝の遺存は想定していなかったものの、山道より更に西側で周溝の一部が遺存していることが確認された。

周溝の全形を検出するに至って、高塚４号墳が方墳であることが確定的となった。墳丘上の表土や流土を除去したことによって墳丘の形態もより明瞭になったため、その段階で再度ラジコンヘリコプターを用いた空測による地形測量を行い、墳丘の測量図を作成した。

**埋葬施設の調査**　その後、埋葬施設の数や位置を確認するために、範囲確認調査時の調査坑を徐々に掘り下げていった。しかしながら、調査坑内での埋葬施設の確認はかなり難航し、そのため最終的に調査坑を地山まで掘り下げてしまい、墳丘を十字に断ち割ったような状況になってしまった。

結局、そのような状況になっても埋葬施設を確認することができなかったため、調査坑壁面の精査を再度行って埋葬施設を確認しようと試みた。しかしながら、それでもなお明確に埋葬施設と判断できるものを捉えきれなかったため[2)]、墳頂部から面的に掘り下げを行い、もう一度平面での埋葬施設の検出を試みた。

その結果、墳頂部から１ｍほど掘り下げた段階で副葬品の須恵器及び埋葬施設を確認することができた。埋葬施設は墓壙を掘らずに盛土中に木棺を埋め込んだもので、埋葬施設確認のために掘り下げた調査坑によって２箇所で分断されていた。検出できた段階では、大半の部分を既に棺底付近まで掘り下げてしまっていたが、木棺の東側小口付近は面的に掘り下げた範囲の外にのびていたため、その部分では精査の結果、やや高い位置で木棺の痕跡を検出することができた。

埋葬施設調査後には、埋葬施設を周囲の盛土ごと断ち割り、埋葬施設と墳丘盛土との関係についての調査を行っている。

**遺構実測**　遺構掘削が完了した後に、遺構平面図の作成を行った。周溝については、３ｍ間隔の実測用基準点を設けて平面図の作成を行ったが、埋葬施設については別に設置した基準点を元に実測を行っている。

**註**

1）　高塚５号墳が想定されていた箇所からも遺物が少数出土しているが、これらについては本章第４節で高塚４号墳の墳丘周辺出土遺物として報告している。

2）　最終的に埋葬施設を検出した結果、土層断面の検討では動物の巣穴などの撹乱と考えていた締まりのないボソボソの土層が棺内埋土であったことが判明した。

## 第２節　墳丘の調査

### ①周溝

**形態**　墳丘の周囲からは、周溝が検出された。周溝は地山を掘り込んで作られている。

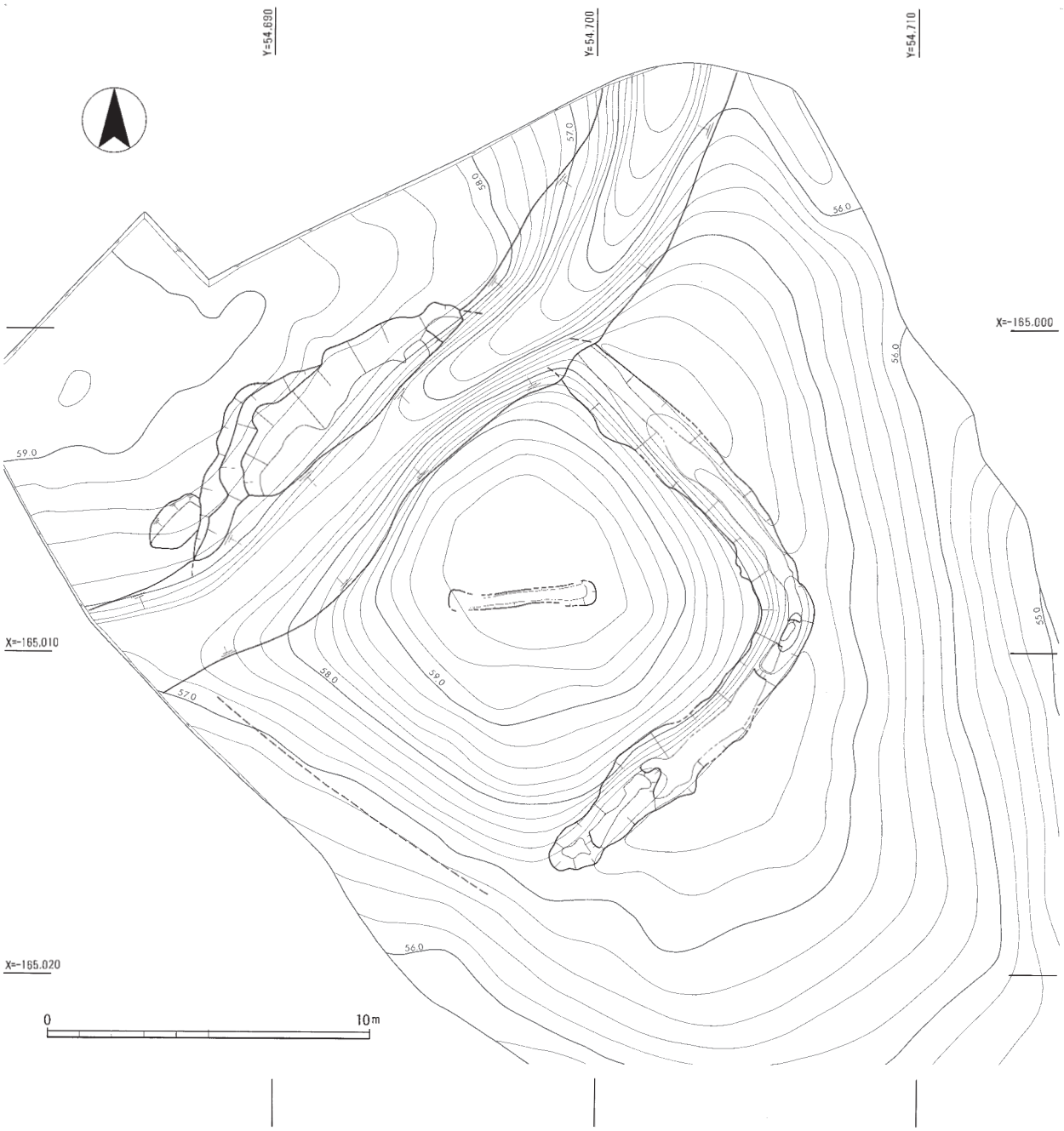
周溝は山道によって削平を受けた西側についても部分的に遺存していたが、墳丘南側については大き

な削平を被っているとは考えにくいにも関わらず、周溝が認められない。精査を行ったが、大きな地山の整形痕跡なども認められなかった。ただし、土層断面でみると、盛土の端あたりで旧表土が途切れ（第34図40層）、地山にも若干の整形らしい痕跡が認められるため（第34図41層）、この部分がほぼ墳端にあたると思われる。墳丘の南側は地形的に最も低い部分にあたっており、この部分には元々周溝が掘られていなかったものと考えられる。

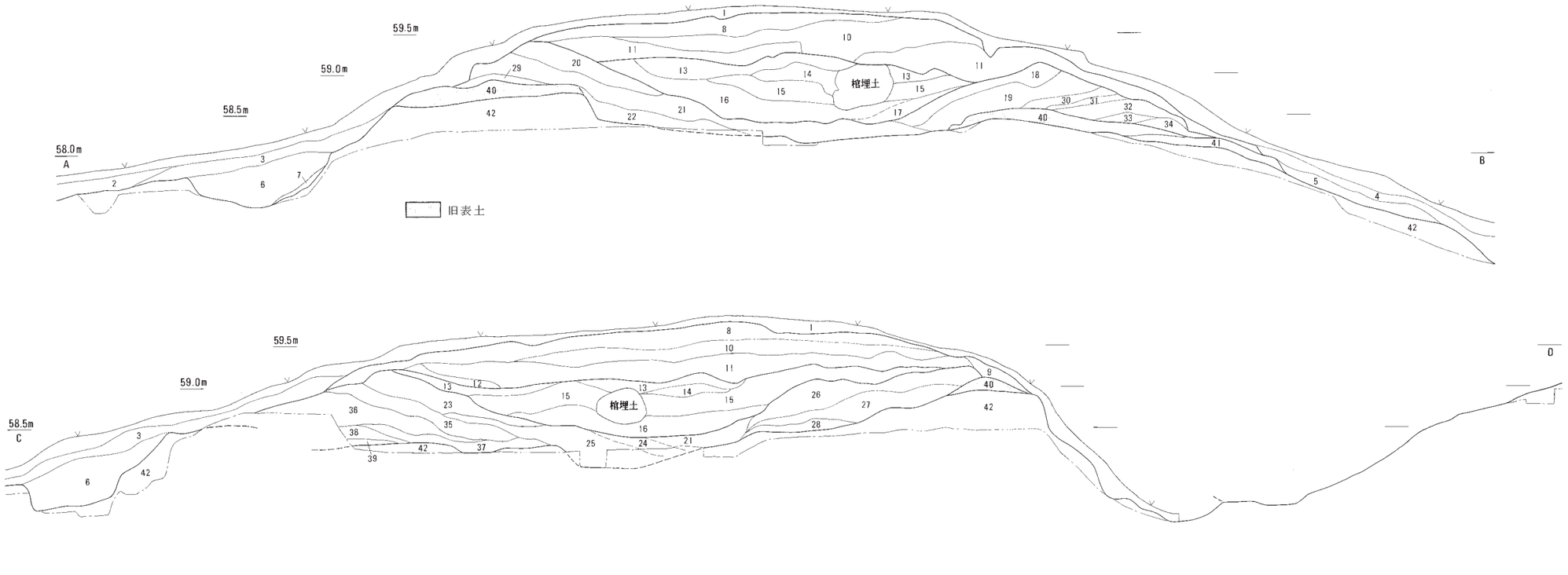
周溝は明瞭にコの字状の平面形をなしており、高塚４号墳は確実に方墳として造られたことが窺われる。墳丘は一辺約15mほどの規模であると考えられる[1)]。

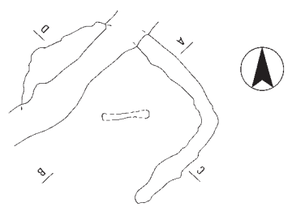
周溝は西側の地形が高くなっている側では特に深く掘り込まれており、最大で深さ0.9mほどを測る。墳丘南側に向かって地形が低くなっていくため、周溝底のレベルは大きく変わらないものの、墳丘東側の周溝は南へ行くにつれてやや浅くなる。

**遺物出土状況**　周溝内からは土師器の杯１点と、須恵器の蓋１点、無蓋高杯２点が出土している（第38




第 33 図　高塚４号墳墳丘平面図（1:200）




1　表土
2　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂
3　5YR5/6明褐色シルト～中粒砂
4　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂
5　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂
6　7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。やや砂質。礫（～20cm）を含む〔**周溝埋土**〕
7　7.5YR4/6褐色極細粒砂～細粒砂〔**周溝埋土**〕
8　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂〔**墳丘盛土**〕
9　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂〔**墳丘盛土？**〕
10　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～極細粒砂ブロックを少量含む〔**墳丘盛土**〕
11　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～極細粒砂ブロックを多く含む〔**墳丘盛土**〕
12　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。10YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂ブロックを少量含む〔**墳丘盛土**〕
13　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR3/2黒褐色シルト～極細粒砂ブロックをごく少量含む〔**墳丘盛土**〕
14　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～細粒砂。砂質〔**墳丘盛土**〕
15　7.5YR6/2灰褐色極細粒砂～細粒砂。砂質〔**墳丘盛土**〕
16　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）を３～５％含む〔**墳丘盛土**〕
17　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～細粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂が斑状に混じり合う。7.5YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～２cm）を３～５％含む。やや粘質〔**墳丘盛土**〕
18　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂〔**墳丘盛土**〕
19　7.5YR5/8灰褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR6/2灰褐色シルト～細粒砂を含む〔**墳丘盛土**〕
20　5YR5/8赤褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～中粒砂ブロックを少量含む〔**墳丘盛土**〕
21　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂と7.5YR5/6明褐色極細粒砂～細粒砂が斑状に混じり合う。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～３cm）を１～３％、7.5YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～２cm）を１～３％含む。礫（３～10cm）をごく少量含む〔**墳丘盛土**〕
22　5YR4/6赤褐色極細粒砂～中粒砂。10YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロックを少量含む〔**墳丘盛土**〕
23　5YR5/6明赤褐色細粒砂～極細粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロックをごく少量含む。礫（～５cm）を５～10％含む〔**墳丘盛土**〕
24　7.5YR5/6明褐色細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～2.5cm）を１～３％、7.5YR3/3暗褐色シルトブロック（～１cm）を少量含む。礫（１～３cm）を少量含む〔**墳丘盛土**〕
25　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロック（５cm～）を10～30％含む。礫（３～５cm）を１％含む〔**墳丘盛土**〕
26　5YR5/8赤褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～中粒砂ブロックを少量含む〔**墳丘盛土**〕
27　7.5YR4/4褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～細粒砂ブロックを多く含む〔**墳丘盛土**〕
28　7.5YR4/4褐色極細粒砂～中粒砂。10YR2/1黒色シルト～細粒砂ブロックを１％含む〔**墳丘盛土**〕
29　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。砂質〔**墳丘盛土**〕
30　7.5YR6/2灰褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔**墳丘盛土**〕
31　7.5YR5/8明褐色シルト～細粒砂。やや粘質〔**墳丘盛土**〕
32　7.5YR6/2灰褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔**墳丘盛土**〕
33　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。やや粘質〔**墳丘盛土**〕
34　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂〔**墳丘盛土**〕
35　5YR5/8明赤褐色中粒砂～極粗粒砂。白色鉱物粒多く含む。砂質。〔**墳丘盛土**〕
36　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂を含む〔**墳丘盛土**〕
37　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（５cm～）を10～30％、礫（３～５cm）を１％含む〔**墳丘盛土**〕
38　5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂。粘質〔**墳丘盛土**〕
39　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂と7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂が層状に混じり合う〔**墳丘盛土**〕
40　10YR2/1黒色シルト～細粒砂。粘質〔**旧表土**〕
41　7.5YR4/4褐色極細粒砂～中粒砂〔**旧表土**〕
42　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～細粒砂。砂質。締まり強い〔**地山**〕

第 34 図　高塚４号墳墳丘土層断面図（1:60）

図１～４）。

これらの土器類は、いずれも破片化した状態で北側周溝内から集中的に検出された。須恵器片の多くは周溝内の中層以下から出土していることと、墳丘の遺存状況がよいにもかかわらず墳丘上では須恵器片の出土が認められなかったことから、もともと周溝内に置かれていたものと推定される[2)]。

また、墳丘裾部の西側コーナー付近では土師器の細片が数点出土している。山道によって削平を受けた部分に近く、また時期や器形も特定できないため、高塚４号墳に伴う遺物かどうかは不明であるが、位置関係からみて削平された西側周溝内に存在した遺物である可能性も考えられる。

## ②墳丘

高塚４号墳は調査の結果、盛土の遺存状況が非常によいことが判明した。墳丘は周溝底から2.5mほどの高さが遺存しており、この墳丘の大部分が盛土によって形成されていた。

**整地**　盛土の最下部には一部で旧表土の遺存が確認できたが（第34図40層）、墳丘の中央部分においてはこの旧表土上面から地山を掘り込んだ、掘り込みの存在が認められた（第34図）。

この掘り込みの深さは0.6～0.9mほどである。全体を検出していないため、どのくらいの規模の掘り込みであるかは判然としないが、ほぼ墳頂部の平坦面に近い範囲で掘り込みが行われていると思われる。掘り込みの壁の立ち上がりは全体的に緩やかであるが、一部ではかなり急な角度で立ち上がる。床面は凹凸が激しい。

なお、元々の地形が他の部分に比べて低い南側では深い掘り込みが入れられなかったようで、この部分のみはほとんど掘り込みが認められない。

地山を平坦に整地するのではなく、掘り込みを設けている理由は不明であるが、これによって後述の第１段階盛土によって生じる墓壙状の窪地を作りやすくする、あるいはより深くすることが意図されたのかもしれない。

**盛土**　盛土は大きく４段階の工程に区分される。

**〔第１段階〕**　第１段階の盛土は、地山を掘り込んだ部分に流し込まれるように周囲から入れられている盛土である（第34図18～39層）。外側では土手状に高く盛られており、結果として墳丘の中央部分に墓壙状の浅い皿状の窪地が生じている。地山に深い掘り込みを入れることができなかった墳丘南側では、代わりに旧表土上に土手状に盛土を盛りあげて土留め状にした上で、更に盛土を流し込んでいる（第34図30～34層）。

この段階の盛土に使用された土は大きな地山ブロックを多量に含み、地山に含まれる礫が多量に混じる土層も認められる。地山ブロック以外にも、西側部分では旧表土に由来する黒褐色土ブロックを多量に含む。また、北側から東側にかけての部分では、旧表土ではなく、植物質のものに由来すると思われる暗褐色のブロックを多く含んでいる[3)]。周溝の掘削や、墳丘下の地山への掘り込みによって生じた土を利用した可能性が考えられる。

**〔第２段階〕**　第２段階の盛土は、第１段階盛土によって生じた墳丘中央部分の窪地の底部分を中心として、木棺を置くために整地するように施された盛土である（第34図16・17層）。この盛土の上面に木棺が置かれている。

この段階の盛土は、第１段階の盛土にくらべて大きな黒褐色土ブロックや礫などを含まない、比較的均質な土で構成されている。

**〔第３段階〕**　第３段階の盛土は、木棺を設置した後に、その周囲に流し込まれるように施されている盛土である（第34図13～15層）。平面における検出作業では明瞭な面の存在は認識できなかったが、この段階で墳丘構築が一旦休止され、埋葬やそれに伴う儀礼が行われたものと考えられる。

なお、木棺の周囲のみでなく、第１段階盛土によって生じた窪地全体を埋めるように土が施されており、木棺の裏込め土という機能とともに、墳丘盛土の一部としての意識もあったものと推測される。

この段階の盛土は、第２段階盛土と同様に大きな黒褐色土ブロックや礫などを含まない、比較的均質な土で構成されている。

**〔第４段階〕**　第４段階盛土は木棺上面を覆い、墳丘の中位以上を構成する盛土である（第34図８～12層）。第１段階盛土によって生じた窪地をすべて埋め、さらにその外側まで広がる。実質的に、この段

階の盛土を施すことによって墳丘が整形されているものと考えられる。

この段階の盛土は、第２・３段階の盛土にくらべるとやや大きな単位で盛られている。用いられている土は比較的均質であるが、部分的に礫が含まれている。

高塚４号墳の墳丘は、以上の４段階の工程によって構築されているが、周溝内には墳丘からの流出土と考えられる土が流れ込んでおり、本来的には第４段階の盛土がもう少し高く盛られていたものと考えられる。

註

1） 周溝の芯心間で計測した数値である。

2） ただし、須恵器の破片の一部は、周溝付近の表土・包含層掘削中にも出土している。破片の一部が周溝埋土上層に含まれていた可能性がある。

3） この暗褐色ブロックは質感が腐植土に近く、砂粒を含まない。調査時には、旧表土というよりは古墳築造当時に地表面に存在したあまり腐食の進んでいない落ち葉ないしは腐植土に由来するものである印象を受けた。

## 第３節　埋葬施設の調査

埋葬施設は、木棺直葬である。主軸方向はN84°Eと、ほぼ東西の正方位を意識して埋葬されている。

木棺の設置に当たっては、盛土の記述でも触れているように、掘り込み墓壙に木棺を入れる方式ではなく、墳丘の構築途中で木棺を安置し、引き続き盛土を積み上げて墳丘を構築していく方式がとられていた。一応、地山を掘り込んだ上で盛土を墳丘外縁に沿って土手状に盛ることによって墓壙状の浅い皿状の窪地を作っているが、この窪地は墓壙として整備されたものではなく、盛土を盛っていく上での土留めとしての役割など墳丘構築との関わりが大きいものと思われる。したがって、明確な墓壙は存在しないといえる[1)]。

以下、棺と副葬品出土状況とに分けてやや詳しく述べていきたい。

### ①棺

棺は外法で長さ3.6m以上、幅0.7mの木棺である。長さに対して幅がかなり狭く、細長い印象を受ける。

棺の形態は、法量からみれば刳抜式木棺とも考えられるが、東側小口の形態などからみれば、箱形木棺であった可能性の方が高いと思われる。この東側小口部分はほぼ棺上面で検出できており、一部では棺蓋と思われる痕跡も確認できた。これからみれば木棺の高さは0.5〜0.6mほどあったと推定される。

西側小口部分には、棺の幅とほぼ一致する範囲で赤褐色土の分布が認められた（第35図８層）。これは、棺小口外側に置かれた土である可能性が考えられるが、特に粘性が高い土ではなく、周辺の盛土とほぼ同じ質の土である。また、土層断面からみても棺の小口を押さえるために当てられたような状況は認めがたい。上層の盛土が一部棺内へ流入した可能性も考えられるが、調査坑によって木棺西小口付近を破壊してしまったために確認することができなかった。

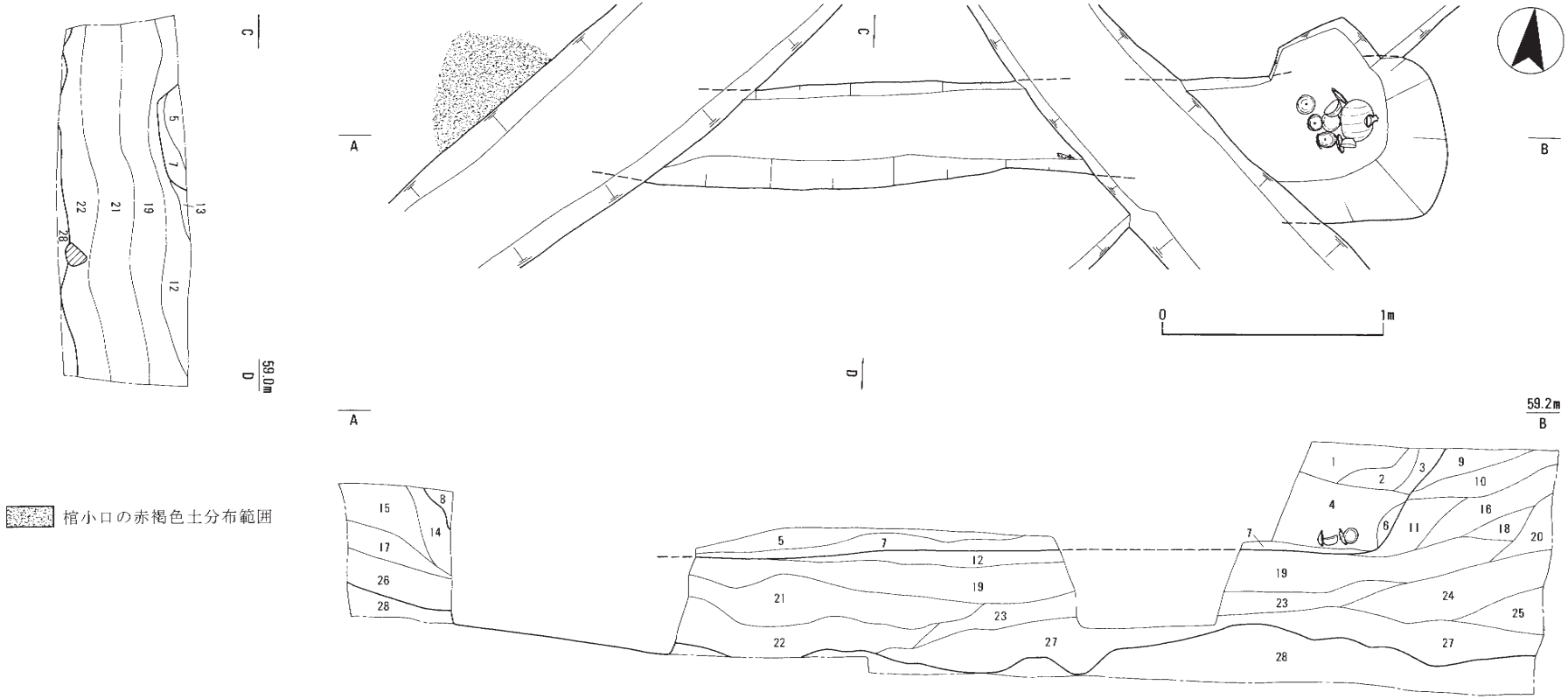
棺底の高さは東側でやや高く、棺幅も東側でやや広くなる。したがって、被葬者の頭位方向は東であると考えられる。

棺内には、均質であるが締まりが弱くボソボソの明褐色土が堆積していた。棺上面の盛土が棺の腐朽に伴う陥没によって棺内に落ち込んだ様子は認められなかった。周囲の盛土がやや粘質である上に木棺の幅が狭かったため、木棺が腐朽しても棺の形状を保った空間が維持され、そこへ徐々に砂質土が流れ込んできたものと考えられる。

棺材自体は完全に腐朽しており遺存していなかったが、一部に棺材の痕跡と考えられる土層も認められた。第35図３・６・７層であるが、このうち７層の上面では須恵器や鉄製刀子などの副葬品が検出されており、この土層が木棺底板の痕跡である可能性が高い。

### ②副葬品出土状況

副葬品としては、須恵器が複数個体、棺内東小口部分からまとまって検出された。副葬されていた須恵器は、横瓶１点と蓋杯のセットが６組である（第




1　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂〔**棺内埋土**〕
2　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～細粒砂ブロックを５～10%、7.5YR5/3にぶい褐色シルトブロック（～0. 5cm）を少量含む〔**棺内埋土**〕
3　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂〔**棺痕跡？**〕
4　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。締まり弱い〔**棺内埋土**〕
5　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR5/3にぶい褐色シルトブロック（～0.5cm）を少量含む。締まり弱い〔**棺内埋土**〕
6　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１cm）を少量含む〔**棺内埋土もしくは棺痕跡？**〕
7　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂〔**棺痕跡もしくは棺設置時の整地土？**〕
8　5YR4/8赤褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR3/2黒褐色シルト～極細粒砂ブロック（１cm）を５～10%含む〔**棺小口置き土？**〕
9　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。砂質
10　7.5YR5/8明褐色極細粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂を斑状に、7.5YR3/3暗褐色シルトブロック（～0.5cm）を少量含む
11　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１cm）をごく少量含む
12　7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂。7.5YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロック（～１cm）を少量含む
13　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/6明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１cm）と7.5YR2/2黒褐色シルト～細粒砂ブロック（１cm）を少量含む
14　7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂ブロック（１cm）を少量含む。砂質
15　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR3/2黒褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）を３%含む
16　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～2.5cm）を１～３%、7.5YR3/3暗褐色シルトブロック（～１cm）を少量含む
17　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。7.5YR3/2黒褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5cm）を少量含む。やや粘質
18　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂
19　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）を３～５%含む
20　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂。5YR4/8赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）と7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）をごく少量含む
21　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～細粒砂と5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂が斑状に混じり合う。7.5YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～２cm）を３～５%含む。やや粘質
22　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂と7.5YR5/6明褐色極細粒砂～細粒砂が斑状に混じり合う。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～３cm）を１～３%、7.5YR3/4暗褐色シルト～細粒砂ブロック（0.5～２cm）を１～３%含む。礫（３～10cm）をごく少量含む
23　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～2.5cm）を１～３%、7.5YR3/3暗褐色シルトブロック（～１cm）を少量含む。礫（１～３cm）を少量含む
24　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂を斑状に１～３%、7.5YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂ブロック（１cm）を１%含む。やや粘質
25　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂を斑状に１～３%含む。やや粘質
26　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。7.5YR3/2黒褐色シルト～細粒砂を斑状に30%以上、5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）を少量含む。粘質
27　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。7.5YR3/3暗褐色シルト～細粒砂ブロック（５cm～）を10～30%含む。礫（３～５cm）を１%含む
28　7.5YR5/8極細粒砂～中粒砂。礫（３cm～）を少量含む。〔**地山**〕

**第35図　高塚４号墳埋葬施設平面図・土層断面図（1:30）**

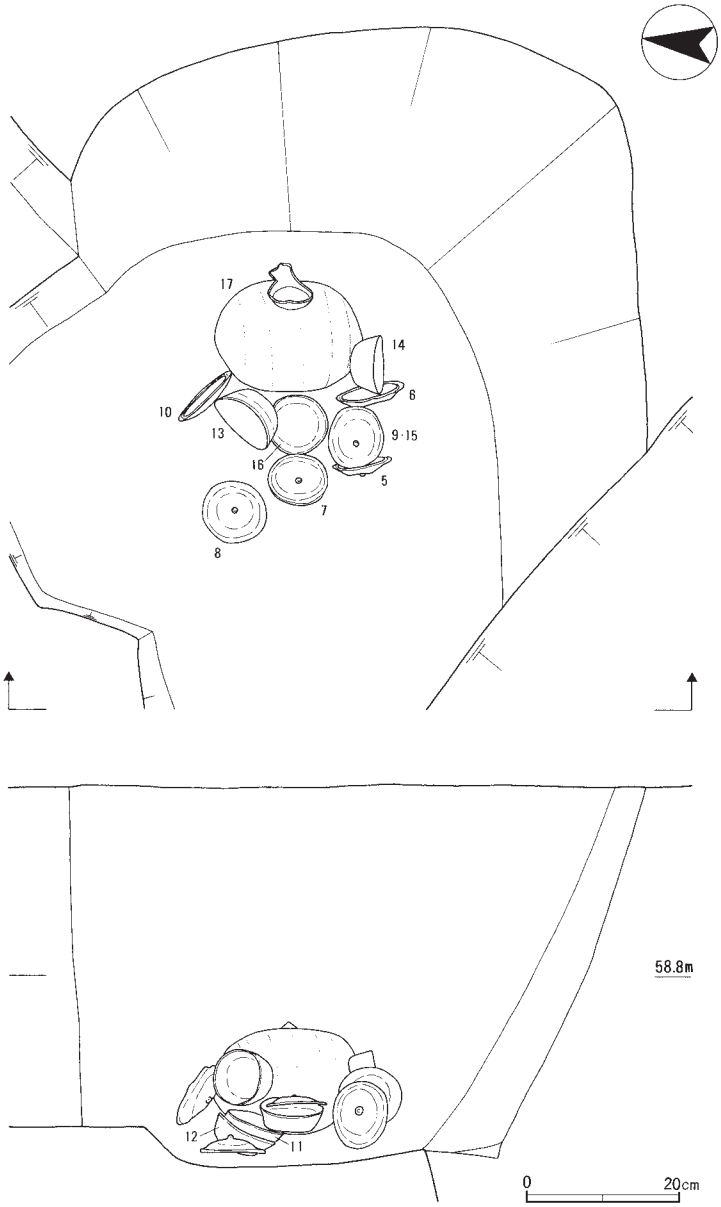
36図)。

蓋杯は１組を除き、蓋が外された状態で副葬されていた。杯には２個体が重ねられた状態で出土したものもある。撹乱を受けた痕跡はないが、整然と配置されている状況は認めがたい。確実に棺底より高い位置から出土した杯もあり、副葬時には複数個体が積み重ねられた状態であったものが、土砂の流入によって乱された結果、検出時のような状況になったとも考えられる。

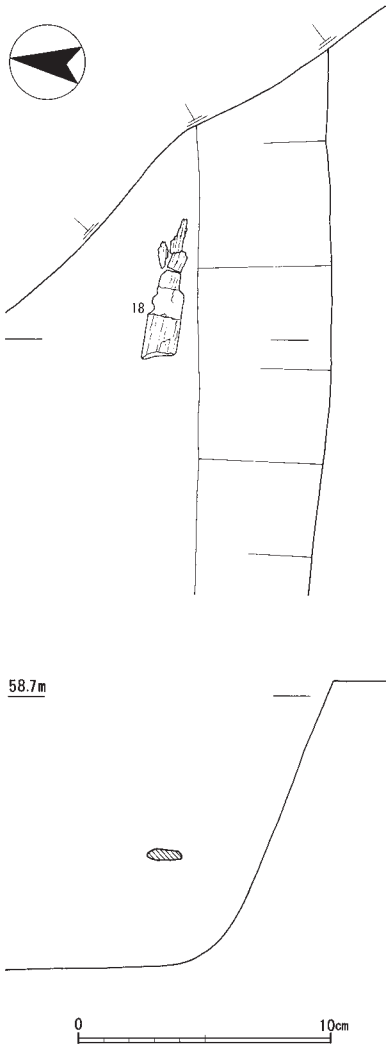
蓋と組み合わさった状態で出土した杯については、内部に粘板岩の小礫が入っていた[2)]。

また、横瓶の口縁部は副葬された当時から欠損していたようで、該当する部分の破片は出土しなかった[3)]。杯と蓋とが組み合わさった状態で出土したものについても、杯の口縁部が一部欠損していた。これについては、欠損部が細片化した状態で杯内から発見された。器面の破断状況からみれば、外面から打撃を加えて故意に一部を割った可能性が高い。

須恵器の他には、棺内の中央部分南側に刀子が１点副葬されていた。埋葬施設完掘時の棺底からは少し高い位置で出土しているが（第37図)、先述のように棺材痕跡の可能性のある土層上面からの出土で




第36図　高塚４号墳須恵器出土状況図（1:10）




第 37 図　高塚４号墳刀子出土状況図（1:3）

あり、ほぼ水平を保った状態で出土していることも踏まえれば、棺内に副葬されていたものと考えられる。また、切先を西側に、刃を棺内側に向けて置かれていた。この刀子は刀身部分と茎尻を欠損しているが、検出時に破損した可能性がある[4)]。

なお、棺内の底付近の埋土については篩を用いて微細遺物の検出を試みたが、玉類などは全く検出されなかった。

**註**

1） 和田晴吾による墓壙の分類で無墓壙とされるものに該当する（和田晴吾「葬送の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社　1989)。この分類を、埋葬施設の構築のタイミングと埋葬施設の基底部が盛土中か地山上かという観点から更に細分した杉井健による分類では、無墓壙・墳丘築造途上タイプ・盛土基盤型にあたるものと思われる（杉井健「盛土上に基底石を置く横穴式石室の史的意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団　2005)。

2） 第Ⅸ章参照。人為的に入れられた可能性がある。

3） 調査においては高塚４号墳墳丘とその周辺についても全面的に表土・流土の除去を行い、それに伴って須恵器片も数点出土しているが、副葬された須恵器の欠損部分に相当する破片は認められなかった。

4） この刀子は埋葬施設の検出作業中に出土したものであり、出土の際に破損した可能性がある。検出作業時の排土を篩にかけたが、欠損部分は発見できなかった。

# 第４節　出土遺物

## ①周溝内出土遺物（第38図１～４）

１～４は周溝埋土中から出土した遺物である。ただし、２・３の破片の一部は包含層掘削中にも出土している。

**土師器**（１）　１は杯と思われる。口縁端部はやや強くナデられ、外面にやや面をもつ。全体に風化が著しく、器壁の調整は明瞭ではないが、ナデやユビオサエによって調整されている。

**須恵器**（２～４）　２は蓋である。杯蓋と思われるが、やや径が大きい。頂部にはボタン状のつまみが貼り付けられている。口縁部は欠損するが、おそらくかえりをもつものであろう。外面には回転ヘラケズリが施されている。

３・４は無蓋高杯である。３は杯部の大きさに比して脚部は低く、ハの字状に外反する。透孔は認められない。杯部は中位に不明瞭な稜をもち、口縁部はやや外反気味である。口縁端部は丸く収められる。底部外面はヘラケズリによって整形されており、また底部内面中央には静止ナデが施されている。

４は３とほぼ同じくらいの高さであるが、杯部はやや小さい。脚部は上半部が中実で、透孔は認められない。杯部は中位に明瞭な稜をもち、口縁部はやや外反する。口縁端部はやや尖り気味である。杯部は脚部から剥離した状態で出土している。

## ②埋葬施設内出土遺物（第38図５～18）

５～18は、棺内に副葬されていた遺物である。須恵器は棺内東小口、鉄製刀子は棺内の中央部南側から出土した。

**須恵器**（５～17）　５～10は杯蓋である。いずれも宝珠つまみをもち、内面にはかえりがつく。外面はいずれもヘラケズリによって整形されているようであるが、ほぼ完全にナデ消されており不明瞭である。

これらの杯蓋には、細部に若干の差異がみられる。特に目立つのはつまみの形態で、頂部がやや尖る５・６、つまみがやや小さく丸い７～９、そしてこの２者の中間的形態ともいえる10の３種類に分けられる。５・６と７～９についてはそれぞれかえりの形態についても共通性が高く、こうした形態差は製作工人の違いなどを反映していると考えられる。

11～16は杯である。いずれも無高台の杯で、底部はヘラ切り無調整である。また、底部と体部との境界付近には、ナデ消されており不明瞭ながらもヘラケズリと思われる痕跡が認められる。ただし、13の底部を観察すると、ヘラケズリの後にヘラ切りによる切り離しが行われたものと推定され、このヘラケズリはヘラ切り痕を調整するものではなかったことが窺われる。杯についても杯蓋と同様に底部と体部の境界の屈曲が強い11・12、屈曲が弱い13・14、口

縁部がやや外反する15・16の３種類に分けられる。

これらの杯蓋と杯の組み合わせについては、出土時に組み合わされていた杯蓋９と杯15についてのみ判明している。他の個体については、実際に個々の杯蓋を被せてみた場合の組み合い方を参考にすれば、６と16、10と13などが組み合う可能性があるが、確定はできない。

17は横瓶である。ほぼ完形であるが、口縁部は元から欠損している。体部内面には片側に閉塞痕跡が認められる。体部外面はヘラケズリによって整形されており、体部を閉塞した後に、閉塞した側を中心にカキメによって外面を調整している。

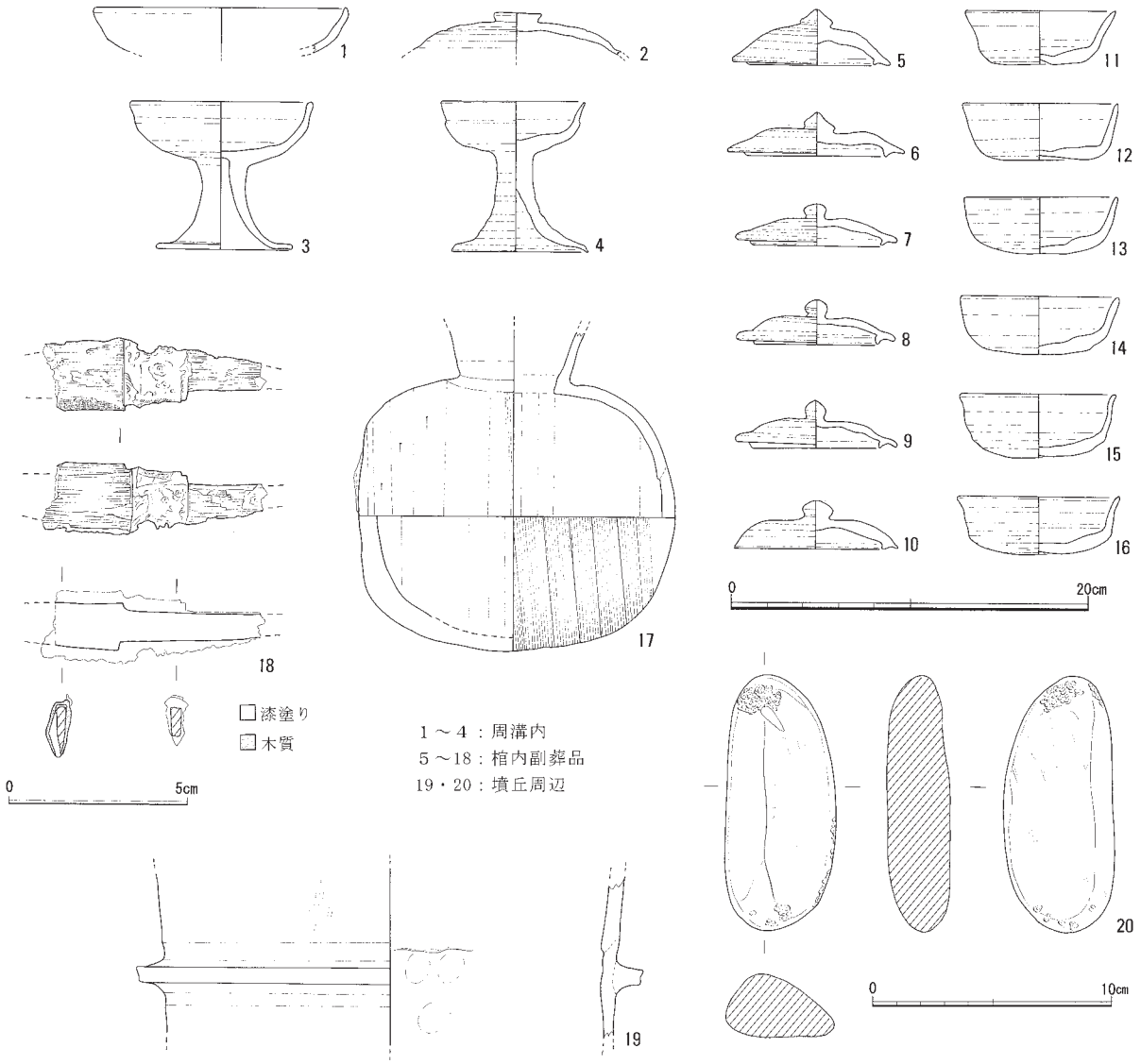
閉塞部分と反対側の外面には、焼成時に焼台の一部が融着したと思われる痕跡が残されており、また、その反対側には自然釉の付着が著しいことから、焼成時には閉塞側を上にして横位で焼成していたことが窺われる。

**鉄製刀子**（18）　18は鉄製の刀子である。刀身の大部分と、茎尻を欠損する。

刀身は関付近での幅が1.3cmある。欠損のため元の長さは不明であるが、高塚６号墳出土の刀子を参考にすれば、刀身長は９～10cm程度であったと推定される。棟は平棟、関は両関である。

茎には柄木が一部遺存しており、柄元には黒漆塗りの柄元装具が遺存している。この柄元装具は樹皮ないしは皮革製である可能性が考えられる。

刀身には鞘木が遺存している。鞘は関より若干茎側まで及んでおり、やや呑口状になっていたものと




第38図　高塚４号墳出土遺物実測図（1:4、18は1:2、20は1:3）

考えられる。

また、刀身から柄元装具にかけての棟側には布の痕跡が残っており、副葬時には装具の上から布で巻かれていたことが窺われる。

### ③墳丘周辺出土遺物（第38図19・20）

高塚４号墳と６号墳との間でも、表土・包含層掘削中に少量の遺物が出土した。以下に述べる遺物のほか、流れ弾と考えられる機銃弾も地山に突き刺さった状態で出土している（写真図版18）。

**埴輪**（19）　19は円筒埴輪の破片である。東側周溝の外側で包含層掘削中に出土した。

突帯は断面方形で、突出度はやや高い。突帯の上下は丁寧にナデつけられている。外面には不明瞭ながらタテハケが認められる。小片のため、径の復元には不安を残すが、復元される径は25㎝前後である。

この円筒埴輪は、突帯やハケの特徴からみて、古墳時代前期末から中期前半のものである可能性が高い。高塚４号墳に伴うものではなく、他の古墳のものが何らかの原因で持ち込まれたものである。

付近に存在する古墳では、高塚１・２号墳が埴輪を有する。出土した埴輪を比較すると、高塚２号墳の埴輪とは明らかに異なっており[1]、突帯の特徴などからみて高塚１号墳の埴輪である可能性も考えられる[2]。

**石器**（20）　20は敲石である。高塚４号墳と高塚６号墳との間で出土した。扁平な楕円形の礫を使用しており、側縁の一部や片側の端部に敲打痕が明瞭に残る。石材は砂岩であると思われる。

付近に斎宮池遺跡などが存在することなどを考えれば、この敲石は縄文時代のものである可能性が高いであろう。

**註**

1）　附章参照。

2）　高塚１号墳出土埴輪については、以下の文献に図面が掲載されている。
松阪市教育委員会『八重田古墳群発掘調査報告書』　1981、
豊田祥三「高塚１号墳採集埴輪の再検討」『研究紀要』第14号　三重県埋蔵文化財センター　2005

## 第５節　小結

**築造時期**　高塚４号墳の埋葬施設からは、須恵器の無高台の杯がつまみ付きの蓋とセットで出土した。杯の口径や底部の形態、蓋のつまみやかえりの形態などからみて、多気町明気３号窯・５号窯出土須恵器に近い特徴を持つとみられる[1]。周溝内から出土した無蓋高杯についても、脚部の特徴などからみて矛盾はないであろう。明気３号窯・５号窯出土須恵器は、淺生卓司による南勢地域の須恵器編年ではⅢ後期に位置づけられており、７世紀後半～８世紀初頭の暦年代観が想定されている[2]。ただし、都城編年に照らし合わせると、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期にあたる可能性が高く、その場合は７世紀第２四半期～第３四半期頃の暦年代観が与えられる可能性も考え得る[3]。明気３号窯・５号窯出土須恵器はⅢ後期の中でも早い段階に位置づけられることが指摘されており、こうした点も鑑みて、高塚４号墳は７世紀中葉に築造された古墳とみておきたい。

南勢地域では、高塚古墳群の他にも、７世紀前葉から中葉にかけて築造された木棺直葬の埋葬施設を持つ小型の方墳が、多気町河田古墳群[4]・明気古墳群[5]や明和町明星古墳群[6]などで多数確認されており、この地域の古墳時代後期後半から終末期における一つの特徴となっている。出土須恵器の特徴などからみて、高塚４号墳はこうした古墳の中でも後出する古墳である可能性が高い[7]。当該地域における古墳時代の終焉を考える上で、重要な古墳である。

**墳丘構築**　また、高塚４号墳では、盛土の遺存状況がかなり良好であったため、墳丘構築過程や木棺の設置過程などについて多くの知見を得ることができたことが特筆される。

中でも、木棺を墳丘の構築途中で設置し、再び盛土をその上に盛っていく埋葬方法がとられているため、明確な墓壙を持たない点は注目できよう。今回の高塚４号墳の調査では、こうした墳丘構築および埋葬過程について詳細に明らかにすることができたため、墳丘が完成してから埋葬を行ったのではなく、墳丘の構築を途中で中断して埋葬を行ったことが明確に分かる良好な事例となった。

これまでの近隣における調査でも、７世紀代に築造されたと考えられる古墳の中には、明星１号墳・６号墳のように、墳丘構築途中で木棺を設置したことが指摘されている事例がある[8]。また、河田Ｃ－９号墳[9]や松阪市大分山９号墳・12号墳[10]など墓壙が明瞭には検出されなかったものや、多気町森出７号墳[11]のように不整形な墓壙が検出されているものについても、高塚４号墳と同様に墳丘構築途中に埋葬を行っている可能性を指摘することができる。このように、当該地域においては高塚４号墳のような墳丘構築方法をとる古墳が多く存在すると思われるのである[12]。今後の当該地域における古墳の調査にあたっては、こうした事例にも十分に留意し、情報を蓄積していく必要性があろう。

このほかには、墳丘構築前に地山に掘り込みを設けている点も注意される。地山を平坦に整地するのではなく、掘り込みを行う点は、高塚４号墳の墳丘構築における一つの特徴といえるであろう。

以上のような墳丘構築に関わる調査成果は、南勢地域における古墳時代終末期の古墳築造技術や葬送儀礼の地域的特色や他地域との関連性などについて考える上で、良好な資料となると思われる。

**副葬品**　一方で､副葬品はそれほど多くはなかった。ただし、この時期の古墳では概して副葬品の量や品目は少なくなっており、その状況に即したものといえる。土器類と刀子という組合せは、隣接する高塚６号墳とも共通する。周辺には、古墳時代後期後半から終末期にかけての古墳でこうした副葬品組成を持つものが他にもあり、副葬品組成の地域性の一側面を示しているといえよう。

**註**

１）　三重県埋蔵文化財センター『明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣護遺跡』　1995

２）　淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産―外城田窯址群の検討―」『Mie history』vol.16　三重歴史文化研究会　2005

３）　都城編年と、それに関わる暦年代観については、以下の文献を参考にした。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　1976、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』　1978、古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』　1992、奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』　1995、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ』　2005

４）　多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』　1983、多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986

５）　多気町教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』　1998

６）　明和町教育委員会『明星古墳群発掘調査報告』　1975

７）　明気３号窯・５号窯が操業されていた時期には、南勢地域の古墳の築造数が減少することが指摘されている（淺生卓司2005)。

８）　明和町教育委員会1975

９）　棺の北側に不明瞭な墓壙状の落ちこみがみられることが報告されている（多気町教育委員会1986)。報告書の図では棺は地山を掘り込んで据えられているようにみえるが、棺部分のみ地山を掘り込んでいる点は不自然であろう。また、棺より下の土層が地山であるとの明確な記載もないため、河田Ｃ－９号墳についても盛土中に棺が設置されていたものと推測する。なお、河田Ｃ－９号墳の立地や周溝の状況は、第Ⅶ章で述べている高塚６号墳の状況と類似している。

10）　松阪市教育委員会『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』　1990。大分山12号墳については埋葬施設が検出されていないが、墳丘盛土がかなり遺存している割に墓壙が全く遺存していないことから、これについても盛土中に棺を設置していたものと推測する。

11）　西村修久「森出古墳群」『三重県史』資料編考古１　三重県　2005

12）　高塚４号墳をはじめとするこうした事例については第Ⅹ章でやや詳しく触れたい。

# 第Ⅶ章　高塚６号墳の調査

## 第１節　調査の方法

高塚６号墳は、高塚４号墳と同じく平成17年度の分布調査によって新たにその存在が認識された古墳である。分布調査時に周溝の痕跡と考えられる溝状の凹みなどが確認されたため、平成19年度に高塚４号墳と同じく範囲確認調査として調査坑を設け、古墳の存在の有無に関する調査を行った。

その結果、確実に周溝と思われるものは検出できなかったが、周溝と思われる部分で自然堆積とは考えにくい土層堆積が認められ、また須恵器片が１点出土したことにより、古墳であることがほぼ確実視されるに至った。しかしながら、事業計画上、当該古墳の破壊は免れなかったため、墳丘及び埋葬施設の調査を全面的に行うこととなった。

調査前には墳丘及び周辺の地形測量をラジコンヘリコプターを用いた空測により行ったが、小さな盛り上がりがあることが確認できたのみで、墳形などを推定するには至らなかった（第32図）。ただし、地形測量時にも、この盛り上がりを中心として浅く不明瞭な周溝状の落ち込みが存在することが改めて確認された。

**掘削作業**　調査では、最初に範囲確認調査では明確には確認できなかった周溝の存在を確認する作業から行った。まず、表土や流出土の除去を行った。この作業はすべて人力によって行い、また掘削の前に４×４ｍのグリッドを設定し、出土遺物はそのグリッドごとに取り上げている。

表土・流出土の除去後、地形測量において確認された浅い周溝状の落ち込み部分に、東西南北４箇所の調査坑を設けて掘削を行った[1)]。この調査坑における調査の結果、西側調査坑と北側調査坑において想定よりもかなり深い周溝の存在が確認できた。なお、東側調査坑では、第２節で述べるように当初は周溝埋土と考えていた土層が盛土下に遺存した旧表土であることが判明し、周溝が存在しないことが確認された。

**埋葬施設の調査**　その後、周溝の掘削と併行して十字に土層観察用のアゼを残しながら墳頂部の掘り下げを行い、埋葬施設の検出を行った。その結果、地表下約50㎝とかなり浅い位置で埋葬施設を確認することができた。

埋葬施設は４号墳と同じく、墳丘構築過程で墓壙を穿たずに盛土中に木棺を設置したものであり、棺内埋土の掘削に不安が残されたため、一部先行して断ち割りを行い、棺の形状や周囲の盛土の様相を確認した上で棺内の調査を行った。

棺内の調査後に、埋葬施設ごと付近の盛土を断ち割り、墳丘構築過程や棺の設置状況についての調査・検討を行った。また、墳丘についても可能な限り断ち割りを行い盛土の状況を確認したが、時間的制約等から一部は地山まで断ち割ることができなかった。

**遺構実測**　遺構掘削の完了後、平面図の作成を行った。周溝については、３ｍ間隔の実測用基準点を設けて平面図の作成を行ったが、埋葬施設については別に設置した基準点を元に実測を行っている。

**註**

1）　東西の調査坑は、範囲確認調査時に設けたものを再利用して設定した。

## 第２節　墳丘の調査

### ①周溝

**形態**　墳丘の周囲からは、周溝が検出された。周溝は地山を掘り込んで作られている。

周溝は墳丘を全周しておらず、墳丘東側では周溝が途切れている。周溝は不整形ではあるもののコの字状の平面形を呈しており、方墳であるとみられる（第39図）。

墳丘の規模は、南北はおよそ12mほどあるとみられる[1]。東西については、周溝が途切れている東側の墳端が不明瞭なため明らかではないが、墳丘盛土の範囲からみると、およそ9.5mほどと考えられる。墳丘の平面形はやや長方形をなしていたものと思われる。

周溝は西側の地形が高くなっている側では特に深く掘り込まれており、最大で深さ0.9mほどを測る。墳丘東側に向かって地形が急激に低くなっていくため、北側周溝・南側周溝とも、墳丘東側では周溝が自然と浅くなり、途切れていく様子が認められた。

**遺物出土状況**　周溝内からは形状が復元できる遺物は出土していないが、西側周溝の最下層から土師器の破片が複数出土している。直径１mほどの範囲から集中的に出土した。これらの土師器片は同一個体のものである可能性が高いと思われるが、１個体に復元できるほどの破片は検出することができず、もともと完形品が置かれていたとは考えにくい。細片のみで図化は不可能であったが、破片の特徴からみて直口壺の可能性が考えられる。

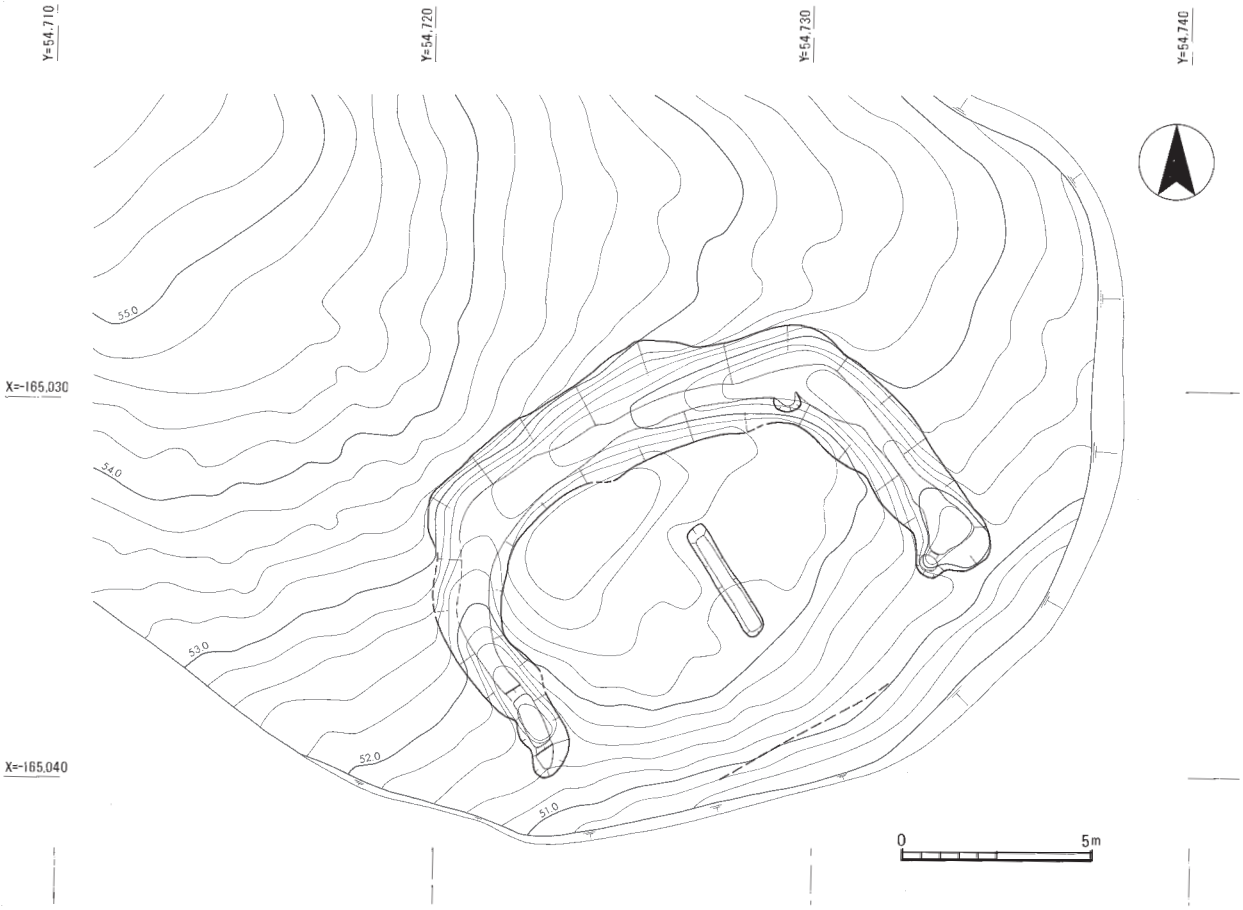
また、北側周溝の下層（第40図11・13層）からは、焼土塊と思われるものが集中的に出土している[2]。これに伴う上層からの掘り込み等は確認できなかった。墳丘上の北側でも表土の除去中に同様の焼土塊状のものが少数検出されているため、もともと墳丘上にあったものが墳丘の流出に伴って周溝内へ流れ込んだ可能性が考えられる。

## ②墳丘

高塚６号墳は、丘陵尾根先端部で周囲の地形の傾斜が急であるという立地条件のため、墳丘盛土の流出が激しく、墳丘の遺存状況は決して良好とは言えない。

ただし、残存した墳丘の調査からは、その立地条件をうまく生かした墳丘構築がなされていることが確認された。

**整地**　調査時には時間的制約等のため、墳丘を地山まで除去できた部分は少なかったが、埋葬施設部分




第 39 図　高塚６号墳墳丘平面図（1:200）

の断ち割りから得られた情報を合わせて考えると、墳丘構築前にある程度地山の整形が行われている可能性が高い。

埋葬施設周辺では地山直上で旧表土が検出されず、墳丘構築前の整地によって除去された可能性が高い。また、埋葬施設付近での地山の検出された高さからみて、尾根の頂部が墳丘構築前にかなり削られている可能性も指摘できよう（第40・41図）。

**盛土**　埋葬施設が地表下50㎝ほどの比較的浅い位置で検出されたことからも分かるように、墳丘は既にかなりの部分が流出したものと考えられる。深い周溝内に堆積している土は、多くが墳丘から流出した土と推定される。

調査開始当初は主に地山整形によって墳丘が構築されているものと推定していたが、調査の結果、墳丘のかなりの部分が盛土で構成されていることが判明した。これらの盛土は、墳丘構築過程に沿って大きく４段階に分けて考えることができる。

**〔第１段階〕**　高塚６号墳周辺の地形は西から東へ向かって低くなっていくが、墳丘はこの斜面を利用して造られているため、まず、もともと地形的に低い東側部分に盛土を施し、西側との高さを合わせている。これを第１段階の盛土とする。

東側部分では地山直上で旧表土と思われる暗褐色土層が存在しており（第40図33層）、第１段階盛土は旧表土直上に施されていることが確認できた。旧表土直上に整地を行うように土を盛り（第40図32層）、その後に斜面に向かって土を盛っている様子が確認できた。

この段階の盛土には、地山の土と似た質の赤褐色系のやや粘質の土が用いられており、盛土の単位は大きい（第40図30・31層）。地形的に低い側に盛土をすることによって全体的な高さを揃え、木棺を設置するためのある程度の平坦面を確保したものと考えられる。

なお、埋葬施設部分の断ち割りにおいても、この段階の盛土に相当する可能性がある土層が認められる（第41図23・24層）。

**〔第２段階〕**　第２段階の盛土は、木棺の周囲に盛られている盛土である（第40図21～25層・第41図19～22層・第42図３・４層）。この盛土によって墳丘中央に凹みが生じており、これが墓壙の役割を果たしている。

土層断面図からは墓壙は盛土を掘り込んで形成されているようにも見えるが（第40図）、平面では明確な墓壙ラインは検出できなかった。また、墳丘南側では内側へ向かって流し込まれているような土層も認められる（第40図21層）。この土層は木棺の検出面よりも低い位置まで続いていることから、木棺の設置に先立って盛土を土手状に盛り上げたことが窺われよう。

この段階の盛土には、第１段階の盛土とくらべて多様な質の土が用いられており、やや粘性が低い土も使用されている[3)]。盛土の単位も第１段階の盛土とくらべて小さい。

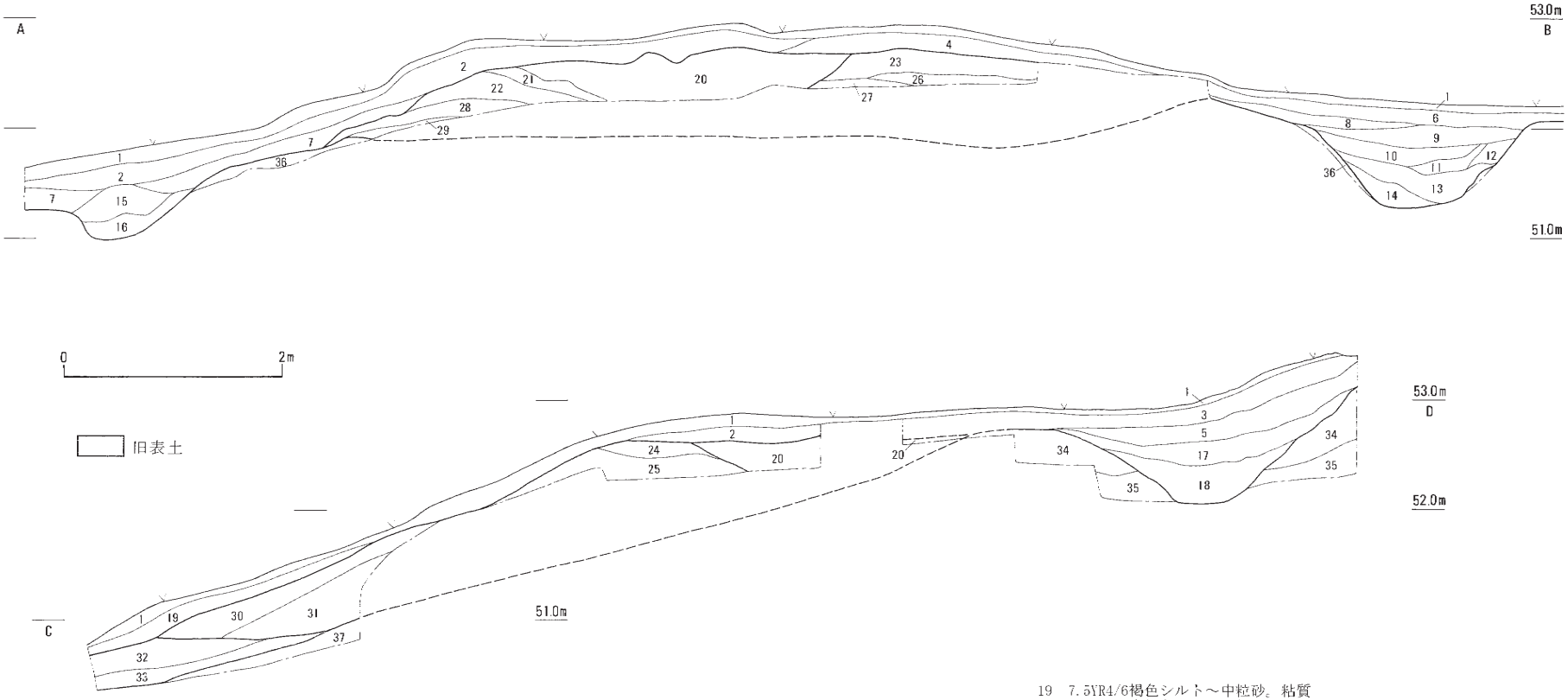
なお、この第２段階盛土に相当すると考えられる土層中から土器片が出土している（第41図21層）。小片であり、器種・時期共に不明であるが、かなり摩耗した破片であることなどから、古墳築造以前のものが混入した可能性が高い。

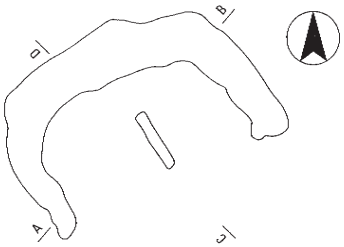
**〔第３段階（墓壙整地土・木棺裏込め土）〕**　第３段階では、木棺の設置と前後して、第２段階盛土によって形成された墓壙状の窪地部分に土が流し込まれる（第41図13～18層）。盛土というよりも、広い意味で木棺設置時の整地土となっているもの（第41図18層・第42図２層）と、木棺裏込め土となっているもの（第41図13～16層・第42図１層）から構成される。

ただし、墳丘構築途中における棺の設置および被葬者の埋葬という点を考えた場合、これらの土層は墓壙底の整地と木棺の裏込めという目的にとどまらず、墳丘の一部を構成する盛土としての性格も同時に有しているものと思われるため、ここでは第３段階盛土として区分した。

また、棺外副葬の須恵器・土師器・鉄製品の一群はこの盛土の上面に置かれており、棺の設置後に葬送儀礼を行うための面を整えるための役割も果たしていたものと考えられる。

**〔第４段階（墓壙埋土）〕**　第４段階の盛土は、木棺の上部を覆うように施されたものである（第40図20層）。第２段階盛土によって形成された墓壙状の凹みを埋めるように同質の土が大きな単位で入れら




1　表土
2　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。粘質
3　5YR4/8赤褐色シルト～中粒砂
4　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質
5　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂
6　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂
7　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。やや粘質
8　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。粘質
9　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。粘質
10　7.5YR4/4褐色シルト～細粒砂。粘質〔**周溝埋土**〕
11　7.5YR5/8明褐色シルト～細粒砂。粘質。焼土塊を少量含む〔**周溝埋土**〕
12　7.5YR5/6明褐色シルト～細粒砂。粘質〔**周溝埋土**〕
13　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂。粘質。焼土塊と炭化物（～0.5cm）を少量含む〔**周溝埋土**〕
14　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**周溝埋土**〕
15　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂〔**周溝埋土**〕
16　7.5YR5/6明褐色シルト～粗粒砂。やや砂質〔**周溝埋土**〕
17　7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂。粘質〔**周溝埋土**〕
18　10YR4/6褐色シルト～中粒砂〔**周溝埋土**〕
19　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂。粘質
20　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う〔**墳丘盛土**〕
21　5YR4/8赤褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**墳丘盛土**〕
22　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。粘質〔**墳丘盛土**〕
23　7.5YR6/8橙色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**墳丘盛土**〕
24　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**墳丘盛土**〕
25　7.5YR4/6褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**墳丘盛土**〕
26　7.5YR6/8橙色極細粒砂～中粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂・5YR5/8明赤褐色極細粒砂～中粒砂ブロックを含む〔**墳丘盛土**〕
27　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。やや砂質〔**墳丘盛土**〕
28　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂〔**墳丘盛土**〕
29　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。粘質〔**墳丘盛土**〕
30　7.5YR6/8橙色シルト～細粒砂。粘質〔**墳丘盛土**〕
31　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。粘質。締まり強い〔**墳丘盛土**〕
32　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。粘質〔**整地土？**〕
33　7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。粘質〔**旧表土**〕
34　5YR5/8明赤褐色極細粒砂～細粒砂。やや砂質〔**地山**〕
35　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～粗粒砂。花崗岩バイラン土〔**地山**〕
36　5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂〔**地山**〕
37　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。やや砂質〔**地山**〕

**第40図　高塚６号墳墳丘土層断面図（1:60）**

れており、墓壙埋土としての性格を有するものと思われる。

ただし、第３段階盛土と同じく墳丘構築過程における埋葬との関係から盛土としての性格も有していると考えられることと、上部がすでに流出しているため不明であるものの、第２段階盛土の上部までこの土層が及び、完全に墳丘盛土の一部となっていた可能性があるため、第４段階盛土として把握した。

以上の４段階にわたる盛土のほか、本来はさらに墳丘上部を形成する盛土（第５段階盛土）が存在していたものと考えられるが、既に流出しているためにその実態は不明である。

高塚６号墳の墳丘は、墳丘構築前に地山の整形を行う点や、地形的に低い側に周溝を設けない点、土手状に盛土を盛って墓壙状の窪地を作る点などからみて、基本的に高塚４号墳と同様の築造方式に基づいて構築されていると考えられる。

ただし、高塚４号墳にくらべて、各段階の盛土に、墓壙や木棺裏込め土、墓壙埋土としての性格がやや明瞭に認められるようにも思われる。無墓壙というよりも、どちらかといえば構築墓壙[4]に近いと考えられるかもしれない[5]。

**註**

1）　周溝の芯心間で計測した数値である。

2）　地山の粘質土が火によって焼成を受けたような質感のものであるが、かなり硬い。形状は不定形な塊状で、大きさは１～５㎝とばらつきがある。スサ等は含まないが、径１㎜以下の砂粒をかなり含む。また、黒斑状に黒くなっている部分も認められる。

3）　墳丘の北側部分については南側・東側とくらべてやや異なった質の土が用いられているようである。

4）　構築墓壙とされるものでも、基本的には多少の掘り込みを伴うものと想定されているようである（和田晴吾「葬送の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社 1989）。高塚６号墳の場合は掘り込みを全く行っていない可能性が高い。

5）　この点については、高塚４号墳にくらべて墳丘面積が狭く、盛土を急激に高く盛らなくてはならなかったことも関係している可能性があろう。こうした理由のため、第２段階盛土によって生じた窪地の壁の立ち上がりが急になり、墓壙状を呈したものとも考えられる。

## 第３節　埋葬施設の調査

埋葬施設は１基のみで、木棺直葬である（第41図）。墳丘のほぼ中央部で検出された。主軸方向はN31°Wであり、東西よりはやや南北を意識して埋葬されているようにもみえる。ただし、埋葬施設は周溝とほぼ平行しており、方位よりも、墳丘主軸を意識していた可能性が高い。

先に述べたように、木棺は高塚４号墳と同じく掘り込み墓壙ではなく、墳丘を構築していく途中で設置されていた。したがって、高塚６号墳でも明瞭な墓壙は存在しない。

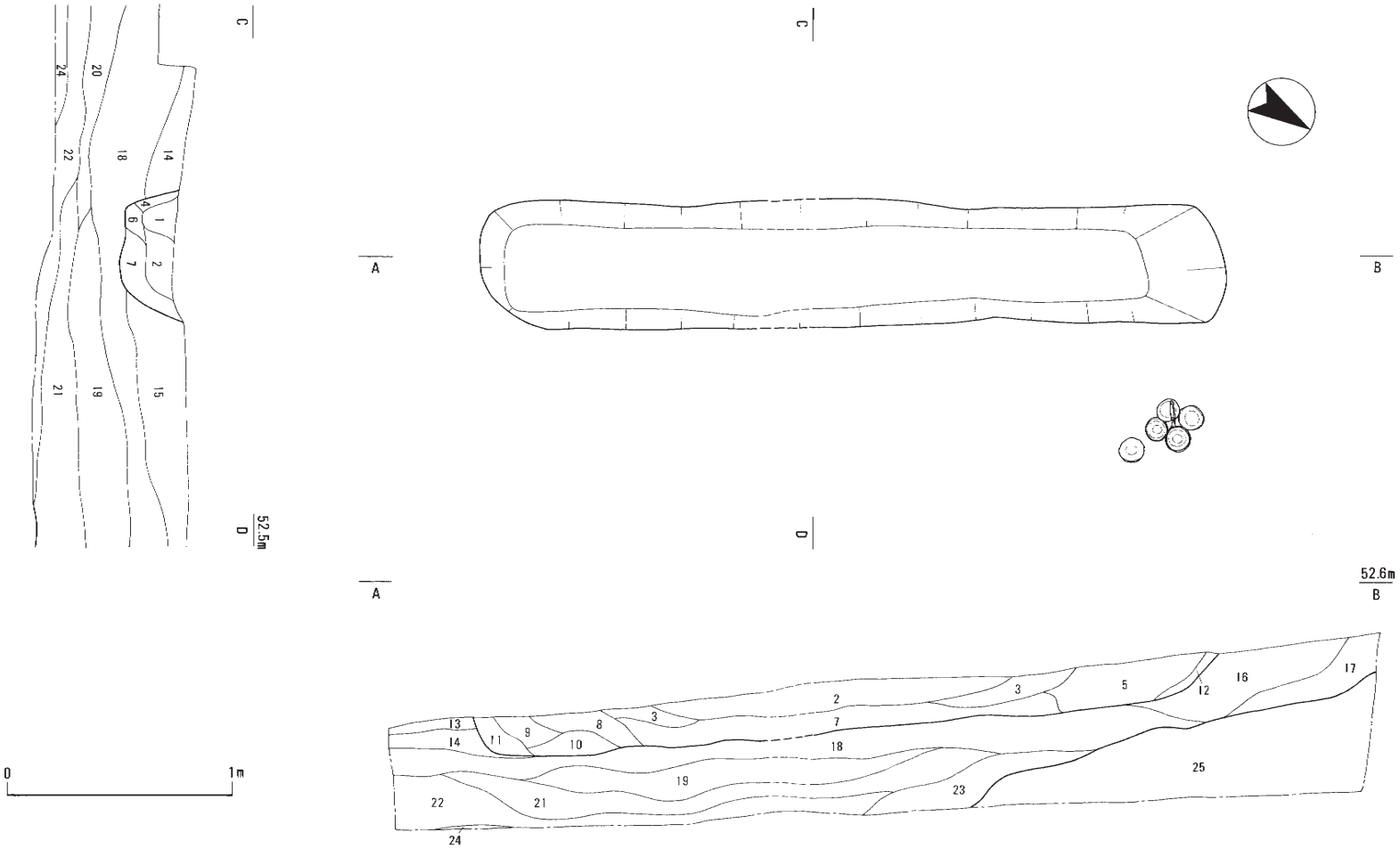
以下、棺と副葬品出土状況とに分けて詳しく述べていきたい。

### ①棺

棺の規模は外法で長さ3.3m、幅0.6mで、高塚４号墳と同じくやや幅が狭く、細長い木棺である。棺材は完全に腐朽して遺存していなかったが、検出時には一部で木棺側板の痕跡とみられる砂質土の存在が観察された。土層断面の観察においても、棺痕跡の可能性が考えられる土層が認められる（第41図４・６・７・10・11・12層）。

棺の形態は、棺材が腐朽しているために推定することが難しいが、横断面の形態からみて箱形木棺であると考えておきたい。ただし、北小口はまっすぐ立ち上がらず、外方へ開くようであり、棺の幅の狭さなども考えると、刳抜式木棺である可能性も残されている[1]。

木棺は盛土の中に墓壙を掘り込まずに設置されている。前節でも述べたように、第２段階盛土までを積んだ段階で、窪地状となった墳丘中央部に整地土を敷き、そこに木棺を置いている。ただし、整地土を施しているにもかかわらず、棺底の高さは北小口が南小口にくらべて20㎝以上も高くなっている。これは、旧地形がもともと傾斜していたことに影響さ




1　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。砂質〔**棺内埋土**〕
2　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～細粒砂を粒状に５％含む。砂質〔**棺内埋土**〕
3　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。砂質〔**棺内埋土**〕
4　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。部分的に5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂を含む。砂質〔**棺痕跡？**〕
5　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。砂質〔**棺内埋土**〕
6　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。7.5YR4/6褐色極細粒砂～中粒砂を部分的に含む〔**棺内埋土もしくは棺痕跡？**〕
7　7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂。10YR5/8黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック（１cm）をごく少量含む。やや粘質〔**棺内埋土もしくは棺痕跡？**〕
8　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂〔**棺内埋土**〕
9　7.5YR5/6明褐色シルト～細粒砂。やや粘質〔**棺内埋土**〕
10　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂〔**棺内埋土もしくは棺痕跡？**〕
11　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂が混じり合う〔**棺内埋土もしくは棺痕跡？**〕
12　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。5YR5/8明赤褐色極細粒砂～細粒砂を部分的に含む〔**棺痕跡？**〕
13　7.5YR5/8明褐色細粒砂。砂質
14　7.5YR6/8橙色細粒砂と7.5YR5/6明褐色極細粒砂～中粒砂が混じり合う。砂質
15　7.5YR6/8橙色細粒砂、砂質
16　7.5YR5/8明褐色細粒砂～中粒砂。10YR6/6明黄褐色極細粒砂～細粒砂ブロック（２～３cm）を１～３％含む。砂質
17　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。10YR6/6明黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック（１～２cm）を少量含む
18　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う
19　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う。10YR6/6明黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック（２～３cm）を１～３％含む
20　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂。7.5YR6/8橙色細粒砂～中粒砂を１～３％含む。やや粘質
21　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂。10YR6/6明黄褐色シルト～細粒砂ブロック（１～２cm）を少量含む
22　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂を含む。やや粘質
23　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂。粘質
24　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。粘質。締まり強い
25　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂〔**地山**〕

第41図　高塚６号墳埋葬施設平面図・土層断面図（1:30）

れているものと考えられる。

棺底の高さが北小口側の方が高い点、そして副葬品が置かれていた位置などからみて、被葬者は北側に頭位を置いていたものと考えられる。

## ②副葬品出土状況

副葬品は、すべて棺外から検出された。棺内からは副葬品は発見されなかった。

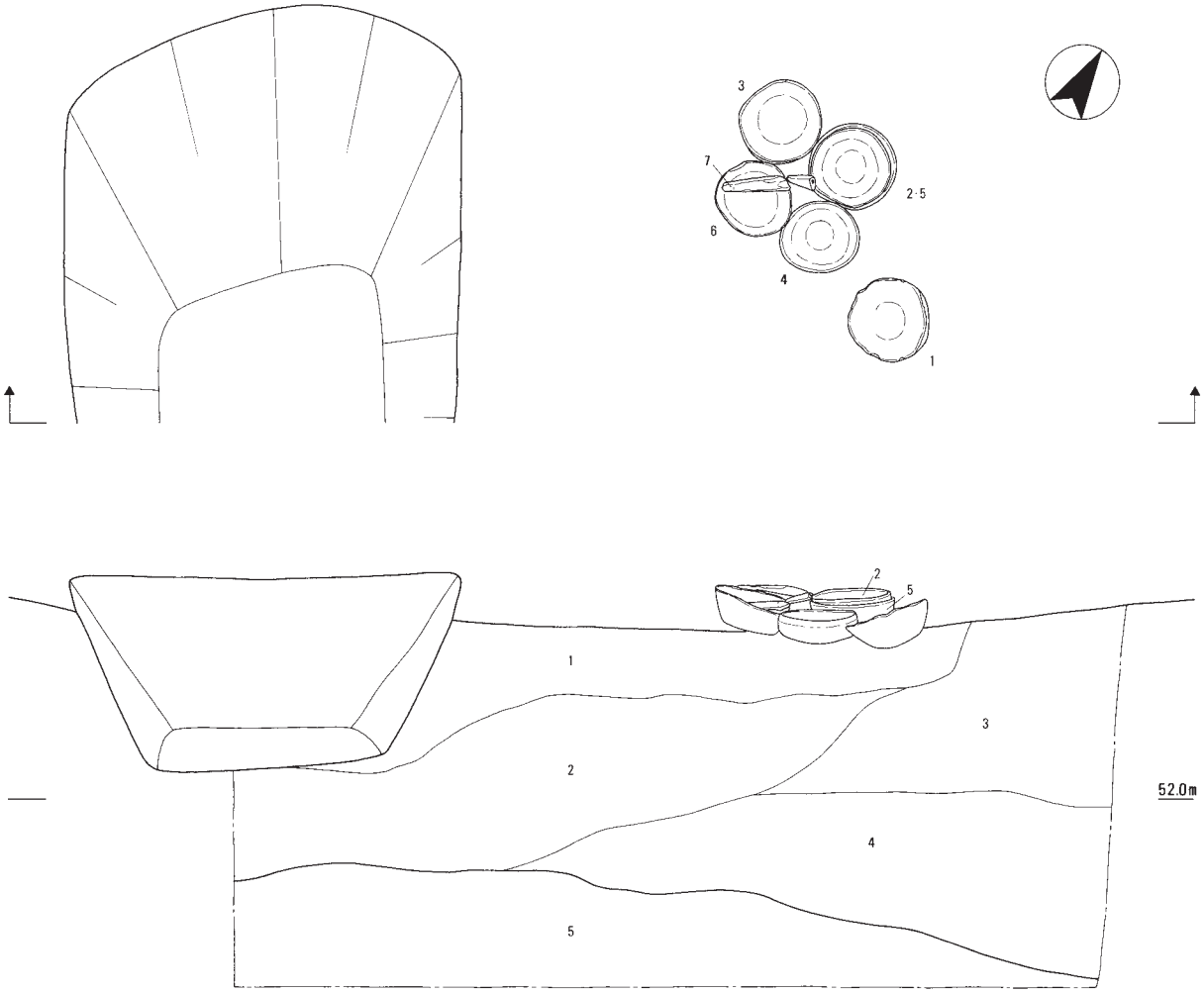
副葬品は木棺北小口付近の棺外東側にまとめて置かれており、土師器杯１点、須恵器杯５点、鉄製刀子１点が出土した（第42図）。

須恵器杯５点は密接して置かれており、そのうち２点は重ねて置かれていた（第43図２・５）。土師器杯も須恵器杯群とほぼ同じ位置に置かれていたが、須恵器杯群からは若干離れた位置から出土している。これらの杯はいずれも正位に置かれていた。

また、鉄製刀子は須恵器杯の中に切先を入れる形で置かれていた。

副葬品の直下の土層（第42図１層）は木棺の裏込め土も兼ねており、第３段階盛土にあたるものである。ただし、他の土層とくらべて均質な砂質土であり、また、分布範囲が木棺の北小口付近から副葬品付近にかけての限られた範囲であるために、副葬品の設置を意識して施された土である可能性も考えられる。

なお、棺内および副葬された土器群近辺から排出




1　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～細粒砂。砂質
2　5YR5/8明赤褐色シルト～中粒砂と7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂が斑状に混じり合う
3　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂。10YR6/6明黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック（１～２cm）を少量含む
4　5YR5/8明赤褐色シルト～粗粒砂。10YR6/6明黄褐色細粒砂～中粒砂ブロック（１～２cm）を３～５％含む
5　5YR5/8明赤褐色シルト～細粒砂〔地山〕

0　40cm

**第42図　高塚６号墳副葬品出土状況図（1:10）**

された排土については篩にかけて微細遺物の検出に努めたが、何も検出されなかった。

**註**

1）　近隣に存在するほぼ同時期の古墳でも幅が狭く断面形がやや弧を描く木棺が多く確認されており、河田C−４号墳などの例では割竹形木棺と推定されている（多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986）。ただし、この時期まで刳抜式木棺が使用されているかどうかという点については慎重な検討が必要であろう。

# 第４節　出土遺物

## ①棺外出土遺物（第43図１～７）

**土師器**（１）　１は杯である。口径は11.4cmで、底部から体部にかけての屈曲は緩やかであり、共に副葬されていた須恵器杯と似た法量・形態のものである。ほぼ完形であるが、風化による器壁の荒れが著しく、内外面ともに調整は確認できない。

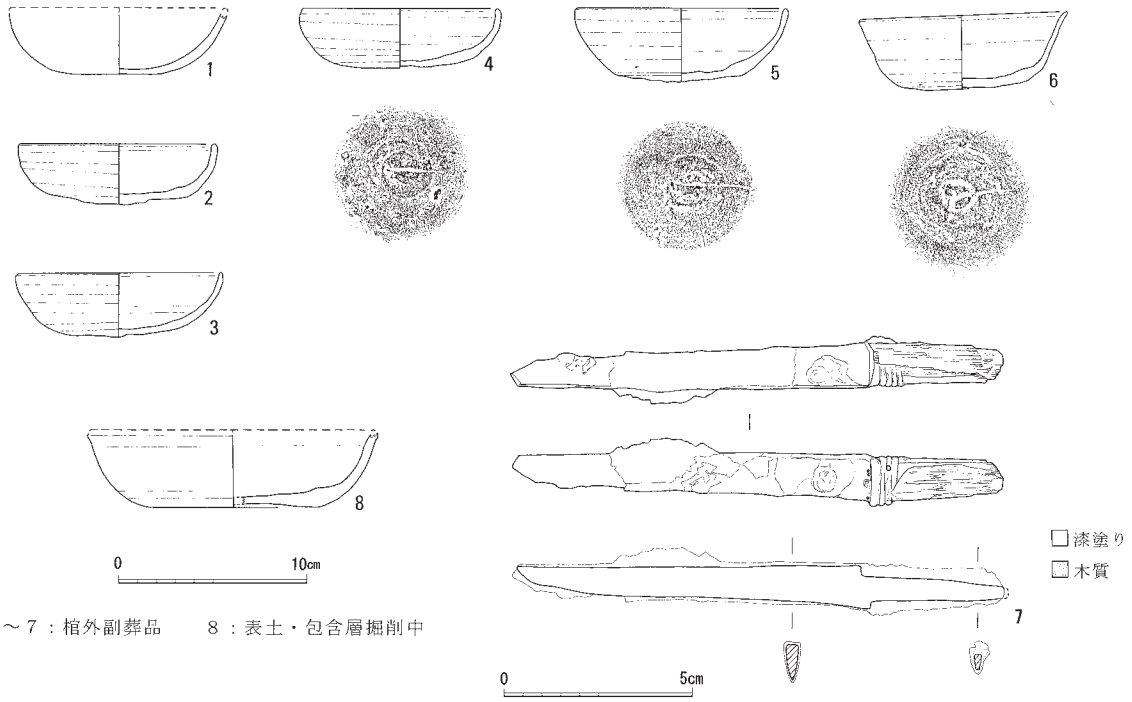
**須恵器**（２～６）　２～６は杯である。２～５の４点は底部から体部にかけての屈曲が緩やかで口縁部がやや内湾気味になっており、形態上はいわゆる杯H蓋[1]と区別がつけがたいものである[2]。６のみは底部と体部との境界が比較的明瞭に屈曲し、口縁部は外反している。

口径は10.3～11.1cmの間に収まり、比較的大きさが揃っている。その中でも、２と４は法量や口縁部形態などの点で共通性が高く、３と５も同様に共通性が高い。また、すべての個体の底部内面に多方向の静止ナデが認められるが、これについても、３と５は明瞭であるのに対して、２と４は不明瞭であるといった共通性が認められる。

いずれも底部外面はヘラ切り無調整である。ただし、５・６には底部と体部の境界付近に回転ヘラケズリによる整形痕と思われるものが認められる。なお、４～６の底部外面には、一本線のヘラ記号が認められる。２と４、そして３と５の共通性が高い２組については、片方の個体にヘラ記号が施されているようである。

**鉄製刀子**（７）　７は鉄製の刀子である。茎尻を若干欠損するが、ほぼ完形である。出土時は関付近で折損していた。

刀身は、長さが9.2cmあるのに対して幅は関部付近で1.1cmと細身で、棟は平棟、関は両関である。




１～７：棺外副葬品　　８：表土・包含層掘削中

**第43図　高塚６号墳出土遺物実測図（1:4、７は1:2）**

茎部分には木質が遺存しており、着柄された状態で副葬されていたことが窺われる。茎は柄に背側から落とし込まれている。柄元部分には柄木の上から幅0.1～0.2㎝の細い樹皮状のものが巻き付けられている。

また、鞘も部分的に遺存している。表面には黒漆が塗布されているようである。材質は不明であるが、明瞭な木質の遺存は確認できず、皮革製である可能性が考えられる。

### ②墳丘出土遺物（第43図８）

墳丘の表土・包含層掘削中に、須恵器の杯・甕の破片などの遺物が少量出土している。須恵器杯１点が図化できた。

**須恵器**（８）　８は口縁端部を欠損するため不確実であるが、杯と思われる。底部は平底であり、ヘラ切り無調整である。底部と体部の境は比較的緩やかに屈曲する。口径は15.5㎝弱であろう。

南側周溝付近で出土したが、表土・流土中からの出土であり、高塚６号墳に伴うものかどうかは不明である。ただし、形態などからみれば、奈良時代以前のものである可能性が高いと思われる。

**註**

1）　飛鳥～奈良時代の須恵器の器種分類の呼称については、基本的に都城編年における分類を用いている。主に下記の文献を参照した。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　1976、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978、古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』1992、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅥ』2005

2）　いずれも副葬状況からみて杯として副葬されたことが明らかであるため、ここでは蓋ではなく杯として報告している。

## 第５節　小結

高塚６号墳は、高塚４号墳や小金３号墳などにくらべて墳丘の遺存状況がそれほど良好ではなかったものの、埋葬施設１基を検出することができ、また、盛土や周溝についてもある程度の情報を得ることができた。

**築造時期**　築造時期については、副葬品として出土した須恵器は杯のみであり、詳細な時期を決めることは難しい。ただし、これらの中には、杯Ｈ蓋に近い形状のものが多い。そして、その中に杯Ｇに分類される形状のものも混じる。このことから、高塚６号墳に副葬されている須恵器が生産された段階では、古墳時代的な杯身・杯蓋である杯Ｈの生産が行われており、それと同時にかえり付きの蓋を伴う杯Ｇの生産も行われていたことが推測される。

また、高塚６号墳に副葬されていた杯Ｈ蓋に近い形状のものが、蓋ではなく杯として意識されていたことは、共伴する杯Ｇと副葬状況において区別されていない点からみて明らかであろう。

以上の点から考えて、高塚６号墳出土須恵器は杯Ｈの生産が衰退し、さらに杯Ｇの生産がある程度盛んになっていた段階のものと考えられる。付近の須恵器窯でこうした生産内容に近いものは明気３号窯・５号窯である。第Ⅵ章で述べたように、高塚４号墳出土須恵器の様相も明気３号窯・５号窯出土資料に類似することから、高塚６号墳は高塚４号墳とほぼ同時期に築造されていると推測される。ただし、杯Ｇの口径が高塚４号墳出土のものより大きいことと、厳密には高塚６号墳に伴うものかどうか不明ではあるが須恵器杯Ａと思われるもの（第43図８）が出土していることを参考にすれば、高塚４号墳より若干遅れて築造された可能性も指摘できる[1)]。これらの点からみて、高塚６号墳の築造時期は７世紀中葉～後葉と考えられる。

**墳丘・埋葬施設**　埋葬施設は高塚４号墳と同じく墳丘構築過程で盛土中に設置されており、掘り込み墓壙を持たない。

また、墳丘の構築については、尾根先端部の斜面をうまく利用して構築されていることが判明した。近隣に存在する７世紀代の古墳の中には、高塚６号墳と同じく緩斜面に築造されているものが複数みられる。これらの古墳の中には、河田Ｃ－４号墳[2)]のように高塚６号墳と同様の墳丘構築方法をとってい

る可能性が高いと思われるものも認められる。緩斜面への古墳の築造は、当該地域の７世紀代の古墳の一つの傾向とみることができ、そうした中で傾斜地に古墳を築造するための方法も当該地域の中で共有されていたのであろう。

以上のように、同一尾根上に築造されている高塚４号墳と比較してみると、築造された時期だけではなく、墳形や埋葬施設の形態、墳丘の構築方法など、多くの点で共通性が窺われる。高塚４号墳と高塚６号墳は同じ集団によって営まれた古墳であると考えることができよう。

ただし、尾根の高所を占め、整った方形を呈する高塚４号墳と、尾根の先端部に地形を利用する形で築造されているやや不整形な高塚６号墳というように、ある程度の差が両者の間に見て取れることも確かである。墳丘規模からみれば、高塚４号墳の方が高塚６号墳より３ｍ以上大きい。また副葬品については、土器類と鉄製刀子１点という組合せは両者に共通しているが、高塚４号墳では土器類の器種構成中に須恵器横瓶を含む点にやや優位性が感じられる。棺長も、高塚４号墳の方が長い。こうした点からみれば、高塚４号墳の被葬者の方が高塚６号墳の被葬者より階層的に上位に位置していた可能性も考えられよう。

**註**

1）　杯Aが顕在化してくるのは、明気３号窯・５号窯より後出する原窯跡群の段階であると考えられている（淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産―外城田窯址群の検討―」『Mie history』vol.16　三重歴史文化研究会　2005)。暦年代観については第Ⅵ章第５節参照。

2）　多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986

# 第Ⅷ章　斎宮池19号墳の調査

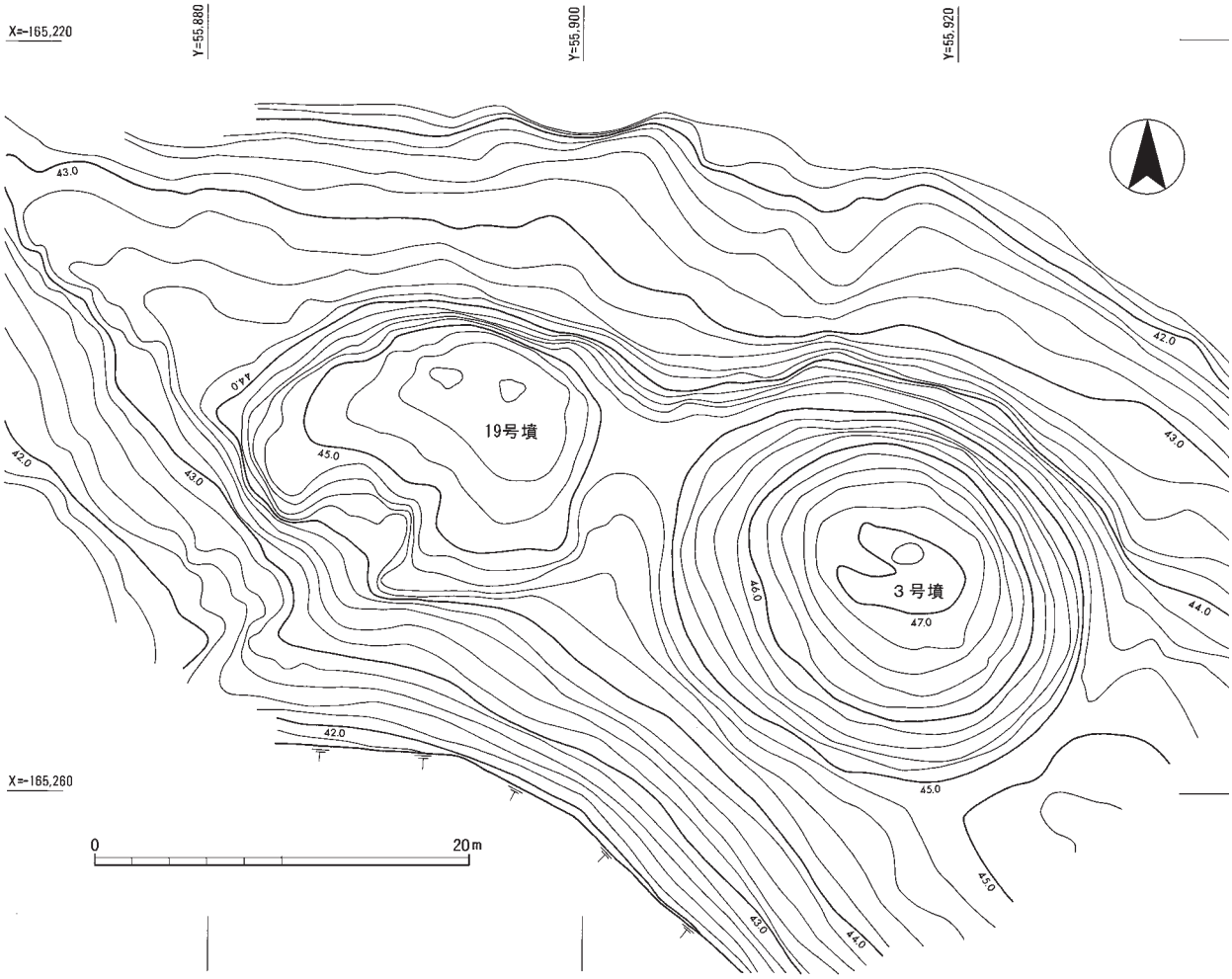
## 第１節　調査の方法

斎宮池19号墳は、平成17年度の分布調査によって新たにその存在が確認された古墳である。分布調査時に、以前より存在が知られていた斎宮池３号墳の北西側に隣接して古墳状の隆起が存在し、その中央部から南西側にかけて盗掘坑の可能性もある落ち込みが存在することが明らかになった。そのため、古墳であるかどうかと、古墳であるとすれば事業地内に墳丘や周溝などが及んでいるかどうかを確認するために、平成20年度に範囲確認調査を行った。

範囲確認調査は、事業地内である墳丘南西裾と北西裾の２箇所に調査坑を設けて行った。その結果、周溝と思われる浅い落ち込みや、墳丘盛土と思われる土層が確認され、また盗掘坑らしき落ち込み付近に設けた南西裾の調査坑から須恵器片も出土し、ほぼ確実に古墳であると判断されるに至った。

この斎宮池19号墳の墳丘のほとんどは事業地外に存在しているが、墳丘の一部が確実に事業地内に入っており工事による影響を受けることと、埋葬施設が撹乱され、周囲に遺物がかき出されている可能性があることから、墳裾の南西側から北西側にかけての部分について、平成21年度に発掘調査を行うこととした。

**掘削作業**　発掘調査に際しては、まず平板を用いて墳丘全体の地形測量を行った[1]（第44図）。その後、表土及び墳丘流出土の掘削作業を開始した。この作業はすべて人力で行った。また、掘削に際しては調




第 44 図　斎宮池３・19 号墳調査前地形測量図（1:400）

査区全体に国土座標の方位軸に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、掘削中に出土した遺物はこのグリッドごとに取り上げた。

表土及び墳丘流出土を除去した結果、地形測量図からも想定されていたように、調査区付近では墳裾がかなり削平を受けていることが判明した。

**墳丘の調査**　表土及び流土除去後に、調査区内の地形測量を行い、その上で墳丘の一部を断ち割って盛土の状況を確認した。ただし、断ち割りを行った範囲はほぼ調査区内に限られたため[2)]、墳丘全体の構築過程や埋葬施設については明らかにすることができなかった。

また、この断ち割り作業によって、墳丘南裾部で溝状遺構が検出された。この遺構は、盛土と推定される土層より下位から検出されたため、遺構の範囲のみ盛土を除去して掘り下げ、検出および内部の掘削を行った。内部の掘削の結果からも、この遺構は斎宮池19号墳の周溝とするには疑問が残ったため、ＳＤ１という遺構名称を別途付与した。

**遺構実測**　調査によって検出されたＳＤ１及び墳丘西側の落ち込みについては、調査区全体に国土座標の方位軸に合わせて３ｍごとに設けた実測用基準点を利用して平面実測を行っている。

**註**

1）　斎宮池19号墳に隣接しており、何らかの関係性が窺われる斎宮池３号墳の地形測量も同時に行った。斎宮池３号墳に関する知見については本章第４節で述べる。

2）　調査区は墳丘付近の事業用地と民地との境界線に接する部分については用地境界から１m近く控えて設定しているが、断ち割りについては調査区外の用地境界付近まで延長している。

## 第２節　墳丘の調査

### ①周溝

斎宮池19号墳の墳丘北側や東側では、明瞭に周溝痕跡と思われるような落ち込みが現地表面で観察できる部分はなく、墳丘の周囲に周溝がめぐらされていたかどうかは不明である。

ただし、斎宮池19号墳の墳丘と墳丘から西側へのびる尾根との境界にあたる部分では、調査区の端で周溝端部とも考えられるような浅い落ち込みが確認された（第45図）。調査区外においても、この落ち込み付近では地形が若干ながら窪んでいる様子が観察できるため、この部分に周溝が存在する可能性もある。

ただし、この周溝状の浅い落ち込みは、墳丘の南側へ続いていく様子は認められない。少なくとも、地形的に傾斜がある墳丘の南西部付近には、確実に周溝が掘られていなかったものと考えられる。

### ②墳丘

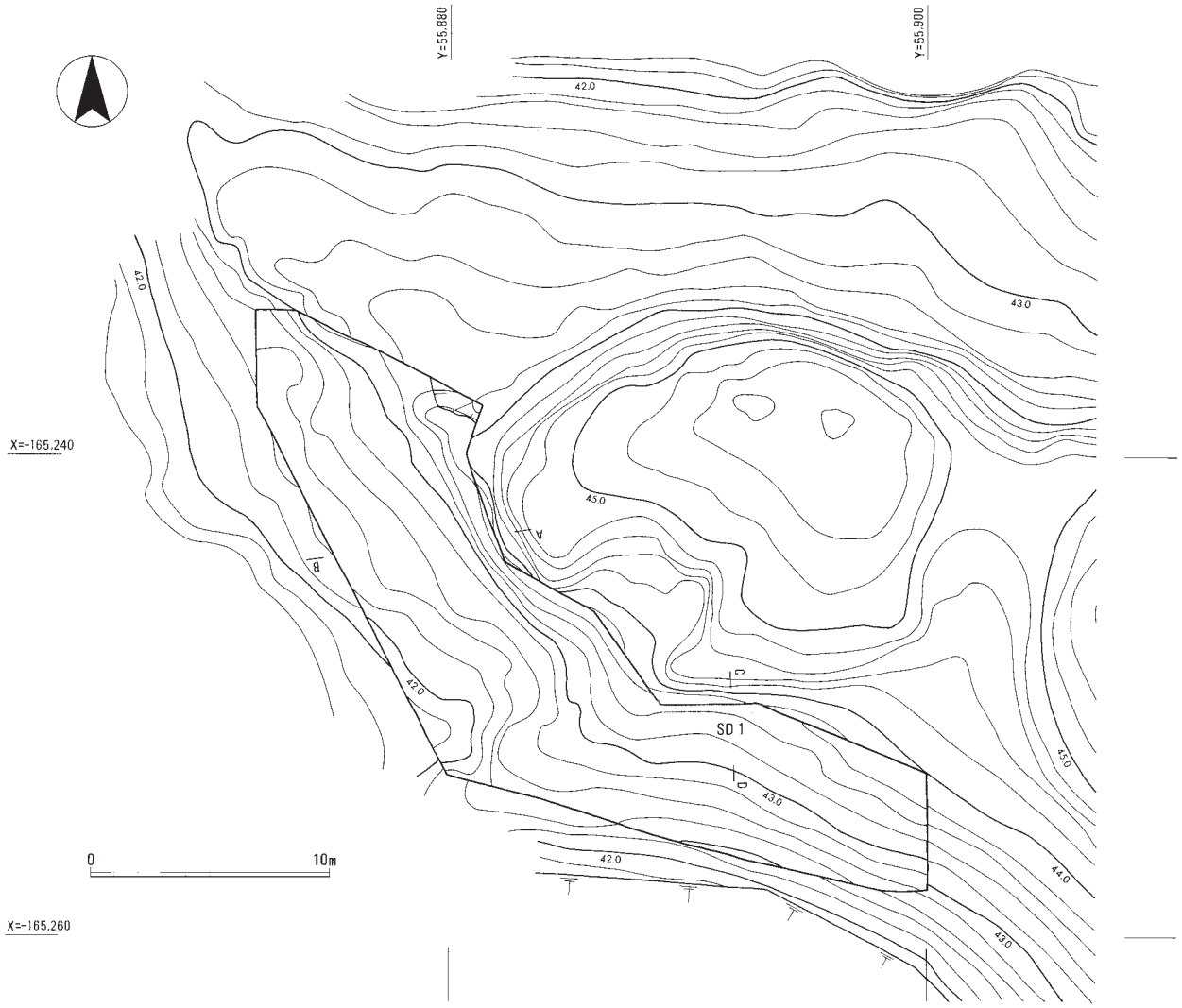
斎宮池19号墳については墳丘のごく一部しか調査を行っていないため、墳丘の状況については不明な部分が多い。地形測量による観察と、部分的な墳丘の断ち割りによって得られた情報について述べておきたい。

**墳丘の現況**　地形測量時の知見から、斎宮池19号墳の墳丘は、かなり後世の改変を受けているものと考えられる（第44図）。墳丘北側については崖状になっており、墳丘裾部が破壊を受けているものと推定される。墳裾より北側には不自然な平坦面が広がっており、この平坦面の造成に伴って削られたものとも考えられる。墳丘の西側から南側にかけても崖状になっており、墳裾が削られている可能性が高い。

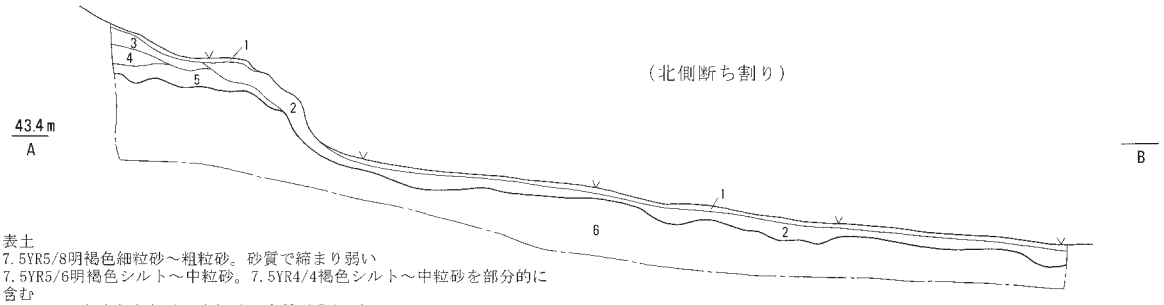
また、墳丘の南西部分には大きな落ち込みが認められる。墳丘の中央部までは達していないようであるが、土取りないしは盗掘によって撹乱を受けているものと思われる。

こうした状況のため、斎宮池19号墳の墳形や規模を明確にすることは難しいが、最も残りが良い斎宮池３号墳と接する部分や西側の尾根へとつながっていく部分などを参考にすれば、おそらく直径19mほどの円墳である可能性が高い。ただし、墳丘の各所で等高線がやや直線的になる部分が確認できるため、方墳である可能性も否定できない。

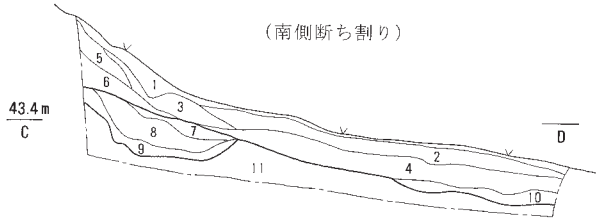
**盛土**　墳丘裾部に２箇所の断ち割りを設けて土層の観察を行った結果、墳丘盛土と思われる土層が確認できた。




第 45 図　斎宮池 19 号墳調査区平面図（1:300）




1　表土
2　7.5YR5/8明褐色細粒砂～粗粒砂。砂質で締まり弱い
3　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
4　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂。均質〔盛土？〕
5　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂と7.5YR5/6明褐色細粒砂～粗粒砂が混じりあう〔盛土もしくは地山土壌化層〕
6　7.5YR6/8橙色中粒砂～極粗粒砂。花崗岩バイラン土〔地山〕




1　表土
2　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂
3　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂を部分的に含む
4　7.5YR5/8明褐色極細粒砂～中粒砂
5　7.5YR5/6明褐色シルト～中粒砂。粘質。締まり強い〔盛土？〕
6　7.5YR5/8明褐色シルト～中粒砂。粘質。締まり強い〔盛土？〕
7　7.5YR4/4褐色シルト～中粒砂。粘質〔ＳＤ１埋土〕
8　7.5YR4/3褐色シルト～中粒砂〔ＳＤ１埋土〕
9　7.5YR4/6褐色シルト～中粒砂。粘質。土器片含む〔ＳＤ１埋土〕
10　5YR5/6明赤褐色極細粒砂～粗粒砂。やや締まり弱い〔地山土壌化層〕
11　5YR5/8明赤褐色細粒砂～極粗粒砂。締まり強い。花崗岩バイラン土〔地山〕

第 46 図　斎宮池 19 号墳墳丘土層断面図（1:60）

南側の断ち割りでは、後述するＳＤ１の埋土の上面に、盛土の可能性が考えられるやや粘質で締まりの良い明褐色土層の堆積が認められた（第46図５・６層）。

北側の断ち割りでは、地山の土壌化層と考えられる土層（第46図５層）の上に30㎝ほどの厚さの堆積層が確認された。その中には均質で締まりが良く、盛土と思われる土層が認められた（第46図４層）。また、地山の上面には旧表土の遺存は認められなかった。

こうした点からみて、斎宮池19号墳は墳丘構築の初期段階においてある程度の地山整形ないしは整地を行った後に、盛土によって墳丘を構築しているものと推定される。

なお、いずれの断ち割りにおいても、墳裾付近は削平を被っているようであり、現状における傾斜変化点が墳端にあたるとは考えにくい。

**ＳＤ１**　墳丘の南側では､溝状遺構が検出された(第47図)。この溝は調査区内ではごく一部しか確認できなかったため、全体の形状については不明であるが、墳丘の南側断ち割りでの情報によれば、幅1.3ｍほどの溝であると思われる。この溝は元々の地形が傾斜している所に掘られているため、北側では深さが40㎝以上あるが、南側では20㎝ほどの深さしかない。また、西側へ向かうにつれて次第に浅くなり、途切れていく。

この溝は斎宮池19号墳の墳裾に沿うように検出されており、一見すると斎宮池19号墳の周溝であるようにもみえるが、周溝とするにはいくつかの疑問点が存在する。

まず、位置的にみれば、現状で確認できる墳丘の下へもぐり込んでいくようにみえる。土層断面においても、溝の埋土（第47図７～９層）の上に盛土と思われる土層（第47図５・６層）が堆積している状況が観察された。

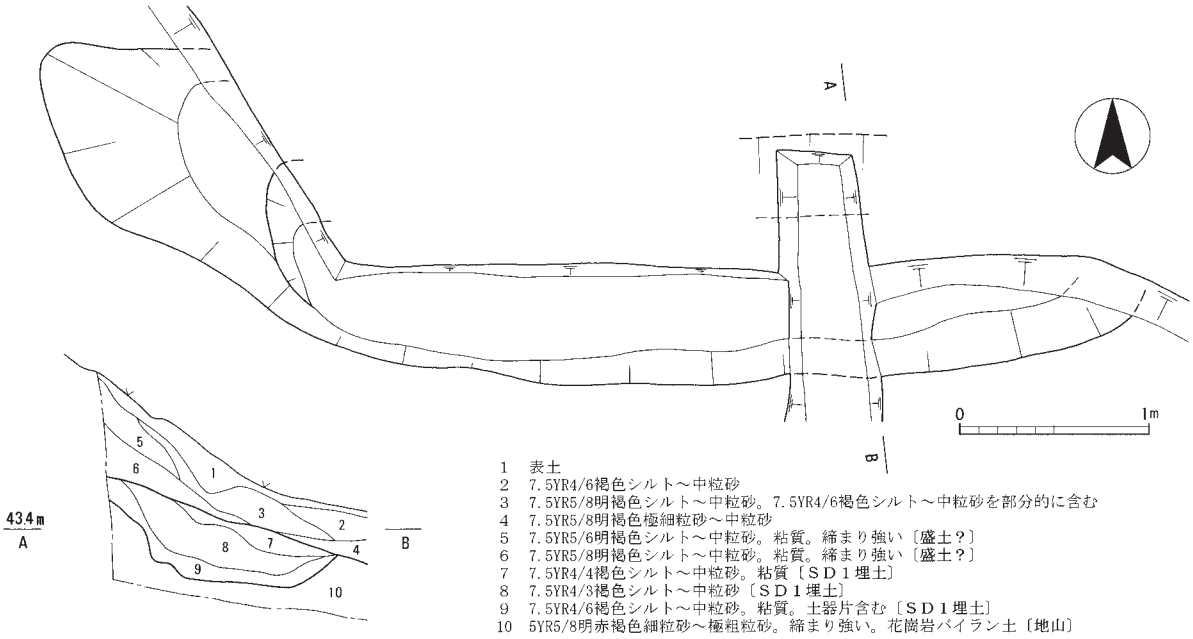
また、内部を掘削した結果、底にほぼ密着する状況で弥生土器が出土した。弥生土器以外の遺物は出土しなかった。

これらの点からみると、現時点ではこの溝を斎宮池19号墳の周溝と考えることは難しいものと思われる。ここでは、古墳築造以前に掘られた溝である可能性が高いものと考えておきたい。こうした理由のため、先述のようにＳＤ１という遺構名を独自に付与した。

## ③埋葬施設

今回の調査では埋葬施設に関する情報はほとんど得ることができなかった。

ただし、墳丘に存在する撹乱坑に全く石材が露出していない点や、調査区内でも石室に使用されたよ




**第47図　ＳＤ１平面図・土層断面図（1:40）**

うな石材は全く出土しなかった点などを考えれば、横穴式石室を埋葬施設としている可能性は低い。墳丘の高さなどからみても、埋葬施設は木棺直葬であるものと推測される。

## 第３節　出土遺物

斎宮池19号墳から出土した遺物は、ＳＤ１から出土した遺物以外は墳丘周囲の表土や流出土中から出土したものである。ＳＤ１から出土した遺物と、それ以外の遺物とに分けて述べたい。

### ①ＳＤ１出土遺物（第48図１）

ＳＤ１の底に密着して弥生土器が出土している。同一個体と思われる破片も付近から数点出土した。

**弥生土器**（１）　１は弥生土器の甕の底部である。平底で、外面をタテハケによって調整している。内面調整は風化によって不明瞭であるが、ナデによって調整しているようである。弥生時代中期のものであると思われれる。

### ②その他の遺物（第48図２～５）

表土や流出土中から出土した遺物、あるいは調査時に調査区周辺で採集された遺物には、縄文時代のものと古墳時代のものとがある。

縄文時代の遺物としては、土器と石器が出土している。古墳時代の遺物としては、土師器と須恵器が出土しているが、土師器は細片のみで図化できるものはなかった。

**縄文土器**（２）　包含層掘削中に出土したものである。深鉢の口縁部の破片で、口縁端部にＯ字形の指頭押圧を連続して施す突帯を巡らせている。縄文時代晩期のものと考えられる。

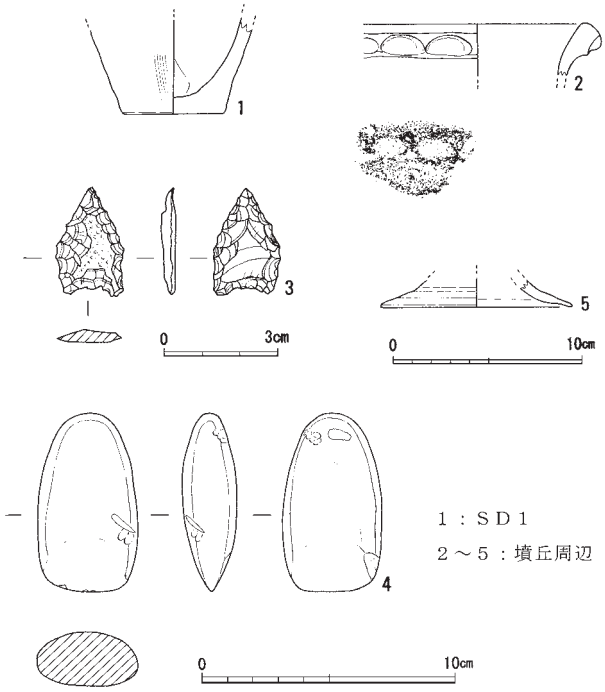
**石器**（３・４）　３は調査区付近で採集された灰色チャート製の打製石鏃である。長さ2.9㎝で、やや肩が張り五角形をなす。片面には石材の表皮を残しており、原材が転礫であったことが窺われる。形態からみて縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられる。

４は範囲確認調査時に墳丘西側の調査坑から出土した両刃の小型磨製石斧である。石英斑岩製で、石材はやや軟質である。全体を研磨しており、特に刃部付近の研磨は丁寧である。側面には明瞭な面をもたない。付近の斎宮池遺跡では同じ石材を用いて製作された磨製石斧が複数出土しており[1]、この石斧も縄文時代中期から後期にかけてのものであると思われる。

**須恵器**（５）　５は範囲確認調査時に墳丘西側の調査坑から出土した。高杯の脚端部片であると思われる。小片で、全体の形状は不明であるが、小型の高杯と考えられる。端部は丸く収めている。詳細な時期は不明であるが、おそらく古墳時代後期から終末期にかけてのものと考えられる。

**註**

1）　三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第６号　2008




第48図　斎宮池19号墳出土遺物実測図
（1:4、３は1:2、４は1:3）

## 第４節　小結

斎宮池19号墳は墳丘のごく一部の調査にとどまったが、いくつかの成果を得ることができた。

**墳形・築造時期**　墳丘の地形測量からは径19mほどの円墳と推定でき、墳丘周辺から出土した須恵器から、古墳時代後期以降に築造された古墳である可能性が高まった。埴輪が全く出土しなかったことからも、後期に築造された可能性が高いものと推測される。

斎宮池19号墳は玉城丘陵に存在する後期古墳の中では大型の部類に属するが、こうした径20m近い円墳が後期に築造され、しかも埋葬施設が木棺直葬である可能性が高いことは、斎宮池古墳群の特徴を考える上で重要な情報であろう。

**斎宮池３号墳**　なお、斎宮池19号墳の地形測量を行った際に、隣接する斎宮池３号墳の地形測量も行っている（第44図）。測量図からみて、斎宮池３号墳は径約24mの円墳であると考えられる。墳丘の遺存状況は良好であり、ほぼ完存している。墳丘の高さは現状で２mほどあり、やや腰高である。

墳丘は南東から北西へ向かってのびる尾根上に築造されており、墳丘の南東裾部には尾根を切断するように掘られた周溝の痕跡が、窪地となって明瞭に残っている。周溝痕跡が認められるのはこの部分のみであり、地形的に高くなっている部分に限って周溝を設けているものと想定される。現状では葺石は認められない。

また、斎宮池19号墳同様に、墳丘の北側には墳裾に沿って幅５mほどの平坦面が認められる。この平坦面については、古墳築造に伴う整地か、後世の削平かは不明である。

墳頂部にはわずかながら窪地が認められ、埋葬施設が盗掘などによって撹乱されている可能性もある。石材の露出などは確認できず、埋葬施設については不明である。

このように、斎宮池３号墳もかなり大型の古墳であることが判明した。群としては散在的である斎宮池古墳群の中にあって、斎宮池３号墳と19号墳の２基の古墳が隣接して築造されている点は、斎宮池古墳群の群構成を考える上で注目される。

**古墳時代以前の遺物・遺構**　このほか、縄文時代や弥生時代の遺物が少数ながら確認されたことから、付近が縄文時代から弥生時代にかけて人々の活動の場となっていたことが窺われる。

縄文時代の遺構そのものは検出されず、土器の出土量もごくわずかであったため、付近に居住域が存在したとは考えにくい。丘陵地で狩猟・採集などの生業活動を行っていた痕跡であると考えられよう。第Ⅵ章で報告したように、高塚４号墳の付近でも縄文時代のものと思われる敲石が出土しており、玉城丘陵が広く縄文時代の生業活動の場となっていたことが推測できる。

ＳＤ１については弥生時代中期の遺構の可能性もあるが、現状では性格は不明である。弥生土器はＳＤ１埋土以外から全く出土していない点を考えれば､やはり付近に居住域が存在したとは考えにくい。弥生時代の遺構とすれば、墳墓などである可能性も考えられよう。

# 第Ⅸ章　自然科学分析

## 第１節　分析試料と分析の目的

### ①分析試料と取り扱い

宮川用水第二期土地改良事業に関わる古墳の調査において、自然科学分析を行う対象とした試料は、高塚４号墳の埋葬施設内に副葬されていた須恵器内部に遺存していた土壌の１点のみである。

分析対象とした土壌が入っていた須恵器は、検出時には杯と杯蓋がぴったりと合わさった状態であり、内部に何らかの物質、特に有機質の遺物が遺存していることが想定された。そのため、取り上げる時にも蓋を外すことは避け、蓋がされたままの状態で取り上げた。

しかしながら、取り上げ時に杯の口縁部に打ち欠きがなされていることが判明し、そこから内部へ土壌が流入していることが確認された[1)]。このことから、内部に有機質が良好な状態で遺存している可能性は低くなったが、土壌の洗い出しによって内容物の推定につながるような微細物が検出される可能性も考慮し、内部に遺存していた土壌を分析の対象とすることとした。

そこで、当該須恵器は取り上げ時の状態のままチャック付のビニール袋に入れて埋蔵文化財センターに持ち帰り、内部の土壌の取り出し等は、分析作業の受託者が決定した後に、調査担当者立ち会いの下で受託者の手によって行った。

### ②分析の目的

古墳時代後期から終末期にかけての古墳や横穴墓の埋葬施設から、しばしば須恵器や土師器などの土器に入れられた状態で有機質遺物が発見されることは、周知の通りである。発見される有機質遺物の種類としては、ハマグリ・シジミ・サザエなどの貝類の貝殻が圧倒的に多いが、ニゴイ・ウナギなどの魚類の骨やモモ・イネなどの植物の種子が検出されている例がある。ほかにもごく少数ながら、鳥類の骨やウシやシカなどの哺乳類の骨、さらにはウニやイセエビなどの殻が検出された例もみられる。これらはいずれも食用となるものであり、葬送儀礼や埋葬に際しての食物供献、あるいは副葬習俗の一端を示すものと考えられている[2)]。

高塚４号墳の近隣においても、伊勢市昼河Ａ２号墳で重ねて置かれた須恵器杯蓋の内面に有機質が遺存していることが確認されている[3)]。志摩地域でも、南伊勢町宮山古墳でトコブシやアワビが入れられた須恵器蓋杯が出土している[4)]。こうした近隣地域の事例の存在からみても、高塚４号墳でも須恵器内に食物が入れられていた可能性は十分に考えられる状況であった。もし、高塚４号墳で須恵器内にどのような食物を入れて副葬したかという点を明らかにすることができれば、当該地域における葬送儀礼や副葬習俗、さらには食生活の一端を窺う上で、貴重な資料の蓄積となると考えられる。

以上のような点を踏まえて、須恵器内の土壌に混じって貝殻・骨・植物種子の細片などが遺存している可能性を想定し、そうした微細遺物の土壌内からの検出を目的とする洗い出し作業を専門設備の整った機関へ委託して行うこととした。また、微細遺物が検出された場合、その微細遺物の種類の同定も行うこととした。

**註**

1）　須恵器が副葬されている付近の土層には植物の根が入り込んでいるような状況は認められなかった。したがって、須恵器の内部にまで根が侵入しているとは考えがたい状況であった。

2）　木村幾多郎「古墳出土の動物遺存体（上）―食物供献―」『九州文化史研究所紀要』第35号　九州大学九州文化史研究施設　1990、米田文孝「自然遺物」『古墳時代の研究』第８巻古墳Ⅱ副葬品　雄山閣　1991、中原計「古墳時代後期における葬送儀礼の系譜―須恵器内検出有機物の検討―」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団　2005

３）　伊勢市教育委員会『昼河古墳群』　1993
４）　関西大学文学部考古学研究室『紀伊半島の文化史的研究』　考古学編　1992

# 第２節　高塚４号墳の自然科学分析

## ①はじめに

今回の分析調査では、木棺内に副葬された須恵器内に残存した土壌の洗い出しにより、貝、魚骨、種実、昆虫など微細遺物の検出を試みる。検出された微細遺物に関しては、種類の同定を行い、供物など葬送儀礼の様相に関する情報を得る。

## ②試料

試料は、木棺直葬の古墳において出土した、木棺内に副葬された杯身と杯蓋が合わさった状態の須恵器内の土壌である。２袋に分かれているが同一試料である。なお、須恵器からの土壌試料採取過程において、石状物質と須恵器片が確認されている。

## ③分析方法

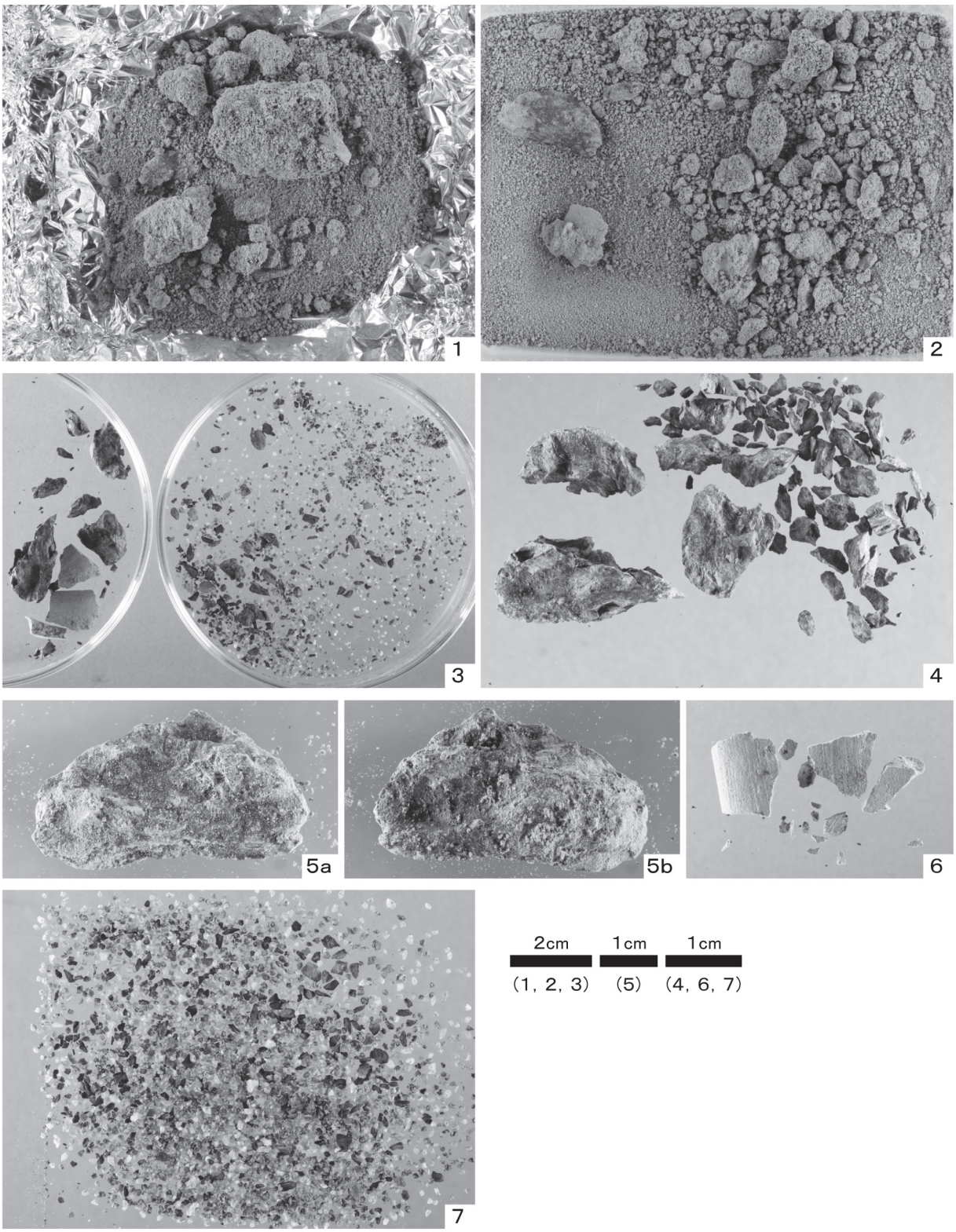
試料の概観や塊状試料の様子を写真で記録したあと、試料全て(76.56ｇ)を水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて須恵器片や石状物質を抽出する。検出物は、70℃48時間乾燥後の重量と最大径を求める。分析後は、検出物と残渣を容器に入れて保管する。一方、石状物質に付着していた土壌は、一部を水洗前に掻き取り、プレパラートを作成し観察した。また、石状物質は表面を水洗後に表面を観察し、その由来を調べた。

## ④結果・考察

土壌水洗の結果は、須恵器片1.33ｇ(最大径1.5㎝。径１㎝以上３個、１㎝未満10個程度)、石状物質3.60ｇ(最大2.5㎝。径１㎝以上５個)が検出されたのみである。期待された貝、魚骨、種実、昆虫など微細遺物は検出されなかった。また、分析残渣(微細な岩石状物質や鉱物片)は0.94ｇであった。

石状物質付着土壌のプレパラート観察の結果、１個体ではあるが、植物繊維片が認められた。一部に珪化した細胞を含むが、特徴的な形態を呈する植物珪酸体が見られず、種類の特定には至らない。この他には植物珪酸体や珪化組織片が認められず、粘土～シルト粒子のみであった。

石状物質の外見は黒灰色を呈し、硬く固結しているが、スレート状に小片が剥離している。実体顕微鏡による観察では、粘土質の粒子により構成されており、シルト径の石英が極めて微量含まれている。これらの特徴から、石状物質とされたものは、変成岩の一種である粘板岩に同定される。高塚古墳群の所在する明和町すなわち伊勢平野南部周辺でみれば、粘板岩は、志摩半島から和歌山市まで紀伊半島を横切って分布する変成岩帯である三波川帯の中に認められている。　(パリノ・サーヴェイ株式会社)




1．水洗前試料（小容器）
2．水洗前試料（大容器）
3．水洗後試料
4．石状物質（粘板岩）
5．石状物質（粘板岩）
6．須恵器片
7．分析残渣

第 49 図　土器内容物

# 第Ｘ章　調査のまとめと考察

## 第１節　各古墳の時期と古墳群の様相

### ①各古墳の時期

今回の調査では、各古墳より副葬品などの遺物が出土した。これらの遺物によって、各古墳の築造時期の想定が可能となった。各章においても個別に述べているが、ここで改めてまとめておきたい。

まず、小金古墳群に含まれる古墳についてみていきたい。

小金３号墳は出土した須恵器からみて、６世紀末のＴＫ209型式期に築造された可能性が高い。波状文を施し、三方に透孔をあける須恵器高杯の脚部が存在することからは、ＴＫ209型式期でも古い段階に位置づけられようか。横穴式石室の規模や形態からみても、ＴＫ209型式期よりさらに時期が下る可能性は低いだろう。

小金12号墳については副葬品が少なく、時期的な位置づけに苦慮するところであるが、石製紡錘車が副葬されていた点からみて、少なくとも石製紡錘車の副葬が各地で見られるようになる古墳時代中期後半以降に位置づけられる。周辺地域の出土例との比較からさらに時期を絞り込めば、第Ｖ章で述べられている通り、古墳時代後期後半の６世紀後半～末頃に築造されたものである可能性が高い[1)]。

周溝の一部のみの調査である小金４号墳については、時期を判断しうる手がかりがほとんど皆無である。ただし、この古墳の周溝と小金12号墳の周溝との重複関係が、調査中にかなり検討したにもかかわらず判然としなかった点を積極的に評価すれば、小金12号墳と近い時期に築造されたと想定できるのではなかろうか。

なお、小金２号墳については出土遺物がほぼ皆無であり、築造時期は不明である。

次に、高塚古墳群であるが、高塚２号墳は範囲確認調査時に出土した埴輪や、過去に採集された埴輪などからみて、５世紀後葉の古墳時代中期後葉に位置づけることができる。

一方、同じ高塚古墳群中の古墳でも、高塚４・６号墳は出土した須恵器からみて７世紀中葉～後葉に位置づけられ、いわゆる終末期古墳に属するものである。高塚３号墳は、現況の地形からは古墳とすることに躊躇を覚えるが、範囲確認調査時に７世紀代に属すると考えられる須恵器杯が墳裾から採集されており[2)]、古墳であるとすればやはり終末期に属するものであろう。

最後に、斎宮池古墳群であるが、この古墳群については斎宮池19号墳の墳丘のごく一部を調査したに過ぎない。古墳時代の遺物としては須恵器高杯の破片が１点出土したのみであり、時期の比定は難しい。ただし、第Ⅷ章で述べたとおり、築造時期は古墳時代後期である可能性が考えられる。

### ②群形成の様相

さて、以上のように各古墳の時期をみていくと、小金古墳群のように古墳時代後期後半に形成された古墳群と、高塚古墳群のように古墳時代終末期に形成された古墳群が存在することが窺われる。

**後期の古墳群の様相**　小金古墳群については、小金２号墳と小金３号墳との距離は比較的近いものの、小金３号墳と小金４・12号墳との間がかなり離れており、一つのまとまりを持つ古墳群として把握してよいかどうか判断に迷うところである。また、隣接する上村池古墳群や池村古墳群との境界も不明瞭である。

一方で、小金４号墳と小金12号墳は周溝を共有するように築造されており、この両者については何らかの関係をもって築造されたことは間違いないものと思われる。

今回の調査で判明したように、小金３号墳と小金４・12号墳が比較的近い時期に築造されていると考えられる点から、現状で小金古墳群として把握されている古墳群は[3)]、古墳時代後期後半頃に次々と同じ尾根上に築造されたものであり、その中には２基

程度の古墳が接して築造されているような小単位も含まれることが窺われる。

こうした群形成の様相は、斎宮池古墳群においても認められる。斎宮池３号墳と斎宮池19号墳はほぼ接して築造されており、両者の間には何らかの関係があったことが窺われる。一方で、同じ斎宮池古墳群に含まれている古墳はかなり散在的に築造されており、小金古墳群同様に一つの古墳群として把握してよいかどうか迷うような状況である。

このように、今回調査を行った古墳時代後期の古墳群では、多数の古墳が密集する様子はなく、１～数基の古墳が一つの単位となっており、その小単位が尾根上に散在的に築造されて古墳群を形成している様子が窺われる。これらの古墳群では、小金古墳群のほか、明和町上村池古墳群[4]にもみられるように、埋葬施設が木棺直葬の古墳と、横穴式石室や小型石室の古墳とが混在している。

なお、これらの後期古墳はいずれも尾根上のやや独立的な高まりとなっている部分の頂部を中心に築造されているが、玉城丘陵は地質的な要因から尾根上に独立的な高まりが多く形成されており、こうした地形環境が古墳群の形成のあり方に影響を与えている可能性も考えられる。

**終末期の古墳群の様相**　高塚古墳群については、明らかに最も大型の高塚１号墳とそれに後続すると考えられる高塚２号墳からなる古墳時代中期のまとまりと、高塚４・６号墳からなる古墳時代終末期のまとまりとに分かれている。その間の時期的空白は大きく、両者は異なった形成背景を持つ別個の群として把握すべきであろう。

高塚４・６号墳は調査によって、ほぼ同時期の古墳であることが判明した。２基で一つの単位を形成しており、その点では玉城丘陵の古墳時代後期の古墳群の小単位と似たあり方を示す。高塚３号墳も終末期古墳である可能性があるが、古墳時代終末期にも基本的に数基の古墳によって一つの小単位を形成していたことが窺われる。ただし、小金４・12号墳、斎宮池３・19号墳のように密接して築造されているのではなく、少し距離をおいて築造されている点が異なっているようにも思われる。

また、その立地も若干異なる。高塚４・６号墳は尾根上の独立的な高まりではなく、そうした高まりから下っていく小さな支尾根上に地形の傾斜をうまく利用して築造されている。

こうした古墳時代終末期における数基程度からなる群形成のあり方は、玉城丘陵やその周辺では、多気町女山古墳群[5]などで近いものが認められる。高塚古墳群と同様に玉城丘陵中央部に位置する明和町等峯Ａ古墳群[6]なども可能性があろう[7]。

一方で、多気町河田古墳群Ｃ支群[8]のように、集塊状に密集して築造されている終末期群集墳と呼びうるようなものも存在している（第50図）。時期は不詳であるが、玉城町朝久田古墳群[9]や明和町垣場古墳群[10]のように小規模な古墳が集塊状に密集する形態の古墳群が主に玉城丘陵の縁辺部を中心に存在しており、こうした古墳群も河田古墳群Ｃ支群と同様の終末期群集墳である可能性も考えられる。

このようにみてくると、玉城丘陵やその周辺の古墳時代終末期における古墳群の形成のあり方は一様ではないようである。大きくみれば、玉城丘陵の縁辺部に形成された古墳群と、玉城丘陵中央部に形成された古墳群とでは、群形成のあり方に差異があった可能性が指摘できる。この差異については、高塚古墳群は第Ⅵ章で述べたように玉城丘陵の古墳の中でも最末期に築造されたとみられるため、時期的な差が関係している可能性も高い。終末期前半の玉城

**第50図　河田古墳群Ｃ支群（1:800）**
※多気町教育委員会1986より転載

丘陵縁辺部での集中的な古墳築造が終息を迎える頃に、墓域自体が玉城丘陵中央部などそれまでと異なる地区へと移動し、古墳の築造数自体も減少していったとも考えられよう。

**註**

1）　近畿地方では古墳時代中期前半の５世紀前半から石製紡錘車副葬例が見られるが、増加傾向は５世紀末から認められるようである。また、盛行期は６世紀後半～７世紀初頭にあるとされ、南勢地域でもその時期の例が多い。石製紡錘車については以下の文献を参照した。
江浦洋「滑石製紡錘車」『太井遺跡（その２）』　大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター　1987、河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie history』vol. 3　三重歴史文化研究会　1991、角南聡一郎「古墳副葬・供献紡錘車の検討―近畿地方を中心に―」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団　2005

2）　附章第１節参照。

3）　玉城丘陵における古墳群の単位の把握は、基本的に尾根単位で行われているが、分布上の区分は明瞭ではなく、あくまで目安に過ぎない。上村池古墳群のように、かなり広範に分布する古墳が一つの群としてまとめられている場合もある。なお、玉城丘陵に存在する各古墳群は、大きな目で見れば、「玉城丘陵古墳群」の一支群であるとの見方もできよう。

4）　多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986

5）　多気町教育委員会『大阪変圧器ＫＫ三重工場埋蔵文化財発掘調査報告』　1974

6）　多気町教育委員会1986

7）　玉城丘陵の中央部に形成された古墳群では、上村池古墳群の中にも数基単位からなる終末期古墳群が含まれている可能性があろう。

8）　多気町教育委員会1986

9）　玉城町史編纂委員会（編）『玉城町史』上巻　玉城町　1995

10）　明和町史編さん委員会（編）『明和町史』史料編第１巻　明和町　2004

## 第２節　高塚４・６号墳の墳丘構築と埋葬について

宮川用水第二期地区土地改良事業にかかる古墳の調査においては、墳丘の遺存状況が良好な古墳をいくつか調査できた点が特筆される。中でも高塚４号墳と高塚６号墳については、墳丘構築途中に木棺を安置して埋葬を行い、その後さらに墳丘構築を行って古墳を完成させている様相が明瞭に確認された。

高塚４・６号墳のような例の存在は、第Ⅵ章第５節で述べたように、明和町明星古墳群[1]など南勢地域の他の終末期古墳群でも指摘されている。ただし、古墳時代研究の中で墳丘構築方法に対する研究が長らく低調であったこともあり、注意されることは少なかった。そのため、当該地域にこうした事例が存在することがそれほど認識されておらず、またその位置づけも進んでいない。

しかしながら、南勢地域では、古墳時代後期後半以降も横穴式石室の普及が進まず、木棺直葬の埋葬施設が盛行し続ける点が特徴的であることが注意されている[2]。こうした古墳時代後期後半～終末期にまで造られ続けた木棺直葬墳の系譜や性格を考える上でも、墳丘そのものの構築方法は重要な情報の一つとなるであろう。

ここでは、今後の当該地域における古墳調査に資する意味も含めて、高塚４・６号墳の墳丘の特徴や構築過程についてまとめ、若干の検討を加えておきたい。

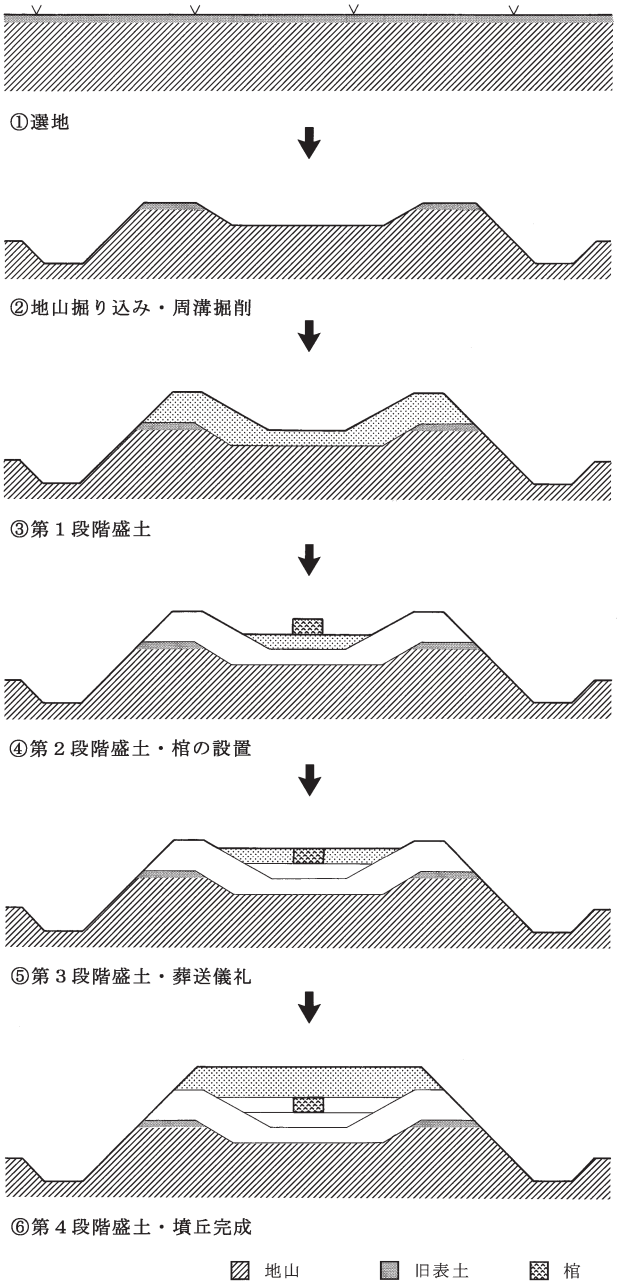
### ①墳丘構築における特徴

**墳丘構築過程と埋葬のタイミング**　まず、高塚４・６号墳の墳丘の構築と埋葬が行われるタイミングとがどのような関係にあるかを確認しておく。

高塚４号墳を例にとってみると、まず地山に土坑状の掘り込みがなされた後に[3]、そこへ第１段階盛土を流し込むことによって墓壙状の凹みが作られる（第51図）。

次に、第２段階盛土によって木棺設置のための面が作られる。埋葬が行われる前には、墳丘はまだ半分程度しか造られていなかったことが分かる。

その後、木棺が運び込まれ、墳丘に設置される。そして、第３段階盛土が木棺の周囲に流し込まれ、棺の安定が図られると同時に、葬送儀礼を執り行う




**第51図　高塚４号墳墳丘構築過程模式図**

ための面が整備される。この段階でどの程度の葬送儀礼が行われたかは明らかではないが、高塚４号墳では棺内への副葬品の配置はこの段階で行われたと考えられ、また高塚６号墳の場合は棺外への副葬品の配置が行われている。

葬送儀礼終了後、再び墳丘の構築が開始される。第４段階盛土によって木棺を埋めると同時に第１段階盛土によって生じた墓壙状の凹みも完全に埋め戻し、更に盛土を盛り上げて墳丘の高さを増していく。最後にある程度の整形を行い、高塚４号墳が完成したものと思われる。

**墓壙について**　このようにして築造された古墳の最も分かりやすい形態上の特徴は、明瞭な墓壙をもたない点である。これまで、古墳の墓壙についてはいくつかの分類がなされてきているが、その中でも基礎的なものとなっている和田晴吾による研究によれば、高塚４・６号墳のような例は「無墓壙」とされるものにあたるであろう[4]。ただし、墳丘構築前の地山への掘り込みと第１段階盛土によって不明瞭ながらも墓壙状の凹みを作り出していることからは、「構築墓壙」とされるものに近い要素ももっているといえる。

和田晴吾の分類を、竪穴系・横穴系という視点及び、地山と盛土との関係を重視して再検討した筌瀬明宏による分類では、高塚４号墳の例は周溝内などの排土を用いて墓壙を構築するＢ１類ないしＢ２類に該当するものとみられる。このＢ１類・Ｂ２類は和田晴吾による分類の構築墓壙に相当するものとされている[5]。

このように、高塚４・６号墳については無墓壙と構築墓壙のどちらともとれる様子を呈している。ただし、高塚４号墳の様相をみると、第１段階盛土によって生じた凹みの壁の立ち上がりの傾斜はかなり緩やかであり、平面形も不整形であるため、「壙」というよりは「凹み」にすぎない。棺を収める穴としての墓壙の役割はほとんど果たしておらず、どちらかといえば、各地の古墳で多く確認されている「土手状盛土」とされるようなものと同じく、以降の盛土の土留め的な意味合いの方が大きいように思われる[6]。これらの点からみれば、高塚４・６号墳は無墓壙であると捉えた方が妥当であろう。

## ②南勢地域における類例とその他の事例

さて、こうした高塚４・６号墳のような例は南勢地域においてはどの程度認められるのであろうか。そして、何らかの特徴的な点を見いだすことができるのであろうか。墳丘盛土の状況が詳細に判明する例がそれほど多くないため、墓壙の状況を手がかりにみていきたい。

**無墓壙の類例**　高塚４・６号墳と同じく無墓壙と考えられる古墳としては、既に指摘されている明星１

・６号墳のほか、第Ⅵ章では河田Ｃ－９号墳や松阪市大分山９・12号墳[7]、多気町森出７号墳[8]などにもその可能性があることを指摘した。

このほか、女山４号墳では木棺の直下の地山に浅い掘り込みがあることから、盛土の上から墓壙を掘り込んでいるとも考えられるが、墳丘の土層断面図からは墓壙の掘り込みは明確に認識できず、地山の掘り込みは棺を設置するためのものであるとみられる。大分山10号墳でも地山に掘り込みを設けて棺を設置しているが、棺全体を収めるようなものではなく、調査においても墓壙の存在は不明瞭であったとされる。こうした例についても、棺設置のために若干の掘り込みを伴う無墓壙タイプの古墳であると捉えることができるのではなかろうか[9]。

**掘り込み墓壙**　一方で、玉城丘陵やその周辺に存在する古墳の中でも、以上のような例とは異なって、明確に墓壙を掘り込んで棺を設置したと考えられる古墳が認められる。

玉城町カリコ古墳[10]では、４基の埋葬施設が検出されているが、そのいずれもが墳丘を盛土によってほぼ構築した後に墓壙を掘り込んでいることが明らかである（第52図）。明和町世古６号墳[11]でも、ある程度盛土を盛って墳丘を形成した後に、墓壙を掘り込んでいるようである。少なくとも、第１主体と重複して設けられている第２主体については後から墓壙を掘り込んで棺を設置していることは間違いないであろう。多気町明気８号墳[12]についても、深さ1.2mほど地山を掘り込んで墓壙が設けられている。

また、大分山古墳群には先に無墓壙の例として挙げたいくつかの古墳が含まれているが、大分山５・８号墳の２基については明らかに盛土上から墓壙が掘り込まれている。河田古墳群についても、河田Ａ－３号墳やＣ-11号墳のように確実に墓壙が掘り込まれているものが認められる。このうち、河田Ｃ-11号墳では墳丘形成前に地山に墓壙を掘り込んで埋葬を行っているようである。

**四つの類型**　以上を整理すると、古墳時代後期～終末期にかけての南勢地域の古墳には、墓壙という観点からみて少なくとも四つの類型が存在していることが窺われる。これに、便宜上からｉ～ⅳ類の名称を与えておく。

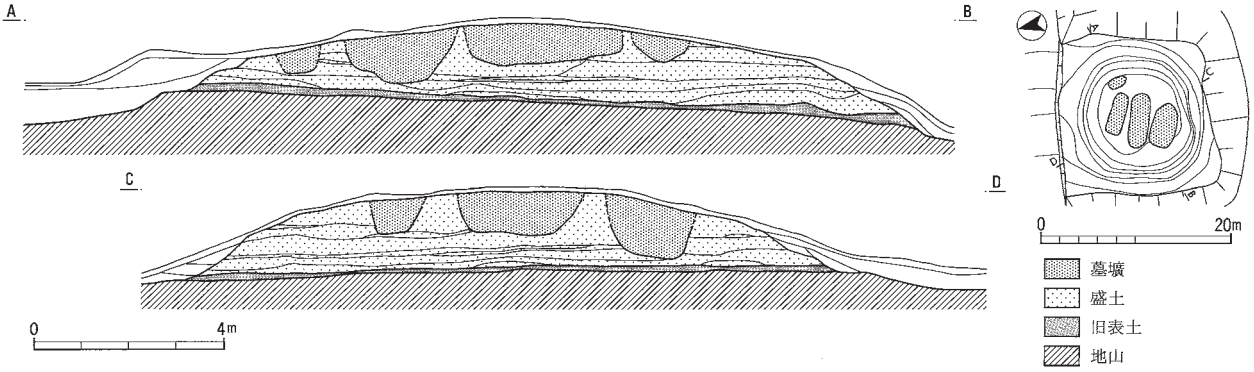
（ｉ類）高塚４・６号墳のような無墓壙タイプのもので、ある程度盛土を盛ってからその上に棺を設置するため、棺は完全に盛土中に位置することとなる。和田晴吾の分類の「無墓壙」にあたる。

（ⅱ類）女山４号墳のような、無墓壙タイプでも地山上に直接棺を設置するものである。棺の設置に先立って、棺を安定させるために棺程度の大きさに若干の掘り込みを行う。無墓壙ではあるが、和田晴吾の分類の「掘り込み墓壙ｃ類」にも近い要素を持つものといえる。

（ⅲ類）世古６号墳のような、ある程度盛り土を盛ってから墓壙を掘り込んで棺を設置する、掘り込み墓壙タイプのものである。和田晴吾の分類では「掘り込み墓壙ｂ類」にあたる。

（ⅳ類）河田Ｃ-11号墳のような、盛土を盛る前に地山に墓壙を掘り込んで棺を設置し、埋葬を行い、その後に墳丘を構築するものである。和田晴吾の分類の「掘り込み墓壙ｃ類」にあたる。

この四つの類型は、単純に墓壙の形態の差にはとどまらない意味を持つ可能性がある。




**第52図　カリコ古墳墳丘土層断面図（1:160）**　※玉城町郷土会1972より一部改変再トレース

和田晴吾による墓壙の類型化においては、墳丘構築と埋葬のタイミングとの関係に関する差異が意識されていた。それをさらに進めて細分・整理を行った杉井健は、墓壙の掘削あるいは埋葬施設の構築が墳丘築造のどの段階で行われるのか、そして埋葬施設の基底部が盛土中と地山上のどちらに置かれているのか、という２つの視点を加えて分類を行っている[13]。この分類は主に横穴式石室を主眼として行われたものであるが、この分類を木棺直葬にも適用するならば、先の四つの類型のうちⅰ類・ⅱ類の二類型は、「無墓壙・墳丘築造途上タイプ・盛土基盤型」と「無墓壙・墳丘築造以前タイプ・地山基盤型」に相当する。前者では墳丘構築の途中で埋葬が行われるのであり、後者では墳丘構築以前に埋葬が行われるのである。この差がどれほど有意なものかは今後の検討課題であろうが、墳丘構築過程における埋葬のタイミングに若干の差がある可能性が考えられるのである。

また、ⅰ類とⅲ類は両者とも墳丘構築途中で埋葬を行うものであるが、盛土の安定などを考慮に入れた場合には墳丘構築と埋葬のタイミングに若干の差がある可能性も指摘されている[14]。

## ③墳丘構築及び埋葬における変化

さて、では本節で挙げた四つの類型は、南勢地域においてどのように位置づけられるのであろうか。

ここで一つ注目されるのは、時期的な位置づけである。先にⅰ類の例として挙げたものは、ほぼすべてが７世紀代の終末期古墳である。ⅱ類はやや時期に幅があるようであるが、やはり７世紀代の古墳が含まれている。

それに対して、ⅲ類については例として挙げた古墳の多くが６世紀代、下っても７世紀初頭までの時期に属するものである。大分山古墳群にはⅰ～ⅲ類が混在するが、ⅰ・ⅱ類の古墳が７世紀代に位置づけられるのに対して、ⅲ類に属する大分山５・８号墳の２基は、副葬品からみて明らかに５世紀末～６世紀に位置づけられる古墳である。

このように見てくると、古墳時代終末期にいたって古墳の墳丘の構築方法、そして墳丘構築と埋葬のタイミングとの関係に変化が生じている可能性が指摘できるのではなかろうか。

この時期的変化には、一つの墳丘への埋葬者数の変化も関係する可能性がある。既に埋葬が行われている古墳へ追加で埋葬を行う場合、必ず墓壙を掘り込む必要がある。実際に、ⅲ類に属する古墳には複数の埋葬施設が存在する例が多い。先にあげた事例でも、カリコ古墳では４基、世古６号墳では２基の埋葬施設が存在している。古墳時代後期にはこうした複数埋葬を行う古墳が多く、ⅲ類が目立つのもこうした点を背景としたものであろう。

一方、ⅰ類・ⅱ類の古墳では高塚４・６号墳のような単数埋葬のものが目立つ。南勢地域でも古墳時代終末期には単数埋葬の傾向が強まるが、それに伴ってⅰ類やⅱ類に属する古墳が増えるものと思われる。これらの古墳では、最初から追加で埋葬を行うという意識がなかったとも想像できるのではなかろうか。墓壙を掘る・掘らないという点には、こうした意識の違いも反映されている可能性も考えることができよう。

ただし、古墳時代終末期の無墓壙タイプの墳丘構築方法がどのような系統のものであるのかは不明である。南勢地域では古墳時代中期に松阪市常光坊谷４号墳[15]のようなⅰ類に属する古墳や、松阪市八重田１号墳[16]のようなⅱ類に属する古墳が築造されていることが確認できる。常光坊谷４号墳については、墳丘下に掘り込みは行っていないが、整地を行った上に高塚４号墳の第１段階・第２段階盛土と同様の盛土を行い、木棺を設置している点には共通性を窺うこともできる。古墳時代終末期のⅰ類・ⅱ類が、こうした当該地域内部における中期以来の墳丘構築方法の系譜の上にあるものなのか、あるいは古墳立地の変化に見られるような新たな古墳造営思想の流入とともに導入された墳丘構築方法であるのかについては、現状では判断できない[17]。この点を考える上では、今後の調査事例の蓄積やその検討が必要であろう。

以上述べてきたように、古墳の墳丘盛土の調査からも様々な情報を得ることができる。そして、それらの情報には当該地域の古墳時代像を考える上で重要なものも含まれている。発掘調査対象となる古墳の多くは工事などによって消滅する運命であるが、

そうした場合には墳丘盛土についても詳細な調査を行い、記録保存しておくことが望まれよう。

**註**

1） 明和町教育委員会『明星古墳群発掘調査報告』 1975

2） 前川嘉宏「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと』第36号 三重大学歴史教室・三重大学歴史研究会 1979、竹内英昭「後期古墳の埋葬施設～伊勢地方の木棺直葬墳をめぐって～」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会 1990

3） 墳丘下の土坑状の掘り込みと周溝掘削との先後関係は不明である。また、第１段階盛土と周溝掘削との関係も不明であるが、第１段階盛土に旧表土由来と考えられる土が含まれていることから、周溝を掘削した時に排出された土が第１段階盛土に使用されているとも考えられる。

4） 和田晴吾「葬送の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６ 講談社 1989。墓壙を掘り込むものを「掘り込み墓壙」、土や石などで墓壙を構築するものを「構築墓壙」、墓壙を持たず棺を直接盛土中に置いたものを「無墓壙」としている。また掘り込み墓壙は、盛土がほぼ終了した後に墓壙を掘り込む「掘り込み墓壙ａ類」、盛土を盛っていく途中で墓壙を掘り込む「掘り込み墓壙ｂ類」、盛土を盛る前に地山に墓壙を掘り込む「掘り込み墓壙ｃ類」に細分されている。

5） 筌瀬明宏「古墳墓壙構築過程の歴史的意義―筑前地域を中心に―」『福岡大学大学院論集』第28巻第２号 福岡大学大学院論集刊行委員会 1996

6） 樋口吉文「古墳築造考」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会 1997、白澤崇「墳丘構築から見た静岡県の古墳」『静岡県考古学研究』№34 静岡県考古学会 2002

7） 松阪市教育委員会『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』 1990

8） 西村修久「森出古墳群」『三重県史』資料編考古１ 三重県 2005

9） 和田晴吾は、無墓壙のものでも棺設置に伴って若干の掘りくぼめが行われる場合があるとしている（和田晴吾1989）。

10） 玉城町郷土会『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』 1972

11） 明和町教育委員会『世古６号墳・池村城跡発掘調査報告』 1982

12） 多気町教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』 1998

13） 杉井健「盛土上に基底石を置く横穴式石室の史的意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 2005。墓壙の掘削や埋葬施設の構築が墳丘完成後に行われるものを「墳丘完成後タイプ」、墳丘築造の途中で行われるものを「墳丘築造途中タイプ」、墳丘築造以前に行われるものを「墳丘築造以前タイプ」と分類する。また、埋葬施設の基底部が盛土中に置かれるものを「盛土基盤型」、地山上に置かれるものを「地山基盤型」と分類する。これらの分類と、和田晴吾の分類とを組み合わせた分類案が提示されている。

14） 墓壙を盛土に掘り込む場合、墳丘構築後しばらくして盛土が安定するまで期間をおく必要があり、期間をおく必要のない無墓壙タイプは掘り込み墓壙タイプより早く埋葬が行える可能性が指摘されている（白澤崇2002）。

15） 松阪市教育委員会1990

16） 松阪市教育委員会『八重田古墳群発掘調査報告書』 1981

17） 松阪市阪内川流域などの事例から、中・南勢地域において一度は横穴式石室を導入しながらも、ＴＫ209型式期頃に再び木棺直葬へと転換する古墳群が存在することが指摘されている（竹内英昭「南勢地域の群集墳―松阪市阪内川流域の特質―」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会 1997）。こうした事象の背景を考える上でも、この横穴式石室の導入の前後で墳丘構築方法が異なっているのかどうかといった視点が重要であろう。

## 第３節　小金３号墳の横穴式石室の位置づけ

南勢地域においては、発掘調査が行われた横穴式石室はまだ限られており、小金３号墳の横穴式石室の調査は、当該地域の横穴式石室の形態について貴重な情報をもたらしたといえる。

ここでは、小金３号墳の横穴式石室についてその形態的特徴を整理し、その位置づけについて述べておきたい。

### ①特徴の整理

まず、小金３号墳の横穴式石室について特徴的な点を列挙すれば、次の通りである。

（ａ）玄室の平面形が細長い長方形を呈する。

（b）玄室に比べて羨道がかなり短い。

（c）袖石にはやや大型の石材が縦位に用いられており、立柱石状になっている。

（d）袖石がやや内側へ突出し、擬似両袖状になっている。

（e）袖石より上位の側壁は玄室と羨道が一連の工程で積まれ、袖部の屈曲が解消されている。

（f）玄門の天井石が一段下がり、まぐさ石状になっている。

（g）玄室天井の断面が弧を描く。そのため、前壁が不明瞭である。

（h）墓道にも石積みの側壁（墓道側壁）を持つ。

（i）墓壙はほぼ石室全体が収まるほどの深さがある。

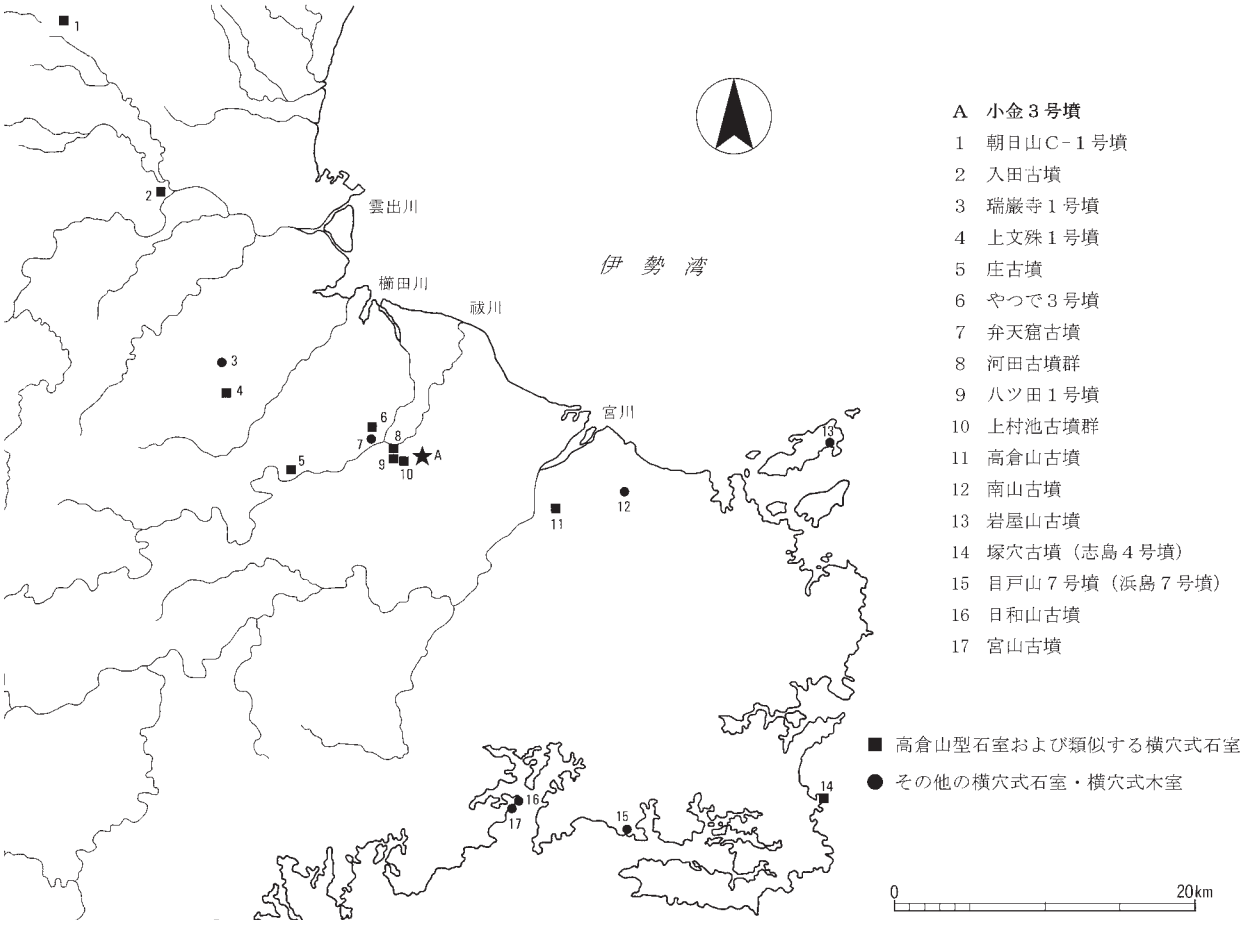
以上の特徴のうち、（a）についてもう少し具体的に示せば、石室幅を奥壁付近で計測した場合には、玄室の長幅比が3.1となる[1]。畿内地域の大型横穴式石室の玄室床面の長幅比が、古墳時代後期を通じて1.5～2.5程度に集中することを考えれば[2]、かなり細長い玄室であるといえる。

（b）についても具体的に数値で示せば、墓道側壁の部分を羨道の長さから除けば、玄室と羨道の長さの比率は1.4：1となり、玄室長の方が1.5倍近く羨道より長いといえる[3]。羨道はかなり短いといえよう。

（d）については、袖石の内側への突出度がそれほど高くなく、また、玄室幅と羨道幅にも確実に差があるために、典型的な擬似両袖式と呼ぶことはできない。ただし、袖石を若干ながら内側へ突出させようとする意識は確実に看取される。

また、石室構造そのものではないが、石室構築の上で大きく関わる要素として、墓壙に関わる（i）もかなり特徴的であると思われる。

横穴式石室を埋葬施設とする古墳には石室壁体の積み上げに応じて壁体を補強するように盛土を盛っ




第53図　関連古墳位置図（1:500,000）

ていくものが多く、墓壙を掘る場合でも石室壁体の中程くらいまでの深さのものが一般的である。しかしながら、小金３号墳の場合は石室が完全に墓壙の中に構築されており、盛土の盛り上げ工程と石室壁体の構築工程との間の関連性がほとんどない。壁体と墓壙との間に入れられた土は、まさに裏込め土と呼ぶべきものである。

## ②南勢地域における類例

**高倉山型石室**　小金３号墳の横穴式石室と似た特徴を持つ石室は、中・南勢地域にいくつか存在している。これらの横穴式石室は、伊勢神宮の外宮に隣接する山に存在し大型横穴式石室を有することで有名な伊勢市高倉山古墳[4]の横穴式石室を典型例として「高倉山型石室」[5]とも呼称されるものであり、その特徴として長大な玄室､断面が弧を描く玄室天井、短い羨道、退化した両袖、などがあげられている。また、大型の石室の場合は玄門の天井石がまぐさ石状に一段下がることも指摘されている[6]。先にあげた小金３号墳の特徴では、（ａ）・（ｂ）・（ｆ）・（ｇ）がその特徴に合致しており、小金３号墳の横穴式石室も高倉山型石室の一群に含まれるであろう。

こうした高倉山型石室は面的に分布せず、ごく限られた地域に飛び火的に分布することが指摘されているが[7]、玉城丘陵では河田Ｅ−８号墳がその例としてあげられており、小金３号墳もあわせれば、玉城丘陵には高倉山型石室が複数築造されていることとなる（第53図）。河田Ａ−11・Ｂ−14号墳、上村池18号墳なども高倉山型石室の範疇に含まれよう（第54・55図）[8]。

小金３号墳の玄室の長幅比は3.1であるが、そのほかの高倉山型とされる横穴式石室の玄室長幅比も、およそ３〜４程度ある。南勢地域や志摩地域に存在する高倉山型石室以外の横穴式石室の玄室長幅

| 古墳名 | 所在 | 袖形態 | 天井形態 | まぐさ石 | 玄室長 | 玄室幅 | 羨道長 | 羨道幅 | 玄室長幅比 | 玄室羨道長比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **【高倉山型石室・類似石室】** | | | | | | | | | | |
| 上文殊１号墳 | 松阪市伊勢寺町 | 右片袖？ | 弧状？ | — | 5.6 | 1.8 | 1.7＋ | 0.7 | 3.1 | — |
| 庄古墳 | 松阪市庄町 | 右片袖 | 弧状？ | — | 7 | 1.7 | 0.9＋ | 1.4 | 4.1 | — |
| やつで３号墳 | 松阪市山添町 | 両袖 | — | — | 5.8 | 1.5 | 2.3 | 1 | 3.9 | 2.5 |
| 八ツ田１号墳 | 多気町河田 | — | 弧状 | — | — | 1.4 | — | — | — | — |
| 河田Ａ−11号墳 | 多気町河田 | 両袖？ | 弧状 | — | 5 | 1.2 | — | — | 4.2 | — |
| 河田Ｂ−14号墳 | 多気町河田 | 両袖 | 弧状 | — | 3.5 | 1 | 2.5 | 0.6 | 3.5 | 1.4 |
| 河田Ｅ−８号墳 | 多気町河田 | 両袖 | 弧状 | × | 4.6 | 1.2 | 1＋ | 0.7 | 3.8 | — |
| 上村池２号墳 | 明和町上村 | 両袖 | 平 | — | 4.6 | 1.6 | — | 0.6＋ | 2.9 | — |
| 上村池18号墳 | 明和町上村 | 両袖 | 弧状？ | ×？ | 5.2 | 1.3 | 2.3＋ | 0.6 | 4 | — |
| 上村池52号墳 | 明和町上村 | 両袖 | 平 | × | 4.9 | 1.5 | 3.6 | 1 | 3.3 | 1.4 |
| **小金３号墳** | **明和町池村** | **両袖** | **弧状** | **○** | **4.3** | **1.4** | **3** | **1** | **3.1** | **1.4** |
| 高倉山古墳 | 伊勢市豊川町 | 両袖 | 弧状 | ○ | 9.7 | 3.3 | 6 | 2 | 2.9 | 1.6 |
| 塚穴古墳（志島４号墳） | 志摩市志島 | 両袖 | 弧状？ | × | 7.6 | 2.2 | 2.5 | 1.6 | 3.5 | 3 |
| **【高倉山型石室以外の石室（参考）】** | | | | | | | | | | |
| 瑞巌寺１号墳 | 松阪市岩内町 | 両袖 | 弧状？ | × | 3.6 | 1.6 | 4.4 | 1 | 2.3 | 0.8 |
| 弁天窟古墳 | 松阪市中万町 | 右片袖 | 弧状 | × | 4.6 | 2.4 | 3.4 | 2 | 1.9 | 1.4 |
| 上村池３号墳 | 明和町上村 | 両袖 | 平 | ○ | 3 | 1.9 | 3.4 | 0.7 | 1.6 | 0.9 |
| 岩屋山古墳 | 鳥羽市答志町 | 両袖 | 平 | × | 5.3 | 2.2 | 3.8＋ | 1.1 | 2.4 | — |
| 目戸山７号墳（浜島７号墳） | 志摩市浜島 | 右片袖 | 平？ | — | 4.8 | 2.1 | 2.6 | 1.2 | 2.3 | 1.8 |
| 日和山古墳 | 南伊勢町礫浦 | 両袖 | 平 | × | 5.1 | 2.1 | 3＋ | 1 | 2.4 | — |
| 宮山古墳 | 南伊勢町礫浦 | 右片袖 | — | — | 5.3 | 2.4 | 1.3＋ | 1.3 | 2.2 | — |

※玄室長幅比＝玄室長÷玄室幅、玄室羨道長比＝玄室長÷羨道長　※玄室長幅比・玄室羨道長比は小数点以下第二位を四捨五入した数値
※「—」は不明。数値に付く「＋」はそれ以上大きくなることを示す　※墓道側壁を持つものについては羨道長はその手前までで計測

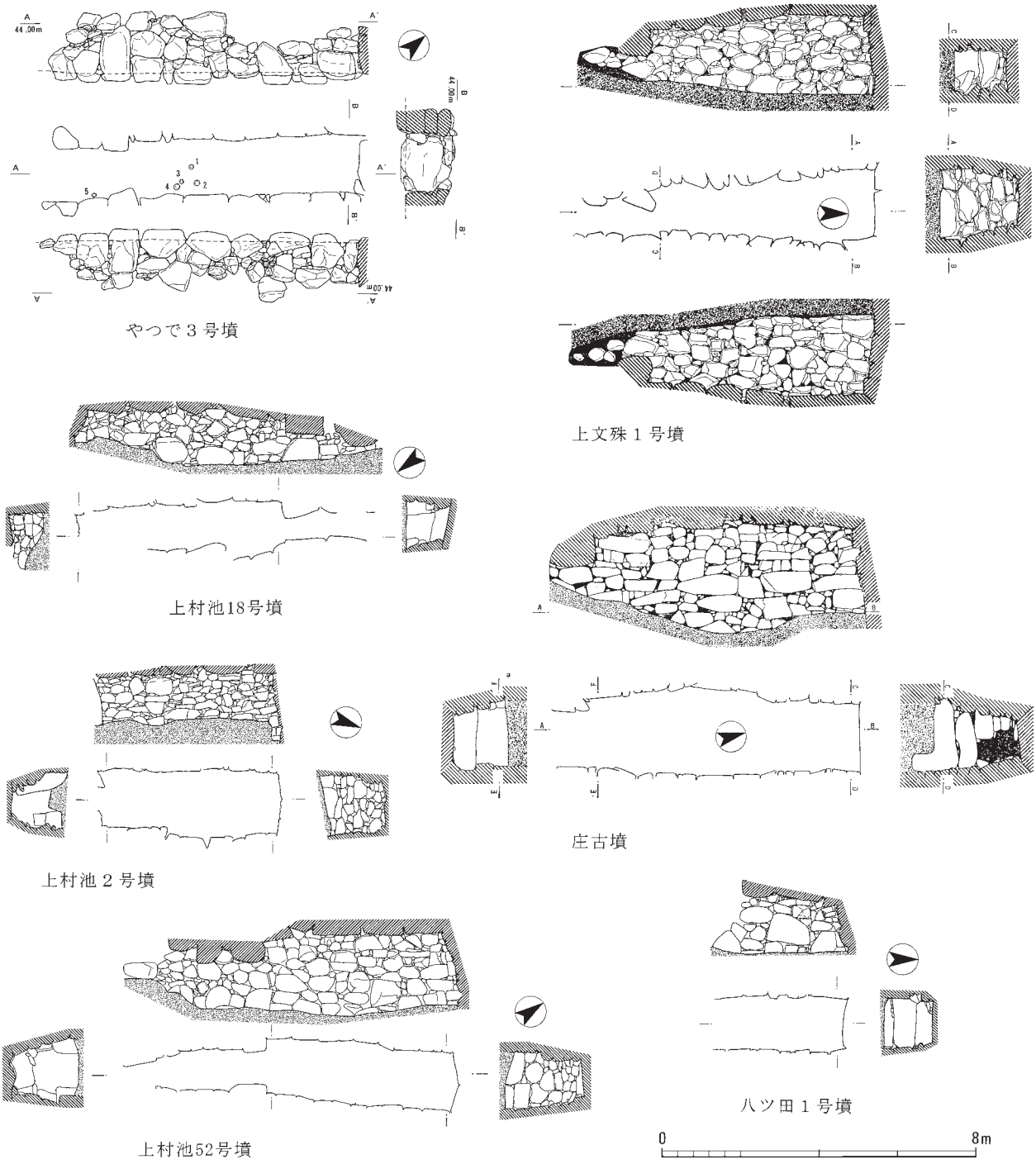
**第３表　高倉山型石室および類似する横穴式石室の規格（南勢・志摩地域）**

比は、畿内地域と同じく1.5～2.5程度のものが多く、高倉山型石室おける細長い玄室平面形がかなり特徴的であることが窺われる（第３表）。

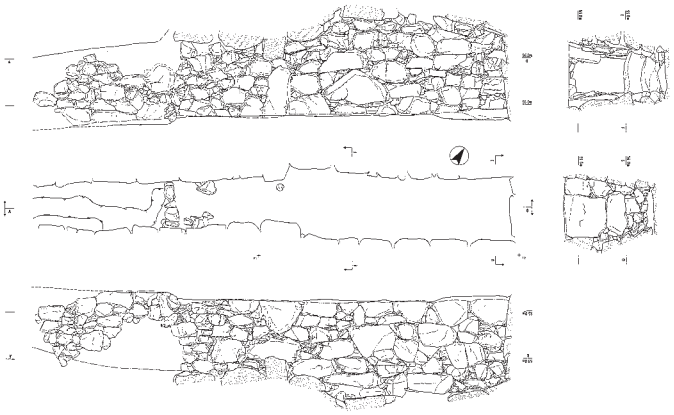
一方で、玄室長幅比が３～４の値を示しながらも、先にあげた高倉山型石室とは部分的に若干異なった特徴をもつ横穴式石室も散見される。

櫛田川より北側に存在する松阪市庄古墳・上文殊１号墳は、玄室長幅比のほかに前壁に向かって徐々に高さを減じていく玄室天井など高倉山型石室との類似性を示すが、両袖式ではなく右片袖式となるようである（第54図）。

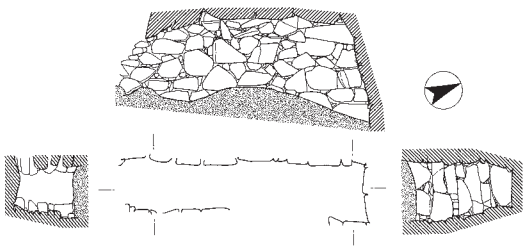
玉城丘陵にも、多少の差異はあるものの高倉山型石室との類似性が認められる横穴式石室が存在する。特に、上村池52号墳の横穴式石室は平天井である点が高倉山型石室とは異なるが、やや内側へ突出する袖石や、玄室側壁の上半部がやや持ち送られる



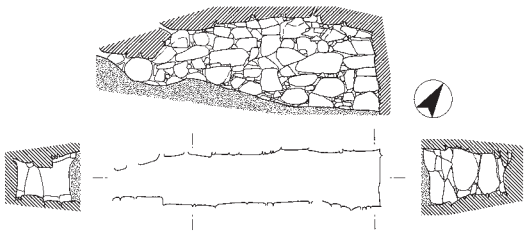

**第 54 図　高倉山型石室および類似する横穴式石室①（1:160）**　※各報告書より転載



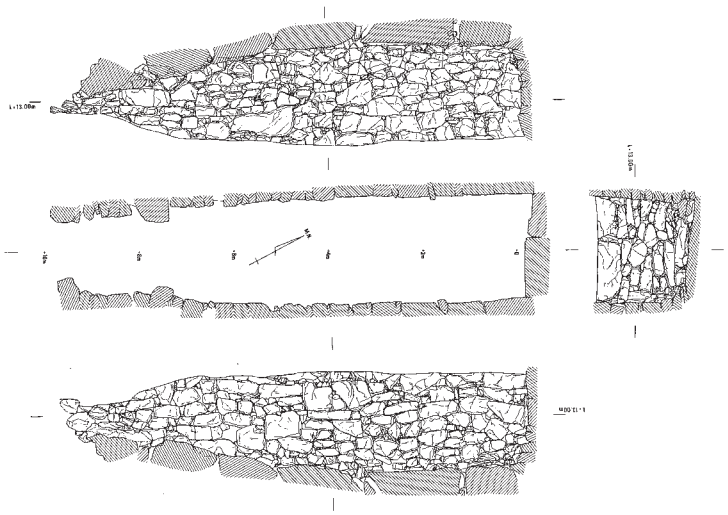
小金３号墳



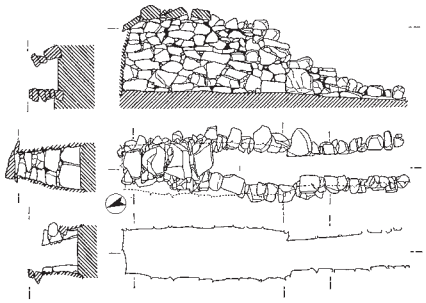
河田Ａ-11号墳



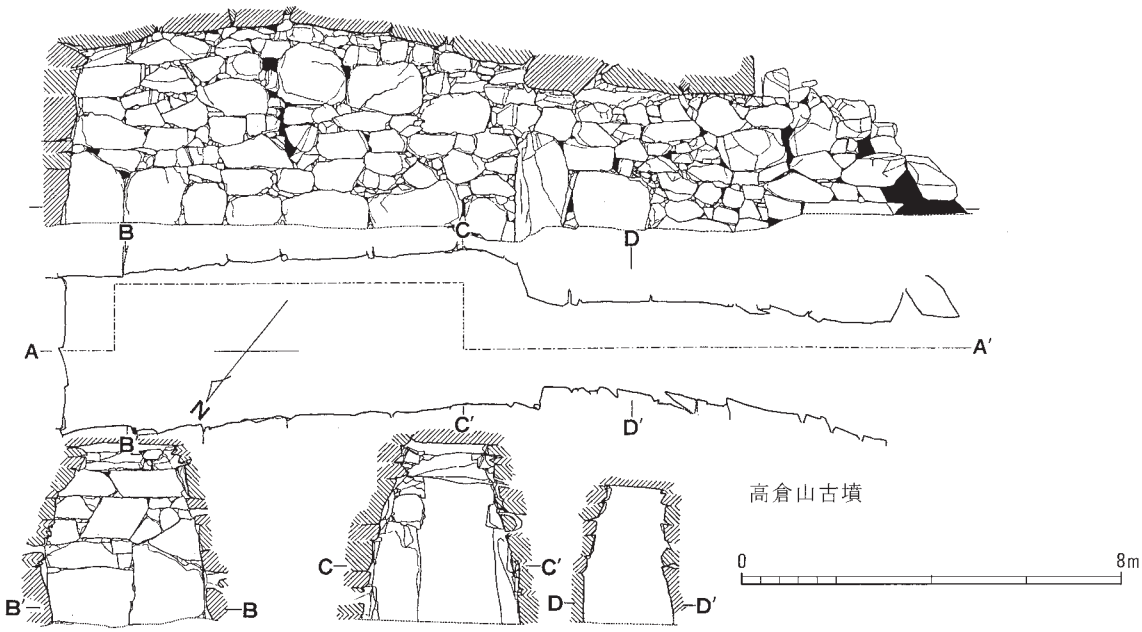
河田Ｅ-８号墳



塚穴古墳



河田Ｂ-14号墳




高倉山古墳

第55図　高倉山型石室および類似する横穴式石室②（1:160）　※各報告書より転載

点、そして使用されている石材の大きさ、奥壁最下段の石材の積み方など、小金３号墳の横穴式石室との共通点が多い（第54図）。また、玄室長幅比だけでなく、玄室平面形の規模そのものに注目した場合、小金３号墳とほぼ同形同大であることも注意される。平天井である点などが高倉山型石室とは異なる上村池２号墳も、小金３号墳と玄室平面形態がほぼ同形同大となるようである。玉城丘陵に存在する古墳では、高倉山型石室に属する河田Ｅ−８号墳なども小金３号墳と玄室平面形がほぼ同形同大であり、これらの古墳が石室の細部を異にしながらも密接な関係の下に築造された可能性が窺われよう。

現在のところ、上村池２号墳・52号墳のような典型的な高倉山型石室とは若干異なった特徴を持つ横穴式石室は、厳密には高倉山型石室に含められていないようであるが、以上のように高倉山型石室との関係を窺わせるものであり、これらも含めた検討が必要であろう。

**高倉山古墳との共通性**　以上でみてきたように、小金３号墳の横穴式石室は高倉山型石室とされる一群に属し、南勢地域から志摩地域にかけての地域には類似する横穴式石室が複数分布していることが明らかとなった。ただ、特に注目すべきは、高倉山型石室の典型例である高倉山古墳の横穴式石室と、小金３号墳の横穴式石室の共通性が非常に高いと考えられることである。

両古墳の横穴式石室は、高倉山型石室の特徴とされている点以外にも、先にあげた特徴の（ｃ）や（ｅ）、また、奥壁最下段に２石をならべ、小さい方の石の上にもう１石を積んで高さを揃えている点などが共通している。これらの点については石室の形態というよりも、石室構築技術上の細かな共通性といえよう。こうした共通性が認められることは、同じ集団によって築造された可能性が高いことを示しているのではなかろうか。少なくとも、小金３号墳の横穴式石室が他の高倉山型石室にくらべても、高倉山古墳との特に強い関係の下に築造されたことは間違いないと思われる。

### ③墓道側壁

ここで高倉山型石室の中でも小金３号墳の横穴式石室に特徴的であると思われる要素に目を向けてみると、墓道側壁が存在することが目を引く。こうした施設は、高倉山型石室に限らず、これまでの伊勢地域における横穴式石室の調査や研究の中ではほとんど触れられてこなかったものであり、その様相は不明である。そこで、類例の検索も含め、この墓道側壁について基本的な整理を行っておきたい。

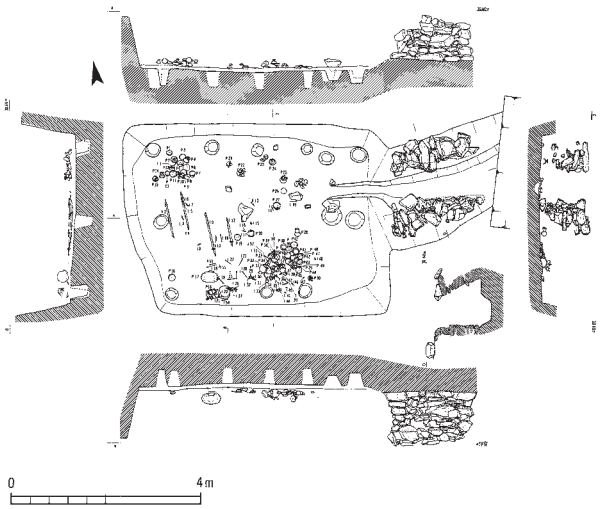
**墓道側壁の定義**　本報告で使用しているような「墓道側壁」という用語は一般的ではない。羨道の延長上にこうした天井石が架構されていない石積みが設けられる場合、その空間を「前庭部」と呼び、石積みを「前庭側壁」と呼ぶことが多い[9]。こうした横穴式石室の前庭について整理した加部二生による分類を参考にすると、小金３号墳の例も大きくみれば羨道側壁から連続して石積みが築かれているＢ類前庭に属するものとも捉えられよう[10]。しかしながら、小金３号墳の例は羨道側壁と墓道側壁との間に全く屈曲がなく、また、狭い範囲にしか石積みがなされておらず裾開きにもならないため、Ｂ類の細分として設定されているＢ−１類・Ｂ−２類のどちらにも属さない[11]。

そして、小金３号墳の墓道側壁をもつ部分が前庭とされるものと最も異なる点は、空間的に墓前祭祀を行いうるようなスペースが形成されていない点であると思われる。いわゆる前庭には「墓前での儀礼実修の場」としての機能が想定されているが[12]、小金３号墳の例は機能としては完全に通路であり、石室の閉塞に伴って完全に埋められ、土器など儀礼的行為を示すような出土遺物も認められない。

以上のような理由から、本報告では小金３号墳の墓道にみられる石積みを前庭とは区別して、「墓道側壁」と呼んできた。その特徴をまとめれば、次の４点となろう。

１．羨道から連続的に直線的に延びる、いわゆる墓道（祭祀空間としての機能を持つ前庭ではない）の壁面を構成する。
２．天井石が架構されない。
３．羨道とは石の積み方や床面施設等によって区別される。
４．石室の閉塞によって埋められる。

**周辺地域の事例**　小金３号墳の墓道側壁について




**第56図　南山古墳横穴式木室（1:160）**
※伊勢市教育委員会1982より転載

は、加部分類のＢ類前庭とはやや異なったものとして捉えたが、先にあげたような墓道側壁の特徴をすべて満たすものは南勢地域では今のところほとんど認められない[13]。ただし、注目される例が２つ存在している。

まず注目されるのは、伊勢市南山古墳[14] である。この古墳はＴＫ10型式期新段階～ＴＫ43型式期に築造されたもので、埋葬施設は「羨道部石積横穴式木室」とされる、横穴式石室状の玄室を木組みで作った木室に羨道とされる通路が付くものである（第56図）。羨道とされる通路の側壁として石積みがなされているため、羨道部石積という名称が与えられているが、この石積み部分に天井石が架構されていたかどうかは定かではない。ただし、内部に落ち込んでいた石材は閉塞の一部である可能性が指摘されており、天井石に相当する石材の存在が明確ではないことなどから、架構されていなかった可能性も十分に考え得る。また、石積みの木室側への延長線上にピットが左右２基ずつ検出されており、報告では玄門あるいは前室と解されているが、本来はこの部分が木材で構築された短い羨道であったとも考えられよう。そうみれば、羨道とされている部分はどちらかといえば墓道と捉えられるのであり、石積みは木材で構築された羨道から続く墓道側壁とみることが可能である。

そして、先に述べたような小金３号墳との関連もあって注目されるのは高倉山古墳である。高倉山古墳の羨道は、天井石が遺存している部分とその外側とで石の積み方が異なることが指摘されてきた。これは石室構築上の工程を示すものとする解釈がなされているが[15]、天井石が遺存していない部分は小金３号墳の墓道側壁同様に石材がやや大型になり、目地の通りも悪い。石室入り口付近の改変が著しいため、小金３号墳のような素掘りの墓道がさらに前面へのびていたかどうかは確定的ではないが、過去に調査が行われた際の知見では、やはり羨道から墓道状の掘り込みが墳丘外へ向かってのびているようである。墳丘規模と石室の位置関係を考えても、小金３号墳と同様の墓道が付属していた可能性は高い。こうした点からみれば、高倉山古墳例についても小金３号墳の墓道側壁と同様の施設であると考えられるのではなかろうか。先に述べた高倉山古墳と小金３号墳の横穴式石室の共通性の高さからみても、蓋然性は高いと思われる。

この高倉山古墳の羨道の石積みが異なる部分については、一方では加部二生による前庭の研究の中でもＢ類前庭に属するものとしてあげられている[16]。確かに、入り口付近はやや外方へ開いており、Ｂ－２類前庭に含めることも可能であろう。

高倉山古墳の例が前庭として考え得るのかどうかは、果たしてこの石積みのある範囲が儀礼的行為を行うための広場としての機能を有した空間であったのかどうかという点に集約されるであろう。現状では判断を下しがたいが、更に前面に墓道が延びていた可能性も踏まえた上で、墓道側壁として捉えられるようなものである可能性を指摘しておきたい。

**墓道側壁とＢ類前庭**　では、こうした墓道側壁はどのような系統の施設として捉えられるのであろうか。

小金３号墳や高倉山古墳の例を考える上では、やはり加部分類のＢ類前庭との関わりは無視することはできない。Ｂ類前庭は東海地方では美濃地域や西三河地域に多く分布しており、伊勢地域にも少数ながら分布している。

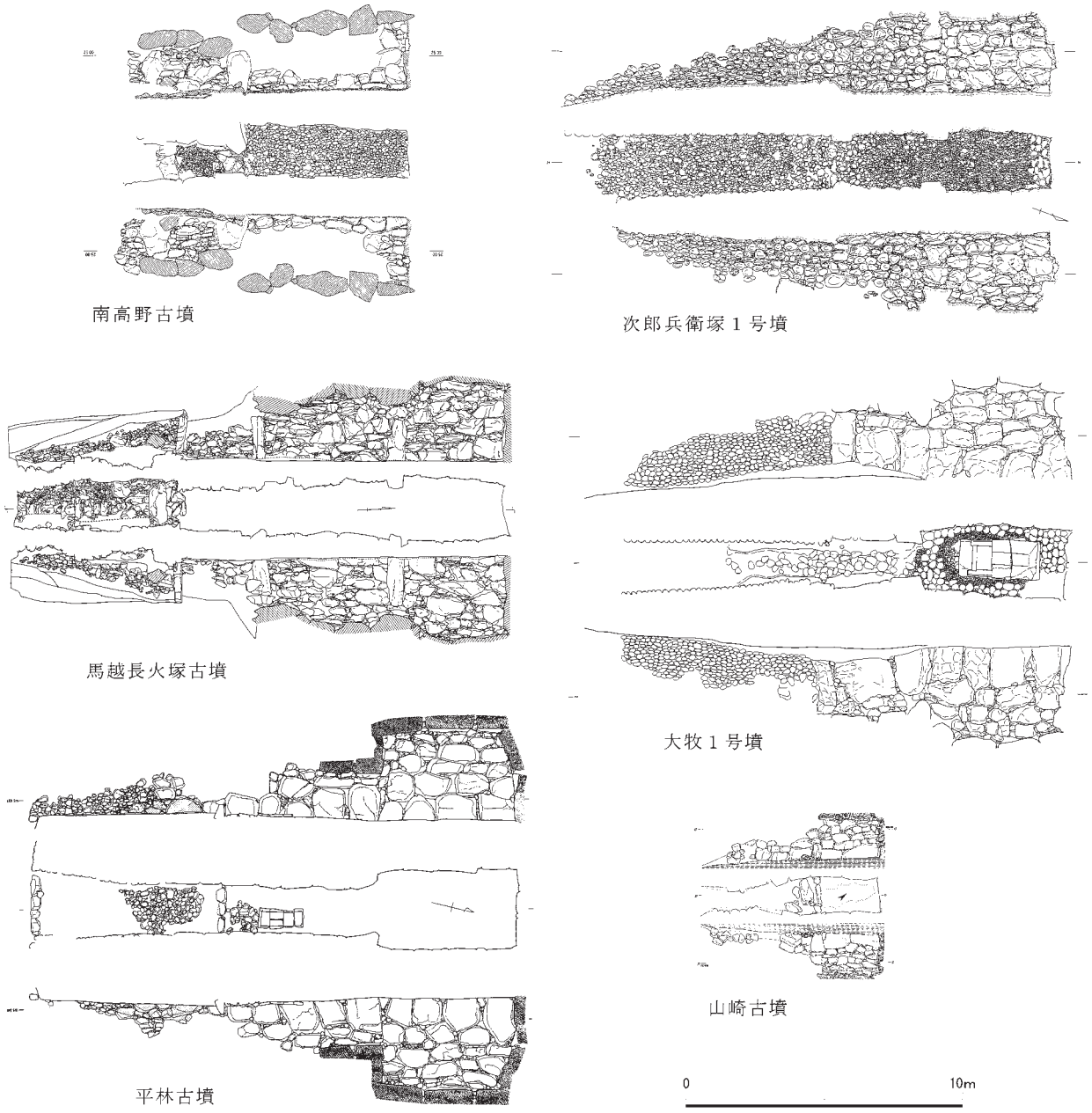
Ｂ類前庭の中でも、最も墓道側壁に似ているものは羨道部との境に屈曲をもたないＢ－２類であるが、多くはハの字状に入り口へ向かって開いていく形態のものであり、特に西三河地域や伊勢地域には大き

く開くものが目立つようである。

しかしながら、一部には入り口付近の開き方が小さく、羨道から前庭入り口まで幅があまり変化しないものもみられる（第57図）。美濃地域ではＢ類前庭の中でもそうした事例が多いことも指摘されており[17]、岐阜県大牧１号墳[18]や次郎兵衛塚１号墳[19]のようなものがあげられる。また、南高野古墳[20]で前庭として報告されているものは、本報告で墓道側壁と呼ぶものに近い。三河地域でも、複室構造の横穴式石室ではあるが、愛知県馬越長火塚古墳[21]などがその例としてあげられよう。

現状では形態的な類似性に過ぎないが、東海地方にこうした入り口付近で開かないＢ－２類前庭が多く分布することは、小金３号墳の墓道側壁のようなものが造られるに至った背景の一つとして考慮しておく必要があろう。

可能性の一つとしては、多様な横穴式石室の構築技術の交流・拡散の中で、Ｂ－２類前庭の変形として墓道の側壁として石積みがなされる事例が出てきたということも考えられよう。高倉山型石室には西




**第57図　墓道側壁・Ｂ－２類前庭に関連する横穴式石室（1:240）**　※各報告書より転載

三河地域の要素が認められるものの、完全に西三河地域の横穴式石室の形態を踏襲したものではない点にも、こうした変形が生じた可能性を見いだすことができるのではなかろうか。南山古墳のような例の存在も、こうした考え方の中で理解できるものと思われる。

なお、入り口付近の開き方の小さいB－２類前庭、もしくは墓道側壁は、前庭の分布が希薄な地域においても点的に認められることがある。

畿内地域では石積みを伴う前庭がほとんど存在しないことが指摘されてきたが、わずかながらB－２類前庭もしくは墓道側壁の例が認められる。これまでにも墓道側壁として取り上げられることのあった奈良県平林古墳[22]の例はその一つである（第57図）。

中国地方でも前庭をもつ横穴式石室は少ないようであるが、管見にふれた範囲では、広島県二子塚古墳[23]や、山口県山崎古墳[24]などがB－２類前庭もしくは墓道側壁をもつ例としてあげられる。山崎古墳例は石積みをもつ部分は広場としての空間を形成しておらず、小金３号墳の例と同様に墓道側壁と呼びうるものであろう（第57図）。

こうした石積みを伴う前庭の存在が希薄な地域での墓道側壁と呼びうる施設の存在は、いわゆる前庭と墓道側壁との関係を考える上でも一定の手がかりとなると考えられる。

## ④他地域との関係

高倉山型石室の典型例である高倉山古墳の横穴式石室に対しては、従来から畿内地域からの影響と、三河地域からの影響の両者が混在することが指摘されてきた[25]。袖部が両袖式で、袖石が擬似両袖式というほど内側へ突出しない点や、玄室平面形態が長方形で胴張りがない点などは畿内系の要素とされ、玄室天井の断面が弧状を描く点や、袖石が立柱状になる点などは三河系の要素とされる。

畿内系と三河系のどちらの要素が強く出ていると見るかについては､研究者によってやや違いがある。しかしながら、いずれの立場にしても、高倉山古墳の横穴式石室は両地域の要素に、短い羨道や細長い玄室平面形などの在地的要素を加えて成立した、在地色の強い石室であると見なされている。

小金３号墳の横穴式石室についてみれば、高倉山古墳の横穴式石室とほぼ共通する形態であり、やはり畿内系要素と三河系要素、そして在地的要素とが混在しているとみてよい。

ただし、小金３号墳の築造集団が畿内地域と三河地域の要素、そして在地的要素を独自に混交させて横穴式石室を造ったとは考えにくい。高倉山型石室という石室類型が認めうることからは、各古墳の築造集団が独自に畿内地域・三河地域と交流を持っていたというよりは、南勢地域から志摩地域にかけての社会的・政治的まとまりとして畿内地域・三河地域と交流を持っており、その中で横穴式石室を導入するにあたって各地域の要素を混交させて地域独自の型を生み出したと考えた方がよいであろう。こうして生み出された石室形態を採用した結果、小金３号墳の横穴式石室にも間接的に他地域の影響が表れたとみられる。

また、もう一つ注目しておきたいのが、志摩地域の横穴式石室の検討の中で在地的要素として挙げられることもある[26]、深い墓壙である。

横穴式石室全体が収まるような深い墓壙は他地域でも地域色として存在することが指摘されており、その背景には竪穴系の埋葬施設からの影響や、地形などによる何らかの規制といった要因が考えられている[27]。玉城丘陵周辺でも、前節で述べたように古墳時代中期から後期にかけて掘り込み墓壙をもつ木棺直葬墳が築造されており、こうした埋葬施設からの系譜を引くものと考えることが可能である。

ただし、墓壙の中に石室を構築する技術は、裏込め土の施し方や、墓壙内への石材の搬入など、墓壙の中に木棺を据えるのとはまた異なった技術と考えることもできよう。そう考えた場合には、南勢地域でもいち早く古墳時代中期末～後期中頃に竪穴系横口式石室や片袖式の横穴式石室が築造された西部[28]や、あるいは中勢地域との関係も考慮しておくべきかもしれない。高倉山型石室も含め、横穴式石室の墓壙の調査が行われている例はまだ多くないため、今後の検討課題ともなってくるであろう。

**註**

1）　玄室長を玄室幅で割った値である。なお、この数値は左

袖側で計測した玄室長を用いた値であり、右袖側で計測した値では3.3となる。

2） 梅本康広「畿内大型横穴式石室の構造―石室規模にみる秩序形成の基礎的検討―」『近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会 2007

3） 左袖側で計測した値を用いたものである。右袖側で計測した値では1.7：１となる。

4） 原始古代史部会「伊勢市高倉山巨石墳について―三重県主要古墳基本調査４―」『ふびと』第24号 三重大学学芸学部歴史研究会 1965、岩中淳之「高倉山古墳」『三重県史』資料編考古１ 三重県 2005

5） 「高倉山型石室」の名称には、米田文孝によるものと、竹内英昭によるものとがある。米田による設定は主に志摩半島の横穴式石室における玄室平面形の分類に基づくものであり、その他の要素やより広い地域での関係性を重視する竹内による設定とは枠組みを異にする。本報告では、竹内の設定に基づいて「高倉山型石室」の名称を用いる。米田文孝「志摩地域の横穴式石室―定着期以降の石室構造の検討を中心にして―」『紀伊半島の文化史的研究』考古学編 関西大学文学部考古学研究室 1992、竹内英昭「伊勢湾地域の横穴式石室の構造と展開」『東海の古墳風景』季刊考古学・別冊16 雄山閣 2008

6） 竹内英昭2008。ただし、現状では例が少ないため、この特徴については高倉山型石室一般に適用できるかどうかは不明である。

7） 竹内英昭2008。津市朝日山C－１号墳・入田古墳など、中勢地域にも類例の存在が指摘されている。

8） 第54・55図に掲載した横穴式石室の図版の出典は以下の通りである。

上文殊１号墳・庄古墳：松阪市史編さん委員会（編）『松阪市史』第二巻資料篇考古 1978、やつで３号墳：松阪市教育委員会『羽根遺跡・やつで３号墳発掘調査報告書』1998、八ツ田１号墳・河田古墳群・上村池古墳群：多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』 1986、高倉山古墳：三重大学学芸学部歴史研究会『ふびと』第24号 1965、塚穴古墳：関西大学文学部考古学研究室『紀伊半島の文化史的研究』考古学編 1992

9） 土生田純之「横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』第７巻古墳Ⅰ墳丘と内部構造 雄山閣 1992

10） 加部二生「横穴式石室の前庭について―その起源と系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集 国立歴史民俗博物館 1999。以下の記述で用いる前庭の分類については、この文献に基づいている。

11） 加部二生によるＢ類の定義及び細分は以下の通りである（加部二生1999；pp. ６－７）。

Ｂ類：前庭石組が羨道壁の延長上に築かれる。前庭の幅も羨道幅と大差ない。全く屈曲部をもたない場合は、前庭部と羨道部の境に側壁に縦もしくは斜めの仕切り、あるいは目地をすることにより、明らかに区画の意識が認められる。

Ｂ－１－ａ類：羨道部から屈曲して短い袖垣をもつ。前庭部は縦長の台形を呈す場合が多い。

Ｂ－１－ｂ類：翼垣の角度が左右で異なり、平面形は縦長の不定形になる場合が多い。

Ｂ－２類：羨道部から屈曲せずに袖垣をもたない。前庭部と羨道部の接点は同じ幅で、次第に裾開きの形態を呈す。

12） 土生田純之1992；p. 115。一般に前庭や前庭部と呼ぶ施設にはこうした機能が想定されているようである。

13） 横穴式石室の羨道や上半部は破壊を被っていることが多いため、墓道側壁が存在したとしても認識できないものが多い可能性もあろう。

14） 伊勢市教育委員会『南山古墳発掘調査報告』 1982

15） 土生田純之「伊勢市高倉山古墳について」『伊勢郷土史草』第23号 伊勢郷土会 1986

16） 加部二生1999

17） 加部二生1999

18） 各務原市埋蔵文化財調査センター『大牧１号墳発掘調査報告書』 2003

19） 可児市教育委員会『川合遺跡群』 1994

20） 岐阜県文化財保護センター『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡』 2000

21） 三河考古学談話会『東三河の横穴式石室 資料編』 1994、岩原剛ほか「三河馬越長火塚古墳の研究」『三河考古』第14号 三河考古学談話会 2001

22） 當麻町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『平林古墳』 1994

23） 福山市教育委員会『二子塚古墳発掘調査報告書』 2007

24） 山口県教育委員会『山崎古墳』 2009

25） 土生田純之1986、米田文孝1992、森島一貴「伊勢の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会 2007、鈴木一有「東海の横穴式石室における分布と伝播」『近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会 2007、竹内英昭2008など。

26)　米田文孝1992

27)　筌瀬明宏「古墳墓壙構築過程の歴史的意義―筑前地域を中心に―」『福岡大学大学院論集』第28巻第２号　福岡大学大学院論集刊行委員会　1996

28)　第Ⅱ章第２節註13）参照。阪内川流域から櫛田川左岸にかけての地域を指す。ただし、この地域の竪穴系横口式石室は地山上にある程度盛土を盛って墳丘を形成した後に墓壙を掘り込んでおり、墓壙がすべて地山に掘り込まれている小金３号墳とはやや異なるかもしれない。

## 第４節　玉城丘陵の古墳群の動態について

小金・高塚・斎宮池古墳群が存在する玉城丘陵とその周辺地域は、南勢地域でも有数の古墳密集地として知られている。こうした古墳密集地となった背景には、当該地域における地域社会の特徴や、より広域における社会的動態が関係していることは想像に難くない。そのため、こうした点の解明を目的に、これまでにも玉城丘陵やその周辺に存在する古墳群を対象として、いくつかの研究が行われてきた。ただし、発掘調査が行われた古墳が少なく、手がかりとなる情報は少なかった。今回の調査成果は、そこへ新たな情報を加えることができたといえよう。玉城丘陵に多数の古墳が築造された背景にも関わる部分もあるため、今回の発掘調査成果を踏まえ、いくつかの点について多少の指摘を行っておきたい。

### ①時期的な動態と画期

玉城丘陵周辺部で検出されている弥生時代終末期の方形周溝墓を除けば、今のところ玉城丘陵で確認されている最も古い時期の古墳は権現山古墳群[1]である。比較的大型の方墳２基からなり、うち権現山２号墳は、出土遺物から古墳時代中期前葉に築造されたとみられる。この権現山古墳群の築造が、玉城丘陵における古墳築造の端緒となったと思われる。

その後、中期中葉から中期末にかけて高塚１号墳や神前山１号墳、大塚１号墳[2]など首長墓と呼びうる大型古墳が連続的に築造される。ただし、中期前葉とはいくつかの差異が認められる。まず、権現山古墳群が玉城丘陵の南西部に位置するのに対して、その後の大型古墳はすべて北西部に築造される。そして、更に大きな変化は、墳形が方墳ではなく造り出し付円墳もしくは円墳になることである。

こうした古墳時代中期における大型古墳の動態は、これまでにもたびたび指摘されてきた[3]。そして、松阪市宝塚２号墳[4]、鈴鹿市白鳥塚１号墳[5]など、同時期には伊勢地域の各地で造り出し付きの大型円墳が築造されており、そうした動向の一部を担うものであることも指摘されてきている。

ただし注意されるのは、玉城丘陵においては中期の大型古墳の付近に、埴輪を樹立するやはり中期の小型古墳が築造されていることが想定できる点である。本報告の附章で出土埴輪を報告した高塚２号墳もその一つである。高塚古墳群の場合、１号墳と２号墳との間には若干の時期差があることも判明した。大型古墳の動向だけではなく、付近に築造されている小型古墳との関係なども含めて考えていく必要性があろう。

その後、古墳時代後期前半にあたるＭＴ15～ＴＫ10型式期の古墳は、玉城丘陵では今のところほとんど確認されていない[6]。少ない事例では、天王山６号墳[7]は出土した埴輪から古墳時代後期前半の古墳であると考えられる。調査された古墳がまだ少ないため、古墳の築造数自体が少ないかどうかは現時点では判断できないものの、少なくとも大型の円墳や造り出し付円墳の築造は行われなくなっており、中期から後期への過渡期に大きな画期があることが窺われる。一方、斎宮池12号墳やユブミ２号墳[8]などの小型前方後円墳がこの時期に築造された可能性も考えられる。

玉城丘陵で古墳の築造数が急激に増加するのは古墳時代後期後半である。ＴＫ43～ＴＫ209型式期にかけての時期に造営された古墳がいくつか確認されている。発掘調査が行われた中では、河田古墳群のようないくつかの支群からなる大規模な古墳群についても、後期後半から形成が本格化している様子が窺われる。玉城丘陵全体に展開する古墳群のうち、この時期に群の形成が行われているものは多いであろう[9]。特に、本章第１節で述べたような散在的に群を形成する古墳群についてはその可能性が高い。

この古墳群の形成が活発化する時期と関わって注目されるのが、横穴式石室の導入である。これまで玉城丘陵に存在する横穴式石室の築造年代はやや不明瞭であったが、小金３号墳の調査によって、前節で述べたような高倉山型石室との関係を想定しうる横穴式石室は、小金３号墳と同じくＴＫ209型式期頃に築造された可能性が高まった。上村池３号墳についてはやや時期が遡る可能性が残されるとはいえ、玉城丘陵の古墳群に横穴式石室が本格的に導入されるのは小金３号墳が築造された時期の前後であると思われる[10]。

次に古墳の築造状況に変化が生じるのは、古墳時代終末期である。後期後半に引き続き古墳の築造数は多いが、後期後半よりも古墳の密集度が高まり、墳丘規模も小型のものが増加する。立地にも変化が生じ、玉城丘陵では好んで斜面地に古墳群を形成しているような様相が認められる。また、玉城丘陵以外でも、明和町坂本古墳群[11]などの終末期群集墳が目立つようになる。そして、高塚４・６号墳が築造される時期にいたって古墳の築造数が急激に減少し、群集墳を形成することもなくなり、ついには古墳の築造自体が停止していく。

以上の点から、玉城丘陵における古墳群の展開の中に認められる画期としては、次のようにまとめられよう。

１．古墳の築造が始まる中期前葉（５世紀前葉）
２．大型造り出し付円墳の築造が始まる中期中葉（５世紀中葉）
３．大型造り出し付円墳の築造が停止する中期末（５世紀末）
４．古墳群の形成が活発化し、横穴式石室が本格導入される後期後葉（６世紀後葉～末）
５．古墳群の群形成や立地に変化が生じる終末期前半（７世紀前葉）
６．古墳の築造が終息へ向かう終末期後半（７世紀中葉）

以下、これらの画期のうち今回の調査成果とも関わるものについて、若干の考察を行っておきたい。

## ②横穴式石室の導入をめぐって

玉城丘陵の古墳の展開における一つの画期に、古墳時代後期後葉の古墳群の形成の活発化と横穴式石室の本格的な導入があげられる。先に述べたように、この横穴式石室の導入時期は、ＴＫ209型式期であると思われる。

**高倉山古墳との関係**　この横穴式石室の導入に関わって重要な問題を提起するのが、本章第３節で述べた小金３号墳の横穴式石室と高倉山古墳の横穴式石室の高い共通性である。小金３号墳はＴＫ209型式期でも古い段階に築造されたと思われるため、玉城丘陵における横穴式石室の導入を考える上で重要な位置を占めるものと考えられる。したがって、玉城丘陵における横穴式石室の導入には、高倉山型石室をめぐる動向が大きく関わっていたであろうと推測されるのである。

この点は、南勢地域でも特に玉城丘陵に高倉山型石室およびそれに類する横穴式石室が集中する状況からも窺うことができる。高倉山型石室とそれに類する横穴式石室は、確かに伊勢・志摩地域に広く分布するが、その大半は玉城丘陵に存在しているのである（第３表）。

問題は、現状では高倉山古墳周辺で高倉山型石室が確認できない点である。今後の調査の進展によっても変化があるかもしれないが、やはり高倉山型石室は面的に分布するものではなく、点的な分布状況を示すものであろう[12]。そのようにみれば、高倉山古墳の被葬者と、玉城丘陵に古墳群を形成した勢力との間には直接的な関係を想定することも可能である。玉城丘陵への横穴式石室導入は、こうした伊勢神宮との関係も窺われる南勢地域有数の有力者との直接的なつながりの下に行われたと考えられるのではなかろうか。

**横穴式石室導入の様相**　玉城丘陵で横穴式石室の導入期に築造されたと思われる高倉山型石室およびそれに類する横穴式石室の様相についてみていくと、二つの点が注意される。

まず第一に、これらの横穴式石室は複数の古墳群に存在していることが注目される。特定の古墳群に集中して築造されているというよりは、分散しているような印象を受ける。上村池古墳群には上村池２・18・52号墳の３基が含まれるが、上村池古墳群は広い範囲に散在的に広がっており、上記の３基の古墳

もそれぞれ上村池古墳群の中の異なる小支群に含まれているような状況である。河田古墳群でも、A・B・Eの３つの支群に分散して存在している。

こうした状況からみると、玉城丘陵への横穴式石室の導入は、玉城丘陵を墓域とした勢力の中の単一集団によってなされたものではないと考えられよう。玉城丘陵の古墳群のあり方をみても、突出する古墳群の存在は認めがたく、比較的均質である[13]。先に述べたような高倉山古墳を造営した勢力とのつながりが首肯されるならば、玉城丘陵に墓域を営んだ複数の集団が個々に直接的な関係を取り結んでいたと考えることもできるのではなかろうか。

そして第二に、前節で整理したように、玉城丘陵においてこれまで知られている横穴式石室には、小金３号墳のように典型的な高倉山型石室と呼びうるものと、若干の変容を伴うものとが存在している点が注目される。

これについては、二通りの解釈が可能である。

一つは、玉城丘陵における横穴式石室の導入にあたって、高倉山古墳を築造した勢力と直接的な関係にある一部の有力者ないしは有力集団がその援助の下に典型的な高倉山型石室を築造することができ、若干変容した石室については、これらからの二次的な情報によって築造されたものとする考え方である。これについては、玉城丘陵に墓域を営んだ集団内での石室構築に関する情報の伝達を想定する。

そしてもう一つは、典型的な高倉山型石室が導入期に築造された後に、やや期間をおいて若干変容した石室が再び導入されたとする考え方である。これについては、両者の間にある程度の時期差を想定し、玉城丘陵に墓域を営んだ集団への石室構築に関する情報の流入あるいは石室築造集団の接触が複数回あったと考えるものである。

以上の二つの考え方のどちらが妥当かは、現状では判断することは難しい。あるいは、両者が複合しているかもしれない。玉城丘陵に存在する各横穴式石室の時期などがより詳細に判明するのを待って検討すべき課題としておきたい。

### ③終末期古墳の消長とその背景

玉城丘陵においては、７世紀代の終末期古墳が各所に築造されていることが、高塚古墳群のほかにも河田古墳群の調査や大塚古墳群[14]の出土資料などから窺われる。

古墳時代後期には玉城丘陵での古墳群形成が活発化していたと思われるが、終末期に至っても古墳群の造営が継続していたものと思われる。埋葬施設が相変わらず木棺直葬である点にもそれが窺われよう。しかしながら、先にも述べたように立地や密集度、単葬化傾向などに前代からの変化が認められる。木棺直葬という埋葬施設については前代の要素を引き継ぎながらも、古墳の築造における意識には変化が生じていたとみることができる。

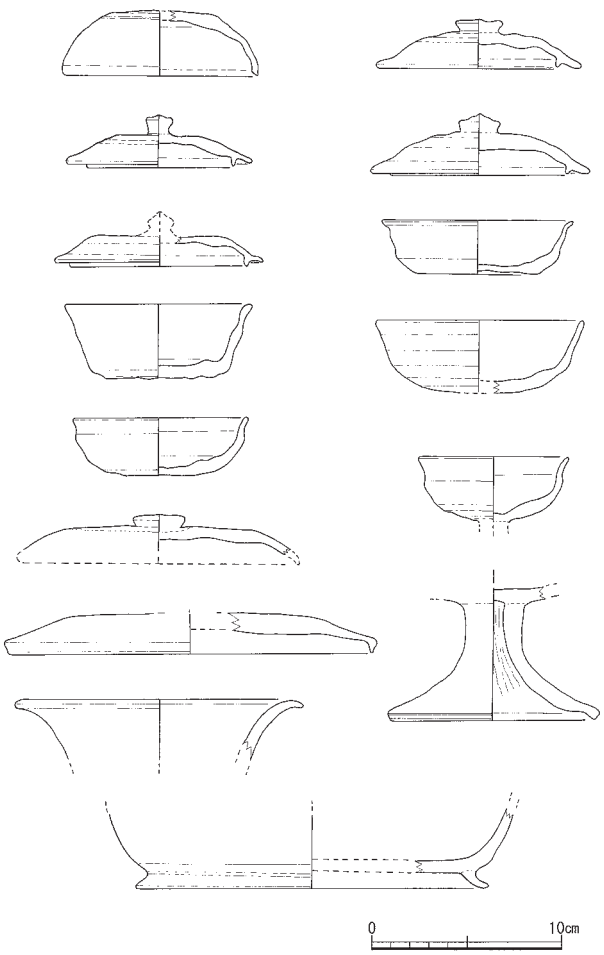
こうした終末期にみられる変化には、より広い地域での動向が反映されているものとみられ[15]、木棺直葬という埋葬施設形態の継続性はあるものの、当該地域の集団が古墳の築造において極めて保守的であったと考えることはできない。

玉城丘陵における古墳築造の停止は、高塚４・６号墳の発掘調査の成果から、７世紀中葉～後葉頃にあるとみられる。この時期には、近畿地方をはじめ日本列島各地で同様に古墳の築造が停止していく。したがって、古墳の築造停止についても広域の動向を反映したものであると見ることができる。

ただし、当該地域における古墳の築造停止には、それだけではなく、当該地域における大きな社会的・政治的な出来事である斎宮の成立と、それに伴う地域社会の再編が関わっている可能性がある。伊勢神宮との関係も想定される高倉山古墳との横穴式石室を介した強いつながりからも、こうした点が窺われよう。

今回の調査成果によって、この点に関する検討課題の一つとして、玉城丘陵でも最終段階に築造されたと思われる高塚４・６号墳から出土した須恵器が、斎宮成立期のものと考えられる斎宮跡出土須恵器とどのような関係にあるのか、という問題が浮上してきたといえよう。

須恵器同士の比較では、斎宮成立期のものである可能性が高い斎宮第Ⅰ期第１段階とされる土器群には、高塚４号墳出土須恵器にも含まれている杯G[16]が存在している。しかしながら、斎宮第Ⅰ期第１段階の中でも時期的に古く位置づけられるＳＢ1615出




**第58図　斎宮跡ＳＢ1615出土須恵器（1:4）**
※斎宮歴史博物館2001より一部改変再トレース

土資料では、杯Ｇは口径が９㎝を越えるものが主体のようである[17]。その他の器種をみても、高塚４号墳出土須恵器より若干ながら後出する要素をもつようにもみられる（第58図）。

第Ⅵ章第５節で述べたように、高塚４号墳出土須恵器は多気町明気３号窯・５号窯出土須恵器に近い特徴をもっており、淺生卓司による須恵器編年ではⅢ後期にあたると思われる[18]。斎宮第Ⅰ期第１段階の須恵器もⅢ後期にあたるとされるが、この時期の斎宮跡出土須恵器には、Ⅲ後期の中で明気３号窯・５号窯よりやや後出すると考えられる玉城町原窯跡群[19]の製品が含まれている可能性が指摘されており[20]、やはり斎宮第Ⅰ期第１段階の須恵器は高塚４号墳出土須恵器より時期的に下る要素をもっているといえよう。高塚６号墳出土須恵器とくらべても、同時期あるいは若干新しい要素をもつと考えられる。

こうした点からみれば、玉城丘陵における古墳築造が停止した後に斎宮の造営が本格化しているものと推定される。高塚４・６号墳出土須恵器の７世紀中葉～後葉という暦年代観に問題がないとすれば、『日本書紀』の大来皇女の記事から一般に実質的な斎王制の確立期としてあげられることの多い、天武朝の673年とも矛盾しないと思われる。しかしながら、この時期の斎宮についてはこれまでに宮殿跡などが検出されておらず、どの程度の施設や組織が存在したかは不明である[21]。玉城丘陵など斎宮跡周辺における古墳の築造停止と斎宮造営の開始あるいは本格化とがどのように関係しているのかについては、古墳と斎宮跡の両者における調査の蓄積がもう少し必要であろう。

**註**

1）　駒田利治「主要古墳測量調査報告　１．権現山１・２号墳」『ふびと』第34号　三重大学歴史研究会　1978

2）　小田泰正「主要古墳測量調査報告　２．大塚１号墳」『ふびと』第34号　三重大学歴史研究会　1978

3）　前川嘉宏「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと』第36号　三重大学歴史教室・三重大学歴史研究会　1979、下村登良男「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』　松阪市教育委員会　1981、下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　多気町教育委員会　1986、伊勢野久好「旧一志郡内の首長墓」『天花寺山』　一志町・嬉野町遺跡調査会　1991、竹内英昭「南勢地域の古墳時代前半期の首長権～宝塚１号墳をめぐって～」『Mie history』vol.５　三重歴史文化研究会　1993

4）　松阪市教育委員会『史跡宝塚古墳』　2005

5）　鈴鹿市考古博物館『白鳥塚１号墳』　2006

6）　西村美幸「玉城丘陵とその周辺の群集墳について」『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター　1999

7）　下村登良男1986

8）　前川嘉宏1979

9）　先に述べたように、小型前方後円墳を後期前半のものと推定すると、後期前半から継続的に群形成が行われていたこととなろう。

10）　南勢地域全体で見ても横穴式石室の定着が６世紀末を遡らない可能性が指摘されている（竹内英昭「南勢地域の群集墳―松阪市阪内川流域の特質―」『立命館大学考古学論

集Ⅰ』　立命館大学考古学論集刊行会　1997)。
11)　下村登良男「県指定史跡　坂本古墳群」『明和町史』史料編第１巻　明和町　2004
12)　竹内英昭「伊勢湾地域の横穴式石室の構造と展開」『東海の古墳風景』季刊考古学・別冊16　雄山閣　2008
13)　西村美幸1999
14)　下村登良男「大塚古墳群」『明和町史』史料編第１巻　明和町　2004
15)　和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版　古代の日本』第５巻近畿Ⅰ　角川書店　1992
16)　須恵器の器種分類の呼称については、基本的に都城編年における分類を用いている。第Ⅶ章第４節註１）参照。
17)　斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』　2001
18)　淺生卓司「伊勢南部の須恵器生産―外城田窯址群の検討―」『Mie history』vol.16　三重歴史文化研究会　2005
19)　山澤義貴「度会郡玉城町原６号・同７号発掘略報」『ふびと』第22号　三重大学学芸学部歴史研究会　1964
20)　三辻利一「泉貢窯跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告―第２分冊―』　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1992、淺生卓司2005
21)　明和町史編さん委員会（編）『明和町史』斎宮編　明和町　2005

## 第５節　総括

国営宮川用水第二期土地改良事業に際しては、数多くの古墳を対象として範囲確認調査や本調査を行い、その中のいくつかについて本書で報告してきた。

本書で報告した古墳が位置する玉城丘陵では、これまでにも丘陵の西側から北側にかけての縁辺部に存在する河田古墳群や神前山古墳群、世古古墳群などにおいて、いくつかの古墳の発掘調査が行われている。しかしながら、玉城丘陵でこれまでに行われてきた発掘調査の中でも大規模なものは1970年代に激化した土取りや開発に伴うものであり、そうした中での発掘調査は難を極め、記録保存の観点からも十分とはいえるものではなかったといえる。それに対して、今回の発掘調査は十分な調査を行うことができるだけの条件下で行われたものであり、調査対象となった各古墳の情報を詳細に記録保存することができたといえる。

また、未調査のまま数多く存在する古墳群の実態は明らかではない。今回の調査では、事前の分布調査によって古墳の分布について更なる情報を蓄積するとともに、これまでに発掘調査が及んでおらず、その内容が明らかでなかった小金古墳群、高塚古墳群、斎宮池古墳群の調査を行うことができ、玉城丘陵の古墳群の実態解明のために、少なからず役立つ情報を得られたものと思われる。こうした情報は、今後の玉城丘陵やその近辺における埋蔵文化財調査において有効に活用することができよう。

そして、これらの発掘調査によって得られた各古墳に関する情報は、その古墳や古墳群自体の詳細な内容を知ること以外にも、当該地域の地域史を紐解いていく上で様々な意義をもっている。本章でもその一部について述べたように、今回の調査成果からは古墳時代における南勢地域の地域社会や、より広域における地域間交流などについても考えるための手がかりを得ることができた。そして、それによって玉城丘陵の古墳群形成がより広い地域の歴史的動向と大きな関連性をもつということが明瞭に浮かび上がってきたといえる。

調査された古墳はいずれも調査後消滅する運命をたどっており、歴史遺産として後世に残すことができなかったことはいささか残念ではある。しかしながら、引き替えに当該地域の歴史像を豊かに描き出すための資料を提供したことは間違いない。今後、この発掘調査によって得られた資料がさらに有効に活用されることと、本報告がそのための足がかりとなることを祈って、まとめに代えたい。

# 附　章

## 第１節　宮川用水事業にかかる範囲確認調査実施古墳の概要

国営宮川用水第二期土地改良事業斎宮調整池拡張造成に伴う発生土処分場の事業地は、南勢地方最大の古墳密集地帯として知られる丘陵地である。この丘陵は通称玉城丘陵と呼ばれ、現在までに500基を超える古墳が確認されている。事業計画は、造成工事の際に排出される発生土を隣接する谷筋に埋め立てるというもので、当該地域に所在する周知の古墳への影響および、未確認の古墳などの有無を確認することを目的として、平成17年度に分布調査を行なった。その結果、新たに17基の古墳状の高まりを確認し、周知のものを含めて約20基の古墳について、工事の影響を受ける可能性があるため、東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所とその取り扱いについて協議を行った。これにより、発生土による埋没および破壊を免れない古墳について、本発掘調査および範囲確認調査を随時行っていくことで合意した。そのため、次年度の平成18年度から平成21年度まで発生土処理関係の発掘調査を以下のように行っている。なお詳細については第２表を参照されたい。

発掘調査を行うに当たって、新たに発見した古墳状の高まりについては、便宜上遺跡名称および遺跡番号を明和町と協議し付与した。以下、その遺跡名称で記述を行うが、調査の結果自然地形と判断されたものについては、遺跡名称および遺跡番号とも、後日協議のうえ抹消されている。

平成18年度は、斎宮池16号墳の工事立会調査および斎宮池20～23号墳の範囲確認調査を行った。

平成19年度は、小金３・４・８・10・11号墳および高塚４～６号墳、池村３号墳、黒桂３～５号墳の範囲確認調査と小金12号墳の本発掘調査を行った。小金12号墳は、４号墳の範囲確認調査時に新たに発見した古墳である。

平成20年度は、小金２号墳および高塚２・３号墳、斎宮池３・19号墳の範囲確認調査と小金３号墳、高塚４～６号墳の本発掘調査を行った。

平成21年度は、小金２号墳および斎宮池19号墳の本発掘調査を行った。

これらの調査結果のうち、本発掘調査の結果については当報告書の本文に詳しい。ここでは、本発掘調査を実施しなかった範囲確認調査結果について、調査終了後にそれぞれ作成している「範囲確認調査結果報告」をもとに、古墳群ごとに記述する。

### ①斎宮池古墳群

**３号墳**　斎宮池３号墳は周知の遺跡である。本調査を行った19号墳と同じ尾根上に位置する。

３号墳の範囲確認調査は、平成20年６月９日から18日に、40㎡を対象に行った。事業は墳裾付近まで及ぶため、墳丘の範囲に影響が出ないか、古墳の施設の有無などの調査を行った。事業範囲内で設定した15㎡のトレンチでは遺構・遺物とも確認できなかったため、今回の事業では古墳に影響が出ないと判断し、施工可とした。

**16号墳**　斎宮池16号墳は多気郡明和町池村字長谷町に所在する古墳で、尾根筋の先端部に位置する。周知の遺跡であるが、墳丘は判然とせず、径10ｍほどの小円墳であることが推定されている。当古墳の東側には斎宮調整池があり、今回その管理用道路を拡幅するにあたり、古墳に影響が及ぶ可能性が考えられる範囲について工事立会調査を行った。

調査は平成18年９月15日に約180㎡を対象として行ったが、遺構・遺物ともに確認されず、今回の工事では古墳本体に影響が出ないものとして、施工可としている。

**20～23号墳**　斎宮池20～23号墳は、前述した事業地内の分布調査により新たに発見された古墳状の高まりである。このうち斎宮池20～22号墳は、前述の斎宮池３号墳と同じ尾根に、また23号墳は谷を挟んで向かい側の尾根に位置する。

20・21号墳の調査は、平成18年７月18日から28日に、22号墳は７月25日から28日に行った。いずれも墳頂部から周溝が想定される墳裾部にかけて、それ

ぞれトレンチを設定した。20・21号墳は54㎡、22号墳は18㎡の調査トレンチである。その結果、一部21号墳で主体部と考えられる土層が認められたため、一部拡張して精査を行ったが、これらは当丘陵の基盤である花崗岩が風化する過程で形成されたものと判断された。その他のトレンチで遺構は確認できず、出土遺物も見られなかったため、斎宮池20～22号墳と思われた高まりは、いずれも自然地形と判断し、施工可とした。

23号墳の調査は、平成18年７月10日から14日に行った。墳丘と想定される高まりの大部分は事業地外にあるため、事業地内で周溝が検出されそうな墳丘裾部において47㎡の調査トレンチを設定した。いずれのトレンチでも周溝および墳丘の盛土と思われる層は確認できず、遺物の出土もなかったため、今回の事業では古墳に影響がないと判断し、施工可とした。

なお、斎宮池20～22号墳は調査の結果自然地形と判断されたため、明和町と協議を行い、遺跡名称を抹消し、遺跡番号も欠番とした。

### ②小金古墳群

小金古墳群は、玉城丘陵のほぼ中央部に位置し、南北方向に伸びた丘陵支脈の尾根筋の高まりや突端部に点々と分布する。そのうち、５号墳までは周知の遺跡である。今回範囲確認調査を実施した８・10・11号墳を含む６～11号墳は前述した事業地内の分布調査によって新たに発見された古墳状の高まりである。

**10号墳**　小金10号墳は小金４号墳の北西斜面に位置する。墳丘と思われる高まりは事業地外にあるが、周溝などの施設に影響が出ないかの確認が必要であったため、平成19年６月19日に４㎡のトレンチを設定して調査を行った。その結果、遺構や遺物はみられず、今回の工事では古墳本体に影響は出ないものと判断し、施工可とした。

**８・11号墳**　小金８・11号墳は、小金２号墳を挟んで南北に位置する。８号墳は平成19年８月７日から９日に12㎡、11号墳は同年６月11日から19日に66㎡の調査を行った。いずれも古墳に伴う埋葬施設や周溝などの遺構は確認されず、出土遺物もなかったため、古墳と思われた高まりは自然地形であると判断し、施工可とした。前述の斎宮池古墳群同様、この８・11号墳も明和町と協議後、遺跡名称・遺跡番号とも抹消した。

### ③池村古墳群

**３号墳**　池村古墳群は、小金古墳群が分布する丘陵支脈と谷一つ隔てた東側の丘陵支脈上に位置する。２号墳までは周知の古墳であるが、３号墳は今回の分布調査で新たに発見された古墳であり、１号墳の所在する丘陵頂部から北側へ張り出した尾根の突端部に位置する。

墳丘と思われる高まりはほとんど事業地外にあるため、事業範囲内に３㎡のトレンチを設定し、遺構や遺物の有無を確認する調査を平成19年６月11日に行った。その結果、古墳に伴うような周溝やその他の施設などは見られず、遺物も出土しなかった。したがって今回の工事では古墳本体に影響が出ないと判断し、施工可とした。

### ④黒桂古墳群

**３～５号墳**　黒桂古墳群は、斎宮池古墳群が分布する丘陵支脈と谷一つ隔てた西側の丘陵支脈上に所在する。今回分布調査で新たに発見した古墳状の高まりを３～５号墳とし、平成19年８月１日から６日までの期間、３基の古墳を縦断するように33㎡の調査坑を設定し、範囲確認調査を行った。その結果、埋葬施設や周溝が想定される箇所でもそれに相当するような遺構は見られず、遺物の出土もなかった。したがって、これらの古墳状の高まりを自然地形と判断し、施工可とした。

調査後、明和町と協議のうえ、遺跡名称・遺跡番号とも抹消した。

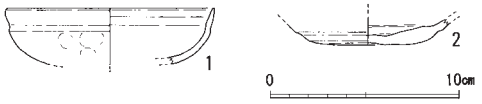
### ⑤高塚古墳群

**２・３号墳**　高塚古墳群は、小金古墳群が分布する尾根の、谷を挟んで西側の尾根に所在する。高塚２・３号墳は周知の遺跡である。墳丘は、ほとんど事業地外にあるため、事業範囲内で古墳の施設が確認される可能性のある箇所に２号墳は18㎡、３号墳は11㎡の調査坑を設定して、平成20年６月９日から18

日に調査を行った。

２号墳の調査坑では、時期不明のピット状の落ち込みが確認され、埋土から埴輪片が出土している。この埴輪片は２号墳から流出したもので、ピットは古墳時代以降の遺構であろうことが指摘されている。掘削も行ったが、不整形で性格不明である。

３号墳では２箇所の調査坑を設定したが、いずれにおいても古墳に関連する遺構や遺物は全く検出されなかった。ただし周辺の崩落土から、須恵器の杯（第59図２）が表面採集されており、３号墳から流出した遺物である可能性が考えられる。このほか３号墳の墳丘周辺で土師器杯（第59図１）も表採している。




第 59 図　高塚３号墳周辺出土遺物実測図（1:4）

今回の事業地内では、古墳に関連する施設は確認できなかったことから、遺跡への影響なしと判断し、施工可とした。

## 第２節　高塚２号墳出土・採集の埴輪について

### ①報告の経緯

前節でも報告したように、高塚２号墳については墳丘の一部が事業計画地内に及んでいる可能性があったため、墳裾付近で調査坑を１箇所設けて範囲確認調査を行った。

その調査坑からは円筒埴輪の破片などが出土したが、他にも墳丘周辺で埴輪片の散布を確認することができた[1)]。

高塚２号墳の墳丘の大部分は現在畑地として利用されているが、範囲確認調査時に土地所有者の方が現地へ訪れる機会があり、その折に耕作中に出土した埴輪片を寄贈していただいた。

その後、同じ土地所有者の方が過去に高塚２号墳で採集したとされる埴輪についても、土地所有者の方から寄託を受けて保管していた別の方を通じて寄贈を受け、結果としてかなりの量の埴輪が三重県埋蔵文化財センターに保管されることとなった。

それらの資料の中には、円筒埴輪のほかにも朝顔形埴輪や形象埴輪の破片がかなり含まれている[2)]。これまで高塚２号墳の具体的な内容については、埴輪を持つという点も含め、ほとんど知られていなかった。これらの埴輪は、高塚２号墳の築造時期や埴輪群構成を明らかにする上で大きな手がかりとなる資料と考えられる。

また、当該地域近辺では形象埴輪がまとまって出土してる古墳は非常に限られており、地域史的な観点から見ても貴重な埴輪資料である。

このように重要性の高い資料であると考えられるため、範囲確認調査によって出土した埴輪とあわせて、採集された埴輪についてもここで概要を報告しておきたい。

### ②範囲確認調査出土の埴輪（第60図１～３）

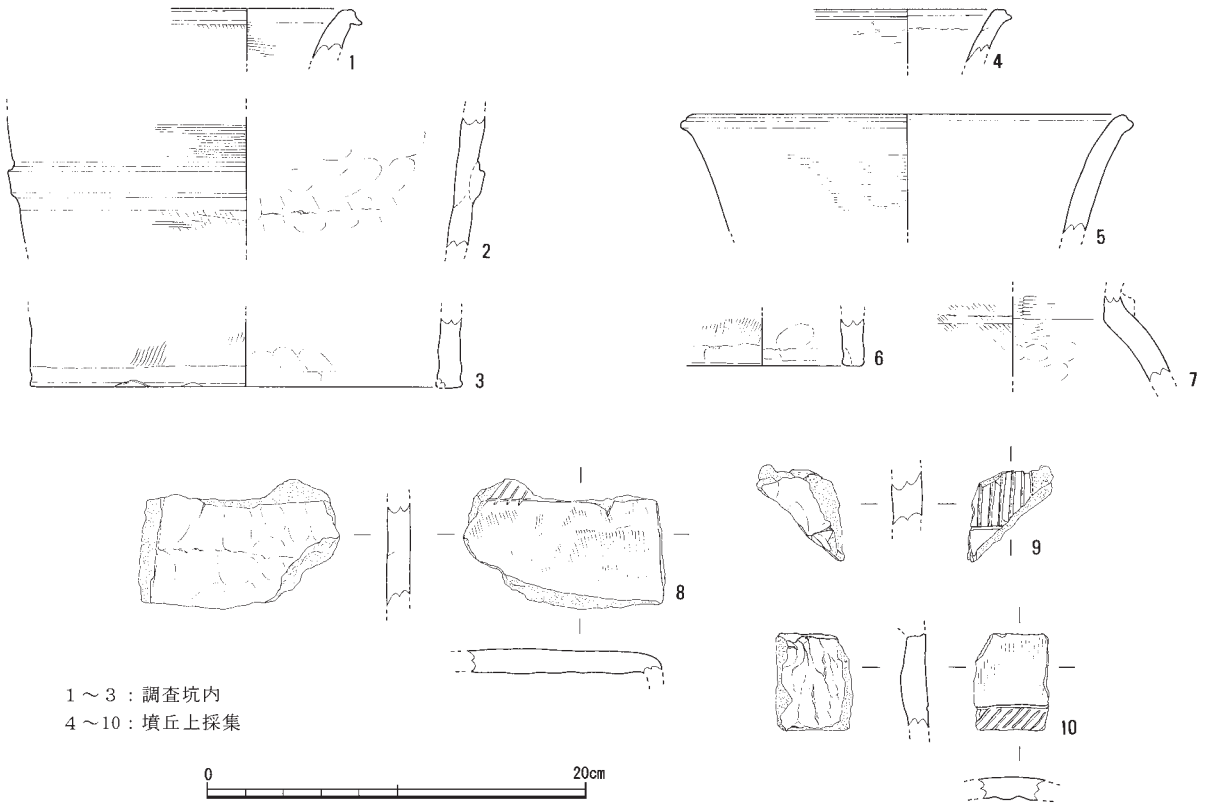
範囲確認調査時に調査坑内から出土したものである。ごく少量であり、いずれも円筒埴輪の破片と考えられる。

**円筒埴輪**（１～３）　１は口縁部片である。口縁端部は外方へつまみ出されており、突出する。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが認められる。２は突帯部分の破片である。突帯はかなり低平である。透孔は遺存していない。器面調整は不明瞭であるが、外面には２次調整のヨコハケが認められる。３は底部片である。一部にタテハケが遺存している。

### ③調査時に採集された埴輪（第60図４～10）

範囲確認調査時に、墳丘上に散布していたものを土地所有者の方から寄贈していただいたものである。円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪があるほか、図化はできなかったものの土師器壺の破片と思われるものも採集されている。

**円筒埴輪**（４～６）　４・５は口縁部である。４の口縁端部は外方へつまみ出されるように突出するが、５はほとんど突出しない。４・５とも外面には




**第 60 図　高塚２号墳出土遺物実測図①（1:4）**

２次調整のヨコハケが認められる。６は底部片である。外面にはタテハケが認められる

**朝顔形埴輪**（７）　７は朝顔形埴輪の頸部片である。突帯が剥離した痕跡が認められる。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが認められる。

**形象埴輪**（８～10）　８・９は家形埴輪であると思われる。両者とも線刻が認められる。８は板状の破片で、一辺には屈曲する部分が遺存している。厚みや屈曲部の製作方法などから、壁ではなく寄棟造の屋根の隅棟部分などと思われる。９はやや刻線が太い。縦横の線が直交する点が８や10の線刻とは異なる。壁の網代表現であろうか。色調は白っぽく、32・33に似る。

10は線刻が施されており、形象埴輪であると思われるが、種類は不明である。やや湾曲しており、内面にはそれによって生じた粘土の皺が明瞭に認められる。他の部品と接合されていたようであり、端面に剥離痕が認められる。

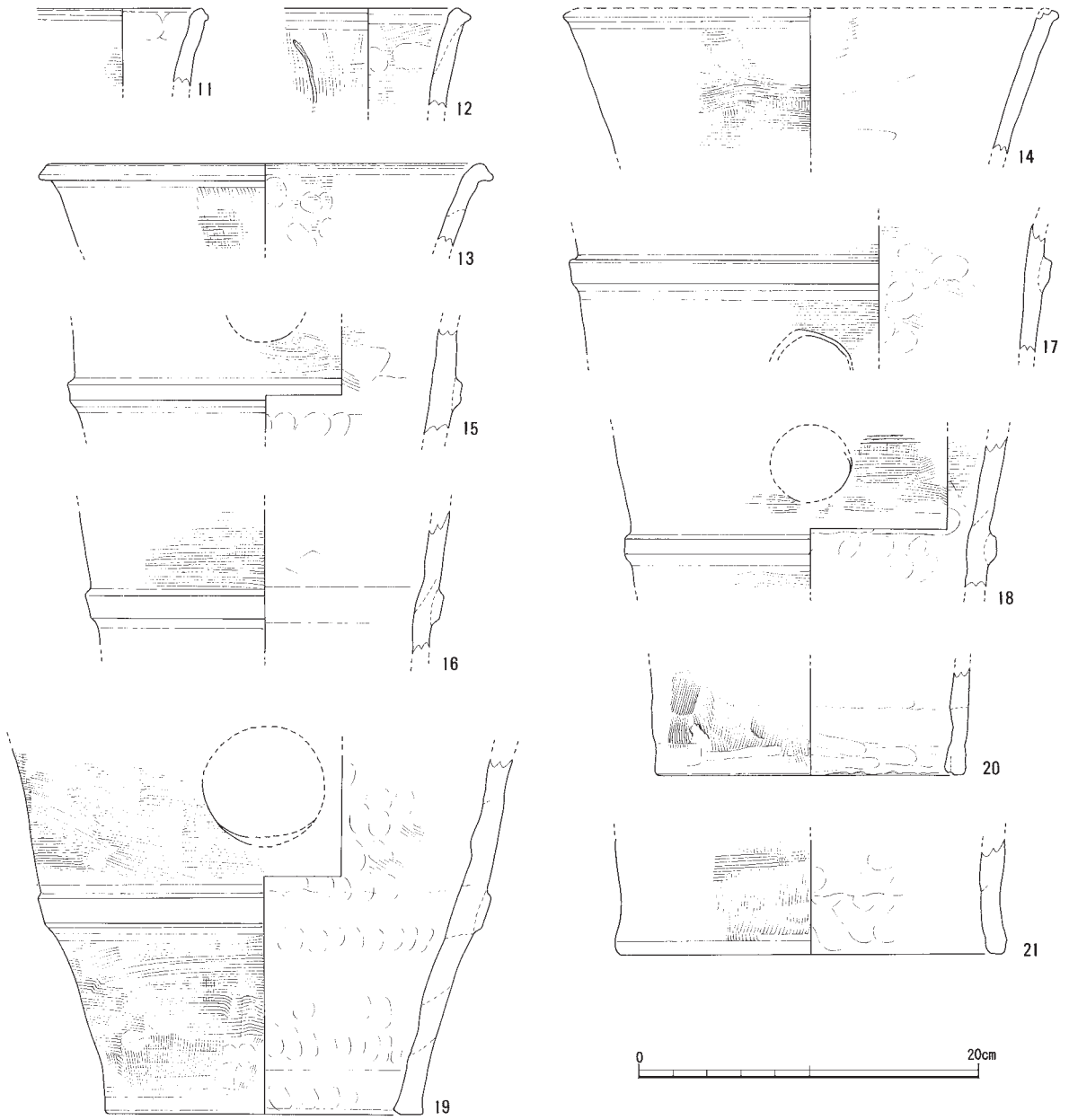
## ④過去に採集された埴輪（第61～64図）

過去に高塚２号墳で採集され、その後土地所有者とは別の方が保管されていたものである[3]。円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。

**円筒埴輪**（11～21）　11～14は口縁部片である。11～13は口縁端部が強いヨコナデによってつまみ出されて外方へ突出しており、範囲確認調査時に出土したものと類似した特徴を持つ。14のみは外方への突出が弱い。12には外面にヘラ記号が認められる。いずれも１次調整のタテハケの後に２次調整のヨコハケを施している。

15～18は胴部片である。15・17・18には透孔が遺存している。いずれも円形透孔である。外面にはいずれも２次調整としてヨコハケが施される。突帯はやや幅広で突出度は低い。突帯の上下は器壁にしっかりとナデつけられている。

19～21は底部片である。19は底部から第２段[4]の途中までが遺存している。今回報告する円筒埴輪の中で最も遺存状況がよい個体であるため、やや詳しく述べたい。器形は底部から逆ハの字状に外方へ直線的に開く。底部高[5]は13.0㎝で、第２段の高さは不明であるものの、透孔などから推測すると、底部高とほぼ同じ高さであった可能性が高い。第２段に




**第61図　高塚２号墳出土遺物実測図②（1:4）**

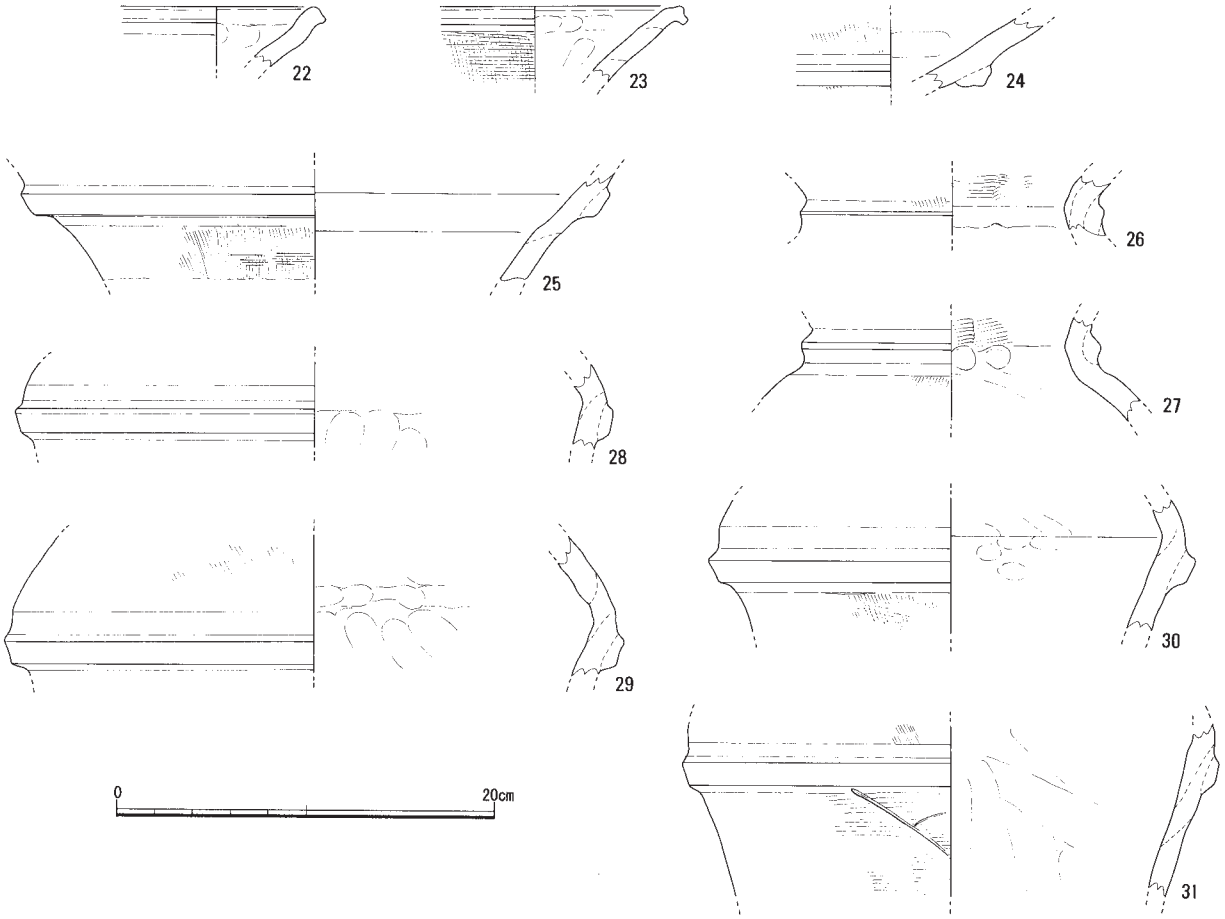
は円形透孔が２方向に開けられている。外面調整も良好に遺存しており、１次調整のタテハケの後に２次調整のヨコハケが施されている。ヨコハケには静止痕が連続的に明瞭に認められ、明らかにＢ種ヨコハケを意識したものであると思われるが（写真図版25）、かなり部分的なものであり、典型的なＢ種ヨコハケほど整然としたものではない。

20・21については、ほぼまっすぐ上方へ立ち上がっており、19とはやや器形が異なるものとみられる。20は内外面の底部周辺にヨコナデが認められる。

**朝顔形埴輪**（22～31）　22～25は朝顔形埴輪の口縁部片である。22・23は円筒埴輪と同様に口縁端部が強いヨコナデによって外方へつまみ出されている。24・25には突帯が遺存している。口縁部の外面調整には23のように２次調整のヨコハケが施されていたと思われるが、24・25のように１次調整のタテハケが主体となっているものもみられる。

26・27は頸部片である。頸部には突帯が貼り付けられている。外面にはタテハケが施されている。頸部内面にはヨコハケが施されている。

28～31は壺部である。円筒部との境には低いが比較的幅広でしっかりした突帯を貼り付ける。円筒部




**第 62 図　高塚２号墳出土遺物実測図③（1:4）**

外面には２次調整のヨコハケが施されているが、壺部の外面調整はいずれもタテハケであり、ヨコハケは認められない。

なお、31の外面にはヘラ記号が施されている。

**形象埴輪**（32～46）　32～45は家形埴輪である。32～39は屋根、40～45は壁の破片と考えられる。

32・33はいずれも白っぽい色調で形態も類似しており、おそらく同一個体と考えられる。屋根の隅棟部分の屈曲が遺存する。33は軒先まで遺存している。両者ともに内面に壁部分が剥離した痕跡を残す。外面は丁寧にナデを施し平滑に仕上げている。赤色顔料を塗布した痕跡は認められない。この個体は、寄棟造りの家を表現したものであると推測される。なお、この２点のほかにも、同一個体と思われる屋根や壁の破片が複数存在している。

34～36は屋根の壁との接合部付近の破片であると思われる。34・35は外面をナデによって平滑に整えているが、36はハケによって調整している。36は外面の上部に幅広の突帯状のものが剥離した痕跡が認められる。また、壁との接合部付近の外面にも激しい器壁の荒れが認められる。この部分には全くハケが遺存しておらず、粘土の接合部で剥離した痕跡である可能性がある。なお、35・36は外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

37は突帯状の破片であり、家形埴輪の屋根の一部と思われるが、どのような部位に相当するかは不明である。38・39はおそらく庇の一部と思われる。38は壁部分から剥離した痕跡が残っており、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

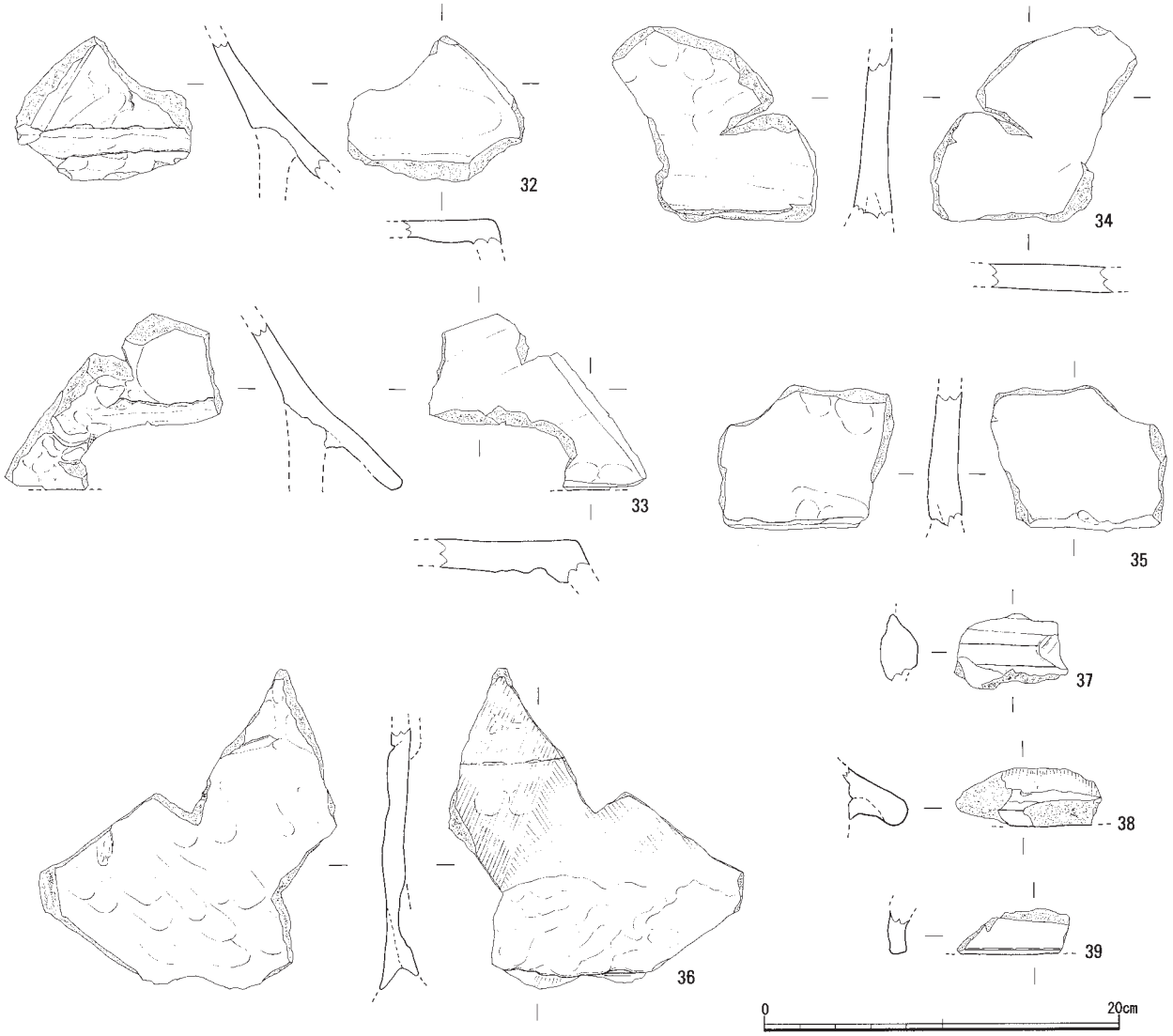
40は壁の隅部分の破片である。板状の粘土を接合して屈曲部を作っている。外面の角部分には幅広の突帯を縦に貼り付けており、柱表現と思われる。41・42はこうした柱表現の突帯部分が剥離したものである。41は外面に横方向の突帯の剥離痕が認められ、45にみられるような裾廻り突帯の痕跡であると思われる。これらの柱表現の突帯にも外面にハケが施さ

れている。裏の剥離面に残るハケは、貼り付けられた壁の外面に施されていたハケの圧痕である。40〜42には、いずれも外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

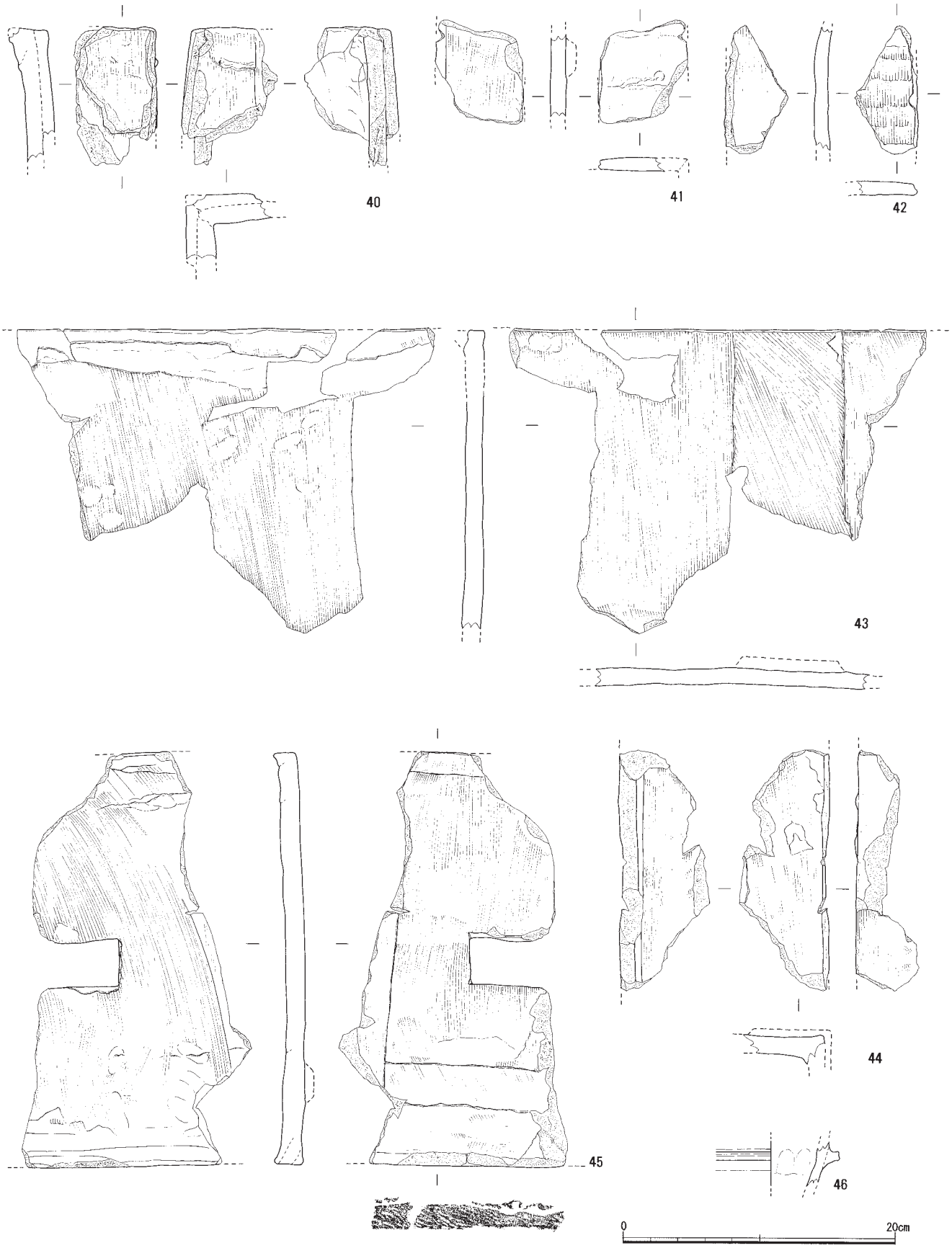
43〜45も壁の破片である。43は外面には柱表現と思われる幅広の突帯が縦方向に貼り付けられていた痕跡が残る。内外面ともハケで調整されているが、突帯が剥離した部分についてはハケの方向が異なっており、１次調整としてハケを施し、突帯を貼り付けた後に、２次調整としてもう一度ハケを施していることが窺われる。外面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

44は壁の隅部分付近の破片である。40と同じく、外面に柱表現と思われる突帯が貼り付けられていた痕跡が残る。ただし、40とは異なり内外面ともハケによって調整されている。

45は底部から上端の屋根との接合部までが遺存している破片である。中位に横長の窓が開けられている。外面には他の破片と同じく柱表現と思われる縦方向の突帯が剥離した痕跡が残る。また、縦方向の突帯より幅が狭い横方向の突帯が剥離した痕跡が、底部から４㎝ほど上方に残る。この横方向の突帯は縦方向の突帯を貼り付けた後に貼り付けられており、いわゆる裾廻り突帯であると思われる。内外面はストロークの長いハケによって調整されているが、43と同様に突帯を貼り付けた後にも２次調整のハケを施している。外面には赤色顔料を塗布した痕跡が残る。なお、この個体は43と同一個体である可




第63図　高塚２号墳出土遺物実測図④（1:4）




第 64 図　高塚２号墳出土遺物実測図⑤（1:4）

能性が高い。焼成や色調、調整などからみれば、36・40～45がすべて同一個体の破片である可能性も考えられる。

46は細い突帯をもつ破片である。小片のため元の形は不明であるが、円筒埴輪の突帯とは全く異なり、器壁も薄いため、何らかの形象埴輪の破片である可能性が考えられる。

## ⑤埴輪群の位置づけ

以上に報告を行ってきた埴輪からは、高塚２号墳の築造時期や、周辺の古墳との関係、あるいは伊勢地域における埴輪生産の様相などを考える上で多くの情報が得られるものと思われる。そこで、報告した埴輪の特徴や構成などについてまとめ、その時期的な位置づけなどについても言及しておきたい。

**円筒埴輪・朝顔形埴輪の特徴**　円筒埴輪には底部から口縁部までの高さが判明するものはない。突帯間隔の分かる資料も得られていない。ただし、全体的に径は小さく、突帯間隔も狭そうである。小片が多く、径の復元に不安を残すものが多いが、底部径は18～22㎝、口径は23～28㎝前後である。また、最も遺存状況の良い19では底部高は13.0㎝である。

これらの点から考えれば、高塚２号墳の円筒埴輪はおそらく２突帯３段の構成をとるものであると思われる。器形には若干のばらつきがあると思われるが、いずれも器高が40㎝ほどの小型品であると考えられよう。

透孔は、いくつかの資料で確認できるが、いずれも円形である。透孔は19からみて２方向に開けられているものとみられる。

突帯は全体的に低い。ナデ付けは全体的にしっかりされており、突帯が剥離したものは確認できない。

口縁部は、外方へ強く屈曲するようなものは認められない。また、ほとんどの個体では口縁端部の強いナデにより、口縁端部が外側へ突出する。

底部の破片は少ないが、底部調整が行われた痕跡はない。

外面調整としては、１次調整のタテハケの後に２次調整としてヨコハケが施される。ヨコハケの採用率は高く、ほぼすべての個体に２次調整としてヨコハケが施されていたと考えられる。ヨコハケについては不明瞭な静止痕が断続的に観察できるものの整然としたものではなく、典型的なＢ種ヨコハケと呼べるものではない。

朝顔形埴輪も、円筒埴輪同様に外面には２次調整としてヨコハケが施されている。口縁端部の形態も円筒埴輪と共通する。頸部の締まりは強く、壺部は丸みを帯びているものと思われる。ただし、壺部の肩部が張るような形態のものは認めがたい。

焼成については、いずれも土師質に焼かれており、須恵質のものは認められない。ただし、黒斑をもつ破片も認められない。

**家形埴輪の特徴**　家形埴輪には全体の形を窺うことができるような破片はないが、いくつかの特徴が指摘できる。

まず、屋根の形状は寄棟造りのものが存在することが判明した。一方で、明確に切妻造りと分かるような屋根の破片は確認できていない。ただし、焼成や色調、外面調整などからみて少なくとも２個体以上の家形埴輪が存在していたことは確実である。その中でも、36・38は簡易な寄棟造り建物の屋根表現としてはやや違和感がある破片であり、他の形態の屋根をもつ建物の埴輪も存在していた可能性は残されている。

屋根と壁との接合には大きくみて２種類あるものと思われる。32・33のように、軒先まで屋根を作った後に壁をしっかりと接合しているものがある一方で、43・45のようにあまりしっかりと屋根を接合していないと思われるものもある。43は壁外面上端に屋根の取り付け時に粘土を補填するなどした痕跡が残っていない。また、36の屋根の破片で壁との接合部付近の外面に剥離痕らしきものが残っていることを参考にすると、屋根と壁の接合後に更に庇を付け足したようなものが存在する可能性も考えておく必要があるかもしれない。

壁については、外面に縦方向の貼付突帯による柱表現を持ち、なおかつ裾廻り突帯を持つ個体があることが確認できた。柱は四隅の柱に加え、桁柱も表現されていたことが43から窺われる。

焼成については、円筒埴輪や朝顔形埴輪と同様に土師質で黒斑は認められない。

**時期**　これまで述べてきた埴輪の特徴から、高塚２

号墳の埴輪の時期について考えてみたい。時期を考える上で最も参考になるのは円筒埴輪であると考えられるため、円筒埴輪を中心にみていく。

円筒埴輪は、いずれも２突帯３段の小型品と考えられる点や、透孔がすべて円形である点、２次調整のヨコハケが認められる点などから、古墳時代中期のものとみてよいであろう。また、黒斑が認められないことからは窖窯で焼成されたことが推測されるため、少なくとも古墳時代中期中葉以降のものであると考えることができる。

一方で、須恵質に焼成されたものが認められない点や、２次調整のヨコハケの省略がほとんど認められない点、そして底部調整が全く認められない点などからは、中期末～後期初頭までは下らないものである可能性が高い。

以上のことから、高塚２号墳から出土した円筒埴輪は中期後葉（５世紀後葉）に位置づけることができよう。

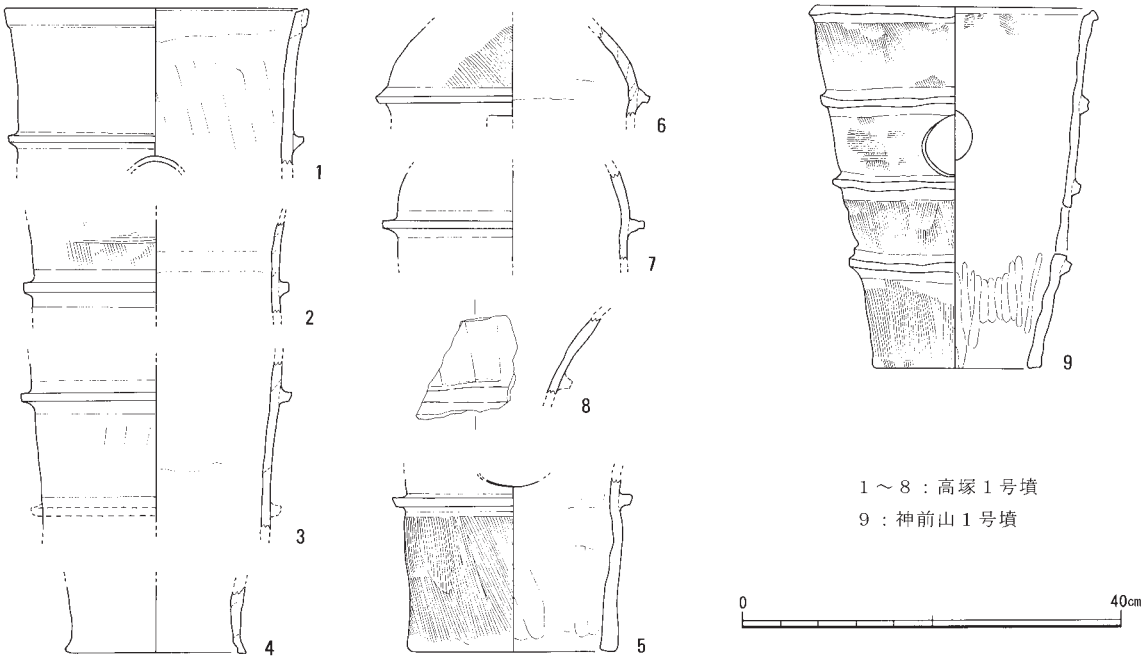
近隣の古墳で近い時期の埴輪を出土しているものとしては、高塚１号墳や神前山１号墳などがあげられる（第65図）。これらの古墳から出土した円筒埴輪との比較も若干行っておきたい。

隣接する高塚１号墳の円筒埴輪・朝顔形埴輪をみてみると、透孔が方形と思われるものが存在しており、突帯の突出度もかなり高い。また、間隔の狭いＢ種ヨコハケが用いられており、近畿地方の円筒埴輪と共通するような口縁部に突帯状の粘土紐を貼り付けて肥厚させている個体も確認されている。これらの特徴から、高塚１号墳の円筒埴輪は古墳時代中期中葉に位置づけられている[6)]。

こうした高塚１号墳の円筒埴輪と比較すると、高塚２号墳出土の円筒埴輪は明らかに後出する特徴を持っており、高塚２号墳は高塚１号墳よりも後に築造されたものとみられる。

神前山１号墳では多くの円筒埴輪が発掘調査により出土している。円筒埴輪は３突帯４段のものが主体である。これらの円筒埴輪には、Ｂ種ヨコハケが施されているものもあるがごく一部であり、一つの個体の中でもＢ種ヨコハケの使用は部分的にとどまるようである。透孔は円形のみで、焼成は土師質ではあるが黒斑はないとされる[7)]。

神前山１号墳の円筒埴輪と高塚２号墳の円筒埴輪を比較した場合、段構成には違いがあるが[8)]、透孔や焼成に共通性がある。Ｂ種ヨコハケが一部に認められる点も、高塚２号墳の円筒埴輪にＢ種ヨコハケを意識したヨコハケが一部で用いられている点と類似する。こうした点からみて、両古墳の円筒埴輪は比較的近い時期のものと考えることができるのでは




**第65図　高塚１号墳・神前山１号墳出土埴輪実測図（1:8）**　※豊田祥三 2005 より再トレース

なかろうか。ただし、突帯の突出度という点からみると、高塚２号墳の円筒埴輪の方が低平な印象を受けるため、高塚２号墳の方が若干時期が下る可能性もあろう。

神前山１号墳ではＴＫ208型式と思われる須恵器が出土している。したがって、高塚２号墳もほぼその時期か、それに若干遅れて築造された可能性が高いものと考えられる。

**埴輪群の構成**　今回報告した資料の中では、円筒埴輪のほかに、朝顔形埴輪が比較的多く認められた。朝顔形埴輪はかなりの数が樹立されていたものとみられる。

形象埴輪の種類は少ない。確実なものは家形埴輪のみである。ただし、採集されている破片の数は多く、先にも述べたように複数個体が存在したものと考えられる。

こうした円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪を中心とするような埴輪群の構成は、中期後半の中小古墳の埴輪群の構成にもよく見られるものである。先に推定した中期後葉という時期からみても矛盾はないであろう。

中期後半の南勢地域から中勢地域にかけての地域では、径20m以下の中小古墳で形象埴輪をもつものがかなりみられる。その中には家形埴輪が含まれることが多いが、家形埴輪のみである古墳はほとんどなく、器財形埴輪や動物形埴輪、人物形埴輪などとともに埴輪群を構成していることが通有である[9]。近隣の古墳の中でも高塚２号墳と近い時期に築造されたと思われる神前山１号墳でも、発掘調査によって家形埴輪のほかに馬形埴輪や蓋形埴輪が出土している[10]。したがって、高塚２号墳においても家形埴輪以外の種類の形象埴輪が存在していた可能性は高いといえるであろう。第64図46のような破片の存在からも、こうしたことを窺うことができる。

ただし、数度にわたって採集された資料の中に他の種類の形象埴輪の存在を窺うことのできる破片が10・46を除けばほぼ皆無であることを考えれば、家形埴輪以外の形象埴輪は極めて少なかったものと推測されよう。

こうした点に関して、埴輪群の構成、特に形象埴輪の樹立数や種類のバリエーションなどに、その古墳の地域内における階層的位置が反映されている可能性も考えられる。高塚２号墳では墳丘の発掘調査を行っていないため確実ではないが、形象埴輪の構成という点においては、神前山１号墳にくらべてランクが低いと見ることもできよう。

また、家形埴輪をみても、鰹木や破風板などと思われる破片が今のところ全く出土・採集されていないことから、それほど複雑な構造の屋根をもつ建物を表現したものは存在しなかったか、あっても少数であった可能性が高いものと思われる。こうした家形埴輪の様相からみても、それほどランクが高くない埴輪群構成であるように思われる。

しかしながら、径13mほどの円墳と推定される高塚２号墳と径34mの造り出し付円墳の神前山１号墳の間の墳丘規模の差ほどは、埴輪群の構成に差があるようには感じられない。古墳ごとの埴輪群構成の違いについては地域内における埴輪の生産体制などとも関係すると思われ[11]、今後も注意しておかなくてはならないであろう。

**註**

1）　なお、墳丘上では埴輪片の散布とともに、葺石が存在することも確認できた。一部では石同士が積み重なったような状況もみられ、かなり丁寧に葺石が施されていた可能性もある。

2）　胴部や底部の破片については、円筒埴輪か朝顔形埴輪かの区別はつけ難いため、いずれも円筒埴輪として報告している。

3）　高塚２号墳から出土したことは、保管者からの聞き取りや、現地で採集された埴輪との比較からほぼ間違いないが、念のため高塚２号墳から出土したことが間違いない他の資料とは分けて報告しておく。

4）　本報告では円筒埴輪の突帯によって区切られた各部位について、底部から順に第１段、第２段、第３段・・・と呼称する。

5）　底面から最も下の突帯の上辺までを底部高とする（辻川哲郎「突帯―突帯間隔設定技法を中心として―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会　2003）。

6）　豊田祥三「高塚１号墳採集埴輪の再検討」『研究紀要』第14号　三重県埋蔵文化財センター　2005。川西編年Ⅳ期古

段階（川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会　1978)、前方後円墳集成６期（広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』畿内編　山川出版社　1992）に位置づけられている。

7）　豊田祥三2005

8）　こうした差異については、神前山１号墳の規模が高塚２号墳よりかなり大きいものであることを考えれば、被葬者の地位の差などに基づくものである可能性も高い。

9）　穂積裕昌「形象埴輪」『三重県史』資料編考古１　三重県　2005

10）　明和町教育委員会『神前山１号墳発掘調査報告書』　1973

11）　穂積裕昌「伊勢における窖窯出現以降の埴輪生産～その系統と工人編成～」『考古学フォーラム』17　考古学フォーラム　2005

| No. | 実測番号 | 種別 | 器種 | 出土遺構 | 出土グリッド | 口径／長さ(cm) | 底部径／幅(cm) | 器高／厚さ(cm) | 重量(g) | 色調 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 【小金２号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-02 | 弥生土器 | 鉢？ | 埋葬施設検出中 | — | — | 3.3 | — | — | 黒褐2.5Y3/1 | 完存 | |
| 2 | 001-01 | 須恵器 | 直口壺？ | 包含層 | c5 | 11.0 | — | — | — | 外:黄灰2.5Y5/1<br>内:灰5Y5/1 | 1/12 | |
| 【小金３号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-06 | 土師器 | 杯 | 閉塞石下 | — | 11.0 | — | — | — | 明黄褐10YR7/6 | 2/12 | |
| 2 | 001-01 | 須恵器 | 杯身 | 玄門付近床面直上 | W5 | 12.0 | — | 4.5 | — | 外:灰白N7/0<br>内:灰N6/0 | 10/12 | 歪みあり |
| 3 | 001-05 | 須恵器 | 高杯 | 墳丘・玄室 | d8・E4 | — | 8.6 | — | — | 外:灰7.5Y6/1<br>内:灰褐5YR4/2 | 4/12 | 三方透孔 |
| 4 | 001-04 | 須恵器 | 高杯 | 玄室 | E3・W4 | — | 14.0 | — | — | 灰7.5Y5/1 | 2/12 | 有蓋高杯？<br>波状文<br>三方透孔 |
| 5 | 001-02 | 須恵器 | 直口壺？ | 玄室 | E1 | 11.0 | — | — | — | 灰N5/0 | 3/12 | |
| 6 | 001-07 | 土師器 | 杯 | 周溝 | e8 | 11.7 | — | 2.9 | — | 橙7.5YR6/8<br>黒褐7.5YR3/1 | 2/12 | 底部穿孔 |
| 7 | 001-08 | 土師器 | 杯 | 墳丘盛土中 | — | 8.2 | — | 4.4 | — | 橙7.5YR6/6 | 完存 | 底部穿孔<br>高杯杯部？ |
| 8 | 001-09 | 土師器 | 高杯 | 墳丘 | f7 | — | 7.6 | — | — | 明黄褐10YR6/6 | 6/12 | |
| 9 | 001-03 | 須恵器 | 広口壺 | 表土 | f8 | 13.0 | — | — | — | 灰5Y5/1 | 3/12 | |
| 10 | 002-01 | 須恵器 | 瓮 | 表土・排土 | — | — | — | — | — | 外:灰4/0<br>内:灰6/0 | 2/12 | 肩部櫛描列点文<br>体部最大径9.4cm |
| 【小金４・12号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-02 | 弥生土器 | 壺 | 12号墳包含層 | トレンチ拡張部 | 17.4 | — | — | — | 明黄褐10YR7/6 | 3/12 | 摩滅のため調整不明瞭 |
| 2 | 001-01 | 弥生土器 | 高杯 | 12号墳包含層 | トレンチ8 | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | — | 脚部片 |
| 3 | 001-01 | 土師器 | 杯 | ４号墳表採 | 北側谷部 | — | 8.6 | — | — | にぶい黄橙10YR7/4 | 4/12 | |
| 4 | 001-03 | 石製品 | 紡錘車 | 12号墳SX2 | トレンチ8・9 | 2.0 | 4.6 | 2.2 | 57.9 | — | 完存 | 滑石製 |
| 【高塚４号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 002-03 | 土師器 | 杯 | 周溝 | g7 | 14.2 | — | — | — | 明黄褐10YR6/6 | 1/12 | |
| 2 | 003-06 | 須恵器 | 蓋 | 周溝・包含層 | g6・18 | — | — | — | — | 灰N5/0 | — | つまみ径2.55cm |
| 3 | 002-02 | 須恵器 | 高杯 | 周溝・包含層 | f5 | 10.3 | 7.6 | 8.2 | — | 外:褐灰10YR6/1<br>内:黄灰2.5Y6/1 | 3/12 | |
| 4 | 001-01 | 須恵器 | 高杯 | 周溝 | f5 | 8.0～8.3 | 7.7 | 8.4 | — | 灰白5Y7/1 | 4/12 | 頸部径2.0cm |
| 5 | 003-04 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 8.8 | — | 3.1 | — | 灰5Y6/1 | 完形 | つまみ径1.75cm<br>取上げ№7 |
| 6 | 003-02 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 9.9 | — | 2.5 | — | 外:灰5Y6/1<br>内:灰N6/0 | 完形 | つまみ径1.8cm<br>取上げ№10 |
| 7 | 003-03 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 9.0 | — | 2.3 | — | 灰5Y5/1 | 完形 | つまみ径1.2cm<br>取上げ№2 |
| 8 | 003-01 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 8.8 | — | 2.5 | — | 外:灰5Y6/1<br>内:灰5Y5/1 | 完形 | つまみ径1.25cm<br>取上げ№1 |
| 9 | 006-02 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 9.0 | — | 2.7 | — | 外:灰N5/0・にぶい黄橙10YR7/2<br>内:灰白2.5Y7/1 | 完形 | 取上げ№8 |
| 10 | 003-05 | 須恵器 | 杯蓋 | 埋葬施設 | — | 9.2 | — | 2.7 | — | 黄灰2.5Y6/1 | 完形 | つまみ径1.7cm<br>取上げ№4 |
| 11 | 004-02 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 8.4 | 5.1 | 3.0 | — | 灰7.5Y6/1 | 完形 | 取上げ№6 |
| 12 | 004-01 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 8.7 | 5.8 | 3.2 | — | 灰N6/0 | 完形 | 取上げ№9 |
| 13 | 004-05 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 8.6 | 5.8 | 3.2 | — | 灰白2.5Y7/1 | 完形 | 取上げ№3 |
| 14 | 004-03 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 8.8 | 6.0 | 3.2 | — | 灰7.5Y6/1 | 11/12 | 取上げ№11 |
| 15 | 006-01 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 8.6 | 6.0 | 3.5 | — | 灰白7.5Y7/1 | 完形 | 取上げ№8<br>口縁部打ち欠き |
| 16 | 004-04 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 9.0 | 6.0 | 3.2 | — | 灰白7.5Y7/1 | 11/12 | 取上げ№5 |

第４表　出土遺物一覧表①

| No. | 実測番号 | 種別 | 器種 | 出土遺構 | 出土グリッド | 口径／長さ(cm) | 底部径／幅(cm) | 器高／厚さ(cm) | 重量(g) | 色調 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 002-01 | 須恵器 | 横瓶 | 埋葬施設 | — | — | — | — | — | 外:灰黄2.5Y7/2<br>内:にぶい橙7.5YR6/4 | — | 口縁部打ち欠き<br>頸部径6.0cm<br>体部最大径17.5cm |
| 18 | 007-01 | 金属製品 | 刀子 | 埋葬施設 | — | (5.8) | 1.3 | 0.3 | — | — | 半欠 | 装具遺存 |
| 19 | 005-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 包含層 | h6 | — | — | — | — | にぶい黄橙10YR7/4 | — | |
| 20 | 005-01 | 石器 | 敲石 | 地山直上 | m5 | 10.6 | 4.6 | 2.6 | 170.0 | — | — | 砂岩製 |
| 【高塚６号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 002-02 | 土師器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 11.4 | — | 3.5 | — | 橙2.5YR6/6 | 完形 | 取上げ№.1 |
| 2 | 001-04 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 10.4 | — | 3.2 | — | 外:灰N6/0<br>内:灰5Y6/1 | 完形 | 取上げ№.5 |
| 3 | 001-03 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 10.8 | — | 3.3 | — | 灰白5Y7/1 | 9/12 | 取上げ№.4 |
| 4 | 001-01 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 10.3 | — | 3.1 | — | 灰N6/0 | 完形 | 取上げ№.2<br>ヘラ記号 |
| 5 | 001-05 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 11.1 | — | 4.9 | — | 灰N6/0 | 完形 | 取上げ№.6<br>ヘラ記号 |
| 6 | 001-02 | 須恵器 | 杯 | 埋葬施設 | — | 10.9 | — | 3.9 | — | 灰N6/0 | 完形 | 取上げ№.3<br>ヘラ記号 |
| 7 | 007-02 | 金属製品 | 刀子 | 埋葬施設 | — | (12.9) | 1.2 | 0.4 | — | — | 完形 | 装具遺存 |
| 8 | 002-01 | 須恵器 | 杯？ | 表土・包含層 | o7 | 15.0 | 9.4 | 4.1 | — | 灰5Y6/1 | 3/12 | |
| 【斎宮池19号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-01 | 弥生土器 | 甕 | SD1 | f5 | — | 5.5 | — | — | 外:橙7.5YR6/6<br>内:橙7.5YR7/6 | 完存 | |
| 2 | 001-03 | 縄文土器 | 深鉢 | 包含層 | h7 | — | — | — | — | 黄灰2.5Y4/1 | — | |
| 3 | 001-04 | 石器 | 打製石鏃 | 表採 | — | 2.9 | 1.7 | 0.4 | 2.1 | — | 完形 | チャート製 |
| 4 | 001-05 | 石器 | 磨製石斧 | 表土 | — | 7.0 | 4.0 | 2.1 | 87.6 | — | 完形 | 範囲確認調査時出土<br>石英斑岩製 |
| 5 | 001-02 | 須恵器 | 高杯 | 表土 | — | — | 10.0 | — | — | 外:灰7.5Y5/1<br>内:暗灰N3/ | 1/12 | 範囲確認調査時出土 |
| 【高塚２号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-01 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 調査坑 | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | — | |
| 2 | 002-01 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 調査坑 | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | 2/12 | |
| 3 | 001-05 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 調査坑 | — | — | 22.6 | — | — | 外:にぶい橙7.5YR7/4<br>内:橙5YR7/6 | 1/12 | |
| 4 | 001-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 外:橙5YR7/6<br>内:淡橙5YR8/4 | — | |
| 5 | 001-06 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 墳丘上 | — | 23.0 | — | — | — | 浅黄橙7.5YR8/6 | 1/12 | |
| 6 | 001-03 | 埴輪 | 円筒埴輪 | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | |
| 7 | 001-04 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 外:浅黄橙7.5YR8/6<br>内:橙7.5YR7/6 | — | |
| 8 | 001-07 | 埴輪 | 家形埴輪 | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | 屋根？<br>外面赤色顔料塗布 |
| 9 | 002-02 | 埴輪 | 家形埴輪？ | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 外:橙7.5YR7/6<br>内:にぶい黄橙10YR7/4 | — | 壁？ |
| 10 | 002-03 | 埴輪 | 形象埴輪 | 墳丘上 | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | 種類不明 |
| 11 | 012-06 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR6/6 | — | |
| 12 | 012-05 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | — | |
| 13 | 014-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙5YR6/4 | 1/12 | |
| 14 | 005-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | 29.0 | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | — | |
| 15 | 013-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | 1/12 | 円形透孔 |
| 16 | 004-02 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | 1/12 | |

第５表　出土遺物一覧表②

| No. | 実測番号 | 種別 | 器種 | 出土遺構 | 出土グリッド | 口径／長さ(cm) | 底部径／幅(cm) | 器高／厚さ(cm) | 重量(g) | 色調 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 013-03 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙5YR6/4 | 1/12 | 円形透孔 |
| 18 | 013-01 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | 2/12 | 円形透孔 |
| 19 | 007-01 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | 18.6 | — | — | 橙7.5YR7/6 | 5/12 | 底部高13.0cm<br>円形透孔 |
| 20 | 014-04 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | 3/12 | |
| 21 | 014-03 | 埴輪 | 円筒埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | 1/12 | |
| 22 | 011-03 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | |
| 23 | 014-01 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | — | 外面赤色顔料塗布 |
| 24 | 012-03 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | — | |
| 25 | 004-03 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 浅黄橙7.5YR8/4 | 1/12 | |
| 26 | 011-05 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | 2/12 | 内外面赤色顔料塗布 |
| 27 | 011-04 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | 11/12 | 外面赤色顔料塗布 |
| 28 | 012-01 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 外:にぶい橙7.5YR7/4<br>内:橙5YR7/6 | 1/12 | |
| 29 | 012-02 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 外:にぶい橙7.5YR7/4<br>内:橙5YR7/6 | 1/12 | |
| 30 | 004-01 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | 1/12 | |
| 31 | 003-02 | 埴輪 | 朝顔形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | 2/12 | |
| 32 | 006-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 浅黄橙10YR8/3 | — | 屋根<br>33と同一個体か |
| 33 | 006-02 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 浅黄橙10YR8/3 | — | 屋根<br>32と同一個体か |
| 34 | 015-02 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 外:橙5YR7/6<br>内:浅黄橙7.5YR8/6 | — | 屋根 |
| 35 | 003-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | 屋根？<br>外面赤色顔料塗布 |
| 36 | 016-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/8 | — | 屋根？<br>外面赤色顔料塗布 |
| 37 | 008-03 | 埴輪 | 家形埴輪？ | — | — | — | — | — | — | 外:橙5YR7/6<br>内:にぶい黄橙10YR7/3 | — | 突帯状<br>部位不明 |
| 38 | 012-04 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | — | 屋根<br>外面赤色顔料塗布 |
| 39 | 008-02 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | にぶい黄橙10YR7/4 | — | 屋根 |
| 40 | 011-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR7/6 | — | 壁隅部<br>外面赤色顔料塗布 |
| 41 | 011-02 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙5YR6/6 | — | 壁突帯<br>外面赤色顔料塗布 |
| 42 | 008-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 外:橙5YR7/6<br>内:灰黄褐10YR6/2 | — | 壁突帯<br>外面一部赤色顔料塗布 |
| 43 | 010-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | 壁<br>外面赤色顔料塗布<br>45と同一個体か |
| 44 | 005-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 橙7.5YR7/6 | — | 壁隅部<br>突帯剥離 |
| 45 | 009-01 | 埴輪 | 家形埴輪 | — | — | — | — | — | — | 黄橙7.5YR7/8 | — | 壁<br>窓あり<br>外面赤色顔料塗布 |
| 46 | 015-01 | 埴輪 | 形象埴輪？ | — | — | — | — | — | — | にぶい橙7.5YR7/4 | — | 種類不明 |
| 【高塚３号墳】 | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 001-01 | 土師器 | 杯 | 表採 | — | 11.0 | — | — | — | にぶい黄橙10YR7/4 | 2/12 | |
| 2 | 001-02 | 須恵器 | 杯 | 表採 | — | — | 5.0 | — | — | 灰白2.5Y8/2 | 6/12 | |

※主な凡例は本書冒頭の凡例に示している。　※アルファベット大文字のグリッド名は石室内に設定したグリッドを示す。
※刀子の幅・厚みは刀身の関付近で計測した。　※（　）の数値は欠損しているものの残存値である。

第６表　出土遺物一覧表③

| 古墳名 | 墳形（規模） | 埋葬施設 | 副葬品 | 墳丘周辺出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 小金２号墳 | 不明（径９ｍ？） | 土壙？ | なし | 須恵器・弥生土器 | 不明 | 周溝なし |
| 小金３号墳 | 円墳（径19×18m） | 横穴式石室 | 須恵器・鉄製品 | 須恵器・土師器 | 古墳時代後期後半 | 石室完存。石室内は撹乱 |
| 小金４号墳 | 円墳？（径20ｍ？） | — | — | 弥生土器 | 古墳時代後期？ | 周溝のごく一部調査 |
| 小金12号墳 | 円墳（径12m） | 箱形木棺 | 石製紡錘車 | 弥生土器 | 古墳時代後期後半 | |
| 高塚４号墳 | 方墳（一辺15m） | 箱形木棺 | 須恵器・刀子 | 須恵器・土師器・埴輪・敲石 | 古墳時代終末期 | |
| 高塚６号墳 | 方墳（一辺12×9.5m） | 箱形木棺 | 須恵器・土師器・刀子 | 須恵器・土師器 | 古墳時代終末期 | 副葬品は棺外 |
| 斎宮池19号墳 | 円墳？（径19ｍ？） | — | — | 須恵器・土師器・弥生土器・縄文土器・磨製石斧・石鏃 | 古墳時代後期？ | 墳丘下層から古墳築造以前の遺構検出 |

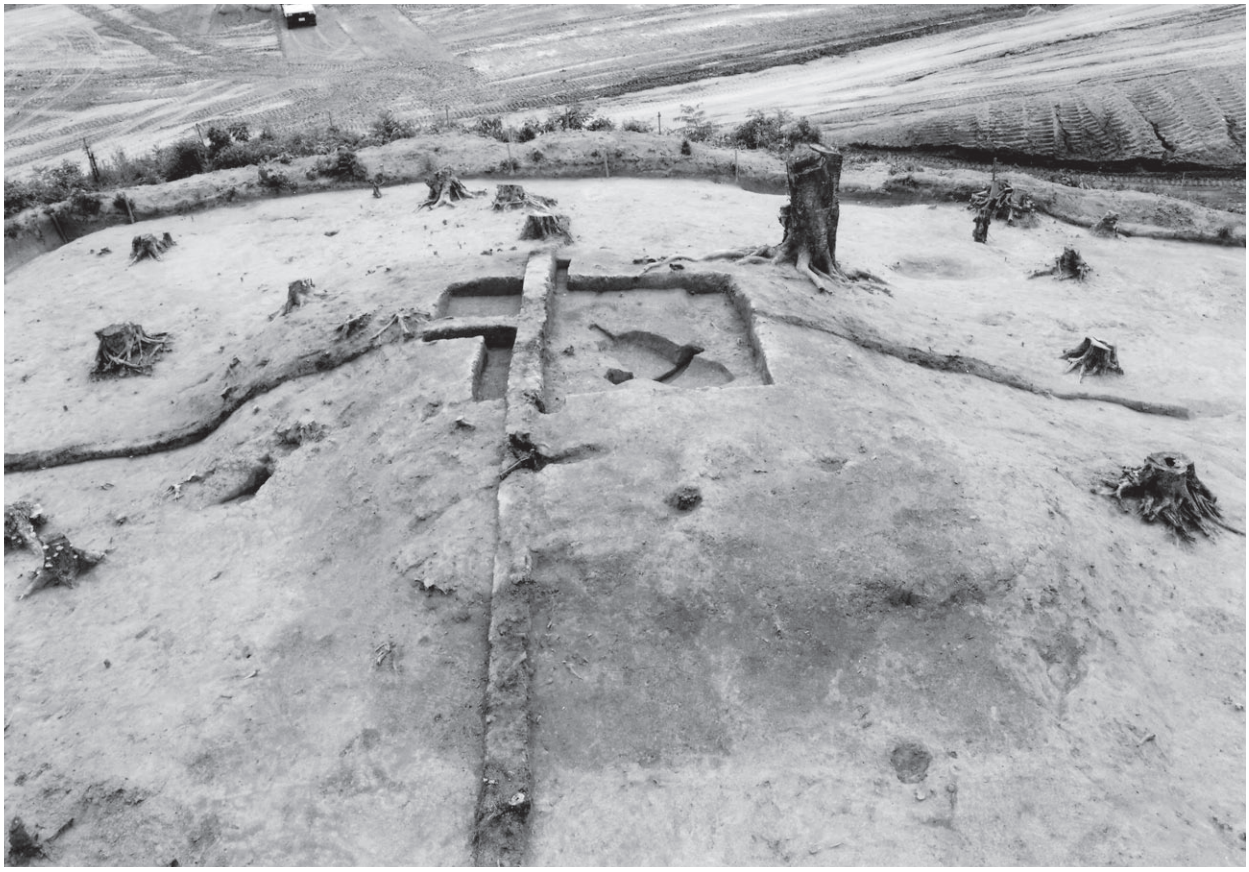
※「—」は未調査

**第７表　調査古墳一覧表**

# 写 真 図 版

写真図版１　小金２号墳①

墳丘表土掘削後状況（東から）



墳丘全景（東から）

調査前状況（北から）

墳丘土層断面（北西から）

埋葬施設横断土層断面（東から）

ピット群（西から）

埋葬施設（北西から）

## 写真図版３　小金３号墳①

調査前状況（北西から）

墳丘全景（南西上空から）

南側周溝（南西から）

北側周溝土層断面（西から）

墳丘盛土縦断土層断面西半部（東から）

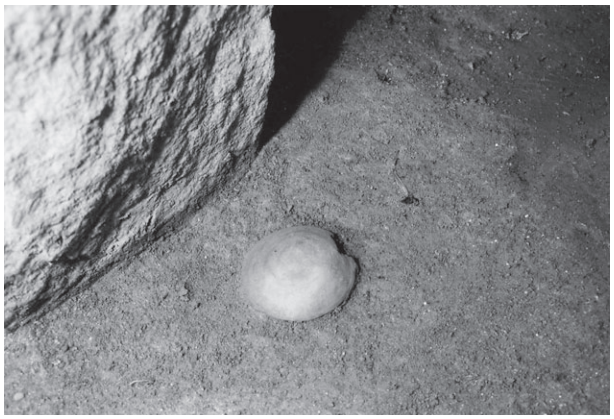
墳丘羨道付近縦断土層断面（北西から）

盛土内土師器出土状況（北東から）

盛土内土師器出土状況（東から）

閉塞上部土層断面（南から）

羨門床面石列（南から）



玄門須恵器出土状況（南から）

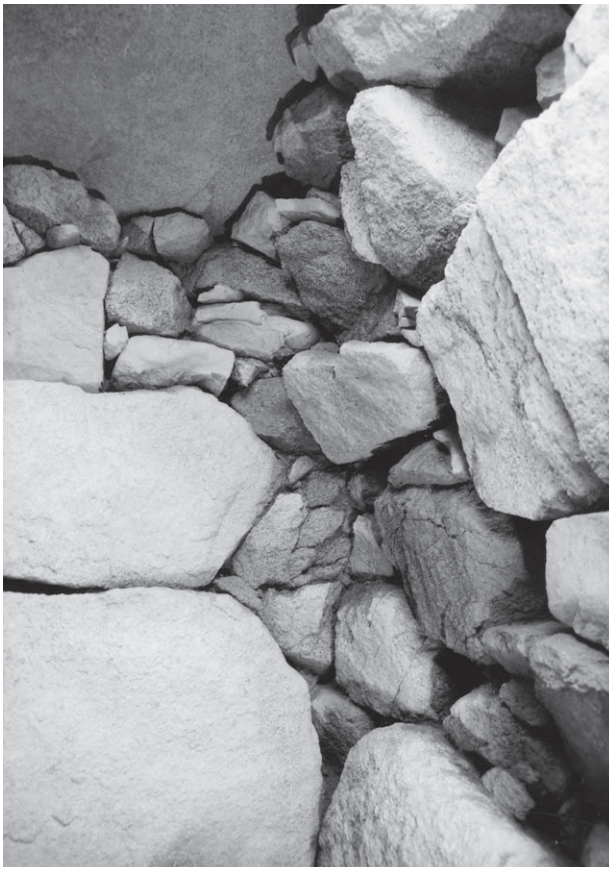
横穴式石室天井石除去作業（南から）

初葬時閉塞（石室内から）

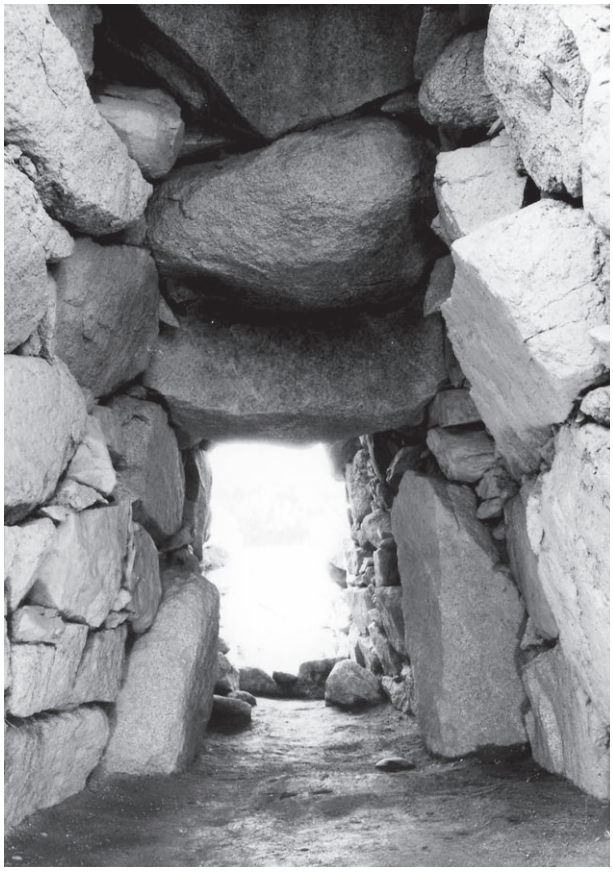
横穴式石室奥壁付近天井石（東から）

横穴式石室玄門付近天井石（南西から）

横穴式石室奥壁・右側壁接点（玄門から）



横穴式石室奥壁・左側壁接点（玄門から）



横穴式石室玄門（奥壁から）

横穴式石室玄門付近天井石（石室内から）

横穴式石室羨道右側壁（羨門から）

写真図版７　小金３号墳⑤

墓道右側壁（南から）

墓道左側壁（西から）

古墳遠景（南から）

古墳からの遠望（北西から）

写真図版９　小金４・12号墳②

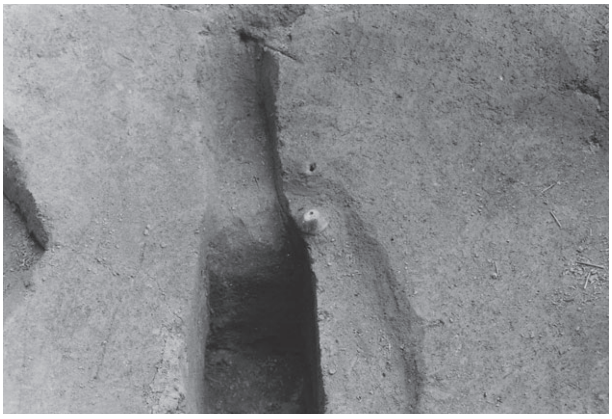
調査区近景（南西から）

墓壙（南西から）

埋葬施設検出状況（東から）

埋葬施設検出状況（西から）

石製紡錘車出土状況（北から）



石製紡錘車出土状況（西から）

埋葬施設掘削状況（南西から）

## 写真図版 11　高塚４号墳①

**調査前状況遠景**（南東から）

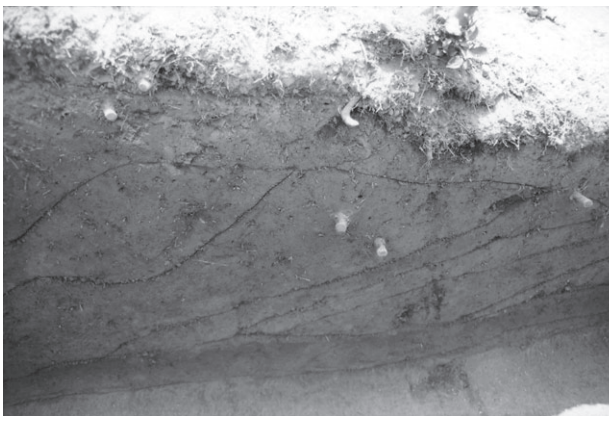
**墳丘全景**（上空から）

**東側周溝**（南西から）

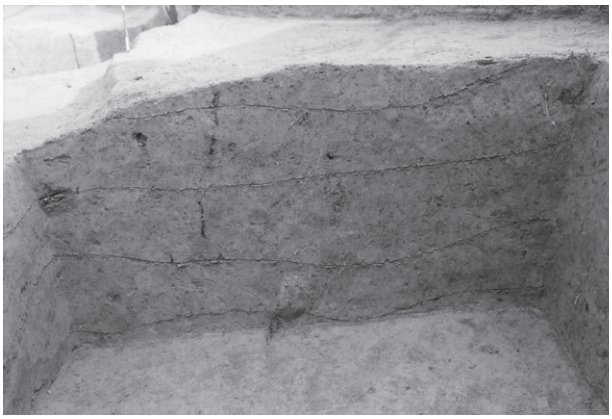
**東側周溝**（北東から）

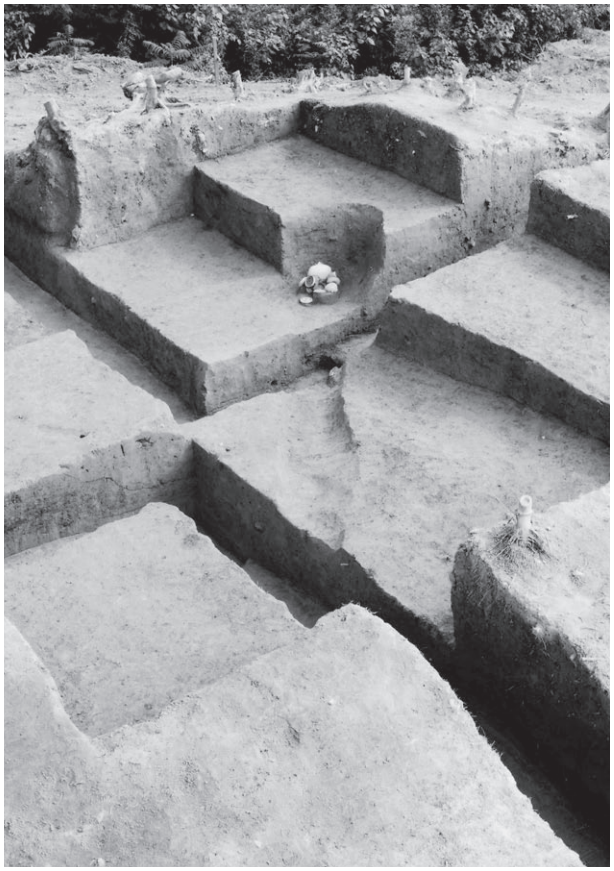
**墳丘全景**（南東から）

墳丘盛土南東部土層断面（東から）


墳丘盛土南西部土層断面（北から）

北側周溝土層断面（南東から）


埋葬施設横断断ち割り土層断面（西から）

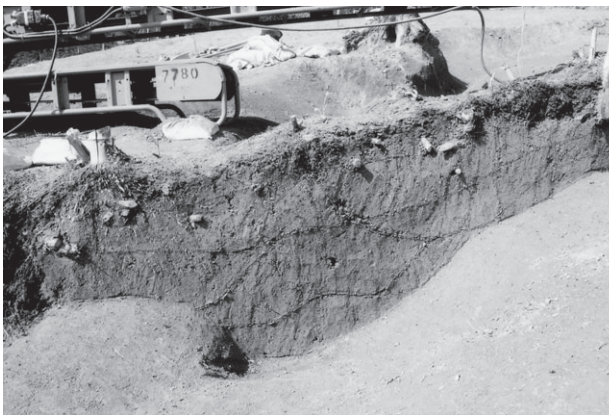

埋葬施設全景（西から）

須恵器出土状況（北から）

刀子出土状況（北から）

## 写真図版 13　高塚６号墳

北側周溝土層断面（東から）



南側周溝土層断面（東から）

埋葬施設縦断土層断面南半部（東から）

埋葬施設縦断断ち割り土層断面南半部（東から）

埋葬施設横断断ち割り土層断面東半部（南から）

棺外副葬品付近断ち割り土層断面（南から）

南側墳裾部断ち割り土層断面（東から）

作業風景（北から）

調査区全景（西から）

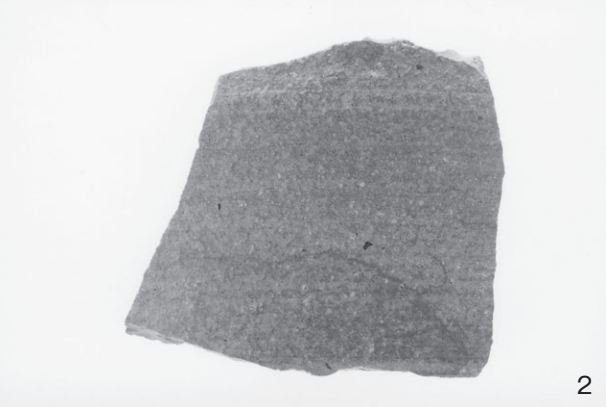
墳丘西側落ち込み（西から）

ＳＤ１（西から）

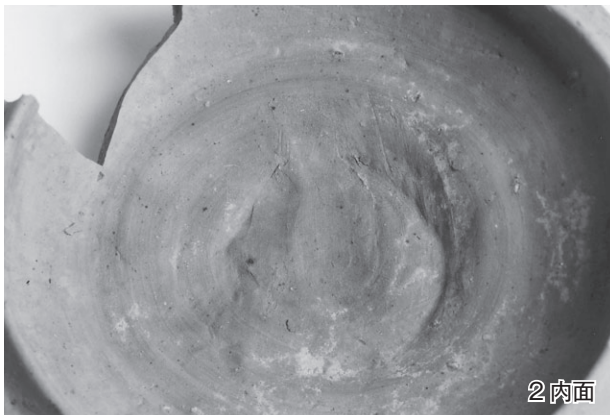
ＳＤ１土層断面（西から）

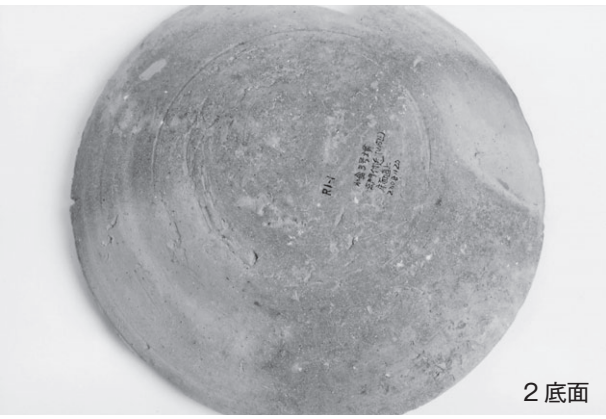
調査区全景（南から）

写真図版 15　小金２・３号墳出土遺物①




小金２号墳出土遺物



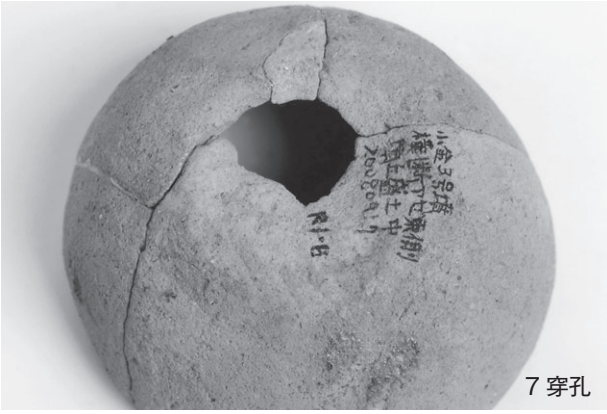



小金３号墳出土遺物

5

6

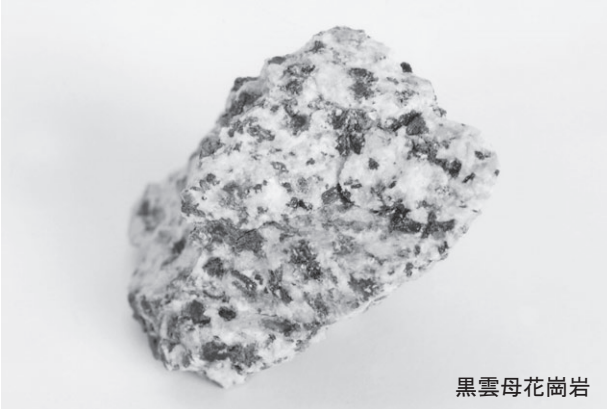
7


7 穿孔

8

9

10


黒雲母花崗岩

写真図版 17　小金４・12 号墳出土遺物

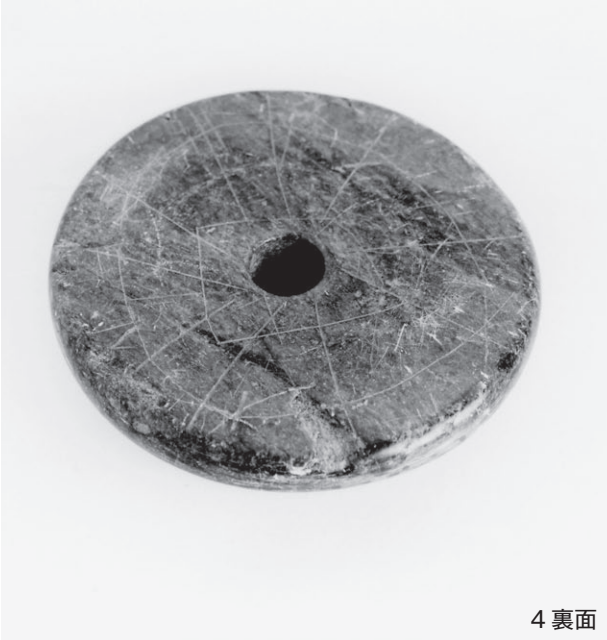
1

1 内面

2

3

4 表面

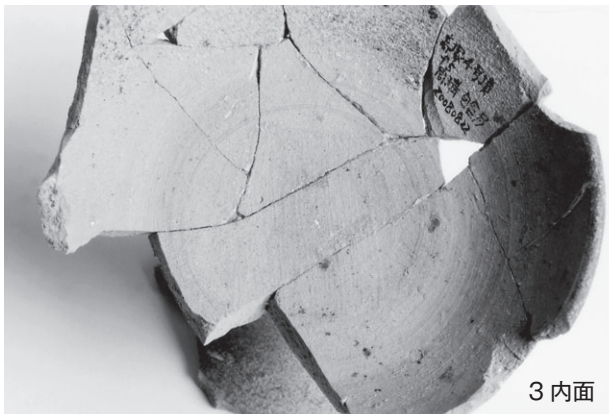

4 裏面

1

2

3

4


3 内面

19

20

機銃弾

写真図版 19　高塚４号墳出土遺物②

5

6

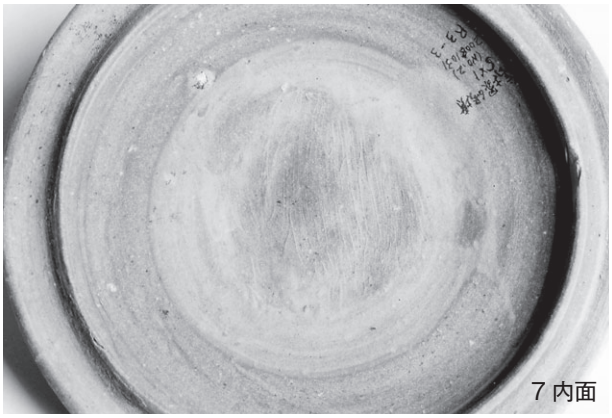
7

8

9

10

６内面


７内面

11

12

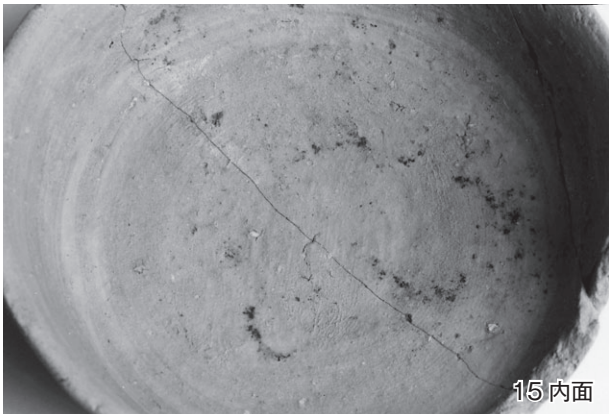
13

14

15

16

15 打欠状況


15 内面

写真図版 21　高塚４号墳出土遺物④

17

17 側面

17 打欠状況

18 A面

18 B面

1

2

3

4

5

6

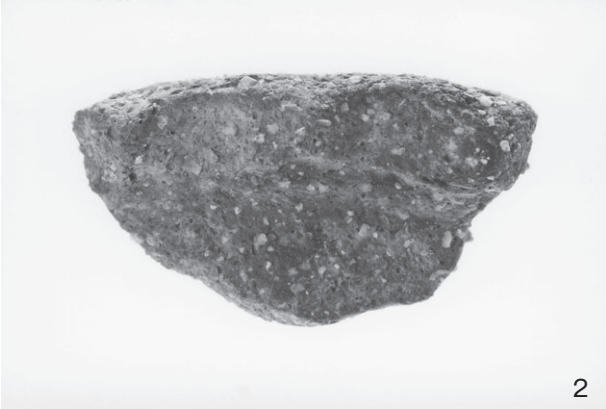
7

8

写真図版 23　斎宮池 19 号墳出土遺物

1

1 底面


2

5

3 A面

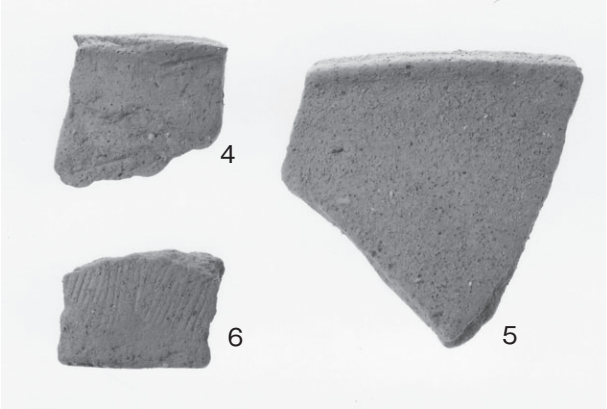
3 B面

4

4

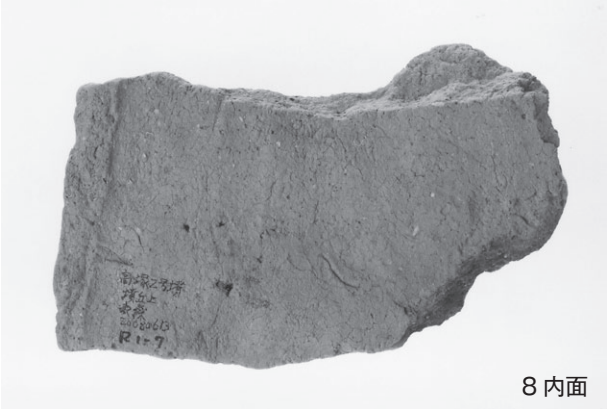
1
3

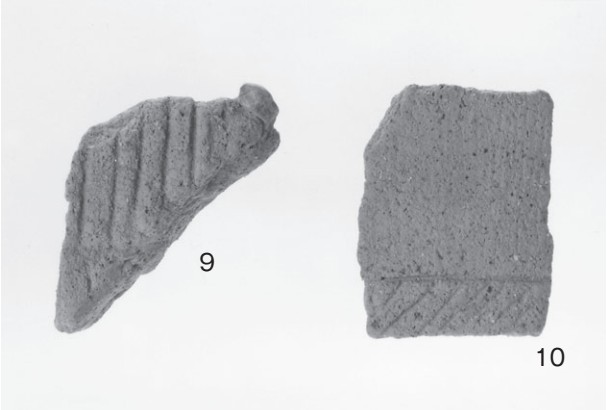
2


4
6
5

7

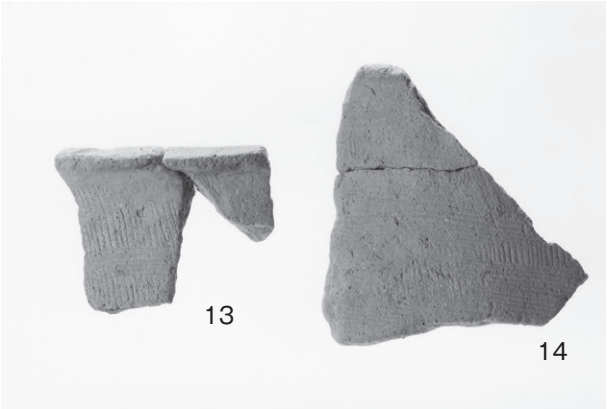
８外面

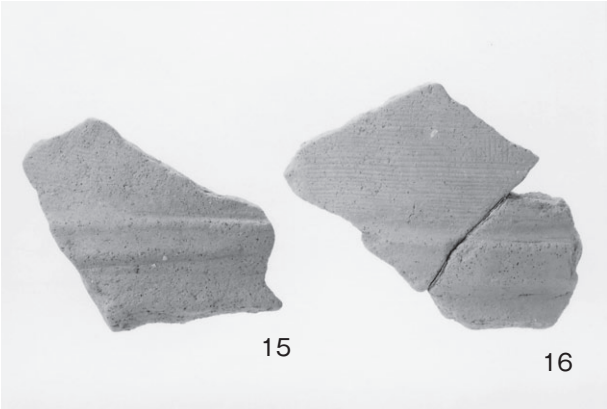

８内面

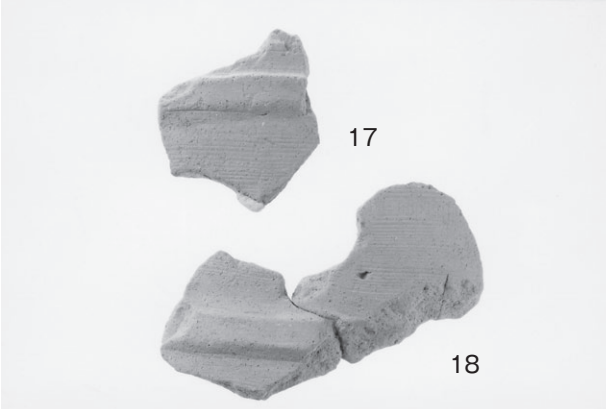

9
10

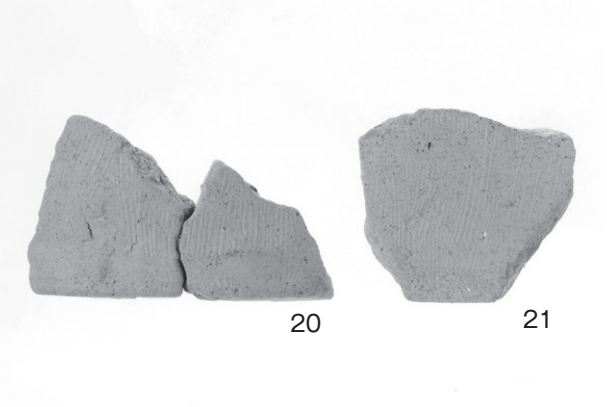
11
12

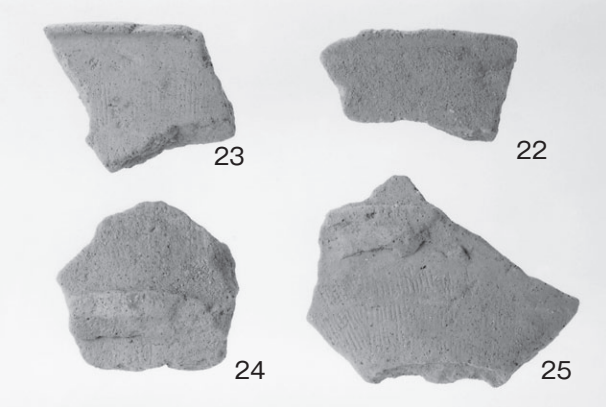
写真図版 25　高塚２号墳出土遺物②

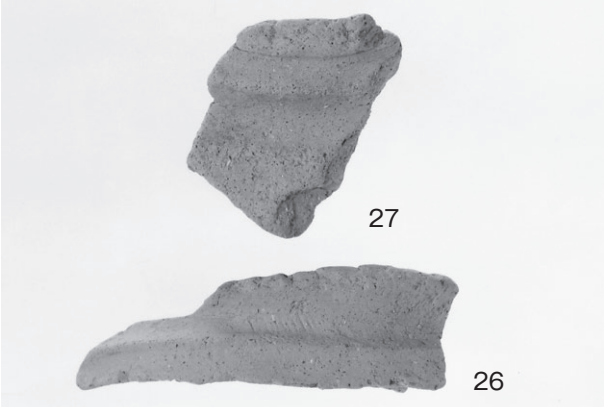


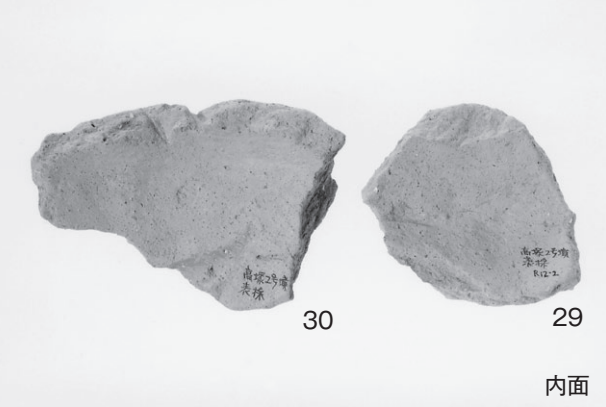



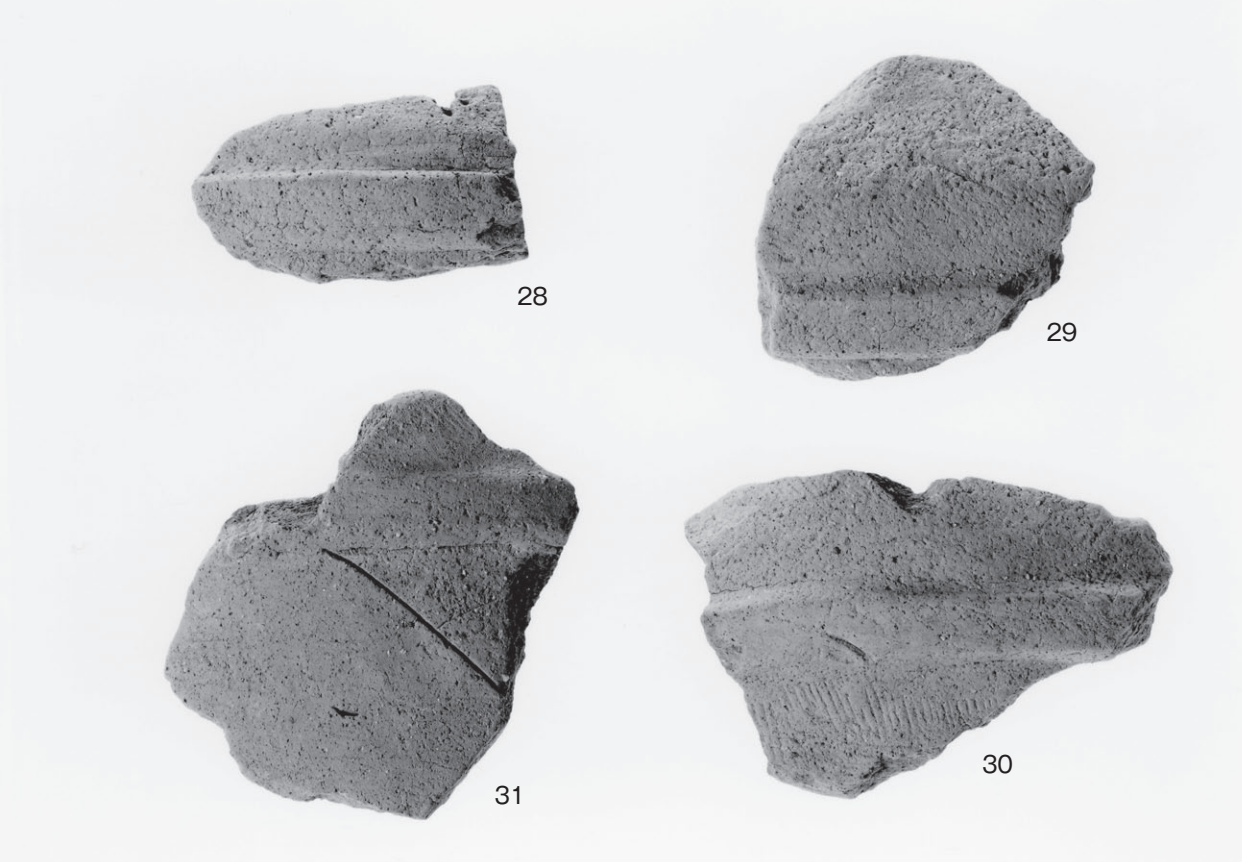




20
21

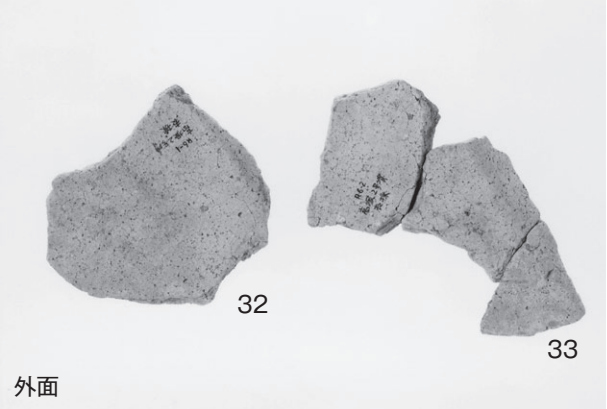

23
22
24
25

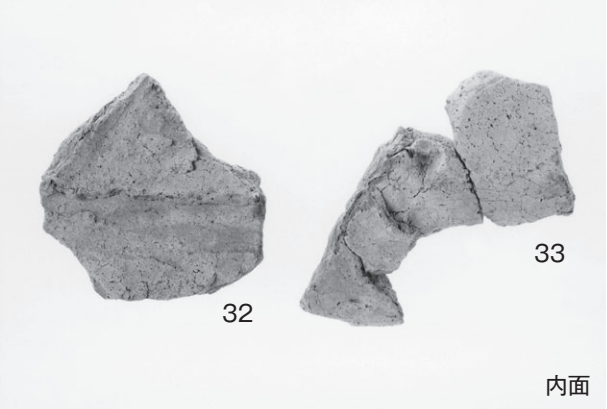

27
26

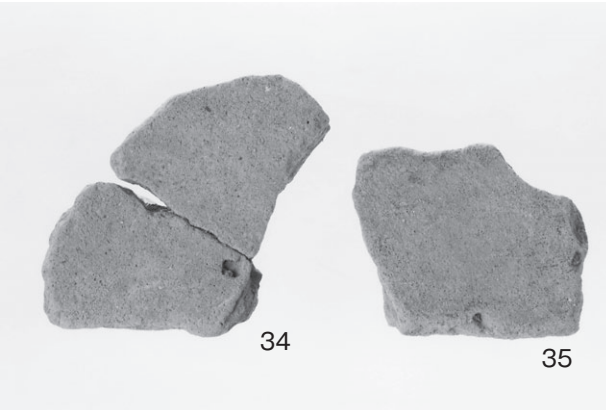

30
29
内面

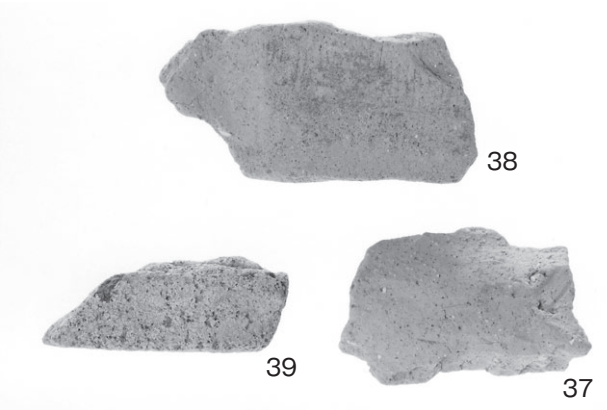

28
29
31
30

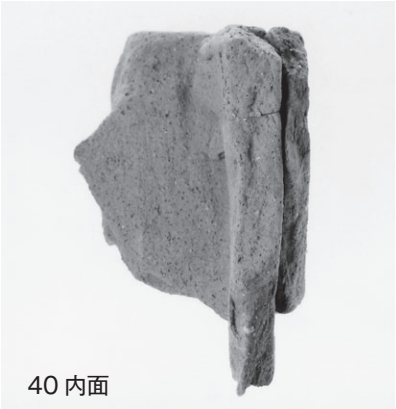
写真図版 27　高塚２号墳出土遺物④





43 外面

43 内面

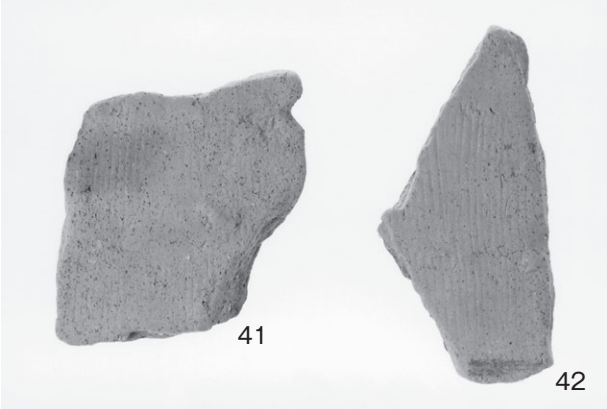
写真図版 29　高塚２号墳出土遺物⑥

45 外面

45 内面

44 外面

44 内面



46

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | こがね・たかつか・さいくういけこふんぐんはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告 |
| 副書名 | 宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | ２０８－８ |
| 編著者名 | 石井智大・松葉和也・柴山圭子・小山憲一 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２ |
| 発行年月日 | ２０１０（平成２２）年３月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>（㎡） | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| こがね ごうふん<br>小金４号墳 | たきぐんめいわ<br>多気郡明和<br>ちょういけむら<br>町池村 | 24442 | 676 | 34°<br>30′<br>19″<br>～<br>34°<br>30′<br>36″ | 136°<br>35′<br>55″<br>～<br>136°<br>36′<br>35″ | 20070622～<br>20070810 | 130 | 国営宮川用水第二期土地改良事業 |
| こがね ごうふん<br>小金12号墳 | | | 748 | | | | | |
| こがね ごうふん<br>小金３号墳 | | | 675 | | | 20080609～<br>20081212 | 806 | |
| たかつか ごうふん<br>高塚４号墳 | | | 721 | | | | 1,301 | |
| たかつか ごうふん<br>高塚６号墳 | | | 723 | | | | | |
| こがね ごうふん<br>小金２号墳 | | | 674 | | | 20090430～<br>20090827 | 620 | |
| さいくういけ ごうふん<br>斎宮池19号墳 | | | 734 | | | | 240 | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小金４号墳 | 古墳 | 古墳時代 | 周溝 | 弥生土器 | |
| 小金12号墳 | | | 木棺・周溝 | 弥生土器・土師器・須恵器・石製品（2.15kg） | |
| 小金３号墳 | | | 横穴式石室・周溝 | 土師器・須恵器・鉄製品（1.05kg） | |
| 高塚４号墳 | | | 木棺・周溝 | 土師器・須恵器・鉄製品・石器（4.2kg） | |
| 高塚６号墳 | | | 木棺・周溝 | 土師器・須恵器・鉄製品（1.15kg） | |
| 小金２号墳 | | | 土坑・ピット | 弥生土器・土師器・須恵器（0.12kg） | |
| 斎宮池19号墳 | | | 溝 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器（0.35kg） | |


要約

宮川用水第二期土地改良事業に伴って行った、多気郡明和町と玉城町にまたがる通称玉城丘陵に築造された小金古墳群・高塚古墳群・斎宮池古墳群の発掘調査報告である。調査対象となった古墳は古墳時代後期から終末期にかけてのものである。小金３号墳では、遺存状態の良好な横穴式石室が確認された。周辺地域の横穴式石室との共通性が注目される。高塚４号墳および６号墳は古墳時代終末期の方墳である。墳丘の遺存状況が良好で、墳丘構築に関わる情報を得ることができた。いずれも木棺直葬の埋葬施設が確認され、須恵器と刀子が副葬されていた。このほか、小金２号墳と小金12号墳でも埋葬施設が検出され、小金12号墳では石製紡錘車が出土している。小金４号墳および斎宮池19号墳は墳丘の一部の調査にとどまった。

また、附章では当事業に伴って行った古墳の範囲確認調査の結果と、高塚２号墳で出土・採集された古墳時代中期の埴輪の報告を併せて所収した。

三重県埋蔵文化財調査報告208-8

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ

小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告

２０１０年３月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　　（株）アイブレーン